
中央線的短編集

円 高寺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中央線の短編集

【Nコード】

N1169C

【作者名】

円 高寺

【あらすじ】

中央線のな人々の中央線のな人々による中央線のな人々のためのスモール・ファンタジー。

第1話「中央線沿線下ネタ教室」

もしもあなたが職場や学校で繰りひろげられる同僚や学友たちの下ネタ合戦にお困りなら、ぜひとも中央線沿線にある『下ネタ教室』に通われることをお勧めする。

それは正式には『新社会人フォーラム・下ネタ教室』といって、よく勘違いされるらしいのだが、間違っても「下ネタ愛好家」の集まりなどではない。そこはかつての私のように、仕事の合間に交わされる同僚たちの下世話な会話にどうしても馴染めず、ついにはデスクで一人孤立してしまうような社会人や学生諸君を救済する場所なのだ。

世間では「セクハラ」などといった言葉が認知されて久しいが、実際の現場では下ネタなる冗談の類がいかにも幅を利かしているかは一度なりとも会社勤めをしたことのある人ならば誰もがご存知だろう。なにしろ下ネタは分かりやすいし、職場の空気を和ませる。人より一時間多く残業する社員よりも、気の利いた下ネタを一つでも言える人間を組織は重宝がる。どんな会社でも万年課長の発するダジャレは職場を白けさせるだけだが、下ネタはなぜかその場をホツトなものに変えてしまうのだ。

私もそうだったが、下ネタの苦手な人にはシャイな人が多いようだ。もしあなたがそうであったとしても、なにも心配する必要はない。『下ネタ教室』はそういう人たちのための駆け込み寺なのだから、躊躇することはないのだ。ちなみに、その壁には念仏のかわりにこんな言葉が額縁に入っかけてかれている。

「下ネタなんて怖くない！」 まったくその通り！

新宿からほど近い中央線沿線の駅近くに教室はある。仕事帰りに

通うのに便利かと思う。目立った看板はない。どこにでもあるような古びれた雑居ビルの曇りガラスの入った三階のフロアだ。地元の人でもここでこんな風変わりな教室が開かれていることを知る者はほとんどいないだろう。なにしろ授業内容が内容なだけにまったく宣伝というものをしていないのだ。

では、どのようにして生徒が集まってくるかといえば、彼らはみな人の紹介でやってくる。私の場合、口添えをしてくれたのは直属の上司であるK主任だった。

もっとも、このK主任こそ我が職場をホットにしている張本人であり、私が苦手としていたまさに目の上のタンコブのような人物だったのだが、じつのところ彼は『下ネタ教室』の卒業生であったのだ。

ある人事関連の飲み会のあと、同じ終電の車両に乗り合わせた主任は、居酒屋でいまにも一人『カラマーゾフの兄弟』でも読みだしそうな勢いだった私にほぼ感銘をうけたか、顔を赤くしながら隣の座席でこうつぶやいた。

「君を見てると昔の自分を思いだすなア」

そんなわけで私は『下ネタ教室』のドアを叩くことにあいなった。驚いたことに、教室の机にはそのK主任が職場と同じスーツ姿で私を待っていた。そう、『下ネタ教室』の講師陣のほとんどはその卒業生たちでなりたっているのだ。

もちろんその中には女性の講師もいる。ちなみに校長と呼ばれる人は男だが、昔はフリーライターの肩書きを持っていた人物だそうで、著書であるノストラダムス関連の研究書はベストセラーにもなったらしい。氏はどうもその印税でもってこの教室を開講したようなのだ。

じつは私ほかの大予言のあと、その筋の研究者と呼ばれた人たちはいったいどこでなにをしているのだろうかと以前からずっと疑問に思っていたのだが、これで一つ積年の謎が解けたわけだ。いまで

は釣り好きの晩年の文豪のように恰幅のよい校長も、若いころは下世話な世間とうまく折り合いをつけられずにいた瘦せた文学青年であつたのかもしれない。

いずれにしる人騒げな大予言も、極東の島国ではこうして少しは人助けの足しにはなつたということか。

さて、職場では上司であるKを教室では主任とは呼ばずに、私は「Kチンチンさん」と声をかける。当『下ネタ教室』では誰でも相手が男なら「チンチン」であり、女性なら「オッパイ」なのだ。

バカみたいな決まりだが、これがけつこう重要なのだ。なにしろ下ネタの苦手な人はその言葉自体に慣れていない。仕事でもなんでもそうだが、まずは慣れることが先決だ。そのうち気心がわかつてくれば、「Tチンチンさん」が「モッコリTさん」になり、「Sオッパイさん」が「Sボイン嬢」になつたりする。そうなれば、あなたのこれまでのどこかきこちなかつた愛想笑いは、きっとその時ごく自然な微笑へと変わっていることだろう。

なんなら新人生であるあなた自身「新人の荻窪チンチンです」とか「新人阿佐ヶ谷オッパイです」なり自己紹介してみるのもいい。私の経験ではこれは必ずウケる。ただくどいようだが、当『下ネタ教室』はけつして下ネタ愛好家の集まりではない。

すでにお気づきかもしれないが、下ネタには特別な才能などはない。よいうするにこれは言ったもん勝ちなのだ。ジョークとしてならよほど万年課長のダジャレのほうが上等かもしれない。誰かそのことを失意の課長にそつと耳打ちしてやるべきだ。私は遠慮しておくが。

そんなわけで、我が教室で使用されている『下ネタガイドブック』なるテキストには、その名のとおり数々の下ネタ例文が引用されているのだが、そこに笑いの質を求めるのは理不尽というものだろう。必要なのは特別な才能ではなく、自分を変えようとするほんの少し

の勇氣だけ。テキストの扉のページには、きっと若かりし日の校長が傾倒していたのであるう、ある米国の詩人のこんな生前の言葉が飾られている。それは私にとって、かの大予言の詩よりもよほど予言に満ちあふれたものだった。

あなたが子供のころにつけられた

恥ずかしいあだ名

(忘れてたくても忘れられない)

それが

私の名前

「キンタマサル」 私が小学生のときにつけられたあだ名だ。どうもチンチンやら下の話ばかりで恐縮なだけど、それが我が生涯唯一のあだ名であり、地元の中学校を卒業するまで、私は一匹の卑猥なオス猿としてあつかわれた。ちなみに「金田マサル」というのが私の本名なのだ。

教室の授業には基礎編と実践編がある。基礎編は講師との一対一でのテキストの読み合わせだ。チンチン、オツパイ諸君はただそこに並んだ文章を読み上げるだけでよい。慣れてきた段階で講師がアドリブの言葉を入れてくるようになるから、生徒諸君もそれに見合ったように文章を変えてゆく。その過程であなたなりの下ネタ文法なるものができあがっていくというわけだ。

基礎編を終了するといよいよ実践編になる。ここでは毎回テーマを決め、講師の指導のもと、お茶を飲みながらグループごとにフリーの下ネタトークが展開される。ちなみに私が参加したグループの先週のテーマは『初デートで許される下ネタの限界点』で、出されたお茶は水牛のオツパイが入ったようなインド風のミルクティーだった。

めつたにないことだが、きわめて優秀な成績を納めた生徒には講師陣の推薦で、ぜひうちで教鞭をと、校長からじきじきに声がかかることもある。それは講習を終えたチンチン君やオツパイさんの会話だけでなく、その懐もいくらかホットにすることだろう。K主任はその収入を家のローンの返済にあてているらしい。

そういつた機会に恵まれなくとも、卒業生全員には記念のバッヂが贈られることになっている。詳しいことはここでは話せないのだが、それはとても奇妙な形をした小さなバッヂで、当教室のOB・OGが運営している『下の会』なる同窓生の集まりへのパスポート代わりにもなっているそうだ。

どうももう少しマシな名前はつけられなかったのかと思うのだけど、その奇妙なバッヂを誇らしげに胸につけた男女の一団を、私も中央線沿線の街中で何度か目撃したことがある。会の名前はどうかあるにしる、彼らはみな愉快そうであり、それでいて謙虚に通りの風景に溶けこんでいたのだった。

そんなわけだから、もしもあなたが中央線のどこかの街でおかしなバッヂを胸につけたなにやら楽しいな集団を目撃したとしても、気軽に声をかけることは謹んでほしい。彼らはみなそれなりに人生の辛苦を味わい、それを共に乗り越えてきた人々たちなのであって、くれぐれも下ネタ愛好家の集まりではないのだから。

それでも、もしあなたがほんとうにお困りで、『下ネタ教室』に通いたいと思つたなら、その時はそのバッヂをつけた一人にそれとなく話しを持ちかけるぐらいは許されるだろう。彼や彼女はきつと素直に曇り窓の入った雑居ビルの場所を教えてくれるはずだ。

それではまだ見ぬチンチン君、オツパイさん、いつか中央線沿線のどこかの街で。

第2話「財テク指南幽霊」

そのアパートがいいと言ったのは彼女の方だった。

少なからず嫌な予感を感じた。それはどう見ても大学卒業を間近にひかえた女の子が住みたがる物件には僕の目には映らなかつた。しかもその部屋には僕自身も一緒に暮らすことになるのだ。

彼女の卒業を機に、僕たち二人は同棲生活をはじめめる計画でいた。

場所は高円寺だったけども、玄関に下駄箱のあるその古い木造二階建ての外観は、たしか練馬近辺にあつたという伝説の『トキワ荘』を僕に思いおこさせた。実際に見たわけではないけれど、読んだ本ではトキワ荘には風呂はなかつたはずだ。

「このアパートに引越すと、いいことがある」

きっと浮かない表情をしていたのだろう、僕の顔を見て彼女は努めて明るくそう言った。それでももう決まりだった。

だって、彼女がいいことがあると言えば、それは必ずあるのだから。やや不安なのは、彼女の言う「いいこと」と、僕がふだん口にする「いいこと」との間には微妙な、いいや、かなりの距離があるのではないかということだ。

灰色の塀にたれかかったベニヤ看板を見ながら僕は不動産屋に携帯電話で連絡をとった。思ったとおり一部屋だけ空いていた。窓にカーテンのかかかっていない角部屋が見えたのだ。その住人は先週出ていったばかりだという。これもまた僕の予感したとおり。案の定、風呂はなかつた。

二週間後、彼女の門出の日には粉雪が舞った。

僕たちは以前、同じ大学に通っていた。ただ、彼女は一年後輩で、学科も所属していたサークルも僕とは違っていたから、お互いに面

識をもつまでには大夫時間がかかった。

けれど、僕は彼女の声だけは知り合いになる前からよく知っていた。僕だけではない。僕が参加していたサークルの全男子部員が彼女の声を知っていた。いいや、むしろファンだったと言うべきか。

なにしろ僕がたむろにしていた男ばかりの弱小サークルと、彼女の参加していた『ジャズ研』とは部室が隣り合わせで、その薄いベニヤの壁からは、彼女の練習する歌声がまるで特設のリスニングルームにいるみたいによく聴き取れたのだ。

そんなわけで、僕ら男所帯サークルのおもな活動は、しばらくの間、狭い部室に煙草のけむりを充満させながら、紙コップのコーヒ一片手に、彼女の歌声を拝聴することだけに終始しがちだった。偶然、僕と彼女が学食のテーブルに隣り合わせになった梅雨時の木曜日の午後までは。

我がサークルの男子諸君の憎まれ口は僕が卒業するまでつづけられた。

彼女は今も週に一度、学生時代からライブをしている吉祥寺の小さなお店で仲間たちとステージに立っている。もつとも、バンドのメンバーも皆それぞれ就職してしまっただから、全員がそこで顔をそろえるということとはなくなってしまった。それでもバンドには固定客がいるようで、二十人も入れれば満杯の店だけでも、草枕のように柔らかな彼女の歌声に、仕事帰りのサラリーマンや学生たちが週末の夜になるとどこからともなく集まってくるのだ。

そんな彼女が就職先に選んだのは、英会話教室の事務の仕事だった。好きな英語にたずさわれるのと、ほとんど残業がないというのが理由らしい。

先に卒業した僕は就職はせずに、学生の頃に大学の生活課に紹介してもらったアルバイトを今もつづけている。そこは東京中のあらゆる大学の文学部の学生が集まっているような、ちよっと変わった

バイト先で、印刷されて製本されたばかりの書籍に目をとおし、誤字や脱字を見つけたのがおもな仕事だった。

その中で僕が長く担当しているのは欧米の哲学関係の書籍だ。そう、僕は哲学科の学生だったのだ。ただ、在学中に哲学者から小説家志望へと転身した僕は、どちらかといえば文学書担当へ移動したかったのだけど、なにしろ哲学は世間や大学同様ここでもやはり人気がない。おかげで僕は今日はプラトン、明日はサルトルと、まるで哲学の森の渡り鳥みたいな生活をずっとつづけている。

さて、引越しを無事終えて一月経つてもこれといって「いいこと」はなにもおこらなかった。むしろ不便なことのほうがずっと多い。まずは毎晩の銭湯通い。最初のうちは目新しく面白味もあったけど、結局は時間もとられるし、けっこう出費もかさむ。

そして貧弱な木造建築の床と壁。夜は上階の住人の足音を数え、朝になれば隣人の目覚まし時計のベルでおこされるような生活。

決して贅沢な生活はできないけども、二人の収入を足せばもう少しマシな物件に住めたはずだった。少なくとも僕はそのつもりだった。どう考えても一人暮らしの時より生活環境が落ちている。

でも、それはまあいいのだ。本当のところ、僕の気がかりはまったくべつの点にあった。今のアパートに引越してきてからというもの、僕はずっと誰かに覗かれているような気がしてならないのだ。おんぼろアパートとはいえ、この部屋だけが空き部屋になっていたのも、なにかしら関連があるのではなからうか。

きつとこの部屋には、彼女だけにしか感じとることのできない得体の知れないものが住みついているのにちがいない。ただ、彼女はそれを「いいこと」と呼んだのだ。

同居人の心配をよそに、近頃、彼女のほうは上機嫌がつづいている。いいや、これまでもいつもたいてい彼女はそんなだったけども、引越してからの僕とはいかにも対照的だから余計に目につくのだ。

「なにかでた？」

彼女のほうが早く帰宅した時、「ただいま」のかわりにそう聞くのが最近の僕のあいさつになっていた。

「まーだ」

彼女も真似をして冗談まじりにいつもそう答えるのだった。顔にはださなかつたけど、僕は内心ホツとしていた。無論、なにかでては困るから。

バイト先で『ツアラトストラはかく語りき』を三度読み返し、疲労と誇大妄想を抱えながらアパートへ帰った夜だった。彼女は先に帰って部屋にいた。

僕は約束のあいさつをしようとしたけれど、それができなかったのは、彼女が畳の上で新聞を読んでいたからだ。我が家では朝刊も夕刊も購読していないはずだった。それが英字新聞ならまだ話はわかるが、彼女が広げていたのはおよそあり得ない経済新聞だった。

たかが新聞一つでと人は言うかもしれない。だがその時、僕の神経はニーチェばりに過敏になっていた。悪いニュースが届けられたに違いない。これはきつと大きな変化の小さな前触れなのだ。

だが、違った。大きな変化はなんの前触れもなくやってきた。我が同居人はかく語った。

「でたわよ」

まるで新しい友達ができた子供みたいに嬉しそうだった。僕はなるだけその話題はさけたかった。

「それおもしろい？」

畳の経済新聞をアゴでさして僕は尋ねた。彼女は首を横にふった。「買って読んでみるように言われたの」

こんなときツアラトストラみたいな超人ならなんと云うだろうか。きつと「誰に？」とは聞き返さないだろう。だが、誤字と脱字のつまった僕の頭ではそれぐらいしか言葉が浮かんでこないのだ。

彼女が子供の頃から靈感が強いのは話には聞いていた。ただ、これまで二人で街中を歩いていて、彼女がショーウィンドーに映った自分の姿を見て突然立ち止まったり、ポストにむかって話しかけたりしたことは一度もなかった。もしかしたら僕の前ではあえてそうしていただけなのかもしれない。どちらにしても僕にはなにも見えないし、聞こえない。

彼女はその幽霊を仮名で「野村さん」と呼んだ。どうも生前は証券会社に勤めていた中年男性らしい。その野村さん、僕が受験に失敗した都内の有名大学を卒業しているそうだけど、学生時代にはこのアパートの下宿人でもあったらしいのだ。なるほどそれでね、とは僕は言わなかった。決して負け惜しみではないけど、彼女の話が事実なら、とつと出ていってもらわなくては。いかに目には映らず、耳に響かなくとも、やはり気分が悪いことこのうえない。

僕は腕のGショックを見た。夕食もまだなのだ。早くしないと銭湯が閉まってしまう。

「『中林精密機器』って会社知ってる？」

「はあ？」

「その株価が今月中に大幅に値を上げるらしいの」

「それで？」

「野村さんが今のうちに買っておいたほうがいいって言うんだけど」
「ははあん、なるほど。僕はまだ夕飯と銭湯のほうがよほど気になっていただけ、それで彼女が言っていた「いいこと」の意味が少し呑み込めたような気がした。しかし、そんな経済観念が彼女にあっただなんて、今の今までまったく気がつかなかった。

しかし、話のつづきに耳を傾けると、どうやら事態はそういってともないらしかった。どうも僕たち二人の将来設計のない生活ぶりに、その元証券マンの野村さんの方から見るに見かねて重い腰をあげたというのが真相のようなのだ。

はたして幽霊に「重い腰」という表現があてはまるかどうかは知らないが、それが大きなお世話であることには間違いない。たしかに僕たちはお金には縁がないけれど、将来設計ぐらいはちゃんとある。引越しをしたのもそのためだし、そこへ無断で足を踏み入れてきたのは、何を隠そう野村さん自身ではあるまいか。無論、これも幽霊に足があればの話だけだ。

だが考えてみれば、無断で足を踏み入れてきたのは僕たちのほうかもしれない。野村さんは僕たちが引越してくる前からここに住んでいたであろうから。

「野村さん、ふだんは証券会社に住みついでるそうよ」

経済紙の数字とにらめっこしながら彼女は言う。

「そこで毎日情報収集してるんだって。それで、気がむいたときだけ人助けのために値の上がりそうな株をこっそり教えてあげてるんだって。いい人ね」

いい人ではなく、いい幽霊というのが正しい。もっとも、ある時彼女から聞いた話では、そもそも悪い幽霊というものはこの世に存在しないのだそう。なぜなら幽霊は「物欲」とは無縁だから。彼らは皆、思春期の子供みたいに内気で、昔の田舎学生のように純朴であるらしい。彼女に言わせれば、もしも世の中の人間たちが全部幽霊だったら、世界は平和でもっと住み良い場所になるということだ。

もしも世の中の人間たちが全部幽霊だったら？ いったいこ

の世界にはどれくらい幽霊が存在するのだろうか。あの世に旅立った人々がすべて化けて出てきたら、地上は内気で純朴な幽霊だらけということになってしまう。僕にしてみれば、それはそれで怖いような気がするけど、きつと彼女みたいに靈感が強いタイプの方が希有なように、人が幽霊となってこの世に舞い戻ってくるケースもめったにないことなのだろう。

それはともかく、野村さんがこの部屋ではなく、証券会社を住みかに入っているというのは一つの朗報ではある。彼女は言う。

「この部屋、少し前まで私たちより貧乏な老夫婦が暮らしてたそうなんだけど、やっぱり奥さんが靈感の強い人で、野村さんがいるアドバイスしてあげたんですって。老夫婦、そのお金で二世帯住宅を建てて、今は息子さん夫婦と一緒に暮らしてるそうよ。そういう話、ちよつと素敵じゃない」

確かに。だけど「私たちより貧乏」というのは余計だと思う。僕たちはまだ若いだけなんだから。

その夜、僕は無口だった。おそらくそのせいもあつたらう、彼女が僕に話さなかったことが二つある。一つはバンドのライブに野村さんを招待したこと。もう一つはその『中林』なんとかという会社の株を彼女がすぐさま購入したことだ。

バンドは僕とは無関係だし、株も彼女自身の貯金から買ったものだからとやかく言う立場ではまったくない。しかし、幽霊を招待するというのはどうということなのだろうか。幽霊ならば出入りはもとから自由だろうし、とうぜんチャージ料だつてとられない。いいやそれよりも、そもそも幽霊には聴覚というものがそなわっているのだろうか。

そなわっているのだ。その週末には毎週のライブが幽霊つきで開かれたらしいのだが、どうも野村さん、いたく彼女の歌声を気に入ってしまったようなのだ。おかげでその夜からというもの、我が家では銭湯に出かけるまでの短い時間、即興のミニコンサートが催されるようになった。彼女がアコースティックギターをつま弾きながら『イパネマの娘』を歌ったりするのだ。客人はもちろん野村さんただ一人。いいや、もしかしたら隣や上階の住人も耳をそば立てていたかもしれない。かつてのサークル仲間のように。

僕としても、もともと彼女の歌声のファンではあるし、それはそれで結構なことだと思っていた。だがしかし、その催しはいつから

か純粹な「音楽の夕べ」から野村さんへんのお礼返しへと、その意味合いを変えていった。というのも、彼女が購入していたあの『中林』なんかの株が急に値を上げはじめたのだ。

新聞はもとより、テレビのニュースもほとんど見ない僕がその事実を知ったのは、彼女からダイバーズタイプのGシヨックをプレゼントされた時だった。8月の僕の誕生日までにはまだだいぶ日がある。彼女の月収は僕のそれと大差ないはずだった。そのGシヨックは僕が今身につけているベシツクタイプの倍近い値段がするのだ。だが、気にすることはない。そのダイバーズタイプのGシヨックには数種類のモデルがあるけども、彼女は彼女で、そのモデルをまとめて身につけられるぐらいのシルバーの腕輪を一リング買っていたのだから。

さて、ある夜、彼女はギターを持たずに、かわりに一冊の文庫本を開いた。それもやはり野村さんのリクエストラしかかったのだが、どうも幽霊には音楽は聴けても、本のページをめくることは物理的に困難らしい。それで毎夕のミニコンサートが、即席の朗読会へと変更された次第。

僕には野村さんの趣向はわからないけれど、バブル経済の前夜にはじまって、その落日とともに終わってしまったらしい決して長いとは言えない社会生活の中で、野村さんが実用書以外の本に目を通すことはほとんどなかったそうな。音楽も然り。思えば氏の人生は、受験戦争とバブル経済の時代とにピッタリと重なっている。きつと若いころからお金や立身出世につながるものたちとはきっぱりとつき合いを断って生きてきたのだろう。

そんなわけで、音楽にしる本にしる、野村さんの「心の旅」は物欲と競争社会の呪縛から逃れられることのできた今になってやっとはじまったのだけど、夕食のあとかたづけと銭湯に出かける準備の

かたわら、僕もそれにつき合うことになった。

彼女が僕たちに読んで聞かせたのは、釣りの話はいつこうにでてこないのに『アメリカの鱒釣り』という題目のつけられたいっぷう変わった小説だった。

実用書以外の本を読んだことのない中年幽霊にどんな話を聞かせるかは、それはそれでなかなか難しい問題だけでも、まあニーチェよりはいい選択だったと思う。それにその小説は学生だった頃に僕が彼女に薦めたものでもあるのだ。

それはいいとして、夕食後に彼女の朗読する『アメリカの鱒釣り』はなかなか素敵だった。作者は男性だったけども、きっとこの小説はもとから若い女の子に声をだして読まれるべくして書かれたもののように感じられるほどだ。ついでに『うたかたの日々』なんかも朗読してほしかったぐらいだけど、肝心の野村さんの感想は、その昔彼女が僕に言って聞かせたものとまったく瓜二つだった。それは「いったいいつになったら釣りの話になるのか」といった類のものだ。

それでも野村さんは辛抱強く黙って彼女の口からささやかれる物語に耳をかたむけていた、と僕は思う。その証拠に、最終章のページにたどり着く前に、野村さんはよくこんな言葉を口にするようになったそうだ。

「私はなんだか旅に出てみたい気分だよ」

『アメリカの鱒釣り』はその物語を完全に理解することができなくとも、なぜか読んだ人を旅情へと誘う不思議な書物だ。それは幽霊も例外ではなさそうだった。

その死後、野村さんのテリトリーはずっと東京周辺に限られていたらしかった。その気になればどこへだって行けるのに。チケット

もパスポートも有給休暇も必要のない自由の身なのに。でも、なんとなくその気持ちもわからないではない。幽霊の人生観について、さすがに僕も一読したことはないけれど、それはやはり相当に寂寥としたものではなかるうか。どこに行っても、なにをしても、もはや変われるものはなにもないような。

もしもそうだったとしたら、野村さんが東京の街を出て、どこかへ行ってみる気になったのは、Gショック一個分の恩のある僕としても、またこの部屋の住人である僕としても、たいへん喜ばしいことのように思える。その上着のポケットに文庫本を入れていくのは物理的に不可能だとしても、野村さんにはそれを心のポケットに忍ばせてぜひとも長い旅に出てもらいたいところだ。

『アメリカの鱒釣り』朗読会はちょうど関東地方が梅雨に入った晩に終了した。シトシトとした夜の雨音に包まれたアパートで、一冊の小説の扉が閉じられた。ただ、彼女がその最終章を読み終えた時、そこに主賓の野村さんの姿はなかった。

もとより僕にはその姿は見えないけれど、野村さんはどうも梅雨の気配が始まる前には旅立ってしまったてらしい。その間、僕は一人で朗読会に立ち合わせられていたわけになる。

どうして彼女が氏の新たな門出をすぐに僕に知らせてくれなかったのかは不明だ。僕もあえて聞きだそうとは思わない。朗読会を最後までつづけたかっただけなのかもしれないし、彼女と野村さんだけにしかわからないもつと深い意味があるのかもしれない。

いずれにしても、野村さんの不在を聞かされた時、僕は嬉しいような寂しいような、ちよつと複雑な気分だった。それは彼女としても同じだったようだ。文庫版の『アメリカの鱒釣り』を子供が絵本を閉じるみたいに膝の上においた彼女は、まだ野村さんの旅立ちを知らない僕にむかつてはにかんだんような笑顔を見せてただこう言

った。
「お引越し」

はたして『中林精密機器』がどんな会社で、そこではいったいなにがおこなわれているのか、僕が知ることはついになかったけど、僕たちはその持ち株すべてを、並のインサイダー取引以上の高値で売り抜くことに成功した。

当然のように僕らはその利益はそっくりそのまま引越し資金にあてた。その額は最初の引越し前の二人の貯金の合計よりずっと多くて、場所は同じ高円寺だったけども、そのおかげで当初の計画よりもグレードの高い物件に引越すことができた。そこにはもちろん風呂もついているし、隣の住人の目覚まし時計のベルで目を覚まされるようなこともない。

ただ、僕はときどき懐かしく思うのだ。アルバイトの帰りに、高架橋を走る中央線の車窓から、夕暮れに染まった低い屋根の街並みを見下ろしている時などはとくにそうだ。半年にも満たないアパート生活だったけども、そこには幼い頃に家族と共に暮らしていた時と同じような濃密な生活感が確かにあったような気がしてならないのだ。

そんな郷愁の気分にかられたまま帰宅した夜、僕は決まって彼女を銭湯に誘う。じつのところ、今暮らしているマンションはかつてのトキワ荘風アパートよりもずっと銭湯に近い場所にあるのだ。

彼女のほうでも似たような心境を抱いているのか、これまでその誘いが断られたことはない。

久しぶりに銭湯の広い湯船につかりながら一日の哲学的疲労をとぎほぐす僕は、壁の富士山ならぬ高円寺名物阿波踊りの風物画をぼんやり眺めながら野村さんのことを思い起こしたりする。

はるばる海を渡った氏は、やはり靈感の強い香港の女性風水師相手に株の手ほどきなどしているのではあるまいか、と。そうしてそのお礼にと、今頃きつと異国情緒たつぷりの歌を聴かせてもらったりして、また胸ときめかせているのに違いなかるう、と。

もしかしたら、彼女が言っていた「いいこと」とは、こういうことだったのかもしれない。内気で閉じこもった幽霊を広い空間へと解放してあげること。人助けならぬ幽霊助け。もしかしたらそんなNPO団体が人知れずどこかにあって、彼女はその職員になっているのかも。世間には公表できない、家族にも言えない幽霊相手の秘密のNPO職員。幽霊退治を生業とする人々がこの世にいるのなら、幽霊を救済する職業があったっていいはずだ。

そう言えば、彼女が勤めている英会話教室にまったく残業がないというのも変な話だ。英会話教室なら会社帰りのサラリーマンやOLたちが生徒となって通ってくるはず。彼女の仕事も当然それに合わせた時間帯になったっておかしくない……。

少々のぼせ気味の僕の頭は懐かしいある予感へとたどり着いた。

もしや、今度移り住んだマンションにも……。

第3話「初恋フィギュア」

昼休みの校庭ではじめてあの子を見つけた時を思い出した。クラスメイトと一緒に縄跳びをしていた彼女は、まるで転校してきたばかりの生徒みたいに際だつて見えた。

思えば、あの時も僕は教室の窓越しから眺めていたのだった。そして今、やはり僕はあの子をガラス越しに見下ろしている。ただ、彼女のまわりにいるのは同じクラスの女子生徒ではなくて、なぜかデビルマンだったり、ルパン三世だったりする。彼女はあの頃と同じ制服を着ているけども、なぜか人形だったりする。

どうしてこんな物がこの世に存在するのか僕にはまったく理解できなかつた。普通、フィギュアのもデルとなればアニメのキャラクターとか有名人とかに相場は決まっている。僕の知るかぎり、大人になったあの子がスターになったという話はまったく聞いた覚えがない。と言うよりも、東京の大学を卒業して、OL生活をへ、学生時代からつき合っていたボーイフレンドと結婚したというのが僕の持ちうる彼女の情報のすべてなのだ。

その彼女がなぜか昔懐かしいセーラー服を身につけてショーケースの中に収まっている。丸縁の眼鏡も、お嬢様風の笑顔も、ショートヘアも当時のままに。

彼女の名前は木杉佐智子さん。中学二年の春、校庭にいた彼女に僕は生まれて初めて恋をした。おかしなことに、それまで一年間も互いに同じ校門をくぐっていたのに、その日まで僕は彼女の存在にまったく気づかないでいた。なぜだか分からない。おそらく、それぐらい僕はぼんやりとした子供だったのだろう。

そこは僕がお気に入りにしていたレトロ・フューチャーなお店で、中央線の中野駅からアーケード通りをぬけた広いショッピングモールの三階にあった。そのショッピングモール、一階のフロアはごく普通の商店が建ち並んでいるのだけど、エスカレーターで二階にあると、そこにはサブカルチャーとオタクの世界が中央線沿線的に雑多に広がっていて、僕にはその気質はないけれど、やはりTV世代の性か、営業の仕事帰りにたまに立ち寄っては、子供の頃に夢中になったヒーローたちのフィギュアなどをぼんやり眺めて時間を潰したりしていた。何か気に入ったものがあつたら一つ買って部屋にでも飾ろうかと思つたりもするのだけど、こういった類の物はよほど思い入れがないと購入する気になれないのが僕の真正銘の気質であり、けっきょくは手ぶらで帰宅するのがいつものパターンだった。

それが今日、思い入れどころか、思い込み100%のフィギュアと僕は対面してしまったのだ。

狭い店内の木製の棚には稲垣足穂の古書や骸骨のオブジェ、飛行船の模型など、高価ではないが、浮世離れた逸品ばかりが所狭しと無造作に陳列されていた。プラスチック製のフィギュアはここではかなりの新参者になるはずだ。そしてルパンとデビルマンの間にもまるで複雑な三角関係を想起させるかのようにたたずんだ我が木村佐智子さんは、ここでも転校生のように真新しい存在だった。なぜなら、先週立ち寄った時には怪盗と悪魔的ヒーローとは仲良く並んでいて、そこに奇妙な緊張感はまだ発生していなかったはずだから。それにしてもよく出来ていた。単に木村さん本人に似ているというだけではない。このフィギュアは肌の質感からセーラー服の素材まで、ほかの人形とはあきらかにレベルが違う。どう見ても大量生産されたものではない。そんな物が存在するかどうかは知らないが、オーダーメイドのフィギュアなのかもしれない。それにしてもいいたい誰か。そして、どうしてそれがここにあるのか。僕が卒業した

中学校は福島の片田舎にあるのだ。

さつきから静かに店に流れていた電子音楽のうたかたの夢を破るように男の咳がした。ジヨニー・ディップが黒縁眼鏡をかけたみたいなのこの店の青年店主だ。今、店内には僕と彼の二人しかいない。これまで一度も言葉を交わしたことはなかったけど、振り返りざま僕は彼に商談めいた質問を投げかけた。『木杉佐智子さんフィギュア』には肝心の値札が見あたらなかったのだ。

「それは売り物じゃありません」

きつと僕をコレクターかマニアの類と見当づけたのに違いない。いつも手にした文庫本から顔をあげると、若い店主はよく言い聞かせるかのように僕にむかってそう答えた。まさか目の前にいる男が店に置いてあるフィギュアの同級生だとは夢にも思っない。

さて、営業職を生業としている輩としては、店主に一度門前払いされたぐらいで、ハイそうですかと引き下がるわけにはいかない。すでに僕の頭の中では財布の有り金どころか、キャッシュカードの限度額まではじき出されていたのだ。

そういえば、値札のついてない店の看板ほど実は店主の売りたい目玉商品なのだと、どこかの雑誌で目にしたことがある。それならば、まずは青年店主を上手く丸め込んで実際に『木杉さんフィギュア』を手にとってみることでろう。なにしろ田舎の同窓会に一度も出席していない僕が、最後に彼女の顔を見たのはもう十年も昔のことなのだ。他人のそら似ということもありうる。

店の奥に設けられた小さな机で、店主はふたたび文庫本のページに目を落としていた。あたかも店の経営にはまるで関心のないアルバイトの店番のように。木杉さんの名前は出さなかったが、僕は正直に事情を説明することにした。店同様にどこか浮世離れた青年に、小細工した作り話はあまり効果がないだろうと考えなおしたの

だ。

意外にも彼は嫌な顔一つ見せずに席を立つと、ガラスケースの鍵を開けて人形を取り出した。そして咳をするように「どうぞ」とボソリと言って僕にそれを手渡した。無論のこと、席にもどった彼はそちらが本業みたいに文庫本を読みはじめのだった。

摩天楼に上り詰めたキングコングよろしく小さな美女を手にした僕は少々戸惑い気味の巨人だった。女兄弟のいない環境で育った故に、これまで女の子の人形など触れたことなどなかったのだ。僕はただジンマリとフィギュアの顔を見つめること以外にできることがなかった。

幸運だったのは、そこにあらたに来店してくる客がいなかったことだ。狭い店内にひたすら文庫本に目を落としている男と、少女の人形を手にしてたたずむ男とが、無言で二人いる光景はいささか薄ら寒い感があったはずだから。

いま一つ確信をつかむ必要があった。かといってフィギュアをこの場で縄跳びさせるわけにもいかない。僕がこころみることができたのは、記憶の扉を開くべく、ただ慎重に銀細工の丸縁眼鏡を人形の顔から取り外すことだけだった。

しかし、それだけで充分だったのだ。たった数センチの指の動きが、僕を中野のショッピングモールから故郷の十年前の教室へと、時空をひとつ飛びにして連れもどした。

当時の僕にとって、授業中に木杉さんが眼鏡を外すことは一つの事件だった。中学の最後のクラス替えて僕は彼女と同じクラスになったのだ。眼鏡をかけていない時の木杉さんはまた凜々しいぐらいに美しかった。授業そっちのけに僕がその瞬間を待ちわびていたのは言うまでもない。高校受験に失敗しなかったのが不思議なぐらいだ。

そしてその光景がたった今、目の前で再現されたのだ。しかも僕

自身の手で。なにか言いようのない感情に襲われ、僕は立ちくらみを覚えた。決して営業帰りの疲労からくるものではない。間違いない、このフィギュアはたしかに木杉佐智子さん本人なのだ。なんてこんな物がこの世にあるのか知るよしもないが、僕の高ぶる全神経が僕自身にそう告げていた。

「最近のアイドルのフィギュアですよ」

奥で店主が何か言っていた。

「その女子高生のアイドルが出演した学園モノの映画の公開を記念して、限定で五十体だけ制作されたんです」

どちらかと言えばこれまで好感を持っていたのだが、今日から僕はジョニー・デップという俳優が嫌いになりそうだった。

青年はまるで彼女の肉親みたいに僕の手から木杉佐智子さんを取り去ると、ガラスケースに閉じこめてふたたび鍵をかけた。そして椅子にもどって文学青年へとかえった。

僕は木杉さんの名前をポツリと言った。そっくりなんです、と。

店主はもう顔も上げず、ただ「そうですね」と答えるのみ。店の経営以上に僕の存在には関心がなさそうだった。

幾らだつたら譲ってもらえますか、そう尋ねた僕の声にはこれまではない凄みがあったと思うのだが、それもこの青年店主にはまったく効を奏さなかったようだ。それもそのはずで、店側には僕には伺い知れないある事情があったのだ。店主はいささかうんざりしたように口を開いて言った。

「あなたで二人目なんですよ」

もちろん僕には彼の言葉の意味をすぐに呑み込むことはできなかつた。ポカンとした帰宅途中の営業マンに、青年店主はここぞとばかり忙しい経営者になったかのように要点だけを手際よく説明した。

もつとも、肝心の内容はやはり店同様に相当浮き世離れたものだった。

それによると、考え難いことだけでも、僕と同じような『同級生にそっくりフィギュア』の購入希望者が先週にも一人来店したばかりなのだという。

はたしてその同級生がかの客の初恋の相手だったかどうかは聞かなかったけども、幸いお相手は木杉佐知子さんではないようだった。ということは、その客は当然僕の同級生でもないことになる。

それにしても、よく世界には自分に瓜二つの人間が三人はいると話しには聞くけども、そういった例はフィギュアにも当てはまるのだろうか。それともたまたまこのフィギュアのモデルになったアイドルがいろんな女の子に似ているということなのだろうか。いいやそれとも、いろんなのに似ているのは、フィギュアでも女子高生アイドルでもなくて、我が木杉佐知子さんの方なのか。

もしそうだったとして、僕は一向にかまわない。こちらとしては、ただフィギュアが手に入りさえすればいいのだから。

しかし予期せぬライバルの出現は僕のささやかな望みをさらに困難で複雑な状況へと陥れた。ひきつづき店主の話では、その男性客はあるうことか、彼自身の卒業アルバムを持参して再び来店する予定だという。それが今週の土曜日で、なんと店主はアルバムをじかに見て、たしかに似ていると確信したら、あのフィギュアを譲る約束をしているのだという。「売り物ではない」と言っていたさっきの話はいつたいどこへいったのか。きつと敵は僕よりはるかにやり手の営業マンなのに違いない。

「よかつたらあなたも参加してみたらどうですか。土曜日のオークションに」

店主は言った。善意ある第三者かのように。まるでバカみたいな話だった。値段だったら話も分かるけど、いつたいどこの世界に「どちらがより似ているか」で購入者を決定するオークションがある

というのだろうか。

だがしかしそうは言っても、早速僕の頭の中では、久しく開いていない卒業アルバムの置き場所を手繰りはじめていたのだ。たしかそれは福島の実家にあっただはずだ。

僕は店主と携帯のアドレスを交換し合っただ店を出た。

さて土曜日。普段着姿の僕は昼近くから中野のファーストフード店の席で青年店主のメールが届くのを待っていた。我ながら冴えない休日の過ごし方ではあると思うけど、財布にはATMから引き落とししてきたばかりの軍資金と、バッグにはやはり昨日実家から速達で届いた卒業アルバムが待機していた。

けれど、ここまでできて僕の気持ちは迷っていた。昨晚、何年かぶりに卒業アルバムの扉をめくった僕は、これまで一度も出席したこととなかった同窓会の夢を見てしまったのだ。

会場はお約束の実家近くのボウリング場のレストランだったけども、その夢の中で僕は生まれて初めて木村知子さんとともに会話をし、楽しくおしゃべりをした。もつとも、目を覚ました時には何を話したかすっかり忘れてしまっていた。ただ、瞼の裏には、僕の言葉にうなずいてみせる少し大人びた木村さんの笑顔が焼き付いていた。

それは本来なら喜んでいいはずの出来事だった。しかし、ベッドのまどろみの中で、僕の心は沈んでいた。彼女の笑顔が鮮やかに思い出されるたび、沈み込んでいった。

過去の夢が、決して過去を取りもどすことができないことを僕に告げていた。それなのにこの僕ときたらそのミニチュア版を手に入れることに夢中になっている。けれどこうも考えられた。絶対に手に入らないとわかっているからこそ、たとえ偽物であっても手元に置きたいのだ。それにミニチュアにはミニチュアにしか表現することのできない魅力だっただしかにあるはずなのだ。

想定外の自己否定の夢を見てしまった僕は、そんなふうに朝からずっと自分の行為を正当化できる理由を探していたけども、完全に立ち直れる前に店主からのメールが着信した。

休日のショッピングモールは田舎のボーリング場よりはるかに混みあっていたが、青年店主の店だけは貸し切り状態だった。悲しいかな、そこにはメッセンジャーズ・バッグをぶら下げた我が同胞、我がライバルの姿しかなかった。

それはそうと、見ず知らずの他人の卒業アルバムを覗き見る時、人には好奇心だけでなく、奇妙な同情心のようなものまで働くことがあるようだ。結局は負けているほうの高校を応援してしまう夏の甲子園中継を眺めているみたいだ。

だが、勝負は実力の世界であり、それはここ中野のショッピングモールでも同様であった。僕の対戦相手は意外にもスポーツマン・タイプのスラツとした三十代の男性だったけども、しばらくの間、僕は彼のまるで長年の友人に裏切られたような口惜しそうな表情を忘れることはできないだろう。まさか『卒業アルバム』で負けるとは。

そう、僕は確実にオークションに勝利した。いや、勝ったのは木杉知子さんと言うべきか。なぜなら、アルバムに映った木杉さんの記念写真は、ただフィギュアにより似ているというだけでなく、男性がたずさえた写真の少女よりもずっと可愛いかったのだ。気の毒だけど、それが男性の表情をさらに暗いものにしていたのはおそらく事実だろう。

この場に居合わせた僕たち三人の目的は決して友情の輪を広げることではなかったら、会はずぐにお開きになりそうだった。僕は心ある勝利者らしく男性には優しい視線を送り、さらに机の上の『木杉知子さんフィギュア』には目もくれず、審判者である青年店主の判定を待った。

彼はいつもどおり椅子に腰掛けていた。ただ、さすがに文庫本は開いていなかった。青年店主は『木杉さんフィギュア』を挟むように机に並べられた二冊の卒業アルバムを一番長い間見つめていたが、勝敗の行方は誰の目にも明らかだったから、かの男性がこれ以上さらし者になる前に、あるいはショッピングモールの他の客たちに変な噂を立てられるより前に、視線をあげた。

僕は店主の言葉を待った。早速値段の交渉へと入る手はずだったのだ。だが青年は何も言わず、机の下から一冊の本を取り出した。それは文庫本よりもずっと大きかった。表紙には褐色の皮が張られていた。三冊目の卒業アルバムだった。それも店主自身の。

無論のこと、そんな話は寝耳に水だった。店主本人がオークションに参加するなんてルール違反もいいとこだ。だがしかし、それをこの場で主張しても無駄なのだ。唯一肝心なのは、誰の写真がフィギュアに一番似ているかであり、その条件だけがすべてを支配するのだ。

完全な敗北だった。かの男性が味わったであろう屈辱感を今度は僕がこうむる番になった。

「似てますね。そっくりだ」

男性が店主のアルバムを見て、さも感心しているかのように言った。

まったくバカげてる。こんなオークションも、そっくりフィギュアも、こんな休日の過ごし方も。そしてなにより過去に捕らわれていた僕自身。

あの日以来、僕が仕事帰りに中野のショッピングモールに立ち寄ることはなくなった。かわりに最近の僕は、毎晩スポーツジムで健康的な汗をかいている。

第4話「イヤホン占い」

国家公務員、榊原ユズルはチャーハンと電子音楽をこよなく愛する男であった。

新妻の波子はチャーハンが得意だった。彼女は三鷹にあるラーメン屋の看板娘だったのだ。ユズルは子供の頃からの好物を今では好きなだけ食べられる環境にあった。

ただ、波子の方はユズルの愛聴する電子音楽はまったく受けつけなかった。彼女に言わせれば、それは身の毛もよだつような騒音なのだそうだ。ちょうど黒板を爪で引っ掻いたような。

そんなわけで、結婚後のユズルのリスニングスペースは主に通勤と帰宅の電車の中だけに限られていたのだが、それを彼が不便に感じることはほとんどなかった。なにしろ彼はまだ新婚ホヤホヤであり、音楽への愛情よりも、妻への愛情のほうがずっと大きく、また真新しいものであったからだ。

彼の悩みはただ一つ、しょっちゅう絡まる彼のミュージック・プレーヤーのイヤホンのコードのみだった。

朝の通勤時間が貴重なものであることはサラリーマンやOLなら誰しもが心得ている。それはタイムカードを押す前に残された最後のプライベートな時間であるからだ。だが、ユズルのイヤホンは毎朝決まって哲学的次元にまで絡まっているのだった。下手をするとそれを解ぎほぐしているだけで、ゆうに一駅分の時間がかかってしまう。

ユズルは不思議でならなかった。ただ普通にスーツのポケットにしまっているだけなのに、なぜこうも自分のイヤホンはこんがらがっているのかと。まるで自分の見ていないすきに、コードが生き物のようにポケットの中で這いずりまわっているかのようだ。

「これはいけない。あなた受難の相がでていますよ」

ある朝のできごとだった。満員の電車の中で男がユズルに言った。それは一種の予言であり、忠告でもあったのだが、彼の耳にその言葉の響きはとどかなかつた。

それはいつものようにユズルがイヤホーンのコードと格闘している真つ最中であつたということもあつたのだが、なにしろ彼はまだ新婚ホヤホヤの身分であつて、そのこんがらがったコードをのぞいては、およそ受難とはほど遠い幸せのただ中にいたからだ。

電車が吉祥寺駅に到着した時、男性は乗客の人波に押されるようにプラットフォームの彼方に消えてしまつたが、そうなる前にもう一度だけ彼に忠告を發した。ちようど一駅分の時間をかけてようやく実存主義的にからまつたコードを解きほぐすことのできたユズルは、やっと男の声を聞き入れることができた。

「あなた、気をつけて。受難の相が

」

これまで見ず知らずの人間から電車の中で人相占いなどみてもらつたことのなかつたユズルは、てつきり頭のおかしな乗客がまぎれ込んでいるのかと思つたが、彼の前にいたのは、まるで学者然としたスーツに眼鏡姿の中年紳士だった。

だが、それよりもユズルが一番驚いたのは、その中年紳士が彼の顔ではなく、なぜか彼が手にしたミュージック・プレーヤーの白いコードを一心に見つめていたことだった。

偶然同じ電車に乗り合わせた占い師からなにかしらの相をみてもらうということとは、かなり確率の低い出来事ではあるけども、あり得ると言えばあり得る。だがその占い師が、相手の顔や手よりもそのイヤホーンのコードの方を熱心に見つめているということは、むしろ論理的にあり得ない。ユズルが一瞬にして思い描いたことはそういうことだった。

おかしな占い紳士はあつという間に人波に呑みこまれて扉の外に見えなくなつた。その姿はたしかに電車通勤にまるで慣れてない学者のようではあつた。

ラッシュ慣れし、また新宿で電車を乗り換えるユズルは、上手く人の流れをよんでなんなく車内にとどまつた。官庁までの通勤時間は彼にとって貴重なひとときだ。ユズルは何事もなかったかのように早速イヤホンを耳に入れた。

だが、それから一ヶ月後の週末の晩、ユズルはおかしな占い紳士の存在を思い出すこととなる。場所は吉祥寺駅近くのアーケード通り。その夜、彼はそこからはるばる自宅のマンションのある三鷹まで歩いて帰ることに決めたのだった。踏切事故かなにかで中央線が全線ストップしてしまつたのだ。

車内アナウンスが流れる中、ユズルはまだプラットフォームに停車している電車を躊躇することなく降りた。バスを利用するという手段もあつたが、改札をぬける前に歩いて帰ることに決めていた。

急いで帰宅する理由は今の彼にはもうなかつた。気分転換が必要だつた。幸福だつたはずの彼の新婚生活は、この一週間で窮地に陥つていたので。

金曜日の夜ということもあつて、吉祥寺駅周辺は人混みでごつた返していた。彼はもう自宅で思う存分好きな電子音楽を聴くことができる身分ではあつたが、酔っぱらいたちの奇声を聞く気分でも毛頭なかつたので、やおらスーツのポケットからイヤホンのコードを取り出した。案の定それはこんがらがつていた。哲学的に。あまりに刹那に。

ちよつとその時だつた。雑踏の中から彼を呼ぶ声がした。と言っても、名前を呼ばれたわけではなかつた。

「あ、そのまま、そのまま。解いてはいけませんよ」

その忠告に反応したのはユズルただ一人だった。占い紳士を思い出しているのではない。一ヶ月前と同じように、彼はまたしてもイヤホーンのコードのあやとりをしている真つ最中だったのだ。

その厄介なコードを手に、彼は声の主の方に目をやった。そして思い出した。占い紳士はいつかの朝とまったく変わりない出で立ちでいた。ただ、椅子に腰掛け、手前にはいかにも占い師らしい黒い幕の掛けられた机が置かれていた。

紳士はシャッターを下ろした銀行の陰でひっそりと目立たぬように商いをしていた。だが、それでもユズルには一見無秩序な繁華街の人波が、実はちゃんと紳士の机の前だけは綺麗に弧を描くようにして避けて通っているのが直感的にすぐに理解できた。

それもそのはずで、机の黒幕には『イヤホン占い』とマジックで書かれた張り紙があり、その横には『イヤホーンの絡み方であなただの現在と未来を占います』とただし書きがある。そんなものは週末の酔っぱらいだって相手にするはずがないのだ。

だが、ユズルだけは違っていた。なにしろ彼にはつかの間の出来事であるにしろ、実際に占ってもらった経験があり、さらに悪いことには、その呪われた言葉は見事に的中してしまっていたのだ。

有名大学を卒業し、政府の広報機関に勤める彼の順風満帆めいた人生の中で、それは生まれてはじめて直面する巨大な壁だった。

占い紳士はまねき猫のようにしてユズルにむかって手招いてみせた。ユズルは通行人の目を気にして最初は躊躇したが、すぐに意を決して紳士のもとへ歩み寄った。こうしている間にも彼の結婚生活は暗礁に乗り上げ、状況は刻一刻と悪い方向へむかっているのだから。

「みてもらえますか」

ユズルの放った第一声は、まるで今まさに医師から告知されようとする患者めいた響きがあった。そしてそれに対し、紳士はすべてを了解しているかのように頷いてみせると、背後からもう一つの椅子を取り出し、彼に勧めるのだった。律儀にも、客がいない間は通行人の妨げにならぬようにと下げていたのだ。

ユズルは供え物をするかのようにイヤホーンのついたミュージック・プレーヤーを仰々しく差し出した。紳士はガラス細工を手にするかのように、さも慎重そうに受け取った。ただ、二人のどこか儀式めいたやり取りは通行人たちにははなはだ関心が薄いもののようにだった。二人のまわりには野次馬一人立たなかった。

「どんなもんでしょうか」

ユズルは尋ねた。ペットの診察をもらっている飼い主みたい。紳士は彼の目の前で「ウム、ウム」と一々頷きながらイヤホーンのコードを右から左へ、上から下へとつぶさに調べていった。もつとも、いったいどこをどう調べているのか、ユズルにはまったく理解できなかった。しかし、それは彼にとってはどうでもいいことだった。重要なのはあくまで『答え』であって、その過程ではなかったからだ。

だが、答えはすぐには出なかった。ユズルははつきりとは記憶していないにもかかわらず、今夜の紳士はいつかの朝よりもずっと手間取っているような気がしてならなかった。そう言えば、イヤホーンの絡み具合もいつもにも増してその複雑さを強固なものにするように見える。ほとんど曼陀羅模様か、DNAの螺旋模様のようになりまで悪化している。きつと、すべての結び目を解いた頃には、家のマンションの建物が見えていたのではあるまいか。そして、悲しいかなその窓に、暖かな灯りはこぼれてはいない。ちょうど今の彼の心のように……。

おそらくこれまでの人生の中で、イヤホーンのコードをこんなに

も長い間見つめていたことはなかっただろう。そのせいか、ユズルの目にもそれがただのコードではなくて、まるで己の分身のごとく見えはじめた頃だった。ようやく占い紳士が口を開いた。

「あなた」

紳士は自分の導き出した答えに驚いたように言った。そして、それから周囲の耳を考慮して、ささやくようにユズルに耳打ちした。

その言葉に反応して、ユズルの顔はすぐに赤くなってしまった。

本当のところ、誰にも知られなくなかったのだ。紳士は遠慮がちにこう告げたのだった。

「もしや、奥さんに逃げられましたね」

「なんでわかつたんですか」

本来ならまずほかに聞かなければならない個人的な問題があったのに、ユズルは紳士自身への質問を投げかけてしまうのだった。妻の不在をまざまざと言い当てられたせいで、逆に妻の存在を一瞬忘れてしまったのだ。

おそらくこれまで何度か同じような問いかけを受けてきたのである。紳士はとっておきの例え話を用意しているようだった。氏は得意げに頷いてからそれを披露した。

「シャーロック・ホームズはご存じですか」紳士は言った。「かの名探偵シャーロック・ホームズは依頼主の靴を見ただけで」

ユズルはポカンとして聞いていた。彼はSF小説は好きだが、サスペンスや推理小説の類は子供の頃からまったく受けつけない体質だったのだ。紳士の言葉が彼の耳よりも、その開いた口のほうに引き寄せられているのは、占い師でも探偵でなくてもすぐに察しがついた。

紳士はしかたなく二番目の例え話の力を借りることにしたらしかった。ただ、そちらの方はあまりお好みではないようだった。

「動物園の猿はご存じでしょう」氏の口調はいくぶん投げやり気味

になっていた。「私たちには、群の中にいる猿たちの顔は区別がつきませんね。しかし、動物園の飼育係にはそれが人の顔と同じように、一つ一つの個性を持った表情として見えてはいるはずですよ」
今度はユズルにも紳士の言わんとしていることが呑み込めた。つまり氏は、イヤホーンのコードを動物園の猿たちに例えているのだ。氏は話をつづけた。

「今の仕事を始める前、私は長い間、中堅のオーディオ機器メーカーでイヤホンやヘッドホーン的设计に携わっていたんです。これまで私は何万本もの絡まったコードたちを手にとって見てきたんですよ。知り合いの修理屋にも、持ち込まれたオーディオ機器の蓋を開けただけで、持ち主の職業や性格がすぐにわかる技術者が何人もおりましたけど、私たちのような技術屋は、みんな人間どうしの交わりよりも、オーディオ機器との付き合いの方がずっと長いような生活を送ってきてるわけですよ」

古い紳士の話は一般の人々には、にわかには信じがたいものだったが、ユズルにはそれが半ば同業者の内輪話のように聞こえるのだった。

ユズルは毎日毎日、『〇〇白書』といった政府が刊行する書籍類と何時間も睨み合いをしていた。その一つ一つのページから誤字や脱字、文法的な誤りを見つけたのが彼の主な仕事だったのだ。

それはまったくの単純作業ではあるのだが、一字一句の違いが、時に関係省庁のトップの首を飛ばすこともあったから、否応なしに神経を使う仕事でもあった。

「文章を追ってはいけない」それが彼の先輩の口癖であり、彼の部署の鉄則でもあった。文章を読んでもしまつと、どんなに熟練した職員でも簡単な誤字すら見逃してしまうことがあるからだ。読むのではなく、書面を一枚の絵として眺める。そうすると、文章のつながらないおかしい箇所だけが、パズルの食い違いのように、そこだけ浮かんで見えてくる。ただ、そうなるまでにはやはり長年の鍛錬

を必要とした。ユズルのような若手の職員にとって、目薬とビタミン剤は毎日の生活に欠かすことのできない常備薬であった。

そんなわけで、彼には紳士のかつての仕事と、自分の今のそれとが、どこか共通している部分があるように思えてならなかった。おそらくは、かの名探偵が関わった難事件も。

「それで、僕はこれからどうすればいいでしょうか」

ユズルはようやく本題に入った。当然のこと、彼が本当に知りたかったのは占い紳士の素性ではなくて、彼自身の将来のことだったからだ。しかしそうなってくると、占い紳士に彼の仕事や性格が分かるとしても、そこからどうやって未来のことを当ててゆくのか、まだ疑問は残った。いかに熟練とはいえ、イヤホーンのコードが未来を語りかけてくるとは思えない。

すると紳士は、ミュージック・プレーヤーごと彼に返して言った。

「これをもう一度あなたのポケットに入れてください」

ユズルは絡んだままのコードをスーツのそこへ押し込んだ。紳士はつづけた。

「あなたの知りたいことは、奥さんとの関係ですね。どうすれば奥さんと鞘をもどすことができるか」

ユズルは頷いた。

「それでは目を閉じて奥さんのことを考えてください。あなたは奥さんのことを心の底から愛していますか」

ユズルもう一度同じように頭を振った。

それからも占い紳士の似たような夫婦愛に関する質問がつづいた。ユズルはいくぶんこそばゆかったが、やっと本当の占いを受けているような気分がしてきた。

「目を開けてくださってけっこう。イヤホンを取り出して、そのまま机の上に置いてください」

最後の質問に頷いてみせると、占い紳士が言った。ユズルはほと

んど催眠術にかけられていたような面もちでふたたびポケットに手を入れた。そして彼をさんざん悩ませつづけてきたそれを麵の玉みたいに掴んで机に置いた。

嘘のようにコードの絡みが解けていた。

ユズルの耳には軽快なテンポのテクノ・ミュージックが流れていた。灯りのついていない我が家の窓はもうすぐ見えてくる。はたして、占い紳士がどんなトリックを使ったのか、それともユズルの体と心の作用が彼のイヤホンのコードにマジックをおこしたのか、知る由もなかったが、それはやはりどうでもいいことだった。今や彼はすっかりとした答えを受け取っていたからだ。

『自分と妻との戦いの時は、迷わず妻の側につくべし』それが一本のコードから占い紳士が導き出した答えだった。

波子には電子音楽以上に嫌いなものが一つあった。それは一種の家訓のようなものでもあるのだが、彼女の家族は全員、区役所の職員から大臣にいたるまで、およそ公務員と名のつく人間が大嫌いだったのだ。特に政治家や官僚たちは彼らにとって虫ずの走るような存在らしかった。

というのも、波子の家族は三鷹に移る以前には、長らく下北沢の地で店を営んでいたのだが、新たな環状道路の建設にともなって、なかば強制的に移店させられたという家系凶的な苦い経験があったのだ。

そんな事情はつゆ知らず、チャーハン好きの国家公務員ユズルは足げく店に通っていたのだが、実家の手伝いをしていた波子の目には、彼はいつもチャーハンしか注文しない、客の中で一番仕事に疲れている男のように映っていたらしかった。

チャーハンはいいとして、そんな疲れ果てた男と、波子がどうし

て付き合ってみる気になったのか、それはそれで謎ではあるけれど、彼女の公務員嫌いに関しては、結婚前にもう少し二人の間で突っ込んだ話し合いがあつてよかつたと、今になってユズルも後悔はしていた。なにしろ波子が家を出ていってしまったのは、官僚の天下り問題をテーマにしたTVのワイドショーを見ていたおり、つい彼が官僚の側を擁護するようなことを口にしてしまったのが発端になつていたからだ。

ああ、おいしいチャーハンが食べたい。吉祥寺のおしゃれな中華店の前を通りすぎた時、ユズルは思うのだった。波子が家を出ていったとき、彼はまるで妻に操をたてるかのようにずっと『チャーハン絶ち』をしているのだ。

もしかしたら本当に今の仕事を辞めなければならぬかもしれない、ユズルは感じはじめていた。チャーハンと引き替えに。いいや、妻の波子のために。

じつは彼女と出会った当初からその予感がよぎることはこれまでも何度かあつたのだが、深く考えないようにしていたのだった。なにしろ、ずっと机の前で人生を過ごしてきたようなユズルにとって、それはかつて経験したことのない、まさに未知の領域だったからだ。けれど、今晚の彼の頭は解けたコードのように以前よりも大夫柔軟になっていた。たとえどんな結果が待っているにしろ、自分の好きな人となにか新しいことがはじめられるのはむしろ喜ばしいことなのではあるまいか、そう感じられるようになっていたのだ。

例えば仮にそれが、テクノ好きのラーメン屋の出前持ちであったとしても……………。

第5話「ジャズ喫茶夢想」

まもなく父親になろうとしている時に、ふたたび独身時代にまいもどったような生活をおくるのは、なにやら奇妙な気分ではあった。臨月の近づいた妻が里帰りしているあいだ、遅い夕食を一人外ですませたあと、ジャズとコーヒーをしばし味わってから家路に着くのが、一日の終わりのささやかな楽しみになっていた。

私が暮らしている中央線沿線には、いまでも数軒のジャズ喫茶が残っている。学生の頃からその手の音楽を愛聴している私にとって、は恵まれた環境なのだが、ただ、いかに60年代的文化の色濃く残る中央線沿線でも、やはり今どきのジャズ喫茶の経営は一握りの熱心な固定客によってどうにかまかなわれているのが実状のようで、たいていどの店でもトランペットやテナーサクソと共に、閑古鳥まで一緒になつて鳴っている。

しかし、中には例外もある。私の行きつけにしている店がそうだ。もつとも、それは悪い例外の方で、その店には、はたしてごく少数の固定客すらいるかどうかあやしい雰囲気なのだ。なにしろそこにはもとから絶対的に少ない客層を、さらに絞り込む商いの神様のようなある物体が店の看板となつて来る客を待ちかまえているのだから。

いったいなぜ、ジャズ喫茶の入り口にサーフボードなんかが必要なのだろう。ジャズとサーフィン。ただミスマツチだけではない。まい。おしゃれなインテリアのつもりかもしれないが、これが今流行りのカフェなんぞならまだしも、私にしてみればジャズ喫茶の玄関脇にあんなものを置くのは、せっかく訪れてくれた客に塩をまくような行為だと思えてしかたがない。

例えばそれは、なじみの銭湯の番台に、いつもの婆さんの代わり

にアルバイトの若い女の子が突然座っているような感じに近いかもしれない。レコード片手に訪れた眼鏡姿の実直なジャズ青年は、短い階段を上ったところでおよそ場違いな代物に出くわし、ふだんより素早く着替えをすませ、銭湯の男性常連客よろしく、そそくさと店をあとにするのだ。

そういつた光景を私はじかに見たわけではないし、またべつに見たいとも思わないのだけど、この想像はそんなに的はずれなものではないと思う。そうでなければ、あの店にだってもう少し客が入っていてもいいはずなのだ。せめて夏が終わったあとの海の家ぐらいには。

私は断じて違うが、わざわざジャズ喫茶にまで足を運ぶようなマニアックな人にはけっこう頑固一徹な人物が多いようだ。そういう人の心に爽やかな海の潮風は吹いていない。そこにはただハードバツプの熱い風だけが吹いている。

唯一の救いは、あのサーフボードのペイントが黄色であることだろう。ジャズファンはなぜか黄色が好きだったりする。その証拠にこのジャンルのレコードやCDには黄色を基調としたデザインのものがない。もしも仮にまったく同じ内容の黄色と白の二種類のCDがあったとしたら、迷うことなく黄色のほうを手取るのがジャズファンだ。もっともロック好きやクラシック愛好家も似たようなことを言うかもしれないが。

ちなみにその店はレンガ造りの階段をあがったテラスのついたビルの上階にあつて、人通りも見えない場所にある。しかも私の独断で決めてしまえば、ソファのリングは少々くたびれていたりするけれど、選曲はいたって趣味のいいものだし、コーヒーの味だって専門店に負けないぐらいに美味しい。おまけに夜遅くまで営業しているから、私のようにサービイス残業の多い営業マンなどなど、普通ならばもう少し客足があつてもおかしくはないのだ。

もしかしたらあの店の丸顔の髭のマスターは若いころサーファーで、波とジャズとを共に語りあえる客がくるのを首を長くして待っているのかもしれない。遙か五十年代の古いジャズのレコードを聴きながら、髭マスターには背を向け、コーヒーをすする私は時々思う。きつと店前の黄色いサーフボードはそのためのサインなのだ。もしもそうだったとしたら、とつとと商売換えをすべきなのだろう。ジャズ愛好家の集まるサーフショップがこの世に存在しないように、サーファーたちの集まるジャズ喫茶もまたありえない。まだサービイス残業を終えた営業マンだけが集うジャズ喫茶の方が考えられる。なんなら私がやつてもいい。いいや、私には開店資金がないから、雇われ店長でもいい。

店の重たい扉を開いた時には0時近くになっていた。黄色いサーフボードはやはりそこにあった。私はなんともなくそのボディに触れてみた。まるで自分のボードの感触を確かめるサーフアーみたい。きつと閉店後も表に出しっぱなしにしているのだろう。私が指先に感じたのは、ビーチの砂ではなくて、こびりついた深夜の都会の冷たい埃だけだった。

私の妻の実家は千葉にあった。私たち夫婦が暮らしている杉並区の住宅地よりもよほど大きな街だ。週末になると中央線に乗ってお腹の目立った彼女にはるばる会いに行くのが近頃の私のもう一つの習慣であり、楽しみであった。

べつに夫婦仲を自慢しようとしているわけではない。お腹の子供や彼女には少々バツが悪いけど、私のお楽しみはそれとは若干別のところにあったのだ。

やはり私の会社の上司にも以前奥さんが身ごもって、週末になると新幹線に飛び乗り、奥さんの実家のある仙台までわざわざ通っていた人がいたけども、その元上司は赤ん坊をさずかつたきり、とうとう会社にはもどってはこなかった。

その上司と私とはどうも折り合いが悪かったから、思いがけない噂を社内ですらに聞いた時にはこれ幸いと小躍りしそうになっただけだったけども、今になってみると、私には実感としてあの人の気持ちがよくわかる。

それはなにも会社の人間が口にしていたような、北国の森の都の風土が肌に合ったとか、食べ物美味しいからとか、そんな単純な動機ではないように私には思える。

少し大袈裟な言い方になるかもしれないが、世の中の夫たちにとって、妻の育った見知らぬ土地で暮らすということは、言葉では上手く言い表すことのできない、なにか魅惑的な体験なのではないだろうか。そこではふと目にした朝の木漏れ日から、肌にふれた夜風まで、普段とはまったく違ったように感じることができる。それはたしかにそれぞれの夫婦関係にもよるだろうけども。

私は夜道を一人自宅へと歩きながら想像する。なにかのきっかけで自分の妻の故郷へと導かれた男たちが、一人また一人と、この東京の街から消えてゆく後ろ姿を。男たちはその土地でこれまでとは別の人間として生きてゆくのかもしれない。中にはジャズ好きの波乗りになったりする者もいたりするのかもしれない。

金曜日の夜、営業先から戻り、見積もりの束をデスクに築き上げた私は終電に乗って中央線沿線の街へと帰った。

その夜、閑古鳥の店は珍しく早くに閉店していたようだった。置き去りにされた店の看板のサーフボードだけが階段の上で私を待っていた。そう、たしかにそれは誰か待っていた。一枚の紙切れを細長いその身に携えて。

おそらく世界中のあらゆるマイナーな趣味を持った人間が共有しているであろうある予感を持って私はレンガの階段を上がってみた。そうして暗い店の玄関前で探偵よろしくライターの火を点けたのだ。私のマイナーな予感は的中した。閑古鳥の店はついに店じまいしたのだ。それも永久に。ドアにはお決まりのお別れとお礼の挨拶がはしり書きされた張り紙がガムテープで止められてあった。私は今度は洞窟を彷徨う考古学者のようにその一文字一文字を照らし出していった。

一方、サーフボードの張り紙には『ご自由にお持ち帰りください』の文字が。

あれは私への当てつけだったのだろうか。もしかしたら髭のマスターは私がこの細長い物体の存在を心よく思っていなかったことに感じていたのかもしれない。そんな私に店の後始末の一端を背負わせようとしたわけだ。だって、私のほかにあんな張り紙に注意を向けるような客はあの店にはいないのだから。

もしや、髭マスターも奥さんの生まれ故郷の土地に惹かれた男性諸子の一人だったのかもしれない。以前、私は手荷物片手に店を訪れたマスターの奥さんらしい女性を見かけたときがある。華奢で色白の感じのいい人だったけども、悪いことにそのときも店内に客は私一人だけだった。それでも奥さんらしい女性は臆することなく私に笑顔で「いらっしやいませ」と挨拶してくれた。髭の旦那よりも数百倍愛想がよかった。

いいだろう。自分でもよく分からないが、暗い階段の踊り場に一人たたずんだ私は、なぜだかすすんで髭マスターの共犯者になってもいいような心持ちがした。いつかの奥さんの笑顔とサーフボードの黄色が私をそんな気分させたのかもしれない。

金曜の深夜にサーフボードを抱えたスーツ姿の私は、周囲の通行

人にはさぞかし華麗な週末を過ごすオシャレなサラリーマンとして映ったことだろう。そうでなければ大きな拾い物をした変わり者の勤め人か。

どっちでもいい。だって、今の私はたしかにそのどちらでもあるのだから。いや、少なくともそうなりつつあるのだから。

妻の実家は海に近かった。帰り道の途中、私の頭はふたたびデスクで見積もりの計算をはじめているかのように働きたした。

車だつてもうじき手に入る。出産に合わせ、会社がリースを受けている営業用の車両を格安で譲ってもらう予定でいるのだ。子供が大きくなったころには私のサーフィンの腕前もきつといくらかは上達していることだろう。週末には助手席に我が子に乗せて海へと向かうのだ。そしてそこで私は髭のマスターと劇的な再会をする。いいや、それだけはなんとしても避けたい。

まるで大海原を目の前した野ネズミのような心境だった。黄色いサーフボードは今、埃をきれいに拭き取られ、当マンションの居間の片隅に鎮座している。私は胡座をかきながら呆然とそれを見あげている。私の妄想は太平洋みたいに果てしなく広がってゆく。

その妄想の中で、私はなぜか海辺の街でカフェを開いていたりする。ガラス張りの日射しの降りそそぐ席には、お気楽なサーファーたちと堅物のジャズファンたちが相席しあつて、なにか楽しそうに雑談している。

店内には古いジャズのレコードが緩やかに流れている。隅の席にはいささか老けた丸顔の髭のマスターの顔も見える。彼は店の壁に立てかけられた黄色いサーフボードを懐かしそうに眺めている。

むろん私は声をかけたりはしない。私はただ専門店に負けないコーヒーを提供し、かつて閑古鳥の店でよくかかっていたレコードに静かに針を落とすだけだ。

そこへ買いだしに出かけていた妻が店のドアを開けて帰ってくる。

彼女の顔を見た私は、やっと現実のマンションの一室へと戻ってきた。

明日の早朝には中央線に乗って妻に会いにゆくのだ。はたして私は我が家の居間の一角を陣取ったこのサーフボードの存在をどうやって妻に説明すればいいのだろうか。私には彼女を納得させることのできる言い訳が、こちらは枯れた井戸のようにまったく思い浮かばないでいた。

第6話「足湯下車」

世の中にはほんとうに魔法の学校に入りたくて、9と3/4なる数字の駅のプラットホームを真剣に探し求める人があとを絶たないと話には聞くけども、わざわざ遠くロンドンまで足をのばさなくとも、時刻表に記されていない電車ぐらいならば、私が毎日のように利用しているここ東京の中央線にだって存在する。

もつとも、その電車に乗車することがあつたとしても、本人の努力ならばいざ知らず、例えばとある乗客「カリソメさん」が、その後天才的な魔法使いになって、見込みのない恋を成就させたり、いきなりIT企業の社長になったりするようなことは、カリソメさんの遠い将来を含めても決してない。

ただ、いつもの駅でその電車をおり、自宅についたときに、カリソメさんの体はそれまでよりずっと調子がよく、気分まで軽やかになっているぐらいのことはあるかもしれない。カリソメさんが仕事や諸々の事情でお悩みならなおさらだ。

かく言う私をはじめてその電車に足を踏み入れたのは、日中の暑さが嘘のように冴えた空気へとかわる9月も終わりに近いおそい夜のことだった。

新宿駅のホームに入ってきた電車が妙に空いていたのを今でも私は覚えている。

いつもなら残業を終えたサラリーマンやOLでいっぱいのはずなのに、その電車はまるでテスト運行の車両のように人気がなかった。扉が自らの意志で乗客を招き入れるかのように開いた。

天井の明かりだけが煌々としていた。

私はてっきりどこかの駅で事故があつたのかと思つた。その影響

で折り返し運転でもはじめたのかと。

そういえば、プラットホームにも人の姿はまばらだ。もしかしたらぼんやりしていて聞き逃したか、駅のアナウンスがあつて、ほとんどの客は総武線なり他の交通手段を利用しているのかもしれないなかつた。

私はホームの電光掲示板を見上げた。行き先は『西荻窪』とあつた。そこからまた折り返し運転をするのだろうか。私がおりる吉祥寺駅より一つ手前だが、せっかく座れるのだし、その夜にかぎり、できるだけ帰宅時刻を引き延ばしたかつた私は、ひとまず無人電車に乗つて西荻窪までゆくことに決めた。

私は鉛のように重い体を無人のシートにあずけた。考えれば午後に会社をでてからというもの、飲まず食わずで歩きどおしだつたのだ。私の足腰はすでに限界点をこえていたが、それ以上に神経のほうは憔悴しきつていた。

はたしてこの日、我が身にふりかかつた災難を家でまっている妻にどう伝えればいいか、私はそればかりをずっと気に病んでいた。電車に乗つてからも、妻の落胆した表情が脳裏から消えることはなかつた。

気がつくと窓の外にあらたな駅のホームの風景が見えた。

私が考え事をしていたのはほんの十数分のはずだつたけれども、まるで見知らぬ最果ての町駅にたどりついたような気がした。

夜の中央線では新宿をすぎた途中駅からも一塊りの乗客がドアから乗り込んでくるのが常だけでも、その最果てのプラットホームには、最果てのサラリーマンが一人ポツンと立っているだけだつた。

電車は私たちを引きあわせるかのように、ちょうど二人を正面に停車してドアを開いた。

男性客は座席にいる私を見て驚いた様子だつた。なんで『私の電車』にあなたが乗つてるんだ、みたいな顔をしていた。

だが、それも一瞬のことで、男性は車内に足を踏み入れると、今度はうちとけたようなまろい笑顔をみせ、私にむかつてお辞儀までするのだった。

はて、どこかで会ったことがあっただろうか。私にはその記憶はなかったが、たとえ初対面であろうと人生の局面であろうと、礼には礼で答えるのがこの国の習わしだ。私はうちとけた笑顔はつくらなかったが、失礼のないくらいのお辞儀はした。

男性はむかいのシートの端に腰をおろした。私と同じ営業畑の勤め人のように見えた。歳は一回り上ぐらいか。褐色のよい社交的な中年男性らしかった。

電車はふたたび走りはじめた。窓の外に『西荻窪』の駅の表札が流れて消えた。はて、たしかこの電車はその『西荻窪行き』ではなかったかしらん……。

どうやら事故の復旧作業が終わって、正常なダイヤにもどったらしい。つぎはいよいよ吉祥寺駅だ。車両の振動とともに、私の家庭的不安も否応なしに加速していった。

すると、さきほどの男性がなにやらチラチラと嬉しそうに私の方を見ているではないか。ああいうのをえびす顔とでもいうのだろうか。しかし、怪しいといえばじつに怪しい。本当にどこかで面識があったのかもしれないが、少なくとも私にはその記憶がないし、笑談をかわせるような気分でもない。

やはりここは知らんふりしておくのが一番だ。私はすかさず狸寝入りを決め込んだ。

その演技がよほど真に迫っていたか、電車が停止するよりさきに誰かが私の肩に手をおいて、一言「着きましたよ」と呼びかけた。

この車両に乗客は二人きりだから、その誰かが誰であるのか、私はまぶたを開けなくとも察しがついた。しかし不思議なのは、どう

して男性に私の降りる駅が分かったのかということだ。やはり顔見知りだったか。

いずれにしても、私は私よりも私自身の行動をより良く記憶している人とは縁故をもちたくない性分でもあったので、男性の親切には悪かったけども、寝起き、またお辞儀だけをして、そそくさとその横をすりぬけ、開いたばかりのドアからホームへ降りた。

悪夢のつづきを見ているようだった。最果てのそのまた果ての駅。私は私がよく知ったはずのプラットホームに立ちつくした。そこには人の姿だけでなく、吉祥寺駅の面影さえ見つけることはできなかった。

どうやら私は逆方面の電車に乗っていたようだ。だとすると、ここは千葉の田舎駅ということになる。いったい疲れ果てたこの心と体を、我が家の湯船で癒せるのは何時のことになるやら……………。

いいや、待て。瞬間ではあったが、たしか私はさつきこの目で『西荻窪』の駅の表札を見たばかりではなかったか。それに新宿駅の電光掲示板で確認した『西荻窪行き』の文字。やはり私は逆方向の電車などには乗っていないはずだ。

そのときだった。私の記憶が私自身を呼び覚ましたのは。

『西荻窪行き』ではなかった。新宿の電光掲示板の文字、あれは『西荻窪行き』と光っていた。そんな駅の名前は聞いたこともないが、たしかに『西』が一つ多かった。

私はホームに駅の表札を探した。それはすぐ横の柱に見つかった。やはり『西』の文字が一つ多い。しかし、こんな中途半端な駅が、こんな中途半端な場所に、いつできたのだろうか……………。

「もしかして、この駅に来るのははじめてですか？」

過ぎ去った無人電車の騒音とともに、背中で男性の声があった。

私は三たびお辞儀だけをしてその前を通り過ぎたい気分もあった

けども、彼ならこの状況を上手く説明してくれるかもしれない。なにしろ、存在感がないと毎日のように営業部長から叱咤されていたこの私のことですら覚えていくぐらいなのだから。

だが、いつもたいていそうなのだが、私の予感は今もハズれた。男性の質問にうなずいてから、「どこかでお会いしましたか？」とたずねた私に、彼はただ首を横にふってみせた。

私は腹を決めた。『西西荻窪』なんて所は知りもしないが、その名前から判断して、わが吉祥寺とは目と鼻の距離のはずだ。これ以上の体力の消耗は危険レベルであることは十分承知していたが、私は徒歩で帰宅することを英断した。

すると男性が口をひらき、営業マンらしい人当たりのよい声で言った。

「ここで会ったのもなにかの縁でしょうし、よかつたら御一緒しませんか」

てつきり私は男性がタクシーを同乗していこうと誘っているのかと思った。きつと仕事でもよく利用しているのだろう、懐には大量のタクシー券を所有しているのだろう、と。

だが、それもやはり私の早合点だった。男性はまだ口にはしていなかったが、この『西西荻窪』にはある秘密があったのだ。男性はそれを「御一緒しませんか」と誘っていたのだった。

そしておそらくは私の反応の一挙一足から、男性はこの人物がはたして秘密を共有できる人間であるかどうか、見定めようとしていたのかもしれない。きつと小生が狸寝入りしている間もすっかりと

しかし、『西西荻窪』初心者である私はそんな裏事情は知る由もなく、家にははやく帰りたくはないが、そうかといってこれ以上歩きたくもなかったがゆえ、恥も外聞もあっさりと捨てて、初対面の男性に快く相づちをした。そして先輩についてゆく新人営業マンよ

ろしく、ホームの階段をおりていったのだ。

『西西荻窪駅』には利用客どころか駅員の姿も見あたらなかった。まるですべての住人が迫りくる大災難にそなえて街を放棄していったかのような静けさなのだ。無人の構内に命知らずの二人の営業マンの靴音だけが響いていた。

私たちは自動改札機をぬけた。扉の音が駅の建物全体にこだましたようだった。

売店には商品が陳列されていた。コーヒースタンドからは煎れた豆の香りが漂っていた。ただ、人の姿だけが嘘のように消えていた。そこにはついさっきまでの駅の活気がおきざりにされたままだった。ふり返れば、電車を降りた人波の足音が今にも階段から押しよせてきそうなの。

だが、雑踏のざわめきはついに聞かれず、かわりに男性が「こっちはです」と言っ、私に手招いてみせた。

彼は『西西荻窪駅』の東口にむかって歩いていった。

ここまでくればいかに勘の鈍い私であろうとある程度予測できたことだが、『西西荻窪駅』のロータリーには案の定、人影はなかった。ティッシュ配りも、チラシ配りもない。明かりのついた交番はもぬけの殻だ。

そして当然のごとく、私が帰宅の足にと目論んでいたタクシーも一台も停まっではないなかった。いささか不安になった私は問いつめるように男性の横顔を見た。いつたいなにを「ご一緒」するつもりだったのか、と。

すると男性は私を見て、「あれですよ」とどこか誇らしげにロータリーの中央を指さしたのだ。

はたしてどれくらいの人が喜ぶかはしらないけども、中央線沿線の駅のロータリーでは、たいていどこでも利用客を噴水が出迎えてくれることになっている。ただ、『西西荻窪駅』にそれはなかった。たしかに噴水はなかったけれど、『西西荻窪駅』のロータリーにはそれとよく似たものはあった。もっとも、私とその違いに気がついたのは、男性の指先を目で追ったずっとあとだった。

白い霧が夜の空気にとけ込もうとしていた。その薄いベールにつつまれてスーツ姿の一人の女性の姿が見えた。噴水らしき縁にたたずんで、まるで喫茶店の席にいるように胸に開いた文庫本に目をおとしている。

私はとうぜんのごとく女性の行動を疑った。これが真夏の熱帯夜ならまだ話はわかるのだが、季節はもうすっかり秋の入り口に立っていた。それなのに、その女性ときたら、スカートの裾からのぞいた両脚を噴水の水面の中につけているのだ。

すると、彼女の名誉をばん回すべく男性が口を開いた。

「ご安心を。言いおくれましたが、私はここの『足湯』の管理人を勤めている者です」

私にはたしかに存在感はないだろうが、良識ぐらいは人並みにそろっている。私のそれは男性の意見を半分だけうけいれた。つまり、霧のように見えたのはじつは湯気であり、かの女性が両脚をつけているのは噴水の水面ではなく、足湯なのだということ。

だがしかし、やはりここは中央線沿線の駅のロータリーであって、観光名所の温泉地ではない。私も営業職という仕事柄、都内某所の数々の駅前噴水は見てきたはずだけでも、それがかつて足湯になっていたというケースは一度たりともありはしなかった。

私はどうも自分が大がかりな悪徳商法に引っかけられているような気分になってきた。えびす顔の営業人、スーツ姿の謎の女、そし

て人生の局面にいる顧客と、すべて役者がそろっている。

男性はさらに商談をすすめるかのようにつづけた。むろん、顧客をその気にさせるえびす顔をたたえて。

「この『西荻窪駅』で下車される乗客はそう多くはありません。仕事につまずいた人、人間関係やつらい恋に悩んでいるお方、そしてなによりも私たちと秘密を共有でき、ほかのお客様に迷惑をかけることのない品格の持ち主。そのような人だけが、あの足湯につかることができるのです」

さて、私に男性の言うような品格がそなわっているかどうかはわからないが、仕事につまずいていることはたしかだった。というより、はつきりと私はこの日の午後、会社を解雇されたばかりだったのだ。

営業部長に呼びだされ、副社長との面談のもと、私はそれを言いわたされた。それからどこをどうほつき歩いたかは記憶にないが、気がついたときには、いつもとだいたい同じ時刻に新宿駅についていたという次第。

自称『足湯の管理人』、私に言わせれば『えびす顔の営業マン』たる男性は、電車に乗った小生の表情を見て一目でそれを見抜いたのかもしれない、私は単純にそう考えもしたけれど、どうも男性の心理眼はそれだけではなさそうだった。

彼のそのあとの言葉は、私にとって殺し文句のような威力を持っていた。

「さあ、お入りなさい。あの足湯は足腰の疲れだけでなく、あなたの心の悩みも解消してくれますよ。そうすれば、家で待っている奥さんにも、今日一日の出来事をすんなりと切りだせるのではないでしょうが」

そうなのだ。私の一番の悩みといえば、それは会社をクビになっ

たことではなく、それをどう妻に伝えればいいのかということにあったのだ。危うくば、彼女には内緒のまま、そつと明日から再就職活動をはじめようかと考えていたぐらいだった。

渡りに船。悪徳商法だろうとなんだだろうと、もはやどうでもよかった。私は男性のえびす顔に力強くうなずくと、白い湯気に誘われるようにしてロータリーの中央へと歩いていった。

私は靴と靴下を脱ぎすてた。先客の若い女性にどう挨拶すべきか迷ったが、彼女は一瞬顔をあげたきり、また目をふせたので、幸いその必要はなくなった。耳には音楽を聴いているのか、イヤホンがしつかりとはまっていた。

私の鈍い直感では、どうも彼女は恋の悩みのほうなのではあるまいか。

まあ、それはいいとして、じつのところごく一般的な足湯をふくめたとしても、私がそれにつかるのはこれがはじめての体験だった。状況が状況だけに、私はなにか秒速単位の劇的な変化みたいなものを期待していた。

しかし、これといって特別なことはおきはしなかった。冴えた夜の空気の中で、暖かい湯に足をつけているのだから気持ちよいことはたしかに気持ちよいのだが、それ以上でもそれ以下でもない。

私はまるでデパートの屋上にある乗り物に乗せられたダダツ子みたいにうしろを振り返った。男性はそこに立っていた。営業用のスマイルをたたえた彼は、管理人というより今は温泉宿の番頭みたいに私の目に映った。

絵の中にいるように辺りは静かだった。猫一匹とおりはしない。聞こえるのはどこからか沸きだしているお湯の源泉の波音と、かすかに女性のイヤホンからこぼれてくる音楽の断片的なフレーズだ

けだ。

そこで悪いとは思いながらも、ほかにすることもない私は、隣はなにをする人よろしく、隣人たる〇嬢を少し観察してみた。

細面のきれいな女性だった。ただ、人のことを言えた義理はまったくないけども、やはりどこか幸薄そうにも見えた。それが私をして、恋に悩んでいるように思わせたのかも知れない。

しかし、もしもそれが事実だったなら、彼女を悩ませている男はさぞかしモテる男なのだろう。まあ、そんなことはホレたハレたの世界からは、湯につかる以前からとうに足を洗っている小生にはどうでもいいことなのだが。

どうやら聞こえてくる音の断片を集めると、女性は私の知らないクラシック音楽を聴いているらしかった。

変な言い方だが、色恋などはべつにして、私は私の知らない音楽についてならば一言も二言も持っている。なにしろ我が家では、妻がいつも私の知らない音楽ばかり聴いているのだ。

そういえば、隣の〇嬢はどこか妻に感じが似ているところがあった。自分の伴侶を幸が薄いとは呼びたくないけども、猫背にして文庫本に目をおとしている姿など、かなり彷彿とさせるものがある。妻もああした格好でよく居間のソファに座って読書をしている。

これがまた私など見たことも聞いたこともないような本ばかりだ。それが彼女の趣味なのだ。私の知らない音楽を聴き、私の知らない本を読むことが。

これまでの私はいたって妻の趣味にたいしては無関心でいた。けれど、こうしてぼんやり足湯につかりながら、聞こえるか聞こえないかぐらいの音楽に耳を傾けていると、遠い昔に置き去りにしてきた懐かしい感性が芽生えてくるような感じがする。まるで子供のころに砂場に埋めておいた宝物をようやく見つけたような。

女性にはなお悪いが、私は隣にいるのが本当に妻だったらよかつ

たのにな、とふと思ったりした。きつといまの私なら、そしてこの一風変わった環境なら、素直にたずねることができるのであるまいか、と。この世界にあまねく私が知らない音楽や書物について。

もしかしたらこれも足湯の効能の一つなのかもしれない。そうでなければ、はやくものぼせたか。私は夜のはざまにかすかに流れてくるエーテルのような響きにもう一度耳を傾けた。

どこか子守歌にも似た優しいピアノの調べが聞こえてきた。いや、悪くない。誰がなにを弾いているのかさっぱり見当がつかないけども、少なくともカラオケボックスで幾度となく聞かされた営業部長のオハコよりはずっといい。

だがしかし、足湯につかりながらの子守歌はやはり状況が悪かった。気持ちよく聴いているうちに私はだんだんウトウトしてきてしまったのだ。車内での狸寝入りがアダになったのかもしれない。私は家の風呂ではそんなことはしたためしはないけども、外の足湯でついに本格的に寝入ってしまった。

目が覚めたとき、私は一人きりだった。麗しのOL嬢も、管理人の男性の姿も、どこかへ消えていた。

夢でも見ていたのだろうか。だが、私の両脚はあいかわらず湯につかったままだった。ふと悪い予感が頭をよぎって、内ポケットの財布に手をやった。それもとのままだった。

ふりむいて目をおとすと、私の革靴がきれいにそろえてあった。ご丁寧に小生が脱ぎ捨てた靴下が丸めておさまっている。誰がやったのだらう。願わくばOL嬢だと思いたい。

すると、慣れ親しんだ夜の静寂を破る騒音が聞こえてきた。高架橋の先に下り電車の明かりが見えた。

もしかしたら、あれが最終電車かもしれない。私はかまわず濡れたままの足に靴下をとおし、大急ぎで駅の改札にむかった。

開店休業の売店とコーヒーショップに別れを告げ、私は改札をぬけた。そして、階段を途中まで駆けのぼったところでようやくあることに気がついた。

足腰の疲れがすっかりとれていた。

目下の電車には乗り遅れたが、時計を見ると、最終までにはまだ時間があつた。逆算すると、私が足湯につかってウトウトしていたのは小一時間ばかりであつたようだ。

しかし、私の感覚でいうと、最初にこの『西荻窪駅』に足を踏み入れてから、もつともつと時間がたっているような気がする。寝起きの時差ボケではないだろうけど、なにか望遠鏡を逆にして、小さくなった一日の出来事を覗き見しているような感じがするのだ。

どうやらあの足湯には、たんに体の疲れをとるだけではなく、竜宮城のおとぎ話めいた、人の時間的な感覚を麻痺させるような効能があるのではあるまいか。それが訪れた人々の不安や迷いの気持ちに緩和させるのだ。ちょうど苦い恋の結末も、時がたてば思い出話の一つになってしまうように。

私の心もなんだか会社での個人的な災難が、遠い昔とは言わないまでも、少なくとも客観的に見られるまでには落ち着きをとりもどしていた。これならきつと妻にも冷静に話して聞かせることができらるだろう。まあ、それについて妻の方がなんと云うかはわからないけども。

しばらくすると電車がホームに入ってきた。車内はいつもどおり残業帰りのサラリーマンやOLで混み合っていた。ふだんの私なら、その光景にかなりウンザリするところだけでも、今夜ばかりは少し

ホツとした。

『西西荻窪駅』のホームで降りる客はいなかった。それどころか、乗客たちは電車がホームに停車していることすら気がついていないかのようだ。

私は開いたドア近くの空いたスペースに体をすり込ませた。私を見る者は誰もいなかった。

電車は静かに走りはじめた。おそらく、満員の乗客の中で、私だけが過ぎ去る『西西荻窪駅』のプラットホームを眺めていた。ごく中途半端な場所にある幻の駅を。

すると、誰もいないはずのホームのその先端に一人の人影が見えた。

まちがいない。『足湯の管理人』だ。

男性は私の姿が見えたのか、電車にむかって最後のえびす顔のお辞儀を試みさせた。

吉祥寺駅につくまでのごく短い間、私はドア越しの風景を見つめながら、あらためて不思議な心持ちがしていた。

無人の駅のロータリーで、ひっそりと誰かがおとずれるのを待っている湯の泉。もしかしたら夜が明けて、始発電車が走りだすころには、『西西荻窪駅』も、あの足湯も消えてなくなってしまうのかもしれない。そうして、ふたたび夜のとばりがあるころになると、また忽然とあらわれるのだ。

日々の泡の中で戸惑いがちな人々のために

第7話「夜の学校」

その日の僕はいささか複雑な心境で都庁の建物をでた。

時刻はまだ夕方の5時を半ば過ぎたばかり。こんなはやい時間に退庁できるのは何ヶ月ぶりのことだろう。そして、同僚たちはあと何時間残業するはめになるのだろう。

きっと僕が自宅のソファに身を投げだしたころにも、彼らの何人かは、まだ公文書室のパソコンとにらめっこをつづけているのであるまいか。

新宿駅で中央線に乗車してから僕の思案はつづいた。

同僚たちはみな一様にこちらの身分をうらやんでいた。できれば代わって退庁したいような顔をしていた。

けれど、いかに定時退庁の権利をもらったとはいっても、それで僕の毎日の仕事のノルマが減るわけではなかった。その埋め合わせを、きつと僕は休日出勤という形で補わなければならなくなるだろう。

しかも、はやく仕事を終えたとはいえ、真つ直ぐに帰宅できるわけでもない。僕はこれから学校へとむかうのだ。十年前に卒業したはずの、杉並区の公立高校へ、『日本史』の授業を受けるために。

母校から封書入りの知らせが自宅マンションのポストに届いたのは一月ぐらい前のことだった。

それは世間一般を騒がせていた必修教科の未修理問題に関することだったけども、文面によると、僕には卒業に必要な『日本史』の単位が足りていないとのことだった。

そんなことをいきなり言われても、しかも十年もたった今ごろになって告知されてもしょうがないのだが、さらに文面によれば、希

望する卒業生には、夜間の補習授業を週五日、無料開講するとの旨が書かれていた。希望者が多数の場合、定員になりしだい応募を締め切るとも。

僕はもちろんそんな手紙は一度目をとおしたきりうつちゃっておいた。月に100時間残業している社会人が、どうやって週五日の夜間授業を受けられるのか。

だがしかし、それから一週間ぐらいあとのことだ。仕事中に総務部に呼びだされた僕は、とうとうな知らせを受けた。その補習の応募を総務から郵送しておいたというのだ。社会人のための補習授業の実施は都の教育委員会の決定であり、都庁に勤める職員の中でそれに該当する者は、当然その義務にしたがわなければならない、と。なんでも僕は、同窓生であるらしい都市整備局の『成瀬』なる職員と一緒に高校の『日本史』の授業を60時間受けることになるらしい。

60時間。1日2時間としても、二ヶ月弱はかかる計算だ。ああ……。

中央線の車内にはいつも朝の時間帯にしか見かけない制服姿の高校生たちも混じっていた。これからしばらくの間は、僕も彼らと同じようにシャーペン片手に教室の黒板とむきあうことになる。

たぶん生徒の大半は強制的に参加するはめになった公務員たちだろう。実社会でバリバリに働いているビジネスマンやOLが、こんな補習授業に自らすすんで参加してくるとはとうてい考えにくい。

これがなにかの資格になるというならまだしも、いまさら『小野妹子』やら『遣隋使』やらを学んだところで、どんなキャリアアップにもつながりはしない。

明かりのついた夜の教室で、どこか不服そうな公務員ばかりが、むっつりと黒板を見つめている光景を想像すると、僕の心持ちはい

よいよ憂鬱になるばかりだった。

僕が卒業したはずの公立高校は荻窪にあった。補習授業がはじまるのが7時。駅前のファーストフード店で軽い夕食をすませてから昔通い慣れた通学路を歩いていった。

照明設備の整ったグラウンドでサッカー部の生徒たちが練習をしていた。どこからか吹奏楽部の管楽器の音色も聞こえてきた。校舎が夜の蒼い空を背景にして横たわっていた。

社会人になったのを期に国立市で一人暮らしをはじめた僕が、たしか母校をこの目で見るのはせいぶん久しぶりのはずだったけども、これといった感慨は湧いてはこなかった。

玄関前に僕とそう歳の違わない男性教師が立っていた。彼から案内書の紙きれをもらって、来賓用の靴箱に革靴を入れてスリッパへと履きかえた。

男性教師の話では、最初の一時間目は補習授業の説明会になるらしい。

それはそうだろう、僕は思った。いきなり教科書の何ページを開いてと言われても困るし、学校側からのそれなりの釈明なり謝罪なりも必要なはずだった。もっとも、どんなに上手な釈明や謝罪の言葉を聞かされたとしても、こちらが納得することはないけども。

案内書を見ると、補習授業には一階の一年生の教室が割り当てられていた。驚いたことに、全部で3クラスもある。一クラス20人と見積もっても、ざっと60人。公務員ばかりがそんなに集まるものだろうか……。

スリッパの音を響かせながら教室へとむかった。

途中の廊下で一人の教師とすれちがった。昔、生徒たちから『古跡先生』と呼ばれていた社会科の教師だ。たしか二年生のときに僕

も教わったことがある。日本の古代史が大好きで、教科書をいつさい使わず、邪馬台国はどこにあったかとか、卑弥呼はほんとうは男だったとか、たぶん学会では相手にされていない自説ばかりを生徒に説く教師だ。

彼は僕が在校の頃からすでに白髪白髭の御老人だったけど、今でもやはりそう見えた。高校教師というより、大学でロシア文学でも教えていそうなどこか19世紀的なその風貌を記憶していた僕は、躊躇することなくお辞儀をした。

けれど、教え子の顔を忘れたか、それとも僕にまつわることと思いだしたくもない過去のドラマツルギー的な出来事でもあったのか、古跡先生は広場を急ぐ人よろしく横を素通りしていった。

どうやらいまどきの公立校は、ベテラン教師でさえ、都庁に勤める職員よりよほど仕事上のストレスをためているらしかった。

教室のドアにたどりついたのは授業開始の10分前だったけども、明かりのこぼれる曇りガラスからは教室内の大きな話し声や、まるで居酒屋で耳にするようなバカ笑いまでが聞こえてきた。

きつと、あれは同じ区役所の職員仲間だったりするのではあるまいか。どうも僕が想像していた補習授業とはだいぶ様子が違うようだけど、それはそれで、やはり保健室に寄って早退届けをだしたいような気分であることにかわりはなかった。

廊下におかれた机には、補習授業の応募者名簿がクラスごとになっていて、出席者は自分の名前の欄に○印をつけるシステムになっていた。

僕は区役所のお友達クラスとは一緒にならないよう希望しながら自分のそれをさがしはじめたのだが、その名簿はさらに予期せぬ事態を僕に知らせた。

見覚えのある字面がならんでいた。あれもこれも、どこかで聞い

たことのある名前がズラリと。

どういうことだろう。僕のクラスの名簿には、高校三年時のクラスメートの名が羅列されていた。僕がはじめて付き合った同クラスの女の子の名前まである。その横にはすでに○印がついている。

僕はなぜか腰を引くようにして教室のドアを静かに開けた。おしやべりに夢中になっていた元高校生たちがいつせいにこちらを見た。やはりそうだった。制服こそ身につけてはいないが、それに思春期のオーラのようなものは消え失せていたが、教室の真ん中を陣取って騒いでいたのは、区役所の職員仲間ではなく、かつての僕のクラスメートたちだった。数にして十数人あまり。よくまあ、これだけ集まったものだ。

そしてその輪の中に、まだ名字がかわっていないければ『西田真由美』という名の、当時、僕が付き合っていた女性の姿もあった。彼女もまた仕事の帰りらしく、紺色のスーツを身にまとい、当たり前だけど、昔よりもぐっと大人っぽくなっていた。

すっかり出遅れた感のある僕は、この場でどう彼らに挨拶したらよいか少々悩んだけど、ただ気さくに手をあげて微笑んでみせた。

反応はなかった。いいや、僕が期待していたような反応はなかった。今度は彼らのほうが悩んでいるみたいだった。

普段着姿の一人の男性　それは『平山』という名の、たしか剣道部の主将をしていた生徒だった。クラスーのおしゃべりで、男子だけでなく、女子からも人気があった　が、僕にむかって遠慮がちにお辞儀をした。

それから彼は横にいるサラリーマン風のクラスメートに僕の素性をたずねるような素振りを試みせた。サラリーマン風の男は首を横にふった。

『首の横ふり運動』は周囲に感染していった。かつての同級生たちは次々にお互いの顔を見合っつてはそのジェスチャーをくり返した。

真由美でさえほかのみんなと同じだった。

そして僕の存在は忘れ去られた。満場一致で可決された。

彼らはふたたびなにもなかったかのようになり、思い出話に花を咲かせ、その輪はすぐに笑いでつつまれました。

かやの外に投げだされた僕は、一瞬これは悪い冗談かと思ったけど、すぐにそうではないことが呑み込めた。

彼らはどうも本気のようなのだ。本気で僕を無視することに決めたのだ。

まあ、それならそれでいい。べつに僕は同窓会目当てにここにやってきたわけではないし、実際のところ、僕はそうだった付き合いに参加したことがこれまでだっただけで一度もない。同窓会好きの彼らが、僕を無視したがるのにもそれなりの理由があつたことだろう。

僕は廊下際の一番端の机に鞆をおいた。

教壇には真新しい教科書と『日本史』の資料集が積み重ねられていた。

チャイムが鳴って、廊下ですれ違った古跡先生が大学教授よろしく登場した。彼はかつての教え子たちの顔を見わたして満面の笑顔をつくつた。まるでさっきとは別人だった。

そしてその笑顔の視線は、僕の思い過ぎでなかったならば、端の席までやってくると、とたんに困惑色のそれへと変貌し、大急ぎで教室の中央へともどっていったのだ。

明日は仕事を休もうか、僕は真剣に考えはじめた。

「それって、もしかしたら無視してたんじゃないかって、ほんとうにあなたのことを思いだせなかったんじゃないかしら」

電話口で彼女が言った。

たぶん一番先に高校の門をでた僕が、国立のマンションについた

のは、もう時計の針が11時近くをさしていたところだった。

帰宅したらさっそく今日の仕事の残りをかたづけようと考えていたのだけど、実際に僕が最初にとった行動は、恋人に電話をかけ、今日一日分の不愉快極まりない出来事を報告することだった。

電話のむこうで、さらに彼女は僕の反論にたいする反論を探していた。

「だって私、前に一度あなたの卒業写真を見たことあるけど、今とはぜんぜん感じが違うんで、びっくりしたことがあるわ」

学生のころに司書の資格をとった彼女は、今は西荻窪にある中央図書館に勤めている。とくにミステリー小説が好きで、僕も彼女の推理力には一目おいているところがある。

それによると、今回の補習授業に僕のクラスの面子ばかり出席率が異常に高かったのは、母校から届いた封書を見たクラスメートの誰かが卒業者名簿を開き、事前にネットワークをつくったから、ということになるらしい。

僕もそれは十分にあり得る話だと思う。もし彼女の推理に付けくわえるところがあるとすれば、そのネットワークづくりに疾走したのは剣道部の『平山くん』であり、その輪から僕が除外されたのは、平山くんが、当時から真由美に気があるともっぱらの噂だったからだ。

だがしかし、思いだせないというのはどういうことだろう。自分ではその実感はないけども、たしかに高校生だったころとは感じがかわったところはあるかもしれない。昔の僕は長髪気味の髪型に黒縁メガネをかけていた。

けれど、それぐらいで一年間も机をならべていた同級生の顔が思いだせないということに、はたしてなるものだろうか……。

なるようだった。どうも僕の想像力は長年の公務奉仕で枯れてし

まったらしい。恋人の推理は的をえていたのだ。

補習授業が二日目をむかえてのことだった。この日の僕はもうかつてのクラスメートの顔を見ても挨拶すら交わさなかったけども、昨夜と同じようにイの一番に教室をでた僕を、誰かが廊下で呼びとめた。

「あの、金田さん？」

声の主は真由美だった。わざわざは僕のあとを追ってきたのだ。そして高校時代のボーイフレンドを「さん」付けて呼んだ。しかも横にはクエッションマークまで付いていた。

「はい」

とだけ僕は答えた。どう考えても、かつての若々しいカップルの挨拶ではなかった。

「あの、間違ってたら申し訳ないんですけど、金田さんって、もしかしたら昔、私たちと同じクラスでした？なんとなく私、そんな気がするんですけど………」

なんとなく？　これが仮に『首ふり同盟』のゲームのつづき

であったとしても、同窓会のお遊戯としては度がすぎている。

もはやどう答えてよいやらわからなかった僕は、ただ「そうかもしれませんね」と言って廊下を急いだ。

その日から僕が補習授業に出席することはなくなった。かわりにファーストフード店に立ち寄るのをやめて、誰よりもはやくスリッパに履きかえ、廊下の名簿に○印だけをして図書室へとむかった。教室で教師が出席をとることはないようだし、古跡先生には悪いけど、彼のパラノイア的な自説に付き合うつもりもなかった。

高校の図書室でノートパソコンを開き、そこで僕は仕事の残りをかたづけることにした。さいわい都市整備局の『成瀬』なる人物はべつのクラスだったけども、真っ直ぐ帰宅してしまうのはやはり得

策ではないように思えた。

僕は特別に定時退庁の許可を得ているのだ。そして、都庁のすべての局が、僕が勤務している公文書局のように残業つづきであるわけでもなかった。どこかの局の職員と中央線の駅でバッテリーなんてこともあり得なくもない。

昔からそうだったけど、僕は教室より図書室にいるほうがよっぽど気分が落ち着ついた。パソコンにため込んだ電子音楽の音源をヘッドホーンで聴きながら軽快にキーをうちはじめた。

夜の図書室にはまだ数人の生徒がのこって静かに勉強していた。若い彼らもまたすぐに帰宅できない理由でもあるのだろうか。

学生諸君の邪魔にならないよう、僕はヘッドホーンのボリュームをしばれるだけしぼった。もっとも、彼らにしてみれば、スーツ姿のオッサンがそこにいるだけではた迷惑だろうけど。

公文書局の仕事にもいろいろあるけども、いま僕たち職員が追われているのは、過去のあらゆる都の公文書を電子化することにあつた。その数は図書室の蔵書数をはるかにしのぐだろうが、さらに局職員をつんざりさせていたのは、その書類一つ一つに各局長の印鑑が必要だということなのだ。

しかも、書類の内容にクレームがつけば、それを補填するあらたな記録を探しだし、書き直さなければならぬ。

出口の見えない果てしない作業。僕ら公文書局の職員が、この計画を太古のピラミッドや万里の長城の建造になぞらえることもしばしばだ。

チャイムが鳴った。補習授業の一時時間が終了した知らせだ。僕はヘッドホーンを首にかけ、一息つきながらまわりを見わたした。背後に人影が見えた。まだ教室にいるはずの古跡先生が、使うはずのない教科書を手にして立っていた。

「私たちだつて、この補習授業がまったくの茶番であることぐらい百も承知してるんだよ。だから、授業をサボった君をべつに責めるつもりはないし、問題にしようとも思わない」

司書室で古跡先生は言った。

僕たちは大きな机をはさんで二人きりで腰けていた。先生はポットのお湯でインスタントのコーヒーをいれてくれた。

この件が上司の耳に入ったらどうなるものかと考えていた僕はとりあえず胸をなでおろした。

不謹慎な教え子の表情を読みとつてから、古跡先生はおもむろに上着のポケットを探り、しわくちやになつた煙草ケースをとりだした。

「君は吸うかね」

僕は首を横にふつた。

「最近じゃ、教師だつて学校の中では禁煙なんだ」

そう言つて、彼は火をつけ、古めかしい蒼い煙を美味そうにはきだした。霧状にただよいながら、煙は壁一面にならべられた蔵書目録のページの隙間へと吸いこまれていった。

煙草もコーヒーも、そして図書室脇にあるこの司書室も、古跡先生といふせい、すべてのものが古式然としているように感じてならなかった。

ふたたびチャイムが鳴つた。授業開始の知らせだ。

「二時間目は自習にしたよ」

古跡先生は言った。

「今頃、教室では小さな『同窓会』がはじまつてるだろう。補習授業は茶番だが、昔の級友に会えるのはいいものさ。私だつて、久しぶりに教え子の顔が見られるのを楽しみにしていたんだ……」

以前からそうだったけど、この教師が頭ごなしに生徒を叱るようなことはほとんどなかった。僕はコーヒーカップごしから、尻つぼ

みになった彼の言葉を補足してみた。
「僕の顔を見るまでは？」

古跡先生は苦笑してうなずいた。やはり思い過ごしではなかったのだ。

恩師は少し困惑気味に話をつづけた。

「不思議だよ。誰も君のことを思いだせないんだ。たしかに君の名前は卒業生名簿に載ってるし、卒業写真にも写っている。でも、誰も君のことを覚えていない。私もふくめて」

彼は僕の反応を待つかのようにゆっくりと音を立ててコーヒーをすすった。けれど、今度は僕にもなにも補足することがなかった。

先生は思い直したように口をひらいた。

「まあ、卒業生の顔を思いだせないぐらいのことならよくあることだがね。でもね、君の存在はなんだかこう………気になるんだな。気になってしょうがない。思いだせないことがね。私だけじゃない、教室にいるみんながそうらしい。君のかつてのクラスメートたちね」

「はあ………」

僕は自分のことを言われているような気がまったくしなかった。

「どうも私たちは、君に対して一種の罪悪感にも似たような気持ちを共有しているようだ。君の出席名簿には がしてあったが、君の机は空いていた。私たちは一時間目の補習をつぶして話し合っただんだよ。君はいつたい誰なのか。どうして私たちは君のことが思いだせないのか。そして、なぜ思いだせないことが、こうも気になるのか、とね」

古跡先生はふたたび教え子の意見を待ち望んでいるようだったけど、やはりなにも言うことはなかった。しかし、彼は今度は自ら口を開こうとはしなかった。

その話し方から推測すると、どうやら僕自身にもなんらかの責任の一端があるらしい。クラスメートたちには悪いけど、僕にしてみれば、彼らのしている議論は今さら『小野妹子』や『遣隋使』について学ぶのと同じぐらいに不毛であるように思えた。

僕は仕方なく、ただ一つ気になっていたことをたずねることにした。

「あの……………」

「なんだい」

「どうして僕が図書室にいたことがわかったんですか」

「ああ……………」

彼は事もなさに答えた。

「防犯カメラだよ。今じゃ、学校のそこら中に設置されてるんだ」

「あなたは、その人たちにとって『大きなクエッションマーク』なのね」

電話越しに僕の恋人はそう言って笑いだした。

どちらかといえば、同情してもらいたくて電話をかけたのだけど、どうも端から見ると、僕の置かれた状況は悲劇と呼ぶよりよっぽど喜劇的であるらしかった。

ただ、『罪悪感』なんて大げさな言葉を使われるよりは、まだ『クエッションマーク』であつたほうが気が楽なことはたしかだ。

僕は今夜学校で体験した不思議な出来事の詳細を彼女に語りはじめた。古跡先生の口から発せられた、世にも珍しいドラマツルギー的な提案を。

教師たる彼はそれを『面談』と呼んだ。たぶん、それ以外に適当な言葉が思いつかばなかつたのだらう。僕もそうだ。たしかにそれは『面談』と言うよりほかはない。

現在よりも過去の歴史の中に生きていくような教師の提案なる『

面談』とはいかなるものだったか。それは、司書室で僕とかつてのクラスメートたちが、補習授業の時間をつかってもろもろの思い出話を語り合うというものだった。僕たちが共有しているはずの、高校生活の最後の一年間について。彼らが僕という存在を思いだし、安心してそれぞれの社会生活へもどれるように。

まったくバカバカしい。たとえなんの資格にもつながらなくろうと、これなら古跡先生の『邪馬台国論』に耳をかたむけていたほうがまだなにかしらタメになるのではあるまいか。

僕としても、せっかく図書室で仕事の残りを片づける計算でいたのに、これでは休日出勤の悪夢が現実のものと化してしまう。

だがしかし、老先生は教え子の打算を見透かしていたのか、僕の弱みを一つの交換条件としてもちかけてきた。つまり、『面談』をおこなえさえすれば、たとえ授業にでていなくとも卒業単位に印鑑をおすというのだ。

「印鑑をおす」その言葉に僕が極度に敏感であることまではまさか古跡先生も知ってはいなかっただろうと思うけど……。

「『思い出の補習授業』ね」

僕の恋人はそう言って、また電話口で笑いはじめた。

そんなわけで、僕は彼らの『思い出先生』となった。『面談』は二時間ある補習授業の最後の一時間があたりられることになった。一時間目終了のチャイムが鳴ると、図書室にいる僕はノートパソコンの扉を閉じ、司書室へとむかうのだ。

そうして休み時間の間にコーヒーを入れ、ふたたびノートパソコンの扉を開いて静かに音楽を流す。コーヒーは物覚えの悪いかつての級友たちのために。音楽は口べたな僕のために。

同級生たちは二人一組で司書室をおとずれる。僕は机をささみ、

たつぷり45分間、彼らに語って聞かせる。

クラスメートのアダ名やその由来。いろんな教師のいろんなクセ。好きだった給食のメニュー、嫌いだったメニュー。校庭にあった檜の木。自転車置き場での雑談。最後の学園祭の夜。卒業前に退学になった生徒、などなど……。

僕の過去のボキャブラリーはそんなに多くはないけれど、それでも彼らは一様に驚いた表情をみせる。当然といえば当然だ。彼らにしてみれば、赤の他人である一公務員が、どうしてこんなに自分たちの当時のことを知っているのだろうか、といった感じのはずだから。

『面談』がはじまってからというもの、これまで真つ先に校門をでていた僕は、まるで日直の当番になったみたいだ。教室の明かりがすべて消えたのを確認してから下駄箱にむかうようになった。

それは『面談』を終えたばかりのクラスメートたちと顔をあわせなくなかったということもあるけれど、ほんとうのところ、『思い出先生』の役割が回を増すごとにつれ、僕の中ではある異変がおきていたのだ。

なんともいえない疲労感に襲われていた。けっきょくのところ、僕のことを思いだした同級生は誰もいなかった。いや、彼らはハナから僕のことなどどうでもいいみたいだった。要は古跡先生の言うていた『罪悪感』とやらが払拭さえできればそれでいいのだ。

彼らは一様に晴れ晴れとした表情で司書室をでていった。まるでお話を聞いてあげたことによって、胸のわだかまりがすっかりとれたみたいに。

僕は最初この『面談』をお互いの言葉のやりとりのようにとらえていた。けれども、いざフタを開けてみれば、僕は話を聞いてもらう立場であり、彼らはそれを聞いてあげる立場になっていた。

僕の言葉は収穫されたコーヒー豆よろしく、検品され、あるものは瓶に入れられ、あるものは弾かれ捨てられていった。

そうして終了のチャイムが鳴ると、彼らは良品だけのつまった瓶を胸に抱えてそそくさと席を立つのだ。それから判でおしたように同じ言葉を僕に投げかけてゆく。

机の上のノートパソコンを見おろしながら彼らは僕に問う。

「その変テコなヨーデルみたいな音楽は君が作ったの？」

三つのコーヒーカップを備え付けの小さな流しで洗いながら、僕は僕自身の困難な存在について自問する。そして、いたるところに散らばった言葉の豆粒を拾い集める。一人きりの司書室で。夜の帰り道で。中央線の車内で。夜のベッドで。毎日がその繰り返し。

日課のようにしていた夜の恋人への電話もおっくうになった。職場でも誰とも話したくなかった。まるで僕は、リングにあがる前の禁欲生活をおくるボクサーのごとく、『面談』にそなえて少ない言葉を溜め込んでいるみたいだった。

真由美は同級生の中で一番最後に司書室をおとずれた。『面談』がはじまって、ちょうど一週間目の夜だった。

僕が用意したコーヒーカップはちよつと多かった。どういうわけか、かつてのガールフレンドは一人でやってきたのだ。

なぜ彼女がそうしたのかはわからない。ただ、いつものように三角線上に当たり障りのない思ひ出話をするつもりでいた僕は少々面食らってしまった。

それはその昔、僕が真由美と付き合っていたという個人的な事情もあったけども、彼女だけはおぼろげながら僕のことを思いだしそうな可能性があったから。そうでなければ、わざわざ廊下まで見知らぬ公務員を追いかけてはこなかったろう。

今夜も紺色のスーツを身にまとった真由美嬢は、蔵書目録の迷宮

に彷徨いこんだ大手企業の社長秘書みたいに見えた。彼女は物珍しそうに、しかしどこか懐かしげに部屋を見まわしてから席についた。そして、机に用意されたお約束のコーヒーカップに目をやり、

「ありがとう」

と言つて、優しく微笑んでみせた。いつかどこかで見たはずの笑顔にも似た。

さて、なにから話したらよいものか。彼女にたいしてはおのずとほかの同級生たちよりも慎重にならざるおえない。

二つのカードがあった。『過去』と『現在』。僕は真由美の今の生活ぶりに探りをいれてから、どちらかの話題を選ぶことにした。

僕たちは互いに別々の大学に進学してから疎遠になってしまったけど、彼女が建築学科を卒業したあと、都内のゼネコン会社に就職したことまでは知っていた。

どうやら彼女は近々その会社を寿退社することになっているらしい。真由美は自身の人生設計をコーヒーカップ片手に語ってくれた。僕は後者の『現在』のカードを切ることに腹を決めた。結婚を間近にひかえた女性が、高校時代のボーイフレンドのことをいまさら思いだしてもしょうがない。

今度は僕が高校卒業から現在までの経過を語って聞かせる番だった。はたしてそれで残りの時間いっぱい話をもつか心配だったけども、とりあえず大学のサークル話でもしてみようかと思っていたときだった。真由美がふたたび口を開いた。

「金田さんは都庁の公文書局にお勤めなんですよね」

「ええ」と僕。

「第一庁舎の13階」

「はあ………そうですけど」

真由美は昔の僕のことはずっかり忘れていたようだったが、なぜか知っているはずもない現在の僕の職場環境については、その内

部事情にまで精通していた。

頭が混乱しはじめた僕はカフェインで気分を落ち着かせようとした。真由美は悪戯っぽく微笑んでから、彼女の婚約者の名前を口にした。

そのお相手は彼女の高校時代の同級生で、　　ということとは必然的に僕にとつてもそうなる　　建築業界と縁のふかい都庁の部署で働いているある職員だった。なんでも、都市整備局に勤めている『成瀬』という名の。

「ああ……………」とふたたび僕。

どうも僕の推理には古跡先生ばりに個人的なパラノイアが入っていたようだった。帰りの電車の中で、僕は一人頭を冷やすことになった。

真由美がこの補習授業に参加したのは、べつに剣道部『平山くん』の下心によるものではなく、同級生である婚約者に誘われたことだったのだ。

上役の命令でいやいや参加してくる公務員がいれば、デート気分さながら恋人同伴でやってくるしっかり者もいる。

真由美は仕事の関係で都庁に足を運ぶことがたびたびあったらしい。そこで見覚えのある顔と、あるいは運命の人と、再会したというわけだ。

それならどうして一度も僕と出くわさなかったのかとも思っけど、そもそも公文書局と彼女の建築業界とは縁もゆかりもないし、都市整備局とは入っている建物の棟もちがう。

それに、バツタリ再会したとしても、補習授業の教室よろしく僕はあっさり無視されて、さぞかし落ち込んでいただろうし。

唯一の救いだったのは、司書室での真由美が、ノートパソコンに

むかつて「その変テコなヨードルみたいな音楽、あなたが作ったの？」とは聞かなかったことだった。

やはり『面談』終了前のことだ。彼女はとつぜん思いだしたようにつぶやいた。

「私、この曲聴いたことがある」

それは『クラフトワーク』というドイツのテクノグループの曲だったけども、二人がまだ付き合っていたころ、僕は自分のお気に入り曲をMDに録音して真由美にあげたことがあったのだ。

たぶんその中にこの曲も入っていたんだろう。彼女はかつてボーイフレンドのことはすっかり忘れていたけれど、耳にしたメロディはいまもどこかに記憶していたのだ。

ただ、僕のほうは彼女にMDをあげたことなど、今の今まで綺麗に忘れていた。そういうことだ。

満員電車の見知らぬ人々の顔を見わたしながら僕は思う。もしかしたらこの中にも、僕がかつて言葉をかわしたことがある人がいるのかもしれない。でも、何一つ僕は覚えてはいない。

あたりまえといえばあたりまえの話だ。出会った人の顔や言葉をすべて記憶していたら、誰の頭だっていつかはパンクしてしまう。

けれど、すべてを忘れてしまうわけではないだろう。人はきつとそれを、ありふれた物や日常の風景とむすびつけて、遠い迷宮の部屋に、文書室に、蔵書目録にしまいこんでいる。

そうして、ふと目にとめた街中の風景や、かすかに響いた物音が一つの鍵となつてとどけられたとき、人の心はざわめきはじめ、なにかを思いだそうとするのかもしれない。

ただ、長い迷宮をぬけて、人が記憶の部屋のドアの前までたどりつけることはめったにない。鍵穴は開かれず、目録のページはついにめくられない。

あんまり考えたくはないことだけでも、かつてのクラスメイトたちが僕を忘れてしまったのは、それと似たようなことではないだろうか。

おそらく僕という男は、なんらかの理由によって、ほかのものたちとむすびつけられることによるのみ記憶されるような運命なのだ。

もしかしたら、かつてのクラスメイトたちは、これまでもどこかでおかしな音楽を耳にするたび、僕という透明な同級生の存在を思いだそうとしてきたのかも。

だとすると、あの『面談』は、彼や彼女たちにとってかえって面倒な事態をもたらすのじゃないだろうか。彼らはこれからもさらに脅迫概念を増した記憶の旅をつづけなければならぬから。

コーヒーと図書館と、得体の知れない電子音楽を耳にすることに。

電車の窓に映ったへコミ気味の自分の顔を見つめながら僕は思う。今夜は家についたらすぐに恋人に電話をかけよう、と。

彼女が僕という存在をまだ覚えていてくれるうちに。

第8話「魔法の国に魔法使いはいない」

「僕らは自分たちのことを魔法使いとは呼ばないんです」

男は言った。

「グルムと呼ぶんですって」

妻がはしゃぐように言った。

若いセールスマンみたいな彼は、紺色のビジネス・スーツにオレンジ色のネクタイをして、お茶菓子を前に居間のソファに腰かけていた。

「僕たちにとって魔法使いであることはあたりまえのことですから。詩人が自らを『詩人です』とは自己紹介しないように、僕たちは魔法使いという呼び名をつかわないんですよ」

「たしか私は『詩人です』と自己紹介している詩人をテレビで観たことがあるがね」

ようやく私は妻の横に腰をおろして言った。テーブルには男が持参したらしいパンフレットと白い名詞がのっていた。

「その詩人はきつと偽物ですよ」

男はいかにも作り物の笑みをみせた。

ひさしぶりに早く帰宅できたというのに、私はなんだかまだ仕事の一つづきをさせられているような心持ちができて少々気が滅入った。

すると妻が名刺を手にとって、まるでなにかの記念みたいに私にみせた。

「神崎実さん。魔法学校の広報をなさってるんですって」

「ビールをくれないか」

私は白い紙切れをテーブルにもどし、ネクタイを片手でゆるめながら言った。

妻はキッチンへ立った。

思わぬ来客をそでに、私はリモコンでテレビのスイッチをいれた。めずらしく巨人戦のナイター中継をやっていた。

昔は缶ビール片手にそれを観るのが毎晩の日課になっていたものだが、いまではもう半分近くの選手の名前がわからなくなっていた。敵も味方も、監督やコーチの顔のほうが私にははるかに馴染みがある。

知らないピッチャーの球を知らないバッターが打っていた。

「で、君は学校の寄付金でもあつめてまわっているのかね。私はその魔法学校とやらを卒業したおぼえはないがね」

マウンド上のピッチャーよろしく、どこの誰だかわからぬ若い男に私はたずねた。

「いいえ。ご主人にはこれから、私たちの学校に入学してもらいたいんです」

「すごいわ、あなた。魔法学校の生徒さん選ばれたんですってよ」妻がお盆に缶ビールと枝豆をのせてはいってきた。

とりあえず、私は冷たい奴を一口喉にとおしてから二人の発言の意味を考えてみようと思っただが、まだ缶の上ブタをあけるまえに、二人の会話はあらたな展開をみせた。

「ご主人はメロンパンが大の好物でいらっしゃる」

「ええ、そう。我が家の朝食は牛乳とメロンパンってきまつてるんです。たまにそれが売り切れで、アンパンでも買ってきようものなら、子供みために一日中ご機嫌ななめで」

妻が言っていることはたしかに事実だった。

しかし、たかが朝食のパンとはいえ、ことはプライベートに関わる問題だ。初対面の男に彼女がいともたやすくそれを口にしてしまうことに、私は朝のアンパン以上に腹がたった。

私はメロンパンとそれを好きな自分自身を擁護するかのようによくしたてた。

「君の魔法学校やらと、私のメロンパンと、なにか関係でもあるのかね。それに、どうして私がメロンパンが好きなことを知ってるん

だい。君は菓子メーカーの広報ではあるまい。いいや、菓子メーカーの広報だって、そんなことを知ってるはずがない」

心外にも、男は私の顔を見て笑うのだった。おかしなことを言う人だ、みたい。私にしてみれば、こっちのほうがはるかにまともなことを喋ってるつもりなのだが。

「統計学上……………」

彼は高ぶった相手の神経を冷ますような話し方をした。

「メロンパンのお好きな方には、魔法使いになれる素質が、そうでない方よりも多くそなわっているようなんです」

私にはいろんな意味でかえす言葉がなかった。

「まあ、そうなんですの」

妻はさも感心しているかのようにつぶやいた。

「ふつう物語の中では、魔法学校というのは子供たちがいくところじゃなかったかな。メロンパンの好きな子供だってたくさんいるだろうしね」

私は妻ののぼせた頭をただす必要性を感じて言った。しかし、それは焼け石に水だった。

男はごく初歩的な質問にこたえるようにあっさり言ったのけた。

「子供はダメですね。集中力がつきませんから」

はたして、そんなものがほんとうにいるかどうかは知らないが、私は枝豆好きの動物園のゴリラみたいにそれをむさぼっていた。

横では妻が入学パンフレットに見入っていた。

それはよくある専門学校や予備校のそれとなんらかわりがないように思えた。しかし、妻の様子はまるで自分がこれからその学校に入学するみたいないな熱心さだった。

思えば、彼女はもともとファンタジー小説が大好きなタチなのだ。我が家の本棚には、私が集めたJ A Z Zの横文字と、魔法使いやら妖精やらのカタカナの名前とが、入り乱れるようにしてならんでいる。

きつと彼女にしてみれば、男の話は興味津々、この日がくるのを何年も待っていた、という感じなのだろう。だが、選ばれたのはなぜか夫たる私のほうなのだ。私の知るかぎり、彼女が三日、いいや二日でもメロンパンをつづけて食べている様を見た記憶はない。

そうなると、男が言うように、もしもほんとうに私に魔法使いの素質なんてものがあるとしたら、私は妻の絶対的な尊敬を勝ちとることができることになる。

それはそれで喜ばしいことだ。だがしかし、私も彼女も、そんな夢物語にうつつをぬかすには少々歳をとりすぎている。妻は私より一回りも歳下だけでも、それだって来年には三十路をむかえるのだ。自宅で本を読んだり、音楽を聴いたり、横文字やカタカナの世界は頭の中だけで想像して楽しむのがちょうどいいはずだ。

そこで私の考えは、妻をガツカリさせない程度にお茶を濁して、魔法学校の広報にはさっさとお引き取りしてもらおう、というところに落ちついた。

「私はひどい高所恐怖症でね。魔法の筭にまたがって空を飛んだりすることはできやしないよ」

「そんなことは僕だってできません。まったくおとぎ話レベルの芸当です」

広報の男はまた笑って言った。

三歩さがって勧誘話を辞退するつもりでいたのに、これはいったいどういふことなのか。鳥や虫や、いいや手品師だって嘘でも飛んでみせる。それなのに空を飛べない魔法使いなんて、まるで楽器の弾けないジャズ・ミュージシャンみたいじゃないか。そんなものあるはずがない。

私は横にいる妻の失望感を肌で感じる事ができた。

「君は魔法使いだと言ったね。グルムだと言ったね。では、私たちにできなくて、君にできることとは、どんなものなんだい」

私はつい会社の若い部下に説教をたれておきのようないきげな

なつてしまった。口だけ達者で、行動のともなわない今時の若者が大嫌いなのだ。

だが、職場でもたいていそうなるように、その問い詰めがめぐりめぐって私自身の首を絞めることになった。

「そうですね……………」

若者の悩み方はなんだか自信ありげだった。そして指をパチンと鳴らしてこう言った。

「たとえばこんなのはどうです」

妻は喜んだ。動物園のゴリラも喜んだ。

空になりかけていた私の小皿は、まばたきする瞬間に枝豆が天こ盛りになっていた。あと缶ビール二本分ぐらいはもちそうだった。

もつとも、そんなものは薄気味悪くて、私は指一本触れなかった。かわりに男が手をのばして、主人のつまみを試食してみせた。あろうことが、妻もそれにならった。

私は負けじとビールをがぶ飲みして言った。

「君は手品師かね」

「たしかに種はありますね」

妻は笑った。奴はジョークを言ったのだ。

ビールの味がとたんに苦くなった。

「つまり、君のとこの学校に入学すると枝豆が食べ放題になるというわけかい」

私もジョークを言っていたつもりだったが、誰も笑わなかった。

「ほかにありますか」

「たとえば、どんな」

「メロンパン」

妻はこんどは笑った。今夜の私はまったく酔えそうになかった。

「ご主人、こんなふうに考えてみてください。この世界は小さな小さな魔法の積み重ねによってなりたっているのだと」

男は言ったが、中堅メーカーの人事部に勤める私の社会人的常識は、それぐらいのことで覆されるほどヤワではなかった。

「冗談はもういいよ。私は明日も仕事があるんだ。要点だけ話して帰ってもらおう」

「すみません」

男は神妙な顔つきをみせた。

「授業料は無料です。入学金もありません。週に五日、必ず出席してもらいます」

「そんなことできるもんか。仕事があると言っただろ」

「ご安心を。僕たちの学校でもあるていど資本主義がとりいれられています。授業は午前中だけ。午後は工場での作業になります。能力によって月給が支払われます」

「働くのかい」

「ええ」

資本主義に能力主義。なにが魔法の学校なものか。これじゃ、ありたいの会社となんらかわらないではないか。

でも、まあいいだろう。おかげで私には男の勧誘を断るはつきりとした口実ができた。

私は奴のさっきのジョークを権力で押しつぶすみたいなのもりで言った。

「君のとこの学校に通うためには、私はいまの会社に辞表をださなくてはならないな」

「そうなりますね」

「そうなりますじゃないよ。仕事というのは、会社というのは、そんな簡単に辞められるもんじゃないんだ」

「でもあなた、毎晩毎晩、ビール飲みながら辞めたい辞めたいってこぼしてるじゃない」

妻が不必要な横やりをいれた。

しかし、彼女の言ったことはこんどもやはり事実ではあった。昨

晩だって、私はそんなことを愚痴っていたはずだ。

けれども、それをいまここであえて指摘する必要があるだろうか。これでは私の一家の大黒柱としての面子が、勤続二十年の社会人としてのプライドが、丸つぶれではないか。

「やり甲斐のある仕事ですよ」

広報はなにかは同情するような口調で言った。

「工場といっても、単純な機械作業ではありません。僕たちは一つ、心をこめてそれを一から作ってるんです」

「なにをだね。まさか枝豆ではあるまいな」

男は首をふり、手持ちのバックからあるものを取り出した。

透明の袋にはいったまるいメロンパンだった。

妻はもう手をたたいて喜んだ。

私が勤めている繊維メーカーは東京の下町にあった。自宅のマンションがある三鷹からそこまで毎日通勤している。朝は眠く、帰りもまた眠い。それはいつものことだが、去年、あらたな人事異動があつてからというもの、これまで経験したことのない心労に私は襲われていた。

会社は経営再建の途中にあつた。社内は投資ファンドに雇われた新社長組と、旧経営陣派とに真つ二つにわかれていた。そのおり、長年勤めた営業部から人事部へと異動させられた私は、ちょうど両陣営の板挟みのような格好になっていた。

ある者はスパイを見るような冷たい視線を私におくり、またある者は二重スパイであるかのようにいやらしい目つきで私を見た。そしてかつて仲のよかつた同僚たちは一人また一人とはなれていった。

私の神経は眠気をとおりこし、昏睡状態にあつた。虚ろな視線を通勤途中の車内からどこにもなく毎日のようになげかけていた。

だが、そんな私に思いもよらない転機がおとずれた。

食べたのだ、あのメロンパンを。魔法学校の広報という男が持参したあれを。その翌朝に。

いい歳をしてまったく恥ずかしいが、枝豆は我慢できても、ことメロンパンに関するかぎり、好奇心を抑えきれない私であった。

しかし、そのメロンパンは、これまで食してきたどんなものより群をぬいて美味しかった。よくその宣伝文句に、「そとはカリカリなかはモチモチ」というのがあるけれど、口に入れたとたん、そのコピーがまるで鼻から荒い息となって飛びだしていくような感じがした。

長い間、毎朝牛乳といっしょに楽しく食してきた何千何百というメロンパンはいつたいたいなんだったのか。その朝、私はまさに目から鱗がおちるような体験をしたのだった。

あのメロンパンがもう一度食べたい。私の視線は今は中央線の車内で蝶のように舞っていた。

だが、それでも私は決心がでずにいた。

家に帰ると、妻が催促するような目で私を見た。彼女の頭の中では、私が魔法学校に入学することはすでに既定路線になっているのだ。

けれど、いざいまの仕事を辞めるとそう簡単にはいかない。まず月給がでるといったって、雇用形態はどうなるのか。正社員なのか、契約社員なのか。ボーナスはであるのか。我が家にはまだマシヨンのローンがのこっているのだ。それに年金や健康保険も必要になってくるだろう。魔法使いになるのはいいが、毎晩、夕食は妻と二人で枝豆ばかりというわけにもいくまい。

そういった数々の疑問にたいする答えが、入学パンフレットには一つも説明されていないかった。おとぎ話にでてくる主人公の少年なら箒にまたがってとっとと冒険の旅に飛びたてるだろうが、現実となるとむずかしい。まして家庭をもった社会人であればなおさらだ。そこには責任という二文字が大きくのしかかってくる。

広報の男の説明では、一週間後、私が毎朝同じ時刻に乗っている中央線の電車が、その日だけ『西荻窪』なる駅で停車するのだという。そこに魔法学校とパン工場があるのだ。

私は『西荻窪』なら知ってるけど、『西荻窪』なる駅はこれまで見たことも、聞いたことも、ましておりたこともない。だが、たぶんそういう駅があるのだろう。

問題は一週間後というさし迫った時間だ。法律によれば、会社に辞表を提出できる期限はおそくても二週間前と書かれている。人事部に勤める人間がはたしてそれをやぶつていいものだろうか。また、そういった状況で会社側に正式に受理されるものだろうか。両陣営からスパイあつかいされている私は誰にも相談することができなかった。

だが、私の勤め人たる悩みはまさに魔法のように数日のうちにあっさり解消されることになった。

社内のトイレでの出来事だ。小便をしていた私のすぐ横に専務がやってきて、ズボンのチャックといっしょに口をひらいた。

「君、菓子メーカーからヘッドハンティングの話がきてるそうじゃないか」

私はなんのことかわからず、キョトンとしたままだった。

「隠さなくつたっていい。昨晚、その広報をしているという男がうちまでやってきたんだ。ぜひ君を我が社へと熱心に語ってつたよ。お土産にパンまでおいてね。ために一つ食べてみたが、せいぶん美味かったな。あれは飛ぶように売れるだろ」

「はあ……………」

「前途洋々じゃないか。まったく君がうらやましいよ。辞表ならいつでもいいから私のところにもつてきたまえ。悪いようにはしないから」

専務は旧経営陣側の中心人物だった。

部署にもどると、四時の休憩時間にはいつていた。人事部の社員たちが、みなそれぞれの飲み物を手に、デスクでメロンパンをほおばっていた。

部長が言った。

「いま社長が袋にいれてもってきたんだよ。で、いつ辞表をだすんだい、この幸せ者」

いつもは暗いスパイ所帯の人事部が、このときばかりは妙に明るかった。

自分でも信じられないことだが、私はその場で辞表を書いて提出し、定時には会社をあとにした。

私は帰りの電車の中で考えた。どうもあのメロンパンはただたんに味がいいばかりではなく、なにか人の思考をやわらかくするような働きがあるのではないだろうか、と。そうでなければ、経営陣の対立がわきおこってからのというもの、やたらと就労規則に厳しくなった会社が、ああも簡単に突発的な社員の退職をみとめるはずがない。

すると、私の脳裏にある疑惑がうかびあがってきた。もしか、メロンパンから、いいや枝豆からはじまった今回の珍騒動は、すべて私を会社からおいはらうための経営陣による罠だったのではなかったのか、と。あの魔法学校の広報は、会社に雇われた若い手品師だったのではなからうか、と。

しかし、役員クラスならいざしらず、たかだが人事部の社員一人を解雇するためにこんな手回しをする必要があるものか……私はすぐに自分の疑心暗鬼をうちつけた。ただ、わずかな不安はきえなかった。たしかに私が自らすすんで辞表をだしたことはたしかだったから。

ローンののこった我が家に帰り、妻に今日の一件について報告す

ると、彼女は十歳若返ったみたいに喜んだ。たぶんマンションの返済がつい完了したと言つても、あんなにふうには喜ばないと思う。

約束の朝がやってきた。前の晩、私たち夫婦はこれから都落ちをしようとしている若いカップルみたいに一睡もできなかった。妻の喜びようも緊張感のあるベールにつつまれて見えにくくなっていた。私たちはまだ暗いうちに部屋をでて、駅ロビーのコーヒーショップで夜明けを待つことにした。妻も私も長い時間、一つも言葉をかわさなかった。

閑散としていた改札口にはしだいに人の列がとぎれることなくつづくようになつて、発車アナウンスがそれを煽るようになりかえされた。走つてゐる人たちもいた。

「そろそろいこうか」

電車の発車時刻にはまだだいぶあつたが、あとはプラットホームで待つつもりで私は言った。

「うん」

と妻はこたえて、私たちはコーヒーショップをでた。

いつもよりはやい時間、いつものプラットホームに私は立った。いつものネクタイを首にしめて。

もしも踏切事故かなにかがあつて、ダイヤが乱れていたらどうしようかと二人で心配していたのだが、そういうことはなさそうだった。私たちはそろってホームのベンチに腰かけ、約束の、私が何年も乗りつづけてきた7：45分発の中央線の上り電車を待った。

それは、まぶしいぐらいによく晴れた通勤日和だった。

そんな中で、ほかの勤め人たちにしてみれば、私たち夫婦の様子はどこか異質な風景として目に映っていたかもしれない。なにかしら病をかかえた亭主を、心配した妻が見送りにきているような。

まあ、それもあながち的はずれな見解ではない。

ただ、
私たちがかかっていたのは病ではなくて、
パンと夢だった
のだが。

第9話 『「ごちそうさま」の多い飲食店』

この世界では、いいや、少なくとも飲食店と名のつく店舗がある街では、人は二つのタイプにわかれる。「ごちそうさま」と、明るく店員に言葉をかけて通りにでてゆけるカタギの人間と、まるでなにかの罰でもうけるみたいに無言のまま店をあとにしてゆく招かざるべき客とに。

サトルはいつのころからかそんなふうに見えるようになっていた。そして、彼の一風変わったその人生感、歳を重ねるにつれ強固なものになっていった。

サトルが生まれ育った福島県田舎町には、駅前の寂れた喫茶店とスナック以外、外食産業らしきものは存在しなかった。彼がそれにあつたる自身の呪われた運命に気がついたのは、正確に東京での一人暮らしをはじめてからのことだった。

下宿先から駅までの道のりをぼんやり歩いていた梅雨時の朝のことだ。彼の頭の中は、ゼミの授業で発表する『百貨店の歴史』に関するレポートのことではいっぱいだっただが、駅前の牛井チェーン店のまえをとおりかかったおり、それとはまったく関係のないある疑惑がとうとうに思いうかんだ。

それは、ありたいの人の人々にとって『百貨店の歴史』以上にどうでもいいことだったのだが、サトルにとっては、もしや大学のゼミよりほど自分の将来を左右する問題なのではあるまいか、と思えた。

そのとき彼の脳内では、こんな独り言がまことしやかにささやかれていた。これまで僕という人間は、飲食店の店員から「ありがとうございました」と、気持ちよく声をかけられたことがはたして何度あったらう……。……。

もちろん彼の耳は、駅へ急ぐほかの人々同様、幾度となく店員の礼の言葉を聞いていたはずだった。ただ、サトルの足どりがにぶくなったのには、もう少し複雑な個人的事情があったのだ。

彼は上京してからの数ヶ月をふりかえり考えた。たしかに僕は「ありがとうございます」と、背中ごしに聞いたことはある。けれどもそれは、いつもきまって僕が無言で店をでていくときにかぎってのことではなかっただろうか。

僕が「ごちそうさま」と言っただけで店をでたとき、そこに店員からの礼の言葉がかけられたことが何度あったろう……。いや、まるでなかったような気がする。僕の「ごちそうさま」は、あるいは僕の存在は、それを少しでも主張しようとする、逆につねに無視されてきた……。

それはコペルニクスの発見といってもよかった。あたりまえのように過ごしていた日々の営みが、突然、その姿をかえようとしたのだ。

しかも、大学で経営学を学んでいるサトルは、将来は花の百貨店マンになることを夢見てもいた。はたして、店の従業員たちから、いわれのない沈黙の対応をうけているような男が、無事、接客業の職に就けるものだろうか。

そこでサトルは急遽予定を変更し、一時間目の講義は遅刻することにして、目の前の牛丼店に足を踏み入れることにした。

おそらく自分とそう歳のちがわないフリーターらしい店員にたいして、それが正しい行動であるかどうか少し不安ではあったが、サトルは自身の運命をあずけるような心持ちで朝限定のセットメニューを注文した。

そして大急ぎでそれを平らげると、フリーター君がカウンター席の前をとおりタイミングを見計らって、まるで親戚の家に招かれた

子供みたいに「ごちそうさま」と、はつきりと丁寧に言って席を立った。

答えは帰ってこなかった。店内にはもう二人の店員もいたが、どちらも反応をしめさなかった。フリーター君はまるでサトルの姿が見えないかのように、目の前にいる律儀な客には視線をむけることなく、機械よりもさらに機械的にカウンターの食器をかたづけはじめた。

自動ドアがサトルを外にしめだした。彼が吐いた言葉と一緒に。百貨店マンを夢見ていたうら寂しい若者は、つとめてなにも考えないように歩きはじめた。まだ単なる悪い偶然ということもありうるし、それに将来ある青年がこれしきのことで人生に絶望してはならない。

しかし、ある雨の朝、彼の中でなにかが萎れようとしていたのは事実だった。

その日からサトルが牛丼屋の旗に近づくことはなくなったが、店をかえて、ささやかな店員とのコミュニケーションは試みてみた。ただ、どこへいっても結果は彼の意志をくじくものばかりだった。サトルの「ごちそうさま」は、あるいは彼の小市民的な善意は、なぜだか急にそこだけ真空地帯になってしまったみたいに、蕎麦屋のおばさんにも、ラーメン店の大将にも、定食屋の看板娘にも、さっぱりとどかないのだ。

それでいて、サトルが無言のまま店をでるときには、かならずといていいほど「ありがとうございました」の聲が、無邪気な商店街の悪戯のように彼の背中に投げかけられるのだった。

これはもはや悪い偶然ですまされるような状況ではなかった。どんな星の下に生まれたかは知らないが、たとえ百貨店マンにはなれないにしても、サトルは自分の将来全般に大きな不安を感じずには

いらなかった。

そんなわけで、サトルはまだまだ最後のコミュニケーションをあきらめるわけにはいかなかったのだが、彼がそれをあっさり捨て去ることにしたのは、くしくも鬼門になっていた駅前の牛丼屋でのできごとがきっかけになった。

やはり雨の日中だった。悪い予感はどうぜんあった。しかし、良薬口に苦しともいう。サトルはこれまでのせち辛い経験が、すべて悪い夢だったかのようにリセットすることができるとしたなら、この状況で、この場所で、ほかにおいてはありえないと、自分を奮い立たせてふたたびそこへ足を踏み入れた。

厨房に二人の店員と、カウンターにいつかのフリーター君がいた。サトルの緊張感是否応なしに高まったが、フリーター君はもちろん彼のことなど何一つおぼえていないかのように元気よく、そしてやはりどこか機械的に注文をとった。

おそらく天候のせいではやく終わったのだろう、カウンター席には二人の建築作業員ふうの男たちがならんでビールを飲んでいた。サトルは彼らの斜めむかいに腰をおろした。

そのあと、六人の男たちによつて繰り広げられることになった店内の光景は、およそ人の失笑を買うような代物ではあった。ただ、サトルにしてみれば、それは自分の将来を潔く白紙にかえしてしまえる節目であった。

サトルは二度も「ごちそうさま」と言った。それにたいする答えは一度もなかった。フリーター君をふくめた店員たちは、まるで天敵がすぎさるのを待つかのように身動き一つしようとしなかった。

災難だったのは、その場に居あわせた作業員の男たちだろう。せつかく昼間から気持ちよくビールを飲んでいたので、二人の視線は

テニス観戦の観客よろしく、サトルと店員たちの間を忙しく行き交うはめになってしまった。

彼らにはちゃんとサトルの声が、小市民の魂が、とどいていたのだ。

男たちは思っていたはずだ。この店員はどうして食後の客の挨拶を無視するのか、と。また、いくら無視されたといっても、あの青年も意固地になって二度も「ごちそうさま」とくりかえす必要があったのだろうか、と。

そしてまた、ビールの残りを気にしながらこんなふうにも考えていたかもしれない。はたして、自分たちの番がまわってきたとき、「ごちそうさん」と口にすべきか、やめとくべきか……。

いずれにしてもその日、サトルの奇妙な人生感、その哲学は、ついに完成をみた。悲しいかな、とにもかくにも無言で店をでてゆきさえすれば、誰に迷惑をかけることなく、店員たちの明るい声が、彼を通りへと送りだしてくれることはたしかなのだ。

これまでもそうではあったが、サトルの辞書には、今後もさらに『馴染みの店』という言葉は存在しないことになった。

しかし、それでよかったのだ。自らすすんで『招かざる客』を装うことにした彼は、もうどんな店にだって気後れすることなく出入りができるようになった。鬼門であった旗のゆれるチェーン店でさえ。

もつとも、慣れないうちは、店員たちの「ありがとうございます」の言葉が、「『ごちそうさま』を言わないでありがとうございます」でした」と聞こえてならないサトルではあった。

そんな彼もまだ在学中だったころ、一度だけ自身の掟をやぶったことがある。それはアルバイト先の学習塾で知り合った女子大生のガールフレンドと、外で食事をしていたときの出来事だった。

いつもなにかに追われているかのようにそそくさと飲食店をあとにしようとするサトルに、教育学部の学生であり、将来は教員になることを目標としていた彼女が、いくらか社会性の欠如しているようにも見つけられるボーイフレンドの素行を更正すべく、一人立ちあがったのだ。

ただ、その母性的な情熱は、サトルだけがもっているであろう特異な環境には何一つ効を奏さなかった。

教育熱心なガールフレンドに、彼は自分なりの哲学を拾得するにいたった過程をはじめて打ち明けた。そして彼女の目の前でそれを実践してみせた。

二人がいたのは、下宿先の近所にある焼き肉店であったけども、サトルは精算をすませると、店の従業員の女の子にむかって久しく発音してこなかった禁句の言葉を口にした。「ごちそうさま」と。

すると一瞬、女の子のうつつむいたまつ毛がピクリと動いたように見えた。サトルはもしや長い封印がとけたのかと淡い期待をいだいたが、女の子はそのあと、とっぜんレジから逃げる去るかのように店の奥へとかけだしていったのだ。

これにはさすがのサトルも呆気にとられてしまったが、ガールフレンドのほうはそれよれもはるかにシヨックをうけている様子だった。

サトルは突っ立ったままの彼女の腕をとって店の外へと連れだした。

このバイト帰りの夜の一件は、若いカップルにいくばくかの教訓をもたらした。

サトルのガールフレンドは、なにか彼に人生の応援歌的な励ましのメールをよこしたあと、なにも告げずに塾のアルバイトを辞めていった。

サトルはサトルで、自分の哲学をさらに強化すべく、たとえ誰に

せがまれたとしても、今後いつさい、禁句の言葉は口にしないことをかたく心に誓った。

ただ、二人がさずかった教訓の、そのどちらにより多くの徳があったかといえ、それはおそらく、焼き肉店の女店員を見習うかのように彼のもとを立ち去っていったガールフレンドのほうになるだろう。

サトルはその後も何度か意中の異性と食事をとにもする機会には恵まれたし、たしかにそのとき禁句の言葉は公にはしなかった。

けども、結局、女たちは彼女らの性にだけ特別な感覚がそなわっているかのように、言葉は耳にしなくてもなにかを感じとるかどうか、まるで冬の到来を予知した渡り鳥みたいに、ある日、彼のもとから飛び立ってゆき、季節がめぐってももどってはこなかった。

大学を卒業したサトルは、百貨店マンならぬ百科事典の訪問販売員になった。

そのころの彼は、もうすっかり、むかしの夢のことなど忘れていたのだが、自分にかした人生哲学だけはしっかりと守りつづけていた。

電話帳ぐらいの厚さもあるサンプルを鞆にしのはせ、若い百科事典マンは電車を乗り継ぎ、毎日のように街から街へと、人の家の玄関から玄関へと、歩きつづけ、日中、飲食店に立ちよっては、綺麗にそれを平らげ、必ず無言のままに店をあとにした。

そして、店員たちの暖かい言葉を背中ごしに聞いていた。

そんな生活を数ヶ月送っているうち、サトルはある環境の変化に気がついた。

それは第二のコペルニクスの発見といってもよかった。まるで時代が彼においついたかのように、外食産業の荒修行僧のごとき、無

言で店をあとにする若い男性客が増えているのだ。

たしかにそんな客は以前からもいたはずだけど、サトルが学生だったころには、もっとその数は少なかったような気がする。

店員たちから無言の餞別をうけとる『招かざるべき男たち』。もしやそれは自分だけではなかったのかもしれない。サトルは最近そんなふうなことをよく考えながら営業回りの途中に飲食店に入る。

そしてそこで、誰の目にもとまらぬように、静かに店の外へでてゆく寂しい男たちの後ろ姿を感じとるたび、それから、彼らの慎ましやかな行為をめざとく見つけたすや、出来のよい弟妹みたいに明るく言葉をかける店員たちの声を耳にするたび、サトルはこれまでの個人的な因縁を越えて、そこになにか時代の宿命めいたものを感じずにはいられなかった。

だがしかし、どんな世相も、はては哲学やら宿命やらも、それが頭角をあらわしはじめたときには、すでにその終焉がはじまっているように、サトルや荒修行の男たちにも転換期がやってきた。

あたかも、それは季節外れに舞いもどってきた渡り鳥のようにとつとつに。

その場所は、最寄りの駅はちがうけども、サトルが自身の哲学の塔を打ち建てた、いにしえの牛井チェーン店であった。

いつもなら昼時の時間はあえて食事をさける彼ではあったが、その日はたまたま午前中に契約が二つとれて気をよくし、混んだ店内に勇ましく足を踏み入れたのだった。

だが、席について間もなく、彼は己のあさはかな思いつきを激しく後悔することになった。

そこはサトルがもっとも苦手とするタイプの店だった。

「ごちそうさま」「ありがとうございました」

「ごちそうさま」「ありがとうございました」

「ごちそうさま」「ありがとうございました」

そこには活気があった。客と店員との息のあったコミュニケーションがあった。

ただ単に混んだ店だったら、サトルだって経験はある。しかしこんな言葉のゆきかう牛丼店はじめてだった。

客のほとんどはスーツ姿のサラリーマンたちだ。サトルはまるで外食産業の新人研修の場に、一人まちがって出席してしまったような気分がした。

そして、まだ注文したばかりだというのに、はやくも店をでてゆきたい衝動にかられていた。

しかし、逃げだすわけにはいかなかった。今では彼は一人ではない。何人もの声なき同志たちがいるのだ。

サトルはやはり『招かざる客』を貫きとおすべく、胸をはって注文した並盛りをまった。

そして、そのとき彼は見たのだった。食事を終えた一人の客が、まるで手鞠でもつくみたいに、カウンター上の得体の知れないボタンを押したのを。

「ごちそうさま」

サトルの耳にはたしかにそう聞こえた。だが、それを発したはずの客の唇はいつさい動いてはいない。「おまたせしました」と、店員が彼の前にどんぶりを置いていったが、サトルの五感には、その言葉はおろか、牛丼の具さえもはや目に入らなかった。

ここにいたってようやくサトルも、新人研修めいたこの店の活気の秘密を呑みこむことができた。

例えば、「ごちそうさま」と席を立ってゆく客たちの声は、そのトーンもイントネーションもまるで同一なのだ。ちょうど駅のプラットホームに流れるアナウンスにも似た。

それは世間的には一つのアイデア商品にすぎないかもしれない。しかし、サトルにとっては革命や魔法にも等しかった。闇の中に暮らしていた人々が、思いもかけず、一筋の光を手に入れてしまったようなものだ。

サトルはまぶしい閃光をさけるかのようにして目を細めた。彼の視線は並盛りをとびこえ、カウンター上のプラスチックめいた白いボタンへと注がれた。その側面には、製品の名前がシールになって貼られていた。『ごちそうさまくん（特許出願中）』と。

午後の日射しが、若いセールスマンの背中を照らしていた。彼の胃袋は満たされていたが、その心境には複雑なものがあつた。

サトルはあのボタンを押した。『ごちそうさまくん』の頭部分

を。もしも、そうまでして店員たちから無言の対応をうけたらどうしようかとも思ったが、そういったことはなかった。店の従業員たちはほかの客たちと同じように彼をあつかった。

サトルは「ありがとうございます」の言葉を耳にし、安堵に胸をなで下ろしながら牛丼店をでてきたのだ。

そうして放心状態のようになりながら、駅前のロータリーのベンチに深く腰をおちつけた。

べつに嬉しいわけでも、悲しいわけでもなかった。店員たちの言葉に一喜一憂するには、彼はこれまで代償を払いすぎていたし、すでに歳もかさねていた。

サトルはただ、これまで経験したことのない目眩を感じていたのだ。

彼の人生観はようやく本来の軽さをとりもどしつつあるのかもしれなかった。それがどんなに軽薄な方法ではあつたにせよ。いいや、むしろまさにそれゆえに。

第10話「主婦と灯台」

その夜の私は、大いなる興奮と一抹の不安を抱えながら、地元の駅前ロータリーで、帰宅のバスがくるのを待っていた。

カバンの中には、私が責任者を勤める『第三企画室チーム』の開発した、できたてホヤホヤの新製品がおさめられていた。これが発売されたあかつきには、低迷をつづける老舗玩具メーカーたる会社の売り上げも、そしてなにより社内での私への評価も急上昇するはずなのだ。

勤続18年、いまだ室長どまりの私は、はじめて100%に近い仕事の確信をもっていた。

『美人なんです』　それが私たちが開発した製品の名前である。『美人なんです』と書いて「びじるんです」と読む。名付け親は、第三企画室室長である私自身である。

もちろんネーミングは『写るです』のバクリだが、むろんのことただのカメラというわけではない。これは被写体の『美人度』を測定するという画期的な新商品なのだ。

原理は簡単だ。このカメラの心臓部には、古今東西、今昔男女の美男美女とよばれる人々の身体的データが記憶されている。我々チームはこれを『お宝データ』と呼んでいるのだが、つまり、被写体のデータが、この『お宝データ』の平均値に近ければ近いほど、『美人度』が高くなるというわけだ。

あとはシャッターをおし、性別と年齢を選択するだけ。さすれば、撮影した顔写真とともに、被写体の『美人度』が100・0ptを上限としてパネル画面上に表示されるという次第。

まあ、これだけでも商品としての話題性はあるだろう。しかし、

我々が開発した『美人るんです』の機能はこれだけではない。

その一つが『潜在的美人度』という項目だ。これは被写体が、将来どれだけ美人になりえるかという度合いを数値化したものなのだ。その性格上、とうぜん入力した年齢が若いほど高く示される傾向はある。たぶん、流行に敏感な女子高生などには大ウケすることだろう。

しかし、若くはなくとも、人間の顔というものは誰でも日々、少しずつではあるが変化はしている。その度合い、あるいはその方向性を数値化、比較することによって『潜在的美人度』は計測される。この機能は、ダイエツトに関心をよせる世の女性陣にも必ずや歓迎されること間違いない。

大いなる興奮と一抹の不安、そしてさらには、ある誘惑にもかられながら、私はバスに揺られていた。

第三企画室的誘惑。私たちは大勢ならんだ人の顔を見ると、つい『美人るんです』のシャッターを切りたい衝動にかられてしまうのだ。

中央線のつり革を握っているときもそうだったが、公安関係の間が乗り合わせていたなら、私はきつとスリか痴漢の類と勘違いされていたことだろう。木陰にまぎれこんた獲物を追うハンターのように、ジロジロと周囲を見まわしてしまうのだ。

しかし、仮に隠し撮りに成功したところで、私が得ることのできるのは、『美人るんです』の画面にあらわれるエラー表示だけだろう。

それは開発者である私たちが誰よりもよく知っている。本製品の機能が正確に作動するためには、正面と左右の安定した三枚の顔写真が必要なのだ。

それでもなお、普段はまったく温厚な紳士である第三企画室の総

勢三名からなる社員が、群れなす人の顔を見るなり、獲物を狙うハンターへと豹変してしまうのかは、それはなにより、我々にはより沢山のデータが必要であるからなのだ。

製品を商品化するためには、重役会議をとらなければならぬ。そのために我々は、祖母の時代から使いつづけている漬け物石のように頭の固い経営陣の目の前で、プレゼンテーションというものをおこなわなければならない。

そこではなにより魅力的なデータがものをいう。週末の接待ゴルフや、どこそこのクラブのお姉さん方に負けないぐらいに魅力的な製品のデータが。

しかし悲しいかな、我々第三企画室には、新たな体験モデルを雇うような金はすでにのこされていない。とうの昔に予算は使い果たしている。

社内の女子社員もダメ。製品開発は会社内でもトップシークレットなのだ。実際に生産ラインにのるまでは、どこで誰に足をすくわれるかわかったものではない。

金がなければ、あとは知恵をしばらくあうしかない。それで我々、第三企画室の三名は、自分たちの家族を被験者にしてはどうかと話しあった。

すると、その場で嬉しい誤算が判明したのだ。なにもモデルなど雇う必要はない。私たちの身のまわりには、ターゲットとなる消費者層をカバーする、それぞれの年齢層の逸材がいたではないか。

若きデザイナーの渡辺君には女子高生の妹さんがいる。先輩格のエンジニアである黒田君は新婚ホヤホヤで、奥さんはまだ20代だ。そして私には長年連れそった、もうすぐ四十の大台を迎えんとする妻がいる。

これで条件はすべて整った。あとはシャッターをおすだけ。しか

し、それが上昇気分の私に、第三企画室室長のこの私に、一抹の不安をいだかせるのだ。

黒田君や渡辺君はいい。彼らのご親族はまだ若い。被験者となってくれる二人のお顔を、私はまだこの目で確認したことはないけれど、もし仮にその『美人度』のポイント数が高くなかったとしても、お二人の年齢から推測して、『潜在的美人度』の方はそれなりの数値を弾きだすはずだ。それでもって突然まきおこった家庭内の不和も、まるくおさめることができるだろう。

だがしかし、我が家はどうなる。

私の妻は決して不美人というわけではないが、そうかといって、はつきり美人と断言できるほどでもない。それは長年連れそった夫である私自身が誰よりよく心得ている。

そしてこれが肝心なのだが、妻は世間で言う『おばさん』と呼ばれる年齢に近づきつつある。その年齢とこれまで私がじかにこの目で見てきたその身体的変容から判断して、彼女の『潜在的美人度』もやはりそう期待できるものではない。

これでは私には、家庭内の不和をまるくおさめる手段がない。

まあ、そんなときには、自分が被験者となつて、彼女の機嫌をなおすしかあるまい、私はそんなふうを考えていた。

『美人るんです』には男性版の『お宝データ』も入っているから、とうぜん『美男度』だって測定できる。今風に言えばさしずめ『イケメン度』といったところか。

私の『美男度』、そして『潜在的美男度』のポイントは、妻のそれよりもはるかに低いはずだ。それは誰よりも私と長年連れそってきた私自身がよく心得ている。

それでもって、私は妻の名誉心を少しは回復することができるだろう。それはたしかに、かなり限定的な、ささやかな名誉ではあるけども。

私はほとんどはじめて、こういった顔立ちに産んでくれた両親に感謝しながら近所のバス停におりた。

自宅のマンションに帰宅すると、妻はテレビをつけたままりビングのソファにもたれて眠っていた。

彼女はほんとうによく眠る女性だ。一回のインターホンぐらいでは起きたりしない。

その昔、私がまだかけだしの制作社員だったころ、取引先の玄関を忙しく出入りするたび、カウンター越しから彼女の肩をつついで、幾度となく深い春眠から引きもどしていたことがある。

当時、妻は部品メーカーの受付嬢として働いていたのだ。得意先の若手社員の手によって、頻繁に揺り起こされるという世にも珍しい受付嬢として。

そして今、妻は相変わらず深い眠りにおちている。亭主のご帰還にもまったく頓着することなく。

しかしこれ幸い。もはや私はその肩をつつくことなく、獲物を狙うハンターへと豹変して、寝顔にレンズをむけ、今度は確実にシャッターをおした。

彼女は起きない。私はそっとソファにもたれた顔を正面にむけさせ、ふたたびシャッターをおす。そうして、測定に必要なだけのデータを夫婦円満のうちに手にいれた。

寝室に入ると、私はネクタイをほどくよりさきに、『美人なんです』の画面上のボタンにふれた。ほどなく、妻の寝顔が表示され、その上を四桁の数値が目まぐるしく走りはじめた。

翌朝の私は、昨晚とは違って変わり、意気消沈した心持ちで通勤電車のつり革につかまっていた。長年手塩にかけて開発してきた『

美人るんです』に不具合が見つかってしまったのだ。

「44.3pt」　それが『美人るんです』の弾きだした我が伴侶の『美人度』だった。予想していたよりもずっと高くて、夫である私も鼻が高いが、そんなことはどうでもいい。問題は『潜在的美人度』の方だ。

その数値は、なんと「76.5pt」。美人で有名な我が社の受付嬢S嬢を、ひと月前にカメラの試作品だと偽って撮影したときだつて、「70.2pt」だったというのに。これが不具合でなくてなんなのだ。

『美人度』の平均値はとうぜん「50.0pt」だが、美人にする美男にしる、とかく『美』に関するものは、個人の主観が入りやすい。昔から「アバタもえくぼ」と言うように。

そんなわけだから、もし被写体の『美人度』が平均値の「50.0pt」をマークしたとしたら、実際にはそれはほとんど美人の部類に入るといつて過言ではないし、我々第三企画室のこれまでの試験結果によれば、半数以上の人は平均値までとどかなかった。

それが私の妻は「76.5pt」。これが不具合でなくてなんなのか。

「なんだ、綺麗な人じゃないですか」

エンジニアの黒田君が言った。

「一杯食わされちゃいましたね。僕たちのことを騙してたんじゃないですか、室長」

後輩の渡辺君が言った。

第三企画室は、来年の春先にはきつと会社のだ真ん中のフロアを陣取っているだろうが、今はまだ地下の一階にある。ここで昨晚撮ってきた『美人るんです』のデータを、黒田君のパソコンに取り込むのが、これからひと月あまり、我々三名の毎朝の日課である。

そのトリを勤める室長である私は、妻の寝顔が表示されたデスクトップのアイコンをクリックした。

画面横に彼女の『美人度』のポイント数があらわれた。

「おおー」

二人の部下は同時に感嘆の声をあげた。

妻は勝ってしまったのだ。新妻と女子高生に。それが『美人るんです』の弾きだした第三企画室親族による『美人度』試験の初日の結果だった。

もちろん、私には部下の二人を騙す気などさらさらなかった。この結果に一番驚いているのは、なにを隠そう、私自身なのだ。もしも、こうなることを予測していたなら、私だって身内を被験者にするなど合意しなかつたろう。なにしろさすがにバツが悪い。とくに新婚ホヤホの黒田君にたいしては。

どうやら私は、少し認識をあらためなければいけないのかもしれない。ふだん考えている以上に、世間一般的には、私の妻は美人の部類に入るらしいのだ。

しかし、『美人るんです』に対戦ゲーム的な要素があることが判明したのは、我々にとって嬉しい誤算だった。これでまた一つ商品の付加価値があがったわけだ。

だがしかし、浮かれている場合ではない。

私はいま一度、マウスの右ボタンをクリックした。今度は妻の『潜在的美人度』があらわれた。

「はあ？」

二人の部下は同時に呆れ気味のクエッションマークを投げかけた。

これまでの私たちの試験結果では、一個人の『美人度』と『潜在的美人度』の開きは、平均で「5〜7pt」。多い人でも「15pt」止まりだった。それが、うちの妻になると「33・2pt」。

この数値がもし真実であったなら、近い将来、私の妻は今とはまったくの別人になってしまうことになる。それは非常に困る。たとえ彼女が、絶世の美女に変身して、エプロン一枚でキッチンに立っていたとしても。

黒田君にはさっそく、『美人るんです』の図面をコンピューター上で再点検してもらったが、設計上のミスは見つからなかった。

ために、妻を撮影した『美人るんです』を用いて、我々三人、そしてかのS嬢にもふたたび被験者となってもらい、撮影を試みましたが、S嬢の『美人度』ならびに『潜在的美人度』がそれぞれ「5 pt」落ちた以外は、前回の撮影時と同様の結果がでた。

はたして、この一ヶ月の間に、S嬢になにがあつたのかは詳しくは知らないけども、前後の検査状況と、昼食時に社内食堂で偶然耳にしてしまった彼女のよからぬ噂から判断して、「-5 pt」の下降は決して製品の不具合によるものではないと、我々は午後のミーティングの席で結論づけた。

そうすると、あとは寝顔を撮影したことによっておこつた誤作動としか考えられない。あるていど最初から予想はしていたことではあつたが、我々はやっと原因を特定することができた。

「寝顔はいけません」

「室長なんですから」

私は一つ咳払いしてから、二人の部下の言葉にうなずいてみせた。

帰りの中央線の車内でも、バスの車中でも、私が獲物を狙うハンターに変貌することはもはやなかった。

かわりに私は、塾帰りの小学生みたいになって、ゲームに興じているかのごとく、『美人るんです』の画面操作に没頭していた。妻の寝顔と受付で微笑むS嬢の写真とを交互に映しだしては、飽くことなく、二人の顔を見くらべていたのだ。

うたた寝を上司に見つかったあげく、倉庫係へと墮ちていった過去の受付嬢と、不穏な噂を耳にしたとはいえ、いまだ我が社のマドンナ的存在である現在の受付嬢。

まるで、通販エステの使用前使用後の写真を見ているようで気が引けるが、社名は違えども、二人が同じ部署に所属していたという事実には固執するあまり、私は妻の容姿をS嬢と比較して、それを下評価しすぎていたのかもしれない。

はたして私の妻は、世間的にいわゆる美人の部類に入るのだろうか。

『潜在的美人度』には直ぐさま異議を唱えた部下たちも、妻の『美人度』の方はあっさり認めるばかりか、その美貌を称えてさえもいた。

夫として、あるいは『美人なんです』の開発責任者として、私は自分の美的感覚を検証してみる必要があった。

画面上の電池残量表示がそろそろ心細くなってきたころだった。ようやく私の五感に変化のきざしがおとずれた。写真の妻の顔が、以前よりも美しく見えはじめたのだ。

気のせいだろうか。私はバスに揺られながら、ふと半年まえに社内で開催されたあるセミナーの一幕を思い出した。招待された某大学教授がこんなことを喋っていたのだ。

曰く、「消費者は自分が欲しいものではなく、他人が欲しがるものを買うもの」なのだ。

その理論を応用すれば、「人は他人が美しいと口にしたものを、美しいと感じる」わけだ。

今の私がちょうどそのいい例なのかもしれない。

「まるで、スーパーサイア人ですね」

「渡辺君、私の妻は猿ではないよ」

「いえ、その潜在能力が」

「わかつてる」

親族を被験者としたデータ収集を開始してから一週間がたとうと
していた。黒田君のパソコン画面にはいま、7日分の妻の写真が横
並びに表示されている。

結局、私はS嬢にそうしたように、開発中のデジタルカメラの試
験だと嘘をついて、寝顔ではない妻の写真を撮ることに成功したの
だったが、それで彼女の『潜在的美人度』が下降するということは
一切なかった。「76.5pt」という驚異的な数値は、0.1p
tも減ることなくキープされつづけているのだ。

しかも、『美人度』の方はというと、これが毎日2から4ptず
つ、確実に上昇していた。

これはいつたいたいということなのだろう。毎日少しずつではある
が、彼女は着実に美しくなっている。このままのペースでいくと、
おそらくあと二週間あまりで、妻の『美人度』はそのピークを迎え
ることになる。つまり、『潜在的美人度』の数値に到達すること
になるのだ。

私たちはその変貌を目の当たりにしている最中だ。まるで、貴重
な記録映像を見つめる地下室の科学者たちのように。

私たちは狭い室内で膝をあわせては、パソコンに映った我が妻と
にらめっこをつづけ、議論をかさねた。

重役プレゼンのためのデータ収集という当初の目的は急速に色あ
せ、我々第三企画室の関心は、言ってみれば、「世界の謎」への究
明へと発展していったのだ。

それはビジネスの域を越えた純粋な探求心であり、一人の女性の
存在が、我々の中に、少年だったころの好奇心旺盛な心を蘇らせた
わけだ。

「特殊なエステに通っているとか」

渡辺君が言った。

「毎日少しずつ整形してるんじゃないですか」

黒田君が言った。

室長である私も似たようなことは考えてはいたが、我が家の家計と整形医学上そんなことはまずありえない。私は彼らにむかい、静かに首を横にふってみせた。

「もしかしたら、実際に綺麗になっているのではなくて、ただ綺麗になっているように見えているだけじゃないでしょうか」

「黒田君、実際に綺麗になっていることと、綺麗になっているように見えていることとの違いを、わかりやすく説明してくれないか」

黒田君は口をつぐんだ。

我々の好奇心旺盛な少年の心は、夏休みの最終日のごとく立ち往生した。

すると、渡辺君がひらめいたように言った。

「室長の奥さん、恋をしているとか。恋をすると女性は美しくなるといえますよね」

私は首をふるより先に、静かに彼をにらみつけた。

渡辺君も口をつぐんだ。

少年の心をもった男たちが、地下室の無口な老人になりかけたころ、先輩の黒田君がふたたび口をひらいた。

「室長は一緒に生活していて、なにか思いあたることはないんですか」

「そうだな……」

部下のもつともな問いかけに、この一週間ばかりの出来事を思いおこしてみた私ではあったが、「べつに何もなし」と返答しかけたそのとき、ふと自宅の食卓の風景が頭をよぎった。

「そういえばね、最近、我が家の夕食のメニューが毎晩一品ずつ増

えてゆくんだよ。それがどうも、商店街の店主たちが買い物途中の妻にサービスしてくれるらしいんだ。おかげでさ、私、なんだか太っちゃって」

横を見ると、部下たちの冷めきつた視線がそこにあった。

その日、おそらく私は誰よりもやくタイムカードをおし、べつに他意はないけれど、受付のS嬢に「おつかれさん」と優しく声をかけて、そそくさと会社をあとにした。

部下たちにはあえて話さなかったが、これもここ一週間ばかりにおこった我が家の変化の一つだった。

室長という肩書きゆえ、毎日の定時上がりなど許される身分ではないけれど、それも気にならない。

とにかく、私ははやく家に帰りたくてしょうがないのだ。

そんな新婚ホヤホヤ黒田君顔負けの輩ではあるが、地元の駅に着くと、バス停の列にはならばずに、自宅まで歩いて帰ることにしている私であった。

夕飯のおかずが増えるのはうれしいけども、こここのところの私のお腹回りときたら、まるで寝正月明けみたいな有り様になってるし、家にいる妻に、帰宅がはやい理由を悟らしてしまうのも、それはそれでまた面白くない。

そんなわけで、私は商店街通りを鞆片手にブラブラと歩いていた。すると、「あなた、あなた」と、妻によく似た声が背中の方から聞こえてきた。不思議に思っただけで振り返ると、私の視線は肉屋の店前に群れなす主婦連へとむかっていった。その中に、とびきり美しい一人の女性がいたからなのだが、よく見れば、それは私の妻だった。

妻は笑いながら近づいてきた。

ただ、近づいてきたのは彼女だけではなかった。店のカウンター

からまわってきた肉屋の主人らしき人物も「奥さん、奥さん」と言
つて、私のもとへむかってきた。

てつきり私は、妻が代金を払い忘れてもしたのかと思ったが、そ
ういうわけではなかった。主人は「奥さん、これサービス。松阪牛」
と小声で言つて、こんもりした包みを妻に手わたした。

松阪牛がサービス。いったい彼女はなにを買ったのか。

主婦連の冷たい視線を尻目に、主人はうれしそうに仕事場へとも
どつていった。

「なにブーツと歩いてるの」

妻は当たり前のように高価な包みを買った物袋にしまい込みながら
言つた。

べつに私はブーツとはしていなかった。私がブーツとしたのは、
彼女の顔を見てからだ。

「すごいでしょ。今日ちゃんとお金払つて買ったのこれだけよ」

そう言つて、妻は袋の中からのぞいた牛乳パックを私に見せた。

「商店街バンザイ」

私はその手から買い物袋を引きつけて言つた。

よく「早起きは三文の得」と言うけれど、会社の定時上がりもま
た然り。この歳になって、私ははじめて美女を横にはべらかして歩
く男の優越感がわかったような気がした。

商店街から自宅マンションまでのわずかな距離ではあつたが、あ
りとあらゆる男たちが、ランドセルを背負った男の子までがこちら
をふり返るのだ。

まるで、映画スターにでもなつたような気分だ。だがしかし、彼
らはみな、妻の美貌より、夫婦そろつて亀のようになのそのそと歩く
二人の姿を奇妙に思つて、顔をこちらにむけていたのかもしれないか
つた。

「大丈夫かい」

私は聞いた。

「大丈夫。最近、なんだか調子がいいのよ」

妻は明るくこたえた。

今から思うと、ずっと椅子に座っていられる受付嬢は、彼女には天職みたいなものだった。ただ、眠ることは、それ以上に至福の時だったのだ。

妻は幼いころから血行の悪くなる難病を患っていて、長い距離を歩くことが苦手だった。おかげで、私もゆっくり歩く癖がすっかり身についていた。

二匹の亀はならんでのそのそと家に帰った。

その晩、我が家の食卓にかざられたのは、松阪牛のステーキと、野菜コロツケが二切れであった。こんな食生活が長くつづくと、経済観念と舌の感覚がおかしくなりそうでなんだか怖い、そんなことよりも、私が一番驚かされたのは、帰ってくるなり妻がとったあの行動だった。

二人で買い物袋から冷蔵庫へと、戦利品をしまったあとだった。

妻はお役ご免になっていた財布から百円玉を一枚とりだして私に見せた。てつきり、荷物番をひきうけた夫にチップでもくれるのかと思っただ、そういうわけではなかった。

彼女は手品師のようにコインを指にはさんだまま居間へとむかった。どうするのかと思って、私はそのあとについていった。

棚の前にたった妻は、部屋に入ってきた私にもう一度百円玉を見せた。そして彼女の手が棚の中にかくれると、鈴の音のような響きが、そこからかすかに聞こえた。

私はまわり込んで、彼女の背後から棚の中をのぞき見た。

それは雑誌やCDにはさまれた狭いスペースの一角と、私の記憶

の奥と、その両端にたっていた。

コカコーラ瓶ほどの灯台の形をした白い貯金箱。

妻はお参りをするように、それにむかって両手をあわせてから言った。

「いい置き物でしょ。これ、『願い事の叶う灯台の貯金箱』っていうのよ」

説明されなくてもわかっていた。なにしろこの代物は、入社して私の企画がはじめて製品化された記念すべき第一号なのだ。たしか300個ほど生産されたはずだが、まったく売れずに、ほとんどの在庫品が、取引先に無料で配られたという曰くつきの。

それはもう二昔近くも前の話だ。

思えば、これが最初につまずきだった。私の灰色のキャリアのはじまりであった。

そして、なんの因果かは知らないけども、300個のうちの、おそらく最後の一個が、めぐりめぐって今、私の目の前にある。

「三月ぐらい前に実家から送ってきたのよ。せつかく驚かせようと思って黙って置いといたのに、あなただったらぜんぜん気がつかないんだもの」

いいや、むしろ気がつかなくてよかったのだ。三月前といえば、『美人なんです』の試作品づくりで、てんやわいやだったころだ。

そんな時期にネガティブな気持ちになって、もし判断を誤っていたら、私の灰色のキャリアは、さらに暗黒へと一歩近づいていたことだろう。

ん、待て。三月前とな……………。

私の手は、懐かしさよりも、ある好奇心から棚へとのびた。思ったとおり、陶器でできた灯台の貯金箱はズシリと重くなっていた。一日コイン一枚。およそ三ヶ月で一杯になる容積にあらかじめ設計されているのだ。それが小さな願い事に見合った消費者の忍耐力と、

新人だった私なりに予測しての計算だった。

ただ、不惑の歳をむかえ、その計算を逆算してみることにしようとは、私もさすがに予測はしていなかった。それも『美人るんです』的な逆算を。

貯金箱に残された容積、そして妻の『潜在的美人度』、それから日々更新されてゆく彼女の『美人度』。この三つの数字が、灯台の照明灯のように私の頭の中でグルグル回っていた。

間違いない。私の不惑な計算に狂いがなければ、ちょうど妻の『美人度』が、その『潜在的美人度』に到達するころ、この貯金箱はコインで一杯になる。

しかし、そんなことがあるだろうか。企画した本人が言うのもうしろめたいが、どんな願い事であるにしろ、小さな貯金箱を一杯にしたことによつて、それが現実的に叶えられるということは、まずありえない。まして、絶世の美女などに……。

私は頑固一徹の目利きのような顔をして、自分の処女作を棚へともどした。たしかに拝見しました。しかし、所詮は安価なオモチャ。バツタ物ですな、というふうには。

すると、目の前の妻が私に抱きつき、こう言ったのだ。

「天才だわ、あなた。私の魔法使い!」

人がよく赤ん坊にそうするように、私はヨシヨシと彼女の背中を優しく叩いたのだった。

そうするほかに、いつたい私になにができただろう。

そもそも、それはなぜ灯台だったのか。どうして灯台でなければいけなかったのか。

大した理由はなかった。仕事のアイデア探しのために、雑誌のページをパラパラと捲っていたおり、海辺の風景写真と一緒に、「外国では、灯台は街の教会のような、信仰に近い存在になっている」

という文面にでくわし、そこから『願い事の叶う灯台の貯金箱』という商品を仕立て上げただけなのだ。

ただ、信仰云々はあくまで外国での話。そんな習慣もない土地柄で、そういった性格をもった商品が売れるはずもない。せめて、『願い事の叶う賽銭箱型貯金箱』ぐらいにしておけばよかった。

しかし、誕生の理由はどうであれ、効果のほどはどうであれ、一人の女性が、小さな白い灯台にむかって祈りを捧げる様子には、どこかおとぎ話めいた純真な趣があった。凍てつく冬の夜に、澄み切った星空を見あげているような神聖な雰囲気もあった。まったく売れはしなかったが、やはり私はいいものを作ったのではなかるうか。『賽銭箱型貯金箱』ではこうはいくまい。

そう考えると、もし妻が美しくなりたいと祈っていたとするならば、それはいかにも打算的で、おとぎ話めいたイメージとはどこか矛盾するようだが、それは夫である私の浅はかな思い込みであった。じつは、彼女は自分の病気がはやくよくなるようにと、毎日コインを一枚ずつ入れていたのだ。

そして、その願いは今まさに叶えられようとしていた。それも、夫の才能や特殊能力、あるいはあんちよこな貯金箱の力ではなく、それこそ体育の授業でいつも一人別メニューをこなしていたという、子供のときからつづけてきた、彼女自身の地道な努力の積み重ねによつて。

「その灯台の貯金箱と『美人るんです』をセットにしたら売れるんじゃないですか」

「渡辺君、そんなことをせずとも『美人るんです』は売れるよ。それに妻が美しくなったのは、体の血行がよくなったからだ。貯金箱のせいじゃない」

時は来た。第三企画室が日の当たらない地下室から、会社の中央フロアへと上り詰める、その取っかかりとなるべき記念の日がついに。

重役会議でのプレゼンまであと十数分。だがしかし、そんな緊張感が張りつめてしかるべきときにも、我々三人はデスクトップの画面に映しだされた「世界の謎」への挑戦を果敢につづけていた。

「でも、血行がよくなったぐらいで、こんなすぐに綺麗になれるもんですかね」

この日の渡辺君はすぐには引き下がらなかった。

「血管の手術をつけて、それまで歩けなかった男性患者が、一時間もしないうちにふつうに歩行ができるようになるのをテレビで観たことがあるよ」

エンジニアの黒田君が先輩医師みたいな顔をして言った。

私も彼の意見に賛成だった。そこで、大した知識はないけども、室長兼院長風な態度をとって私も語った。

「たぶん、美しくなったというより、本来あるへき姿をとりもどしたと言ったほうが正解なんだろうね。あらかじめ妻の体内ではそういうったプログラミングが準備されていたんだよ。それで眠っていた細胞が急速に活性化できたわけだ」

「なるほど。とすると、室長の奥さんは『スーパーサイア人』ではなく、むしろ『みにくいアヒルの子』だったわけだ」

私は今一度、渡辺君の顔を睨みつけたい衝動にかられたが、大事な会議のまえだったのでそれはやめにした。

「時間だ。いこう」

私は口火を切った。資料の山とノートパソコン、そして『美人なんです』の入ったダンボール箱を抱え、我々は地下室をあとにした。

その日、私はそそくさではなく、胸を張って定時きっかりに会社をでた。せつかくなので、受付のS嬢に勝利報告の挨拶でもして

いこうと思っただが、あいにく彼女は休みのようだった。

それから十数分後、私は中央線のシートに腰をおろしていた。本来なら部下を引き連れ、祝杯をあげるために繁華街へとくりだしてしかるべき夜だったが、それどこではなかった。

プレゼンは大成功だった。妻のデータはあまりに特殊な例なので、我々はそれを公表することは控えたが、二人の部下が持ちよった親族のデータだけでも重役たちには大ウケだった。

ただ一つ、重役連中がお気に召さなかったのは、室長たる私自身が命名した『美人るんです』という商品名であった。彼らによれば、『美人るんです』を「びじるんです」とは誰も読めないし、仮に読めたとしても、魅力に欠けると言うのだ。

そんなわけで、肝心の商品名はプロのコピーライターにあらためて発注することで手打ちとなった。

なんだか手柄を横取りされたみたいで癪に障るが、どんなに優秀なアイデアにも、1%のケチをつけ忘れないのがサラリーマンの世の常だ。

ありがたい重役連中のアドバイスはとつと忘れ、おまけに残業の部下たちは会社に残し、私は中央線の車両に飛び乗ったのだった。

そして、私の鞆の中には今、『美人るんです』ではなく、ドイツ製のブロックハンマーがはいっている。プレゼンの準備にかこつけて、はやい時間に東急ハンズにでむいて買ってきたものなのだが、無論、多少なりとも不愉快な事例があったとはいえ、会議の席上で私がそれを振りかざすことはなかった。

たぶん人生の中で、日曜大工品を妻にプレゼントするというのはこれが最初で最後の機会になるのではないだろうか。私はこのハンマーを、彼女の夢を完結させるために購入したのだ。

もしも、毎夜のごとく流星群がおがめれば、誰も星に願いなどが

けたりはしない。神社のおみくじだって、大吉がでるまで買いつづけては有り難みもない。

夢が叶うチャンスはふつう一度かぎり。それで当時、設計者であった私は、灯台の貯金箱にあえてコインの取り出し口をもうけなかったのだ。

そしてその最後の一つが、今夜、役目を終えようとしている。塔のてっぺんに空けられたコインの差し口からは、すでに浮いた食費から妻が貯め込んだ、地元商店街店主たちの真心があふれて見える。彼女は布かなにかを巻いて、ドイツ製鉄槌でもって陶器でできたその胴体を叩き割ることになるのだ。

それをもつて今日という一日は、私たち夫婦にとって、夫が戦で手柄をたてた日としてではなく、妻の積年の願いが叶った記念日として未永く記憶されることになるだろう。

もつとも当の妻はといえば、はじめから壊される運命にあったとはいえ、貯金箱の破壊者となることに少しためらいを感じているようではあった。灯台の破片とともに、叶ったはずの自分の願いもまた、砕け散ってしまうのではないかと心配しているようなのだ。

笑止千万。もとより私が設計したオモチャにそんな力はない。作った本人が言うのだから間違いない。

それでも、妻はいまだに、昔私が考えだした商品名の効能をにわか信じているようであった。せつかくだから、私もあえて彼女の前でそれを否定するつもりはない。

信じる者は救われる。願わくば叶えられん、と。

しかし、駅のホームに降り立ってみると、私の頭の中には、これまでとは相反する考えが思い浮かんでくるのであった。

もしかしたら1%ぐらいならば、あの小さな灯台の恩恵もあったのかもしれない、というふうな。

そもそも、あの貯金箱は300個のうちの最後の一つであるし、

それが十数年も経った今、私のもとにまいもどってきたのには、どこか運命的な力さえ感じる。そしてなにより、あの商品には制作者である夫の愛情もつまっているであろうから。

いいや、もしかしたら300あまりの何処の家庭でも、あれやこれやの願い事が、一つ一つ、私の知らない間に叶えられていたのかもしれない。

もしそうだったとしたら、失意のS嬢にも一つとっておいてあげればよかった。

どうも駅のプラットホームには、人の妄想をかきたてる不思議な磁場が働いているようだ。

気がつくと、私は自動改札機をぬけていた。

マンションに着くと、我が家の眠り姫はリビングのソファでふたたび夢をみているようであった。壁の棚には、灯台の貯金箱がいつもどおりそこにあって、最後の優美な姿をみせていた。

私はソファの端っこに腰をおろし、美しい寝顔を眺めながら気長に待つことにした。

一人の女性の、大いなる目覚めのときを。

第11話「冷夏懐かし」

「『メランコリック症候群』が日本を滅ぼす！！」

メタボリックならぬメランコリック。もしもそれが真実であったなら、ぜいぶん危険で、なおかつおセンチな見出しが踊った通勤電車の中吊り広告を、僕はいくぶん郷愁の念に近い心持ちを抱きながら見あげていた。

それというのも、その雑誌広告は二週間もまえから電車の天井に吊されたままになっていて、そこに謳われたいかにも遅れてきた終末論的なお題目がいささか的はずれな結果に終わったことは、もはや誰の目にも明らかかな状況にあり、そしてなにより、朝から僕が祭りのあとの懐かしみめいた感情に包まれてしまったのは、じつのところその広告が自分の勤めている会社の出版物であったからだった。

もつとも、所属している部署は違えど、編集部の名誉のために補足しておくならば、たしかにこの国の状況はおかしなことになっていて、例えば、その正確さで有名な鉄道の列車ダイヤは、このところ時刻どおりに到着したためがないし、宝クジや人気ラーメン店前の長蛇の列は、嵐が過ぎ去ったあとの桜みたいに散ってしまったり、都内のデパートは夜の6時には『蛍の光』を流しだし、テレビ局など、かき入れ時のゴールデンタイムにさえ昔懐かしい再放送を放映しているしまつなのだ。

外国ならともかく、つねに一時が万事のようなこの国で、はたしてこんな非生産的な事態がかつてあっただろうか。たぶんないはずだ。しかしここにいたつてもなお、これをもって「滅んだ」と定義づけるのには、やはりいくらかの抵抗がある。

それというのも、僕にしたところでダイヤの乱れなど大手を振って会社に遅刻できる絶好の口実になっているし、なにも列に並ばな

くてすむのであれば、それにこしたことはないのだし、TVの再放送にいたっては、子供の頃に夢中だったアニメ番組にもう一度出会えたりして、それはそれで恩恵をうけているのも事実なのだ。僕みたいな社会人はきつと大勢いるはずだ。

車窓から慣れた視線を灰色の雲に僕はむけた。事故でもないのに、すでに電車は30分も遅れているけども、まだ目的駅へは到着しようにない。このままのペースだと、どんなにダッシュしても大遅刻はまず避けられない。

もつとも、僕には駅から会社に向かつてダッシュするつもりなど八ナからなかった。たぶん僕だけではなく、この電車に乗車している勤め人のほとんどが同じ気持ちだろう。携帯片手に会社や取引先に詫びの電話を入れている乗客など一人も見あたらない。

そうなのだ。もはや僕たちサラリーマンは、上司のお説教も、取引先からのクレームも気にすることなく、正々堂々と遅刻ができるのだ。それもこれも、すべてはあの雲たちのおかげだ。

僕はもう一度、窓の外に目をやった。今度は、ほとんど半世紀ぶりといわれるこの夏の異常気象に多少なりとも感謝の念をこめて。

世の管理者と呼ばれるお偉方に見れば、これはたしかに思わず「滅んだ」と嘆きたくなる緊急事態かもしれない。でも、僕らみたいな平社員にとっては、むしろ「ゆとり」と定義したくなるようなありがたい側面があったわけだ。

あえて終末論者の向こうをはる言い方をするならば、「我々はいまだかつて実現できたためのなかった『ゆとりある社会』というものをようやく手にすることができた」とでもなるだろうか。

そんなわけで、大遅刻必至の身の上でありながら、僕は通勤電車のシートでグリーン車並のスペースとファーストクラス以上の精神的余裕を確保していたのだけれど、人間万事塞翁が馬、この「ゆとり」も行き過ぎることがあれば、たしかに「メタボリックな夏」よ

りは危険なものになりうる可能性があることもまた事実だった。

僕は予定を変更して、会社のあるお茶の水にはいかず、新宿駅で電車を乗りかえることにした。どうせ会社に着いてもすぐに外回りにでなければいけないのだし。

例年であればこの時期、僕が所属している人事部では、就職面接の準備で大忙しであったはずなのだが、今年の夏ばかりはなにより社員各位の『メランコリック症候群』対策が最優先になっていた。そのために僕たち人事部の人間は、社員の個人面談を毎日おこなっているところなのだ。『M症候群』を発症し、会社に出社してこなくなってしまうた「迷える子羊」たちをふくめて。

ホームで電車を待っているあいだ、その旨を伝えるべく課長に電話をかけると、我が上司の携帯は留守電になっていた。たぶん氏もゆとり通勤の途中なのであろう。僕はメッセージをのこして、中央線の下り電車に乗りこんだ。

高架線から見あげる灰色した雲は、あいかわらず天空の大河のように頭上をおおっていたけども、ようやく僕は、車内に真新しい中吊り広告を発見することができた。ただ、それは某有名花火大会中止の知らせだった。

こんな夏がくることを誰が予想できたらう。

僕の記憶では、おそらく5月のはじめごろまでは、ほとんどの人がいつものように浴衣姿に団扇の映える夏がくるものと、漠然と考えていたように思う。気象庁もたしかそんな長期予報だしていたはずだ。

それが6月になってもいっこうに気温が上がらず、例年なら一足先に梅雨明けするはずの沖縄でも空はぶ厚い琉装をまとったままで、そうこうするうち、今年の夏はどこかおかしいと、マスコミが騒々しくなりはじめたころ、ようやく気象庁がその長期予報を訂正したのだった。

こうして半世紀ぶりとなる冷夏の到来が公のものとなったわけだけど、その時にはもう列島全体がすっぱりと寒気におおわれた状態にあつて、全国のビアガーデンはどこも津々浦々、墓地のように静まりかえり、各地の海の家では、その店先で風鈴が北北西からの風雨に身を揺らしているみたいだった。

しかし、そんな冷夏の風景よりも、僕が一番驚いたのは、長期予報が訂正されるやいなや、それを当たり前のようにごく自然と、あるいは粛々と受け入れた人々の振る舞いのほうだった。

例えば、『メランコリック症候群』の兆候はすでにあらゆるところまで及んでいたのだ。花火大会の中止。それはおそらく、観客が集まらないという以前に、まず肝心の花火師が集まらないのではあるまいか。大玉の打ち上げ花火を造ることに飽いた彼らは、きつと今ごろ、かつて近所の軒先を慎ましく彩っていた線香花火をつむぐことに鍛錬している真つ最中なのだ。

小さな秋ならぬ小さな夏。それが半世紀前の冷夏に匹敵する異常気象がもたらした人々への効果だった。それはスーパードに並んだ野菜の高騰以上に僕たちの生活に影響をあたえていた。

もとより自炊をしない僕が、白菜やレタスの正確な値段を把握しているわけではないけれど、今年の夏にはどこか懐かしい、人の記憶を蘇生させるような趣があるのは事実だった。

それは、ちょうど立ちこめる雲たちが幕となつて、昼でも夜でもない端境の刻をつくりだし、僕たちはエアークケットにすっぱり収まってしまったみたいに、静止した時間の中で日々を過ごしているような感覚なのだ。ここでは四角い車窓に走り去るなんでもない風景が、フィルムのコマのように映る僕の瞳に、いつか見た一夏の情景と重なって見えたりする。

それにしても、ちっともらしくない季節に、古いアルバムに仕舞ったまま忘れていたような遠い夏の記憶を蘇らせるのはなんだかお

かきな話だ。ほとんど、落ちるリングを見て引力を発見するかのよ
うな展開だ。

けれど、僕みたいに出版社に勤めながら、もっぱら読書はコンビ
ニで立ち読み専門の輩であるから、まだ懐かしがっているだけです
んでいるのかもしれない。多少なりとも敏感な神経をもった人々は
そうはいかないようだ。

とくに、想像癖と完璧主義という、おのずと矛盾せざるおえない
傾向をあわせ持った人々は。

彼らは懐かしい風景をただ眺めているだけでは気がすまない。そ
こから失われた時間を再構築しようとする。よせばいいのに、過去
をとり戻そうとするのだ。

そしてさらに困ったことに、その遊技に熱中してしまうあまり、
会社にこなくなってしまうこともある。どうも、彼らがとり戻そう
としているものは、往々にして仕事とは無関係なようなのだ。

ある精神科医は、こういった症例をひとまとめに『メランコリッ
症候群』と名付けた。僕に言わせれば「迷える子羊」たち、あるい
は、線香花火造りに入れ込む一夏の花火師。

どちらでもいいけど、あいにく出版業界に身をおく人間には、こ
の手のタイプの人が多いようだ。おかげで、会社がだしている雑誌
はこのところ立てつづけに休刊状態におちいついて、そのあおり
もあり、僕はメランコリッくな子羊たちとの面談に負われる日々を
おくっているわけだ。

目的地の吉祥寺駅に着き、携帯電話のナビシステムを開いている
と、ちょうど着信が鳴った。さつき電話した課長の名前が表示され
ている。僕は3秒考えてから通話ボタンをおした。機種変更でもし
たのだろうか、課長の声には妙に艶があった。

「悪いがね、君の用件は伝言できないんだ。旅にでるんだよ。今日、
まさにこれからね」

入社して5年。僕の知るかぎり、課長という人はギャンブル好きではあるけれど、仕事はいたって真面目な粋なロマンスグレーで、熟年離婚の直後でさえ、会社と競馬通いだけはきっちりこなしていた。その課長が言うのだ。

「ありったけの有給休暇を消化することにしたよ。トライアンプを買ったんだ」

「トライ？」

「アンプだよ。知らないかな、イギリス産のオートバイ。それで北海道を一周するんだ。学生のころからの計画をとうとう実行に移すことにしたんだよ」

課長の指摘どおり、僕はそのトライなんとかという乗り物をご存知ないけど、これが典型的な症例であることはまず間違いない。

それにしても、オートバイで夏の北海道とは、我が上司ながらかなりベタな選択だ。しかも、その発端が学生時代まで遡るとなれば、相当「失われた夏を求めて度」は高いはず。つまり、重度の『メラニコリック症候群』の疑いがある。

しかし、電話口の課長こそ、社内における『M症候群』対策の陣頭指揮にあたらねばならない人間ではなかったか。

やはり、その点は本人も多少の自覚がのこっているのか、課長は最終レースの馬券を握りしめる勝負師のような声で告げた。

「君たちには悪いと思うんだ。だがね、今行かないと、もう一生行けないような気がするんだよ」

行かせてやればいい。バツイチの中間管理職男が、いかに一夏の心の病とはいえ、好きなギャンブルでも、お得意の色恋でもなく、北の大地を走ることを選んだのだから。

僕は本来の立場を放棄して、我が上司に言った。

「いい旅を」

「ありがとう」

なんだか、半年前にやめた煙草をまた喫いたいような気分だった。

冷夏の中年ライダーと化した課長が、冴えた風を肌感じはじめたころ、僕は吉祥寺駅そばの井の頭公園にむかっていた。

雨は降っていなかったけども、緑が増えはじめたせいかな、あたりは一段とひんやりしていて、いつもの年ならこの時期には邪魔で仕方がないスーツの上着も、昼間から必需品になっていた。

その内ポケットからふたたび僕は携帯電話をとりだして、仕事用のファイルに収めた今日の迷える子羊のプロファイルを開いた。

対象者の名前は「野宮真理」。編集畑の文芸部に所属する三十路間近の女性社員だ。僕より二年先輩になるだろうか。担当は欧米の新進女流作家だそう。いったい誰がこしらえたプロファイルなのか、ご丁寧に出版された作品名も羅列してある。もちろんコンビニで立ち読み専門の人事部社員たるもの、その中に知ったタイトルなど一つもない。

共通の話題はかなり乏しそうだけど、履歴書に添付されていた顔写真のコピーから判断すれば、なかなかの眼鏡美人だ。もしかしたら、編集部のマドンナ的存在だったりするのかもしれない。あるいは、元ミス・ハーレクインとか。どちらにしても、まず人事部にはいないタイプの女性ではある。

それはさておき、その野宮女史、一週間前に3日分の休暇届をだしたまま出社していないらしい。

『M症候群』の症状は人それぞれ千差万別だけど、この野宮女史の場合、眼鏡姿のせいもあるかもしれないが、それはなんだか文学的な香りのするもののような気がしてならない。もともと、根拠はだいが希薄だけど、その実像に触れることはないとして、常に身近にいる分、僕はこと文学的なるものの匂いを嗅ぎ分けることに關しては人一倍敏感なのだ。

よしんば、その嗅覚が見当違いであったとしても、よもや彼女にかぎって、ミス・ハーレクインにかぎって、女一人旅ということ

はまずあるまい。もしあつたとしたら、職務の公平上、僕はただいい旅を祈るしかない。

僕たちの訪問面談はアポイントをとらないのが普通だった。なにしろ対象者たちは夢の途上にいるのだ。彼らにしてみれば人事部の人間など、個人経営者にたいする国税局みたいなものだろう。ただ、国税局はアポイントをとるかもしれないけど。

野宮女史のマンションは井の頭公園のすぐそばにあった。はたして彼女は部屋にいるだろうか。いつもはそれを期待しない僕だけど、今日ばかりはこれも祈るような気持ちでいた。たぶん、いや間違はなく、野宮女史の諸々のデータが、僕を仕事熱心な人事部社員へと改心させたのだ。

入社以来ほとんどはじめて自分の読書経験の浅さを後悔しながら、僕は近道をするために公園に足を踏み入れた。

なんだか北欧の森でも一人歩いているような気分だった。淡い影絵のように周りを取り囲んでいるのは木々の緑だ。公園の半分をしめる大きな池には、ボートが湖上の亡霊みたいに浮かんでいる。曇りガラスの閉じた売店小屋はなかば廃家のようにだ。

霧がではじめていた。遠くで散歩していた老人も、犬を連れてたご婦人の姿もすで見えない。いや、もしかしたら最初からいなかったのかも知れない。

都心からわずかな距離にいながら、ここはあたかも人里離れたサナトリウムのように静かで、あらゆるものの輪郭が霧の中にぼんやりと霞んでいるかのごとく映った。なにやら僕が存在は、遠い彼岸の国へと、はるばる商談に訪れた若いビジネスマンめいていた。頼りになるのは、履き慣れた革靴と、もし電波が届いていれば、携帯電話だけのような。

その女性は晴れた日であったなら鮮やかな波光をきらめかせていただろう公園の池とむかいあったベンチに一人腰掛けていた。

僕は最初、まるで白昼の幽霊かとも思っただけども、裾の長いワンピースにカーデガンを羽織った彼女をめぐる光景には、人に一枚の幻想的な絵画を連想させる雰囲気はたしかにあった。

しかし実際のところ僕の頭をよぎったものは、芸術というよりはむしろ文学的なることで、さらにいえば、それは自分のある嗅覚に関わることだった。つまり、文学的嗅覚だ。

それというのも、霧に霞む中、女性のシルエットが手にしているのはあきらかに文芸書であり、間違っても『月刊EXILE』ではなさそうだったから。ただ、まだ肝心のお顔が拝見できない。それを確認してからでないと、僕の文学的嗅覚の正しさは証明されない。

さて、どうすればいいだろう。ここは一つ無難に天気因んだ挨拶でもして声をかけるべきか。しかし、冷夏に交わされる一般的な挨拶とはいかなるものだろう。やっぱり「涼しいですね」あたりが妥当な線か。「曇ってますね」は少し変だろう。

そんなことで躊躇しているうち、女性が顔をあげてこちらを見た。もしやマジマジと見つめるサラリーマン風の男を、霧の中からあらわれた変質者の類と思っただろうか。あらぬ疑いをかけられる前に僕はそそくさと先を急ぐことにした。やはり野宮女史ではないようだ。

すると、すれ違いざま、かの女性から声をかけてきた。それがあまりに意外で、そして同時に狙い澄まされた言葉であったので、僕はつい足をとめてしまった。彼女はイヤリングを外すみたいに耳からippodのイヤホーンをとってこう言ったのだ。

「あなた、恋愛小説は好き？」

入社して数年、あたりまえだけど野宮女史の容姿も変化していた。履歴書の証明写真にあった長い髪はバッサリ切り落とされ、眼鏡は

たぶんコンタクトになり、より澁刺とした印象の女性に変身していた。

もしや同僚の眼鏡好きの男性社員たちにとっては、それが逆に物足りないところではあったかもしれないけど、数年単位のレベルでその変化を眺めることができた彼らはいいとして、それを一瞬で見せられた僕は、最初、他人のそら似とも思わなかったわけだ。

しかし、野宮女史は僕のことを知っていたのだろうか。はじめから知って言葉をかけてきたのだろうか。

悲しいけれどそれはまずあり得ない。だって僕にしたって、同じ社内にながら彼女みたいな美人社員をずっと認識していなかったのだから、反対の可能性は限りなくゼロに近いはずだ。

たぶん誰でもよかったのだ。

その事実を僕はあとに知った。

さて、霧に漂う中、野宮女史の唐突な質問に、僕はなかなかいい答えが見つからないでいた。人事部という仕事柄、意地悪な質問を考へることには慣れていただけ、いざ自分が答へる側になってみると、これがやっぱり大変だ。マニュアルどおりにはいきはしない。

編集の強者たちにくらべれば古代人なみの読書量しかないであろうこの僕が、どんなふうに答へれば野宮女史の要求を満たすことができるのであろうか。いいや、そもそも、どうして彼女は初対面の男にそんなことを尋ねようとしたのか。真意のほどによっては、これからの面談の内容を左右する問題になりうる。

ヒントを探すべく、僕は時間をかけずに女史の身の周りに探りをいれた。

ワンピースの膝の上に二冊の文庫本がおかれていた。それぞれ赤と緑の、どちらかといえばくすんだ色をしたカバーがかけられている。

なにやら見覚えのある装丁ではあった。僕のスペシャルな嗅覚はふたたび活動をはじめた。

だが、今回にかぎって、スペシャルで文学的な僕のそれは、活躍の場のないまますぐに退場となってしまうのだった。なにしろ、彼女が手にした赤と緑の上下巻からなる小説は、誰もが知っている有名なベストセラーだったのだ。読んでいない僕でさえ、それにまつわる雑学を一つや二つご披露できるくらいだ。

例えば、「100%の恋愛小説」 出版当時、その本の帯にはそんなキャッチコピーがふられていたそうなの。

恋愛？100%？二つのキーワードを人事部的に勝手に言いかえてみれば、想像癖と完璧主義。

どうやら僕は、図らずも問題の核心に近づいていたのかもしれない。

「興味はあります」

たぶんこれが就職面接だったらペケだろう。僕が野宮女史に返した答えは無責任なまでに平凡だった。

しかし、ここ北欧の森めいた公園のベンチでは、そんな曖昧さが逆に有効だったのだ。いいやむしろ、僕はこれ以上ないくらいにベストな答えをしたのかもしれない。ほとんど偶然に魔法の扉を開く呪文を言い当ててしまったわけだ。さもなくば、まんまと魔女の誘惑に引っかかったか。

「こちらにどうぞ。読んでさしあげます」

彼女は言った。その微笑みは、文学的というより、どちらかといえば今は女性ファッション誌めいていた。

僕はちょうど一人分間を空けて野宮女史の隣に腰をおろした。久しく嗅いでなかった魅惑的な香りがした。女史は僕の心の中を覗くように赤い扉を開いてみせた。

物語は静かに、そして僕が言うのもなんだが、かなり平凡に幕を

あけた。あまりに平凡すぎて、あの有名な恋愛小説の代しはこんな感じだったのかと、少し拍子抜けするぐらいだ。

ただ、野宮女史はまさに文面そのものをいとおしむように、一字一句、優しく読みあげた。その潤んだ声は辺りの霧の幕に共鳴して、音楽みたいに消えてゆくのがあった。

僕たち二人の千夜一夜は、こうしてお互いの自己紹介もないままにはじめられたのだ。

冷夏は夕方の時間が長い。西の空がなにかのサインのように淡い紫色にしばらく染まっている。僕は一人、吉祥寺駅のベンチでその名残を眺めながら、膝の上に一冊の文庫本をおいていた。

電車はなかなかやってこない。TVでは『フランダーズの犬』の再放送がはじまっている頃だ。ずっと欠かさず見つけていたのだけど、今となつては美術好きの少年も、それに寄り添う大型犬の運命も、もはやどうでもよかった。

もしかしたら旅にでた課長も、面談の帰りにどこかの駅のベンチに腰掛けて、僕と同じように曇った夕闇を見つめながら、なにやら北の方角に思いをさせていたのかもしれない。あるいは『M症候群』は人から人へと感染するのかもしれない。

数時間前、今とは反対側のプラットホームに足を踏み入れたときには、まさかこんな展開が待っているとは思ってもよらなかった。まさかこの僕が小説にはまってしまうとは。

「N」。それが野宮女史が読んで聞かせてくれた小説のイニシャルだ。

ただ、その上巻を読み終えたとき、僕たちの頭上には公園の街灯がすでにともっていたけども、その明かりは、お互いワケありな同僚二人だけでなく、もう一人の男性の姿も照らしだしていた。

次のお客さんだ。

べつに料金をとっているわけではないようだから、お客という呼び方には語弊があるけども、ほかに言いようがない。つまり、野宮女史には数人のお得意さんがいるらしく、どうやら僕はその谷間を埋める格好のカモであつたらしい。

「今日はここまでにしておきましょう」

優しい個人教授みたいに野宮女史は言った。僕はベンチを立つた。どこかのオーケストラでチューバでも吹いているのか、大きな楽器ケースを背負つた小太りの中年男と入れ替えに。

公園では今も二人の朗読会が開かれているかもしれない。小太り風チューバのワルツを伴奏に。これを需要と供給が生んだ一夏の珍事と言つてしまえばそれまでだけど、いったいどのようなにしてあの奇妙な朗読会ははじめられたのだろうか。あるいは、野宮女史はどうやって「お客さん」と呼んでいる男たちと知り合いになつたのか。あまり想像したくはない光景ではある。しかしどちらにしても、小太りの楽団員を含めて、彼ら「お客さん」たちが迷える子羊たちである可能性は大だ。そして女史の場合、これは完全に『メランコリック症候群』を発症している。しかも、かなり特殊なケースで。彼女はあたかも小説「N」の中に生きようとしているかのようだ。

朗読会を中断して二人で霧の公園を散歩しているときだった。

「野宮真理さんですよね」

そう問いかけた僕に、彼女はか細い首を横にふり、本気なのか冗談なのか「N」の中に登場するヒロインの名を口にした。

この機に乗じていよいよ自分の正体を告白しようと考えていた僕は、すっかり出鼻をくじかれ、霧の中にそのチャンスを見失つてしまった。白いカーデガンを横目にしながら。揺れるワンピースに惑わされながら。

しかし考えようによっては、そもそも空想の世界に生きる今の彼女にとって、まっとうな勤め人のほうが、よほどリアリティのな

い存在であるのかもしれない。もしそうであったなら、僕もありきたりな素性を明かすよりは、「N」の語り手である青年主人公の名を借りたほうが、賢明な選択なのではあるまいか。それでもって、二人で架空のラブストーリーを演じるのだ。

だが、物事にはやはり分相応というものもあるだろう。才色兼備の女性が物語のヒロインの名を語るのは、ある範囲のサークルでなら許されても、僕がそれにならうのは、家族の間でも失笑を買う。

それにこの青年、僕に比べたらかなりの読書家であるようだ。とくに『グレート・ギャツビー』という古い小説が好きらしい。たぶんコンビニでは売られていない種類の本なのだろう。僕は見かけたこともない。

そんな輩が、もし編集者をしている女性のまえで小説中の主人公の名を語ればどんなことになるか。

とりあえず僕は、名もなきお得意さんの一人になるほうを選んだのだった。

電車は何度となくやってきた。でも、僕はそれをすべてやり過ぎた。日頃不慣れな縦書き文字を目で追いながら。

明日になれば女史の潤んだ優しい声で、物語のつづきを聞くことができるのは分かっていて。別れ際、僕たちは翌日の約束を交わしていたのだ。でも、とても明日まで待っていられるような気分ではなかった。

僕はほとんど生まれてはじめて、世の中には面白い小説というのが存在することを発見したのだ。コンビニで立ち読み専門の輩には、これは驚くべき短時間での進歩だ。

公園をあとにした僕は、すぐに駅周辺の書店をさがしあて、そこで緑色した「N」の下巻を購入した。そうして駅のベンチに腰掛け、夕闇の空にはやる心を落ち着かせると、一気に読みはじめたのだ。

たぶん二度目の放心状態に陥っていたとき、目の前を通過していたのが最終電車だった。

何年ぶりだろうか、最終に乗り遅れるなんて。おそらく学生時代にまで遡るだろう。そのとき、きつと僕は酔っ払っていただろうが、今はシラフでも、それよりずっと思考は停止状態にあった。

なんとという小説だろう。恋愛小説というから、つい甘酸っぱい展開を予想していたのに、僕は思わずカウンターパンチを喰らってしまった。これがバブル経済真っ只中のベストセラーとは信じがたいものがある。そりゃバブルだって弾けるはずだ。ラストシーンの青年主人公よろしく、僕は激しく動揺していた。

しかしこの際、個人の感想などどうでもよい。問題なのは、野宮女史がこの小説に共感している点だ。それも『メランコリック症候群』を発症するほど深く。

もしも「N」がよくできただけの物語であつたなら、僕の人事部社員としての勤労精神にふたたび火が点くことはなかつたらう。でも幸か不幸か、これはそういった作品ではなかつた。決して大袈裟ではなく、半永久的に野宮女史を公園の住民にしてしまう可能性を秘めている。

そんなことになれば、当然の成り行きとして、彼女は会社を退職するか、解雇されることになるだろう。どんな形であつたにせよ、僕たちが出会えた意味もなくなってしまうわけだ。

なんとかしなければならぬ。早急に解決策を考えださなくては。この僕が、野宮女史を魔の公園から救いだすべく。

目には目を。小説には小説を。僕の頭にひらめいたアイデアはいったってシンプルなものだった。しかし、見た目には簡単そうに思えるものほど実は複雑な構造を持っていたりする。とくに読書経験の浅い輩にとっては。

けれど、僕は自分でも驚くほど軽快に携帯電話のキーを叩いてい

たのだった。べつに深夜のメールをしたためていたわけではない。携帯を使って人生初となる小説を執筆していたのだ。それも恋愛小説を。

ただ、ライバルは破格のベストセラー小説だ。ふつうにやっては勝算はまるでない。しかも書いてる本人は読書経験に負けないほど恋愛経験も貧しいときてる。

そこで僕は、現実と虚構の入り混じった物語を書くことにした。つまり、僕と野宮女史の希望的観測をふくめたラブストーリー。これなら僕にも書くべきことはたくさんある。現在進行形の現実に空想をシンクロさせることによって、彼女を現実の世界へとつれもどすのだ。そして、小説の神様が味方してくれることがあったなら、僕自身もめでたい結末を迎えることができることになるだろう。

物語の舞台は当然、冷夏の井の頭公園だ。小説を読む女とその声に聞き耳をたてる男。邪魔な楽団員はチラリともでてこない。

夜霧のしじまから聞こえてくる僕の創作用BGMは、アコースティックなレノン・マッカートニーのナンバーだった。なんだか出来すぎのような気もしたけど、きつと『M症候群』のサラリーマンがシャッターの閉じたアーケード通りでひっそりと演奏しているのだろう。

車はほとんど走っていないかった。タクシーも深夜便トラックの姿もない。交番の赤色灯がぼんやり浮かんで見えていた。

追われるように駅からでてきた僕は、ロータリーのベンチで、ホットの缶コーヒーと襟元を立てた上着を相棒にさっそく執筆活動を開始したのだ。まったくはじめの経験だったから、いったいどこまでできるかわからなかったけども、とりあえず書き上げたところまで野宮女史に朗読してもらおうつもりでいた。

「N」のかわりに。

太陽に焼かれる夢で目が覚めた。これは自分がしようとしている

ことへの無意識レベルでの自己批判のあらわれだろうか。

いや、僕は直射日光を浴びていたのだ。ロータリーのベンチにせもたれながら。

車の騒音、人の足音が聞こえた。それに混じって耳につくのは、季節はずれの蝉の声だ。でも、季節はずれという言い方はもはや正確ではないのか。

それをたしかめようと、長いトンネルをぬけたようにゆっくり瞼をあけてみた。

街はすべて白くまぶしかった。その時、僕は真夏の中にいた。

横断歩道を走ってわたる人々が見えた。忙しそうにしている人たちを間近に見るのはずいぶん久しぶりだ。けれど、彼らはなにをそんなに急いでいるのだろうか。まるで時計の針と競争しているかのよう。

僕はなんだかわけもなく腹立たしくなって、必要以上にゆっくりと腕の時計を見やった。

すっかり時の流れにとり残されていた。いったい何時間寝ていたのだろう。野宮女史との約束の時間が間近に迫っていた。

それでも僕は冷夏の住人らしく、慌てふためくことなくロータリーのベンチから腰をあげてみせた。すると、一瞬頭がフラつき、目のまえが暗くなった。汗が額から流れ落ちるのが分かった。いいや、額だけではない。体中のあちこちから汗が噴きだしていた。僕は条件反射的に一夜の相棒を脱いで、昨夜ホットコーヒーを買った自動販売機をめざした。

買っつもりはなかったけど、ここでも僕のもう一方の相棒はやはり用済みになっていた。すべての暖かい飲み物が、一晩のうちに冷たい表示へとかえられていたのだ。誰がやったのだろうか。この変わり身のはやさ。

僕は、ほとんど庶民に裏切られた革命リーダーのような気分になりながら、それでも迷うことなくポカリスエットのボタンを押した。

かつて霧によって遮られていた人々の視線を、今は太陽の光が占拠しようとしていた。木々の葉は緑に輝き、滝のような蝉しぐれの奥で小鳥たちがさえずりあっている。彼岸の国への渡り舟めいていた池のボートでは、子供を乗せた家族連れが波光の中で白い歯をのぞかせている。あらゆる生き物が、遅れてきた夏を、生命の季節を謳歌しようとしているようだった。

森の廃家を思わせた売店小屋からは、かき氷を削る小気味よい音がひっきりなしに聞こえていた。きつと海の家では、これよりさらにパワーアップされた光景が繰り広げられていることだろう。そして、日が暮れるころになれば、墓地然としていたビアガーデンも、仕事を終えたサラリーマンやOLで例年の賑わいをとりもどすのかも。

あるいは、中止になっていた花火大会も復活するかもしれない。花火師たちが現場へともどってくれば。それぞれの線香花火を胸の内に。

仕事？そういえばすっかり忘れていた。しかし、いくらなんでも今さら会社に言い訳めいたメールを送るのはさすがに気が引ける。時刻はとっくに昼を過ぎていた。

そして、野宮女史はまだあらわれない。

暑さとベンチに座りつづけた尻の痛さから、手頃な避難所を公園の中に探しはじめたころだった。背後から男の声がした。

「彼女はこないよ」

振りかえると、チューバを背負った中年男が立っていた。今日はかき氷のカップを手に持って。

「冷夏は終わったんだ。同時に『メラニコリック症候群』もね。彼女は職場にもどったんだよ。だから、君もそうしたまえ」

男はまるで僕の上司みたいに言った。バカな。僕の上司なら旅の途中のはず。

重たそうな楽器ケースを地面におくと、男は僕の横に腰をおろした。そして、ものを食うときは話をせずにおれない質なのか、かき氷を頬ばりながら一方的に喋りつづけた。

「趣味でジャグバンドをやっているね。ストレス発散にはなによりこれが一番だよ。休みにはいつもこの公園で練習してるんだ。ちょうど今日まで有給をとっていてね。明日には私も会社にもどるよ。君もそうするといいだろう」

中年男は言った。まるで立場が逆転している。これでは、僕が『M症候群』で会社を欠勤している社員で、向こうが面談にやってきた人事部の人間みたいではないか。

僕の心底にはふたたび腹立たしさがよみがえり、じつのところ、このエセ人事部男には聞きだしたいことが山ほどあったのだけど、やおらベンチから腰をあげると、昨夜のフラッシュバックのように無言のまま公園をあとにした。

本当に冷夏は終わってしまったのだろうか。その予感はずいぶんあったが、僕がそれを実感したのは、強い日差しでも蝉しぐれでもなく、エアコンの効いた夜のリビングで目撃したある短い文章だった。

TVで『フランダースの犬』を観ていたときだった。突然、番組終了のテロップが流れたのだ。明日からは通常の番組プログラムにもどるといふ。なんとということだ。最終回のない『フランダースの犬』なんて。

どうも、冷夏の終焉はそのはじまりよりもずっと早いスピードで社会に浸透しているらしかった。

天気予報は観なかった。どうせ一度訂正した長期予報を、ふたたび訂正してるに違いない。

翌朝、目覚めると、窓に映った空はどんより曇っていた。それ見

たことかと思っただが、気温はじつとりと高かった。ネクタイをしめて駅までむかううちにもう汗がでてきた。

プラットホームには通勤客の列ができていた。なにかもが、もとの状態にもどりつつあった。それでも、列の中には、なにかを期待するかのよう空を見上げたり、「冷夏はどこにいつちやっただしょうねえ」というふうに、隣人の顔をうかがったりする人々があとを絶たなかった。

しかし、そんなサラリーマンたちの最後の望みを断ち切るかのように、電車がホームに入ってきたのだ。時間ピッタリに。

新宿駅で電車を乗り換えるころには、すでに太陽が顔をのぞかせていた。ここまでくれば、さすがに冷夏の夢はあきらめていたけど、そこに追い討ちをかけるような出来事が会社で僕を待っていた。

「コラ、昨日はどうしたんだ」

オフィスに着くなり、聞くはずのない声を僕は聞いた。

「すぐに欠勤届けを書いてもってきたまえ」

どうして彼がここにいるのか。声の主はロマンスグレー課長だった。北海道は、トライなんかはどうなったのか。学生時代からの夢は。僕が無断欠勤したことを知っているところを考えれば、行つて帰って、北海道一周どころか、彼は本州もでていないはずだ。いや、関東地方ですらあやしい。

「ボーツとしてないで、はやく仕事にとりかかりたまえ。すぐに会議だぞ」

「『メランコリック症候群』対策ですか？」

僕の問いかけに、課長はやっとデスクトップからチラリとだけ視線をあげた。

「新しい採用策だよ。各部署の代表が集まって最初から練り直しだ。今回から君も出席するんだ。私と一緒にな」

この僕が代表とは。ぜんぜん嬉しくなかったけど、これは課長の

僕にたいするある種の恩返しであったのかも知れない。そうでなければただの口封じか。どちらにしても、僕にはトライなんかの夢話を他言するつもりはさらさらなかったし、代表者会議にだって長く退屈なものになるのは分かっているわけで、まったく有り難迷惑な話ではあった。

しかし、当初の予想に反して、会議はあっという間に終わったのだった。たしかに時間はかかった。ただ、それを僕はまったく長いとは感じなかったのだ。むしろ、これなら毎日会議だっていいくらいに。

それというのも、誰であろう、その円卓の席に、あの野宮女史が参加していたのだ。今日は紺色のスーツに身を包んで。

これはどう考えても、会議がはじまるまえに、こちらから挨拶に参上すべき絶好のシチュエーションだ。

だがしかし、僕がそれを躊躇してしまったのは、彼女の横によからぬ人物の姿を発見してしまったからだだった。

社長や専務の顔もロクに見分けられない輩が、その男の面だけはハッキリと覚えていた。奴は本来ならチューバを背負って、かき氷を手に持っているはずだが、今日のところは書類の束らしきものを抱えていた。そして、まるで保護者みたいに野宮女史の横にピツタリはりついていたのだ。

どうも、かき氷男の正体とは、音楽業界ではまったくの無名であっても、出版業界では少しは有名な文芸部のお偉いさんだったらしい。この業界でよく耳にする名物編集長というやつだ。

もっとも、よく耳にするとは言っても、実際にそう呼ばれている人物を会社で見るのはこれがはじめてであったのだけど、そんな肩書きはいいとして、重要なのは、かき氷男と野宮女史の関係のほうだった。そもそもあの二人は、ただの上司と部下なのか。本を読む女とただのお得意さんだったのか。

それをつきとめようと、会議の間中、ずっと向かいの野宮女史の様子をうかがっていたのだけど、しだいに二人の関係より、肝心である僕と女史の関係そのものの存在自体がありがたいことになってきた。

はたして僕は野宮女史と本当に出会っていたのだろうか。僕が見ていたワンピースとカーデガンは彼女が着ていたものだったのだろうか。それを疑ってしまうほどに、女史の僕にたいする態度は素っ気ないものだった。

長い会議の間、彼女のほうから僕の顔を見たことは一度としてなかった。霧の公園を二人で散歩したのに。冗談を言っただけを困らせたのに。あの優しさにみちた女性はどこにいったのか。同じ会社にいながら、今ではもう挨拶すらためらわれるほどだ。まして「僕が携帯電話で書いた小説、読んでくれませんか」などと。

いよいよ会議がはけると、野宮女史は誰よりも早く席を立って部屋からでていってしまった。まるで、かき氷の食べ過ぎでトイレをずっと我慢していたみたいいな早業だった。

僕はそのうしろ姿を置き去りにされた亀のように見送っていた。すると、かき氷男がやおら席を立ち、あたかも慰めるかのように僕にウインクしてみせたのだ。

「知り合いなのか？」

ロマンズグレー課長が嫉妬心半分、僕に耳打ちしてきた。

「まさか。僕は本なんて読みやしませんから」

部下はそう答えた。ほとんど心の携帯電話を握りしめながら。

うだるような暑い日々が続いた。太陽に焼かれる悪夢は正夢となった。人事部の先鋭である僕は会議の決定にもとづき、優秀な学生を求めて電車を乗り継ぎながら、毎日のように大学から大学へと長い道のりをわたり歩いていった。

ちよつと前まで霧の中に霞んで映っていた人々の姿は、今はアスファルトの陽炎にゆらゆらと揺れて見えた。もう誰も冷夏のことなど覚えていないかのようだ。強い日差しと蝉しぐれが、僕たちの神経を麻痺させ、記憶は汗に溶けて体外へと流れでてしまう。遠い夏の思い出も、いつの間にか古いアルバムの中にふたたび仕舞い込まれた。

人も街も、雲も空も、いつもの季節どおりのたたずまいをとりもどしていた。

ただ一つ、以前と様変わりしたことがあるとするなら、それは僕が本を読むようになったことだった。通勤電車の車内で、夜のソファで、休日の公園のベンチで、僕はよく紙の扉を開くようになった。まるでつぎの冷夏を静かに待っているかのように。あるいは、恋人との再会を夢想しているかのように。

でも、本当はそうではないのかもしれない。僕は昔からよく本を読む男だったのかもしれない。ただ、冷夏の間だけそのことをどういうわけかすっかり忘れていたのだ。

たぶん、誰かと一つの物語を分かちあうために。誰かにそれを読んで聞かせてもらうために。

それが僕の『メラニコリック症候群』だった。そんなふうに今では思う。

第12話「ア、アリガトウゴザイマシタ」と自動販売機は言った」

中野駅西口の交差点で、一人の若き未亡人がじつと信号機を見上げて立っていた。

青信号にかわった横断歩道には、仕事へとむかう朝の勤め人の人波がなだれ込んでいた。女性はその端っこに顎をあげたまま立ち止まっていた。

彼女は三年前に交通事故で夫を亡くしていたけども、べつに信号機に怨みをもっているわけではなかった。同じように、そこで帰らぬ人を待っているわけでも、また、上空に故人の面影によく似た形の雲を発見したわけでもなかった。

女性は三鷹にあるパン工場にむかう途中だった。結婚前からつづけているパートの仕事で、彼女はそこでは毎日葡萄パンを焼いていた。

それはコンビ二向けに出荷する大量品で、味は常にある一定の範囲を超えなかったし、消費者に違いはわからなかったけども、彼女の焼いた葡萄パンは、工場内と、お裾分けを頂戴しているご近所では評判がよかった。

遅刻や欠勤はこれまで一度もなかった。しかしその日、毎朝利用している中央線の下り電車はほどなくホームに到着しようとしていた。それでも彼女に動く様子はなかった。

若き未亡人はついさっき耳にしたばかりだったのだ。まるでなにかの啓示のような、さもなければ悪い冗談のような、とある電子的な音声を。それは、生前の夫の口調とほとんど同じイントネーションをもっていた。

いつもの信号待ちが終わったときだった。行く人来る人の頭上で、信号機がこんなメッセージを発した。

「ア、青二ナリマシタ」

その青年は車窓に映る遠い富士山のパノラマを眺めながら、いつかあのお山に登ってみるのもいいと、お気に入りのアウトドアジャケットにザックを背負い、登山道をゆく自分の姿を、朝の中央線車内で妄想している最中だった。

彼の正式な肩書きは「東京都公文書保安課第四書記」。ただ、近頃では、同僚たちから『自販機係』と呼ばれるようになっていた。

それは赤ん坊だったころを除けば、これまで彼が人生の中でつけられた一番まともなアダ名の一つであったのだが、ほかに同僚たちが考案したアダ名には、『バックバツカー君』とか、『自販機回り』、『自販機調査員』などがあつた。

もつとも、それらの名前は彼個人に寄与されたものではなかつた。むしろ、それは彼らと呼んだほうがよく、彼にのみあたえられたものといえば、「三代目」という称号のみだった。

それというのも、それらの呼び名は、彼らにあたえられた、もしくはあたえられていた、とても奇妙で困難な仕事の内容を言い表していたのだ。そしてもし、そんな仕事がなかつたなら、あえて彼らの名付け親になるうとする者もあらわれなかつたに違いない。

平野ミキオ、25歳。黒縁メガネに童顔の、まるで旧館の町役場が似合いそうなこの青年は、またの名を『自販機係』あるいは『三代目バックバツカー君』といい、70リットル容量のザックをスーツに背負いながら、毎朝9時半に都庁のツインタワーをでる。

それは三ヶ月ほど前のある朝のこと。ミキオが普段どおりデスクワークにとりかかっていると、やはりちょうど三ヶ月ほど前に国立大卒のエリートに一人娘を嫁がせたばかりの課長が、まるで新郎にそうするみたい、どこか複雑な心境のこもった手をその肩へとおいた。

もちろん課長は「娘をよろしく頼む」とは口にせず、ただ可愛い

部下の将来を憂うようにこう言った。

「すまないな。私の力が足りないばかりに」

この時、ミキオはなんのことを言われているのかまだ分からずにいたが、当然イヤな予感だけは持った。

「平野君、キミに決まったよ」

課長の口調は、それだけ言えばすべての事情が相手に伝わるかのような感じだった。けれど、ミキオはまだ話が呑み込めず、椅子の上でキョトンとするばかりだった。

その無言の反応を、ふだんの課長ならば優柔不断とみてとるところなのだろうが、この時ばかりは、謙虚な受諾とうけとめたようだった。そして、自分よりもはるかに有能かつ有望な娘婿より、よほど好感を持ったらしかった。ただ、当のミキオ本人にしてみれば、ここで見当違いのことを喋っても、自分にとつてなにやら都合の悪い状況が、さらに悪い方向にかたむくだけと、経験的に判断した結果にすぎなかった。

それはそれとして、課長の言動は、ミキオを除いたまわりの職員たちには、その狙いどおりにちゃんと伝わっていた。

それは、彼の同僚たちが、前もつてある噂を耳にしていたからだ。つたのだが、それがミキオのもとにまで届いていなかったのは、彼が職場にこれといった敵も味方も持ちあわせていなかったということ以上に、その噂話の主人公が、他ならぬミキオ本人であったということなのだ。

その男性職員は、課長に指示された階段下の狭い喫煙コーナーでミキオを待っていた。古ぼけた長椅子の隅に腰掛け、中央には目印と云われてきた、小型冷蔵庫ぐらいならスッポリ収まりそうな赤いザックが、主人よりもよほど存在感を示してそこにあった。

「ウ、ウツるんだよ。で、できれば断ったほうが、いい、いいよ」

ミキオが簡単な自己紹介をしたあと、その男性職員は言った。なにか前のめりになりながら、必死に言葉を探しているような話し方

だった。しかし、その熱心さとは裏腹に、彼はミキオと微妙な距離間にある巨大なザックはどけようとはしなかった。まるで、もう半分キミのものでもいうように。男の名は木村といった。

彼こそ、都庁総務部に勤務する『二代目自販機係』その人であり、ミキオはこの場所に引き継ぎのために呼び出されたのだった。そのことをミキオ自身もすでに承知はしていたが、なぜ自分が三代目に抜擢されたのかは知らなかったし、課長からもなんの説明もなかった。彼はデスクのパソコン画面もそのままに、ただ急ぎ約束の場所におもむくよう指示されてきたのだ。

先代・木村は銀縁メガネ姿のずいぶん痩せた男で、ミキオはてっきり公務で枯れ果てた先輩職員だとばかり思っていたのだが、聞けば同期であることがわかった。煙草は吸わないらしい。ミキオも吸わない。なのにどうしてわざわざ都庁内の喫煙コーナーが二人の待ち合わせ場所選ばれたのか。ミキオは一瞬そのことを尋ねてみようかと思ったけども、今はそんな場合でもなかるうと、もう少しマシな質問を考えた。

「でも、僕がこの職務を引き継がないと、あなたも辞められないんじゃないですか？」

「き、きつと、そ、そうなるね」

「なんで僕があなたの後継者に選ばれたんでしょう」

「し、知らない。だ、だって、どして僕が選ばれたのかさえ、い、未だにわからないんだからさ」

この男には何を尋ねても無駄なのかもしれない、ミキオの脳裏にそんな邪念がかすめはじめると、先代はやっと先輩らしい知識と経験を銀縁メガネの奥から披露した。

「た、たぶん噂だよ。つ、次はキミだって噂が都庁の中で流れはじめたんだ。そ、それが一番の理由だよ。だ、だって、ほかに『自販機係』を選ぶ基準が、ど、ど、どこにある？」

あ、あ、あなたは　　ミキオはすでにその口調がウツリそうだ

った。

「辞めたら、もとの部署にもどれるの？」

男は大きくうなずいた。

「で、でも、そ、その前に、リ、リ、リハビリだ」

木村と会ったのはそれが最初で最後だった。今、彼がどこでどんなリハビリをおこなっているのか知る由もないが、もしも再会することがあったとしても、こちらから声をかけるのはやめておこうと、ミキオは固く心に決めていた。

というのも、自らリハビリをし、キミにもウツると警告していたあの喋り方が、すでに三代目を襲名して三ヶ月がたとうとしているのに、ミキオにはその兆候すらあらわれていないのだ。

たしか前任者・木村が『自販機係』をしていた期間は半年弱。その半分以上を後任者の男がなんの問題もなくクリアしたと知ったなら、彼の心境もおだやかではないだろう。リハビリで改善してきた口調が悪化して、ふたたびスクラッチしだすかもしれない。たとえば一度切りの出会いであったとしても、そうなるのはミキオの本意ではなかった。本人にバツタリ再会し、同情心からその口調を真似て喋るようなこともまた然り。

しかし、言葉に関することを除いてなら、木村が言っていたことのおおよそが、ミキオにもあてはまっていたことは事実であった。

例えば、その一つ。『自販機係』になると体力がつく云々。

それこそ小型冷蔵庫並みの重量をもったザックを毎日のように背負い、何キロと歩きつづけるのだから、当たり前といえば当たり前の話だけでも、もう何年も運動らしい運動をせず、それに輪をかけてデスクワーク三昧の日々を送り、駅の上り階段では、時に息を切らすことすらあったミキオが、今では無数の新宿駅利用者の中でも指折りの階段アスリートへと変身している次第。

そうして彼は、車窓の富士パノラマを見つめながら、クライマー

たる己の姿を夢想している最中だったのだ。

西の空を染めた夕暮れ模様がしだいに輝きを失い、夜の帳がその幕を下ろし切るころ、ミキオは新宿駅の西口を歩いている。

帰宅の足を急ぐそこかしこのビジネススマンたちと無言のままに擦れ違いながら、彼は明かりの消えはじめたビルの群れへとむかう。

都庁の建物に入ると、下りエレベーターから降りてくる、すでに私人の顔つきと入れ替わった同僚たちとは正反対に、彼はそれに入らずに上階のボタンを押すのだった。

人気のないフロアを横切り、彼は薄暗い会計課のデスクに今日一日分のA4サイズからなる支出記録をおいて部屋をでた。そして、ふたたびエレベーターに乗り込むと、今度は地下階のボタンを押した。

まるで裸電球然とした貧しい蛍光灯の明かりの下を、ミキオは体育館ほどの広さもある地下倉庫の奥へと迷わずに進んでいった。両脇にはスチール製の棚に引き詰められたダンボール箱がくたびれた顔色をのぞかせている。ミキオはその中でも比較的新しい顔の前で足を止めてから、職場にもどってはじめてザックを下においた。鈍い金属音が鳴る。

「おかえり、兄弟」

冷えたセメントをこするシューズの足音と共に、低い男の音が背後に響いた。倉庫の番人をしている契約社員の男なのだが、なぜかミキオのことを会ったときから兄弟と呼ぶ。そうして、倉庫内の通路をトラックに見立て、暇さえあれば作業ズボンにTシャツ姿でジヨギングしているのだ。

「ただいま、兄弟」

ミキオは遠ざかってゆくシューズに声をかけた。

棚からダンボールを引き出すと、それも鈍い金属音を立てた。ま

るでジャック・スパローの子分たちが船の積み荷からおろした宝箱
みたいに。

しかし、都庁の地下倉庫に七つの海にまたがる金銀財宝が眠って
いるはずはなく、中には煙草のばらのケースと、缶類の飲み物とが
それぞれ定規で計ったように綺麗半々収まっていた。ミキオが開け
たザックにもやはり同じ品物が、こちらはもつと乱雑に、フタから
溢れんばかりに顔をのぞかせている。

彼はそれを一つ一つ手にとって、積み木を重ねるようにダンボー
ル箱に並べてゆくのだった。どれもこれも大切な都民の税金によっ
てまかなわれたものなのだ。一つとして粗末にはできない。

もつとも、半日かけてこうして集めた品々が、この先どうなって
ゆくのか、ミキオにはまったく知らされてはいなかった。

ザックが空になると、彼は静かに倉庫をでた。間際、地下室アス
リートの声が、四方の壁に反響して木霊した。

「おやすみー、兄弟」

『音声機能付き街頭機器における音声機能障害についての調査報
告VOL.1』 去年のある日の午後、ミキオのもとにまわ
ってきた書類の表紙には、彼の正式な肩書きを凌駕するそんな長つ
たらしいお題目が並んでいた。

それから一年間、VOL.2、VOL.3と、どこからか提出さ
れつつけるその報告書を、公文書記官であるミキオは定期的にデ
ータファイル化することになったのだが、虫の知らせだろつか
ちようど課長に肩をたたかれた朝にも、デスクのパソコンキーに指
をおきながら、彼はその長い題目のついた文書とニラメッコしてい
る最中であつた。

そんな事情もあつて、決して自ら望んだわけではないけども、こ
と『音声機能付き街頭機器における音声機能障害』に関しては、ど
こへ出されても恥ずかしくない知識と教養をミキオは身につけてい
た。もつとも、そんなものが実際に役に立つ日がくるとは、夢にも

思っではいなかった。

ミキオがデータファイル化した報告書によれば、中野駅西口の交差点で、若き未亡人によって確認された音声機能付き信号機の「どもり」の一件が、『音声機能障害』の最も古い記録として書き残されている。

報告書はその事例を『第一音声遭遇』と呼んでいるけども、その翌日、西荻窪の交差点で通学途中の男子児童が耳にした同様の事例に関しては、特に『第二音声遭遇』とは名付けてはいない。

そう呼ばれているのは、『第一遭遇』から一月後、高円寺のアーケード通りで、缶コーヒーを買おうとした仕事帰りのサラリーマンが耳にしたあるワンフレーズで、そのページには、取り出し口から飲み物を取りだそうとした際、自動販売機がこう喋ったと記されている。

「ア、ア、アリガトウゴザイマシタ」

「どういたしまして」

ミキオは自動販売機にこたえ、ザックを道端に下ろした。

そして取り出し口からミネラルウォーターを引き抜くと、ボトルを中に入れた。それからザックのサイドポケットにまるめて突っ込んだファイルを開いた。そこにはコピーされた住所録が一覧表になっており、同じような○×記号がいくつも横に並んでいた。

どもれば○。どもらなければ×。住所は販売機か信号機のそれ。いたって簡単な決まりだが、同じ機械でも、なぜだかどもる日と、どもらない日があるのだ。それを毎日記録に残すのが「自販機係」の仕事だった。

これは一つの統計学であり、都議会で決定された調査法ではあるのだが、この結果がいったいどこで、どんなふうに活用されるのか、やはりミキオには知らされていなかった。

彼は今、ページに新しい○印を書き込んだ。そしてファイルをし

まっつてザックを背負うと、また歩きはじめた。さらなる自動販売機をめぐして。彼らの声に耳をかたむけるために。

木村と引き継ぎをした日以来、課長に肩を叩かれた日以来、万事がこの繰り返しだった。自動販売機から信号機へ、信号機から自動販売機へ、と。

まともな勤め人であれば、なにかしらのストレスなり不安なりを感じてよさそうな環境だった。しかし、ミキオは単調極まりないこの『自販機係』の仕事が気に入っていた。たしかに人とのコミュニケーションといった点に関してはいささかの問題があるけども、そのかわり、上司の顔色はうかがわないですむし、職場のつまらない人間関係に気をもむような必要もない。

それに今でこそ『自販機係』は、さまよえる公務員めいた存在になつてはいるが、かつては人々の注目をあつめたことだつてあつたのだ。

たしかにそれは、いささか心苦しい注目のされ方ではあつたけども。

遙か初代『自販機係』の時代。まだ、どもる自動販売機が珍しかった頃のこと。人々は中央線沿線の街へと、正確にいえば、中野駅西口から三鷹寺駅東口の区間へと、まるで上野の森にパンダとモナリザがいつぺんに現れたみたいに、こぞつて集まつたものだった。

もちろん大衆の目的は、どもる自動販売機や信号機を一目見ようとはるばるやってきたのだったが、なにしろその奇跡的な現象は中央線沿線の一定地域でしかみられないものだったのだ。

おかげで、付近の道路は毎日が帰省渋滞のようで、電車は電車ですら一日中が通勤ラッシュ。世界各地からはマスコミだけでなく観光客も押し寄せ、中央線の街は一時期、人種のルツボとなつた感もあつた。

とくに、頻繁にどもると噂されている信号機や自動販売機の周辺

は、もしも日本のサッカー代表チームがワールドカップで優勝したりすることがあったなら、こんな騒ぎになるだろうと思われるような光景で、群集の頭上にはヘリコプターが飛び交い、渋滞に巻き込まれて立ち往生する救急車がもはや風物詩となり、ほんとうに来ないのは戦車だけといった状況であった。

そして人々は、まるでなにかに取り憑かれたように、信号機にむかっていつせいに携帯電話をかざしているのだ。

そんな中、車両の列を掻き分け、野次馬を立ち退かせ、例外的に優先されている、いわゆる関係者と呼ばれている者たちがいた。

その筆頭は飲料メーカーの配送車だ。なにしろ世界中から客が集まってくるのだ。それこそ販売機はすぐに空になってしまう。そんなわけで、配送車がパトカーの先導付きでお目見えすると、群集は拍手喝采して出迎えたものだった。

『自販機係』もその関係者の一員には入っていた。ただ、ザツクを背負ったスーツ姿の公務員があらわれても、そこに拍手がおこったためしはなかった。場違いな場所で、見当違いの特権を乱用している有名人みたいに、販売機の前に列をなした人々から冷たい視線を浴びるのがオチだった。

しかし、初代『自販機係』としても、なにも好んで列に割り込みをしていたわけではなかった。ひとつの販売機を調査するたびに列の最後尾に並んでいては、ザツクのフタを二三回開けただけで日が暮れてしまうだろうし、割り込み行為は、あらかじめ上司から厳命されていたものだったのだ。

三代目であるミキオはもちろん誰からの喝采もつけていないが、冷たい視線も浴びてはいない。彼はただふつと販売機でものを買っている。祭りはとうに終わっていた。

もちろん、どうして路上の機械たちが突然どもりはじめたのか、その原因説明は製造元のメーカーをはじめ、あらゆる機関で調査さ

れ、今もきつとされていることだろう。しかし、はつきりとした理由には誰にもわからないようだった。機械にはどこにも異常はみられないし、音声機器を取り替えても結果は同じ。結局、どこかしらのなにかしらの電波が影響しているのでは、という範囲をこえる意見はいまだにあらわれてはこない。

しかも、「答え」を求めていたはずの大眾はすでにどこにも見当たらないのだ。

それはUFOや超能力にくらべれば確実に手がとどく身近な奇跡ではあつたかもしれない。ただ、必ずしも大眾が望むようなかたちでの奇跡ではなかった。彼らの熱が冷めるのは、真冬のホットコーヒーが冷めるように早かった。

最初に引き揚げていったのは、外国の観光客とそのメディアたちだった。そもそも、東洋の島国の言語など理解しない彼らにとつて、その自動販売機がどまろうが、どもるまいが、それは大差のない非エキゾチックで非ファンタジックな出来事だった。むしろ彼らは日本の自動販売機と道路標識の多さのほうに驚いていたぐらいだった。

はるばる地方からやってきていた物好きたちも、お盆過ぎの海水浴場のようにパタリと姿をみせなくなつていった。

彼らは飽きてしまったのだ。たしかにお目当ての機械はどもることとはある。しかし、それ以上のこと起こりはしない。自動販売機や信号機が勝手に喋り出すようなことはないのだ。

そして誰もいなくなった。『自販機係』をのぞいては。

「ア、青二ナリマシタ」

「そうだね」

ミキオは環状道路沿いの信号機を見上げて言った。それからファイルに○印をして横断歩道をわたり、西荻窪方面にむかつて歩いていった。

彼は先代たちと同じように、荷物にならない分、自動販売機よりも信号機のほうが好きだった。そしてこれも同じように、いつからかあたり前のように機械たちと会話をするようになっていた。

しかし、これはなにも『自販機係』だけに限ったことではなかった。相当数の人々が、口にするのではなくとも、似たような傾向を感じていたはずだった。

そしてこれが、音声機能の付いた「どもり機械たち」を、その機能の付いていない新しい機械へと交換することなくそのまま保持するという、現在の環境をつくりだした最大の理由となったのだ。

とはいっても、べつに撤去反対の署名運動などがおきたわけではなかった。そこまで彼らを愛していた者は、いたとしてもまだ少数派のはずだった。

そうではなく、保持の根拠とは、信号機や販売機がどまるようになってからというもの、その地域一帯にある好ましい傾向があらわれはじめたからだったのだ。

それはおそらく、犯罪心理学や文化人類学畑の人間が指摘しているように、人々が彼らのことを、そうまさしく彼らのことを、「人格を持ったモノ」として捉えはじめたからだと推測される。

つまりこういうことなのだ。まず交差点での交通事故が減った。そして自動販売機にたいする破損ならびに盗難事件が減少した。

他人の目のあるところ、人も車も信号無視はしづらいものだろう。あるいはそれが、自販機荒らしともなればなおさらのこと。

おかしな話だが、路上の機械たちはその本来の機能を損なうことによって、まるで心を持ったロボットのように扱われはじめたのだ。そしておそらく、その出来損ないのアトムの末裔たちと、一日のうちでもっとも多く会話している人間の一人がミキオだった。いや、より正確に彼の近況を述べたなら、出来損ないの末裔とだけ、会話している一人だった。

「ウツるのよ。絶対、断んなきゃダメよ」

ボーイフレンドの行く末を案じたミキオの彼女も、二代目木村と同じセリフをかつて吐いていたことがあった。仕事帰りの待ち合わせ場所によく使っていた中央線沿線にある小さなブックカフェのことだった。

その彼女はミキオより一つ年上の、やはり都庁で働いている女性職員であったのだが、自分の彼氏が自動販売機のようになってしまうのをひどく気にしているようだった。

しかし、彼女の言葉をそのまま受けとめたなら、その心配は取り越し苦労で終わったと考えてよさそうな状況ではあった。それなのに、この三カ月というもの彼女からは音信不通で、ミキオの電話は着信拒否。

どうやら彼女は、ミキオの口調が自動販売機化してしまうことよりも、年下のパートナーが、『自販機係』という役職に付いていること自体に抵抗を感じているようだった。職場の中の「外様大名」といったイメージ漂うその境遇に。

そんなわけで、仕事でもプライベートでもきわめて無口な生活を送っているミキオではあったが、そのことを当の本人が気にかけているかといったら、そういうことはまったく言っていないとよかった。せいぜい、『自販機係』の仕事に慣れてきたせい、少しばかり手持ち無沙汰を覚えるくらい。そして、歩きながらこんなことを感じたりしていた。そういえば、このところ自分の声を耳にしていな、などと。

ミキオはザックを下ろし、小銭のつまった財布からコインを取りだしてスポーツドリンクを買った。仕事ではなく、自分のために。自動販売機はウンともスンとも言わなかった。もともと音声機能の付いていない機種だったから当然なのだが、販売機がどもりもせず、喋りもしないと、逆に不自然さを感じてしまう。

これ以上荷物を増やさぬよう、彼はその場で飲み干し、缶をゴミ

箱に放り入れた。どうなるかと思って試すように眺めていたが、もちろんゴミ箱が喋りだすようなことはなく、ゴミ箱はゴミ箱らしくただゴソツと物音を立てただけだった。

ミキオはそれを聞きとると、意味もなく「ウン」とうなずいて、また歩きはじめた。

ミキオは先代から受け継いだ職務用の詳細な地図も持ち合わせていたが、チェックポイントはすでに頭の中にすべてインプットされていたし、体でも覚えていた。だから彼が休憩以外に足を止めることはそうはなかった。

そのミキオが疲れる間もなく歩みを止めたのは、ブロック塀に挟まれた西荻窪周辺の路上でだった。

もう少したてば、下校してくる児童たちの黄色い声が聞こえてきそうな時刻だった。家々の屋根屋根はまだひとときの午後の眠りにその瞼を閉じているようだった。

ミキオが立つ左手は路地につながっていた。だが、そこはどういうわけか、すぐに三方をブロック塀に取り囲まれた袋小路になっていた。そして、その奥の塀を背に、見覚えのない黒い自動販売機がポツンとおかれ、閑静な住宅地には不釣り合いなネオンを燦然と瞬かせていた。

それは付近の住民が見ても、オヤツと思える光景だったろうが、『自販機係』のミキオにしてみれば、散歩途中に野良猫を見つけた柴犬みたいに、決して放っておけるものではなかった。

彼はザックから地図を取りだして、駆け出しの頃のように今一度確認作業を試みた。

やはり地図には記されていない。とすると、まったく新しい販売機なのだろうか。それを調査すべく、ミキオは路地に足を踏み入れた。

ふだん煙草や缶コーヒーなど、安価な日用品ばかりに慣れ親しん

でいるミキオにとって、そこはまったくの別世界であった。販売機のショーウィンドの向こうに並んでいるのは、外国ブランドのバックや香水だったのだ。しかも、円形のステージに乗っかって、踊り子のようにスポットライトを浴びながらクルクルと回転している。ミキオの黒縁メガネのレンズには、その様子がさながら万華鏡のごとく華麗に映しだされていた。

はたしてこれは自動販売機なのかしらん。ミキオは半信半疑、機械まわりに目をくばった。間違いなく自動販売機だった。おまけに音声機能付きと思われるスピーカーの穴まであいている。

ただ、やはりふつうの販売機ではなかった。これはいわゆる『ガチャガチャ』なのだ。機械の右手には「一回3000円」の銀ステッカーが貼られてある。缶コーヒーにくらべればずいぶん高い。しかも、それでショーウィンドに飾られた豪華な商品が必ず手には入るともかぎらない。1000円ショップで売られていそうなエコバックという場合だって考えられる。いいや、まずそうなる。

3000円だして1000円のエコバックでは割に合わない。しかも、ミキオが使う金は都民の税金なのだ。しかし、音声機能付きとわかれば見過ごすわけにもいかない。コストは二次の問題だ。たとえば販売機の中の品物がフェラーリであったとしても、彼は財布を取りだし、大枚を機械に挿入した。

西荻窪から新宿へとむかう帰りの電車の中で、ミキオはひどく落ち込んでいた。窓の外はすでに暗く、家々の明かりが点々としていた。

音声機能付きの販売機ではなかった。スピーカーだと思っていた穴は、機械を冷却するための空気孔だったのだ。

商品を取り出し口に落とす黒い販売機はウンともスンとも言わず、ただゴミ箱と同じようにゴソツと物音を立てただけだった。

こうなってしまうと『自販機係』の管轄外だ。缶コーヒー一本だろうと、フェラーリだろうと、調査対象外の販売機には一円の税金

だつてあてるわけにはいかない。つまり、ミキオは自腹で商品を買ったことになる。

その商品なのだが、バックや香水でなかったことは彼にとってかえつて好都合ではあるらしかつた。いいやむしろ、販売機がなにも言葉を発しなかつたにもかかわらず、取り出し口からその透明の小箱を掴んだとき、ミキオは喜びさえしたのだ。

ただ、その歓喜は長くはつづかなかつた。ミキオが手にしていたものは一見iPodめいてはいた。iPodが3000円ならたしかに安い買い物だ。しかしよく見れば、箱にはiPodではなく、iPodとプリントされている。つまり、彼は偽物を掴まされたのだ。

そんなわけで、ミキオは中央線の車内で憤懣やるかたない思いでいたのだつた。もつとも、彼としてもべつに3000円がそんなに惜しかったわけではない。問題は金ではないのだ。

ミキオは裏切られたような気持ちがしていた。自動販売機に。まるで、親しい友人にそうされたみたいに。

さて、都庁の建物にもどつたミキオは、ザックを背負つたまま地下室の倉庫へとおりていった。

いつもの挨拶が彼を出迎えた。だが、その声は昨夜までの倉庫番のそれではなかつた。

「お、お、おかえり兄弟」

作業服に身を包んだ木村が、受付用の古い机にいた。

ミキオは入り口に突つ立つたままこたえず、呆然と彼の顔を見ていた。椅子の上で組んだ脚に、木村はなぜだかウクレレをのせ、両手に抱え持っていた。

それはたしかにウクレレだつた。けれど、ミキオの目には、倉庫から引つ張りだしてきたなにかの古道具としか映らなかつた。木村がそれにあてた右手を動かした。乾いた弦の音が薄暗い倉庫内に響

いた。

「ぼ、僕たちの先代は、た、旅にでたよ」

「先代？」

ミキオは課長に肩を叩かれたときののように、相手がなにを言わんとしているのかさっぱりわからなかった。今度は木村のほうが不思議そうな顔をして言った。

「き、聞いてなかったのかい。か、彼が初代の『自販機係』だったんだよ」

それで兄弟と呼んでいたのか　ミキオは小さな謎が一つ解けたような気がした。だが、なぜ彼が最後まで正体を明かさなかったのか、その疑問はのこった。ただ単に話したくなかったのかもしれないが。

「彼はいつも倉庫の中を走ってたよ」

ミキオの言葉はどこか言い訳めいていた。もっとも、木村の関心はもうべつのところに移っていたようだ。

「そ、それが、彼流のリハビリだったんだ。い、今ごろ、き、きつと夜の香港の街を歩いてるよ。お、お、大きなザックを背負ってね」

木村はミキオの背後をアゴでさした。

「そ、それ、に、似合ってるじゃないか」

ミキオは木村の作業服を見て同じことを言っただろうかとも思ったがやめにした。

「君にはリハビリの効果はまだでてないようだけど」

「で、でてるさ。む、昔よりずっと上手くなってる」

木村はそう言って、ウクレレの弦を華麗にピッキングしてみせた。

ミキオは普段どおりの作業をつづけた。ダンボール箱にiPodをのぞく今日一日分の収穫を詰めてゆくのだ。

ただ、いつもと調子がちがうのは、耳に入ってくるのが、床にこすれるシューズの音ではなく、木村の奏でるハワイアンミュージック

くだということだった。

ミキオは木村の素性もやはりよくは知らないけども、知るかぎりでは、彼とハワイアンはどうしても結び付かない。この薄暗い倉庫と南国の風景もまた然り。

ミキオの手はいつもよりはやく動きだした。自然、商品の並べ方は雑になっていった。ここから抜けだしたいという気持ちで、彼の頭を占めはじめていたのだ。とにかく、まともな世界にもどらねばと。

そんな心の動きが伝わったのか、木村は遠く離れた机からも話しつづけた。もつとも、声を張り上げる必要も、耳をすます必要もなかった。たとえウクレレの伴奏付きではあっても、その声は倉庫中に反響して、どの場所においても聞きとれたからだ。

「と、都庁の中で、き、君がなんと呼ばれてるか知ってるかい？ みんな、き、き、『奇跡の自販機係』と呼んでるよ。君が三カ月たつても、まだ、少しも、ど、どもらないものだから」

どうやら、留守の間に出世していたらしい。けど、誰とも会話してないのにどうしてわかったのかしらん。ひきつづき手を動かしながら、ミキオは不思議に思った。

「で、でもね、いずれなんらかの変化があるはずさ。今と同じままだじゃいられない。『自販機係』になった以上はね。こ、この仕事は、そんなに甘いもんじゃないんだ。変化は必ずやってくる。い、いや、も、もつきてるかもしれない。こ、この倉庫の机の上にもね」

それで、ミキオは机の上だけは目もくれまいと、固く心に誓ったのだった。

すべての調査品をダンボール箱に詰め終え、空になったザックをふたたび背負い、ミキオはなにも聞かなかったように出口へとむかった。

しかし、寸前のところで、彼の心境に変化がおきたのだ。

なぜ木村の言うことを気にかける必要があるのか。ミキオの脳裏にそんな考えがとつぜん浮かびあがった。『自販機係』を引き継ぐとき、奴は君にもウツると言った。しかし、実際にはそうはならなかった。なら、今回だってそうかもしれない。いや、そうなるうがなるまいが、どうだっていい、と。

新しい倉庫番の前までくると、ミキオはほとんどワザと視線をおろした。そして後悔した。

机の上に一枚のCDがのっていた。

てつきりハワイアンのそれなのかと思ったが、ジャケット写真には、見覚えのあるヒゲとパーマの外国人が二人並んで写っていた。

いつだったか、彼女にプレゼントしたものと同じCDだ。サイモン&ガーファングルのベスト盤。それがどうしてここにあるのか。

一度は目もくれず素通りしようと思っていたのに、ミキオの足と視線はピタリと静止したままだった。

「ある女性がだ、き、君に返してくれて。た、退庁前にここにきて、おいってった」

木村はそう言って、よせばいいのに『サウンドオブサイレンス』をウクレレで奏ではじめた。ミキオは思いたしたくもない映画のラストシーンを思いたしてしまった。

それは彼女のお気に入りだった。彼女はキャサリン・ロスみたいな長い髪をしていた。

「か、彼女のことは忘れるんだな。向こうはもう気がついてるんだよ。や、やっぱり、女性のほうが勘がいいからね」

「なにを聞いたんだよ」

「な、なにも。ただわかるんだよ。ぼ、僕のとときも同じだったから木村はやつと弦の指をとめた。

「や、やっぱり、ウクレレに『サウンドオブサイレンス』は、む、無理があるな。も、もっていけよ、兄弟。お、おいていかれても困るから」

ミキオは引つたくるように机の上から二人の外国人を取り去った。ほかにもいろんな物をプレゼントしたはずなのに、どうしてCDだけなんだろうと思いつながら。

ウクレレに『サウンドオブサイレンス』は似合わなかったが、『自販機係』の仕事にも、やはりそれは不向きだった。それでも、『ミセス・ロビンソン』や『コンドルは飛んでゆく』あたりはなかなかよかった。

ミキオは昨晚、さつそく彼女の置き土産を3000円のiPod oにインストールしたばかりだった。ほかにも手持ちのCDは何枚かあったけども、あらためて聴きたいと思うほどのものはなかった。それよりも、iPod oを手に入れたその日に、なんの因果か、自分のもとへとまいもどってきたCDをインストールするほうを彼は選んだのだ。

恋人は彼を見捨てたが、自動販売機は彼を裏切らなかった。iPod oは問題なく動作した。ミキオはいつもの販売機から信号機への道のりを、今日は白いイヤホーンをして歩いていた。なじみのメロディーに口笛を吹きながら。

「ア、青ニマリマシタ」

「そうだね」

「ア、アリガトウゴザイマシタ」

「どういたしまして」

ミキオは快調に飛ばした。『自販機係』の最長歩行記録を更新しそうな勢이었다。

イヤホーンはしていたが、もう音楽は耳に入らなかった。口笛も忘れた。彼は自分の足が向かうままに、ただ黙々と歩きつづけた。

いつしか街は森になり、信号機は葉を揺らす樹木になった。自動販売機はお喋りな熊に。下水道は小川のせせらぎとなり、電線のカラスはカツコウのように鳴いた。スニーカーは登山靴へと、歩くア

スファルトは、二泊三日のトレッキングロードへとつづいていた。

ミキオは一人、都庁所属のワンダーフォーゲル部員になっていた。

日が暮れ、人々が帰宅の道を急いでるころ、ミキオは中野通りをトボトボと歩いていた。

今日だけでどれくらい歩いたことか。『自販機係』としての自身の最長歩行距離は見事に更新したけども、おかげで脚はパンパンに腫れ、ザックが食い込んだ肩はキリキリと痛んだ。

本当はこのまま徒歩で新宿都庁にゴールするつもりでいたのだが、そうなれば、明日の仕事にさしつかえるのは目に見えていた。彼はあっさり自身のワンダーフォーゲル部を解散し、文明の力を借りるべく、中野駅へとむかっている最中であつた。

中野サンプラザを過ぎると、目的の駅が見えた。ガードレールの上を高架橋が走っている。と、その下の交差点に信号機が立っていた。ミキオはそれを今日最後の仕事にしようと心に決めた。

しかし、交差点に近づくにつれ、ミキオの視界にはいつてきたのは信号機ではなく、ガード下のトンネルにへばりつくように立っているある人影だつた。そのシルエットはミキオが会いたいとは思わない人物のいでたちによく似ていた。

作業服に、胸に抱えた小さな楽器。高架橋下の街灯が男の姿をオレンジ色に映し出していた。もう少し近づけば銀縁メガネも見えることだろう。

ミキオの頭にとっさに思い浮かんだのは、一か八か、電柱のかけにでも身を隠そうか、というものだった。けれど、実際にそうしなかったのは、隠れなければいけないのは、むしろアチラさんではないかと、考え直したからだ。

あれはたしかに木村だつた。魔がさしたのか、よせばいいのにガード下でウクレレの演奏をしているのだ。音はここまでは聞こえて

はこないが、まず間違いないでお得意のハワイアンだろう。

奴が言っていた変化とは、ああいうことだったのか、ミキオは『自販機係』になったことをはじめ後悔しはじめた。キャサリン・ロス似の彼女が予期した変化とやらも、もしやあんなだったのかしらん。だとしたら、彼女が別れたと思った気持ちも満更わからな
いではない。

木村はこちらの存在にはまったく気がついていないようだった。うつむき加減に、一心不乱、楽器を弾いている。

その姿はハタから眺めていてもかなり哀れだ。作業着にワイア
ン。通行人たちは皆、彼の前を素通りしていった。まるで道化役の疫病神を見るかのごとく。

いや一人、たった一人だが、足を止めて聴き入っている通行人が
いる。

それは淡色のコートを着た女性だった。仕事帰りなのか、腕には
網目のバッグをぶら下げている。ちょうど木村の影になって見えな
かったのだ。

あの人はフラダンスでも習っているのかしらん、ミキオがある意
味感心して眺めていると、木村がやつと顔をあげ、かわりに楽器を
おろした。演奏がおわったのだ。唯一の聴衆に頭をさげる我らが二
代目。すると、つぎの瞬間、ミキオは信じがたい光景を目の当たり
にした。

拍手している。女性が。しかも、笑顔をむけて。

それは、単に同僚の別の一面を垣間見たというより、これまで木
村のことを「外様大名のその代表」のように考えていたミキオにと
って、都庁を中心点とした彼の半径40キロからなる価値観を揺る
がすような出来事だった。

なにしろ、黄昏の冥王星よろしく、円周の一番端を漂流している
に違いないと考えていた男が、じつは誰より世界の中心に近い場所
にいたのかもしれないという予感を抱かせたのだ。

こうなったら、同じザックを背負った身、一言声をかけて労をねぎらうべきかとも思ったのだが、同時に、このまま路上のカップルを二人切りにして立ち去るのもまた一考のように思え、どちらにするか、ミキオは悩みはじめた。

それで、しばらく様子をつかがっていたのだが、女性がこちら側に立ち去ってくるのを見てとると、やおら歩きだし、先代にむかつて約束の言葉をかけた。

「やあ、兄弟」

木村は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに彼を出迎えた。これまで見たことのなかった満足そうな生き生きとした笑顔をうかべていた。都庁の職員たちが見たらなんと言うだろうか。彼らはまたしても『自販機係』にたいする新しいアダ名を考えださなくてはならないだろう。

「や、やあ、兄弟」

「似合ってるじゃないか、それ」

胸の小楽器をアゴでさしてミキオは言った。ちょっとは気の利いた冗談のつもりであったのだが、木村の視線はそれを帳消しにするようにあらぬ方向にむかっていった。

振り返ると、さきほどの女性が白い包みを手にしてミキオの背後に立っていた。

「よかつたら、これどうぞ」

そう言つて、女性は包みを木村に手渡した。

ミキオの目にそれはパンのように映った。包の内側から、その生地がかすかに透けて見えていたからだ。

でも、どうしてパンなんだろう。ミキオは不思議でならなかった。もっとも、頂戴した木村のほうは素直に彼女にむかい、こうこたえたのだ。

「あ、あ、あ、ありがとう」

第13話「ケーキのマーチ」

そのケーキ屋がトモ子にとって最後のケーキ屋となるはずだった。中央線の車窓に映った街灯りに、イヤホンから聞こえる馴染みのメロディーをかさねながら、彼女はそう誓い、阿佐ヶ谷駅のプラットフォームへ降りたはずだった。

しかし、実際にはその夜から、先がギザギザになったトモ子のケーキ専用の銀スプーンは、いつそう頻度を増して使われはじめたのだ。それもごく限定的に。まるで最後のスイーツと乙女の契りでも交わしたかのごとく。

『大黒屋』。トモ子が愛したケーキ屋の額に飾られた漆看板には、だいぶクスミはじめてはいるが、あきらかに墨の筆文字でそう書かれていた。

洋菓子店としてはおよそあり得ない名前に外見だった。トモ子はずっとあとになって、その名付け親が店主の実の父であったことを知る。もつとも、父親の代には、そこは駄菓子屋であつたらしい。売り物を変えても、店の看板は変えないというのが、跡取りへの条件だったのだ。

元駄菓子屋は、街のクレープ屋と見間違えそうなくらいに小さな店だった。それは『グーグルアース』の高解像度でもとても確認できないくらいだが、トモ子にとって運が悪かつたのは、人工衛星からは確認できない『大黒屋』が、地上から見れば、彼女の下宿先となる岩手出身の女子大生専用の県庁寮と阿佐ヶ谷駅との、ちょうど中間地点にあつたということだった。

いつもなら、どんな天気予報士よりも春のおとずれをはやく知る花粉症患者のごとく、目には見えないケーキ屋の存在を鼻先で感じることのできるトモ子であつたが、さすがに衛星写真や県職員からもらった簡単な地図からは、それを感知することはできなかった。

彼女は毎日、回り道をして駅まで通っていた。トモ子は世にも哀れな、あるいはまた、ダイエツト中のご婦人方に見れば羨ましい限りの、『ケーキアレルギー』を患った、まったく希有な女子大生であったのだ。

つい最近まで。

小学校の給食でされたショートケーキを食べて以来、およそ十年、ケーキと名の付くものは一切口に入れないばかりか、鬼門のようにならぬに近づくことすらなかったトモ子のもとに、天の啓示か、あるいは小悪魔の囁きがとどけられたのは、大学二年になったばかりの、ある夜の出来事が発端だった。

いいや、厳密に言ったなら、はたしてそれが諸々の発端であったかどうかについては、それこそ過去から未来まで見通せる天使か悪魔にでもたずねてみなければわからないところではあるのだが、その夜、サークル帰りの中央線の車窓から、悪夢の形をした二つのシルエツトを、彼女が目撃したのはたしかな事実だった。

まったりとした晩春の夜霧が沿線の街並みを深く包み込んでいた。家々の窓明かりが精霊流しの提灯のように、ぼんやりといくつも浮かんで流れてゆくのが見えた。べつに遅遅の花見帰りでもないのに、トモ子はまるで甘酒に酔って夢をみているようなノボせた気分であった。

唐突に電車の扉が開いた。霧の中に駅のホームが突然造りだされたいにそこにあつた。

「あ、もう吉祥寺。次の次の次がいよいよ私の阿佐ヶ谷です、先輩」

トモ子は現実と虚構の入り混じったセリフを妄想の舞台で吐いていた。現実の車内では一人吊革を握っているのだが、妄想上の車中では、憧れの三年生部員と肩を並べ、来るべき夜にそなえてシユミレーションをおこなっている真つ最中であつたのだ。

「でも、どうしよう。私のマンション、女子大生専用なんです。あ、先輩、もしかして、女装得意ですか？」

たとえそれが妄想ではあっても、トモ子のセリフにはそれなりの根拠があった。先輩は変態ではなかった。二人は大学内の演劇サークルに所属していたのだ。彼女が先輩と呼んでいる男子学生は、野崎といい、サークルの部長を務めていた。トモ子の妄想の中で、二人はサークル活動の帰りに演劇論で盛り上がり、急遽その延長活動を彼女の住んでいる女子寮でおこなおうと話が決まった、という設定であった。

その日、実際のサークルのミーティングでは、秋の学園祭で発表する予定の演目が話し合われた。入部したての新入生もまじえ、総勢四十名ほどの部員たちが狭いゼミ室に一同に集まり、まるで政変騒ぎに駆けつけた新聞記者のように、蛍光灯の明かりがこぼれる暗い廊下にまでいくつもその影帽子をのばしていた。

彼ら血気盛んな芸術家たちは、それぞれ一つずつ、自分が上演したいと思う劇名を好き勝手にあげていった。その様はおよそ若き夢想家たちの名に恥じないもので、チヨークでいちいち黒板に書きだされていった演目には、チエーホフの高名な現代劇のすぐ横に、『ヤッターマン』の名が正々堂々と肩を並べているような有り様だった。

それからスッタモンダの議論が二時間ほどあって、中庭の芝生を春の夜霧が濡らしはじめたころ、どうにか多数決によって四つの最終候補にまでしぼられた。

その候補の中に自分の案がのこったにもかかわらず、そしてまた、お気に入りの部長がその場を仕切っていたにもかかわらず、ゼミ室の壁に背をつけたトモ子は、一連のことの推移をずっと不機嫌なドロンジヨみみたいに眺めていたのだった。（話しかけるんじゃないよ、このスカポントン）。

演目の最終的な決定は来週に持ち越され、お開きとなったサークルはそのまま飲み会へと流れてゆき、仲間たちが夜の繁華街へと消えたあとにも、トモ子は構内の中庭にのこって覚えたての煙草を一口にくわえていた。

本当なら先陣を切って居酒屋へとなだれこんでいきたいところなのだが、今夜それを実行するのは得策でないように思われた。芝生の上を漂う夜霧よろしく、彼女は己のテンションは低くたもつように努めていた。

ある意味、その夜のトモ子は勝ち組ではあった。しかし、だからこそ、喜んではいらなかった。調子に乗っているとロクなことはない。「おだてられたブタは木から落ちる」。それが、まだランドセルを背負った頃から身についている彼女のモットーだった。さすがに当時は煙草は口にはいかなかったけども。

トモ子は二本目に火を点けた。これを吸っているうちに居酒屋に顔をだすか、それともこのまま駅へいってしまうか、決めることにしよう。彼女は思った。

青い煙りが霧に混じって消えてゆくのが見えた。遠くからつたないトランペットの音が聞こえた。音楽サークルの新生が居残り練習しているのに違いない。

「へたくそ」

トモ子はだしぬけに声にだして言った。ふと、それを誰かに聞かれたような気がして辺りを見渡した。もしかしたら、心配した仲間の誰かが様子を見に戻ってきたのかも。

でも、誰もいはしなかった。校内に居ついている一匹の野良猫が、警戒するように茂みの陰から目を光らせているだけだった。

それはトモ子に、昔、実家に住みついてた一匹の野良猫を思い出させた。彼女はますます自分が子供に舞い戻っていくような気がした。ある朝、家の縁側から庭先にでていったきりもどってこなかった雄猫のブチ。もしかしたら、どこかで車にぶつかってしまった

のか、それとも、もっと住み心地の良い床暖房の家でもみつけたか。トモ子はザツクのポケットから携帯灰皿をとりだして煙草の火をもみ消した。このまま駅にむかうことを選択して、すっかり冷たくなったジーンズの尻をベンチから持ちあげた。

野良猫はいつの間にか霧の中に消えていた。

その時、男子部員たちは「オー」と唸り声をあげ、女子部員たちは「キヤーツ」と悲鳴に近い黄色い声をあげた。

黒板にその演目が書きだされると、どこそこの監督がドラフト会議で一番クジを引いたようななどよめきが湧いた。

それらがすべてミーティングでトモ子が発言した際におきた周囲の反応だった。彼女の放った小さな振動は、その日、学内の教室で一番大きな化学反応を引き起こしたようだった。

賛同の手をあげたのはほとんどが女子部員たちだった。迎えにはきてくれなかったけども、トモ子の当座の味方はやはり同性たちであつたのだ。

もっとも、賛同してくれたとはいえ、彼女たちが発案者の腹の奥底まで理解していたとはとうてい考えにくい。いいや、むしろ、それら女子部員たち一人一人が、トモ子と似たような目論みを抱いて清き一票を投じたのかも。

ミーティングも半ばを過ぎた頃、トモ子は赤い顔をしてこう言い放つたのだつた。

「『花とアリス』がいいと思います」

それはある意味、学園祭の演目に『ヤッターマン』を推すことより、よほどに恥ずかしい行為であつたかもしれない。『花とアリス』は、そんな一面のある作品だった。一人の男子高生を二人の女子高生が取り合うのだ。ただ、そうは言っても、そこはやはりタイトルどおり、あくまで少女コミック的に可憐に可愛いらしく。

そんなわけで、サークル帰りの中央線の車中、トモ子は彼女の可

愛い野心を可憐に実現すべく、予行練習をおこなっていたのだった。もちろん、トモ子の考える芝居の配役は、彼女自身が部長の野崎演じるところの男子高生と結ばれるヒロインその人であり、さらに言えば、劇中のカップルを演じる二人は、それが縁となって、嘘のように現実の世界でも結ばれるという筋書きであった。

それがトモ子の考えたシナリオなのだ。そして、それはトモ子の妄想の中で、演劇論の延長の末、野崎が彼女の下宿先を訪れるというシーンにまで発展していた。だが、そこは男子禁制の女子大生専用マンションだ。トモ子は、女装に代わるもつとよいアイデアはないものかしらん、と考えはじめた。

西荻窪駅のホームに人影は見えなかった。夜霧が開いたドアから乗客の代わりに入ってきた。まるで温泉郷に到着した夜行列車のような風情だった。霧は人々から視界を奪うのと同時に、それ自体が目新しい風景として、乗客たちの注目を集めていた。

女装にかわるアイデアが浮かんでこないトモ子は、ついにクロージェットに入れてある自分のワンピースを野崎に貸してやることにした。ついでに化粧道具とカツラも用意した。(やっぱり、胸パットも入れたほうがいいかしらん)。

トモ子の妄想モニターには、ニューハーフ風野崎部長の姿が、モニタージュ写真のように着々と写しだされつつあったが、その予想外のセクシーさに思わず腰が引けると、自分より女っぽくならないように、とつさに彼の口まわりに浅いヒゲあとを付け足すのだった。すると、それに腹を立てたか、モニタージュ野崎はトモ子の頭の中を抜けだし、一人勝手に歩きだすのだった。駅のプラットホームを、霧の幕に映しだされた動画のように、ぼんやりとした野崎の姿がスウィーツと彼女の目の前を横切つてゆく。

トモ子の頭は霧に包まれたように白くなった。だが、それもつぎの瞬間には真つ暗闇に。どこかで誰かが彼女のモットーを聞いていて、わざとイジワルをしているかのようだ。

調子に乗っていると口クなことにならない。おだてられたブタは木から滑り落ちる。ブチだつて二度と帰つてはこない。

もちろん、ホームを歩いていたのはモニタージュでも妄想でもなく、真正正銘の野崎本人だつた。ただ、トモ子がそれに気がついたのは、野崎の胸にパットが入っていなかったからではなく、彼の横を、華奢そつな女の影が寄り添うようにして一緒に歩いていたからだ。

それは同じ演劇サークルの紗英子だつた。学年も学部もトモ子と同じの。どうして二人が西荻窪にいるのか。二人は居酒屋の飲み会にでているはずなのに。(それに、部長が乗る電車は逆方向のはずでしょ。もしかして、引越した？私に内緒で)。

電車の扉が閉じた。二つの影は一つになってホームの階段に吸い込まれて消えた。

トモ子の一人芝居はほとんど暴力的にその幕を下ろされた。ただ、冷静に考えてみれば、それは当然の結果ではあつた。サークルのリーダーとサークル内で一番の美人がカップルになるのは。妄想癖のある田舎娘の出番など、ハナからどこにもなかつたわけだ。

にもかかわらず、想像の舞台で野崎とカップルを演じていたトモ子のシヨックは大きかつた。つぎのセリフどころか、どこをどうほつつき歩いたのかも思いだせないまま、気がついた時には下宿先のある阿佐ヶ谷の通りにたどり着いていた。

なにか懐かしい匂いが鼻先をくすぐつた。それがトモ子を正気にもどらせた。だが、それはもう一つの危険なサインのはずだつた。

深い影からその歴史を垣間見せる古城のように、『大黒屋』の漆看板が霧の中からその姿をあらわした。日頃あんなに気をつけていたのに、知らぬ間にケーキ屋の前に立っていたのだ。しかも、時刻はすでに夜の10時を回っているはずなのに、『大黒屋』はまだ営業をやめていない。つまり、トモ子の気付け薬となつたのは、店越

しに漂ってくる、十年來の宿敵であるスイーツの香りであったのだ。

阿佐ヶ谷の夜の路上で、トモ子とはつきに鼻と口を両手で覆い立ちつくした。事情のわからない通行人が見たなら、きつとうら若い乙女の酔っ払いとでも思っただろう。

しかし、彼女が堪えていたのはアルコールによる吐き気ではなく、もつとべつの種類によるものだった。たしかに、人々を喜ばせ、祝福の席を飾るといふ点では、アルコールと似通ったところがあつたけども。

トモ子は一方で鼻をつまみながら、もう一方で自分の唇をたしかめた。それがまだ原型をとどめ、人間らしくあるかどうか。

幸い唇はまだ無事だった。しかし、ここはとにかく、一刻もはやくこの場から離れることが先決だ。上唇と下唇が二つのタラコと化してしまふ前に。小学校の給食のあとに、クラスメートの男子から「タコ女」とアダ名をつけられる前に。

しかし、トモ子はその場に立ち尽くしたまま動こうとはしなかった。低く足元に立ち込めた霧が、なにやら今宵の彼女をアニメのヒロインのようにとても凜々しくみせていた。

その凜々しい足を動かす代わりに、なにを思ったか、トモ子は命綱の両手をダランとおろした。まるで、女子大生版『あしたのジヨ一』みたいだ。

急所ともいふべき唇がそのまま外気に触れていた。それでもトモ子は、『大黒屋』の看板を見上げると、意を決したように一歩一歩、その明かりのもとへと近づいていった。あたかも、悪党がたむろする酒場に、丸腰で一人乗り込もうとする女保安官のごとく。

それは運命にたいする、あるいは過去の自分にたいする、ささやかな反抗だったのだろうか。見事に失恋したあげく、今度は臆病者のようにオメオメと逃げだすなんて、今夜のトモ子にはとうてい我慢ならない仕打ちだったのかもしれない。（だいたい、私がなにを

したっていろいろの)。

まるでそこは、幽霊による幽霊のためのケーキ屋みたいだった。『大黒屋』には店の外にも中にも人影がなかった。狭いレジはもぬけの殻だった。

トモ子の鼻を指パツチンした、焼きたてのシュークリームみたいな甘く柔らかなケーキ屋特有の香りは、開いたレジ越しの小窓からとどいていた。けれども、その真下のショーケースに飾られている商品は、普通の店にあるどんなケーキとも違って見えた。

ガラスの中に、ボーリング玉みたいな球体が並んでいた。¥995と、ケーキの値段にしてはずいぶん中途半端な値段がついている。トモ子が連想したのはアニメの『ドラゴンボール』にでてくる、テカテカしたあのドラゴンボールだった。数もちょうど上下の棚にわかれて七つある。ただ、色はオレンジじゃなくて、どれも水晶玉みたいな無色透明だ。たぶんゼリーでできているのだろう、閉じ込められた空気の小さな粒が、店の照明に反射して、中で星のようにキラキラ瞬いている。

そして、普通のサイズよりも一まわりほど小さなショートケーキやモンブランが、ワインボトルに収まった船のミニチュア模型みたいに、それぞれ一つずつ、星々に囲まれながらまるいゼリーの真ん中に、まるで宇宙に誕生した小さな家のように浮かんでいた。

トモ子がケーキを見て、いいやケーキに限らずとも、食べ物を見て可愛いと思ったのは、これがはじめての経験だった。

彼女は子供みたいに球体の中をのぞきこんだ。だが、そこに彼女が見たのは、生まれたばかりの小さなケーキの赤ちゃんではなくて、歪んだ自分の唇だった。

彼女は傷口に触れるよう慎重に指を口元にあてた。しかし、今さら慌てフタめいてもしかたがない。こうなったらアレルギーが引くまでしばらくマスク姿でやり過ごすしかない。経験上、それは分か

っていた。

けれど、そこにタラコはなかったのだ。彼女の指先がとらえた感触は、大袈裟に例えても、縦に切り身を入れたウィンナーソーセージのその切り身ぐらいのものだった。つまりそれは、彼女の唇に、スイーツの香りによるアレルギーがなんら発症していないことを意味している。球体のゼリーに映っていた「タコ女」は、その曲面によつて作りだされたトリックだったのだ。

トモ子は俄然立ちあがった。そして、開いた小窓に顔をむけると、そこから店中の空気を占有すべく、限界のかぎり両鼻を開いておよそ十年振りとなる香りを吸い込んだ。

カラーリングが気に入ってバイト代から購入したニューバランスのスニーカーは、ほどよいフィット感とクッションが効いていて、夜の通りを走るのもうつつけだった。そのデザインに一目惚れして即買いたしたノースフェイスのトレイラー用ザックもまた然り。

学校帰りではあったが、偶然にも、トモ子は街中を走るのに適した格好をしていた。そして実際、彼女は夜の街を走っていた。

いいや、もしかしたら、それは偶然の産物ではなかったのかもしれない。フラれたその夜にアレルギーが治つて、こうして息を切らせ疾走しているのは。もしか、天使か悪魔か、闇の奥から瞳を光らせたブチにならそれがわかるのかも。

ただ、トモ子自身には、どうして自分が走っているのか、あるいは走りだしたのか、ケーキ屋の甘い香りを嗅いでもアレルギーがあらわれなかったのと同様、その理由がわからないでいた。

それはある種の感情の高ぶりがなせる結果ではあった。哀しみと歡喜が一緒になって押しよせてきたような。しかしおそらくは、それだけではなかったはずだ。

トモ子は時間と競争しているかのようにだった。霧の向こうの月の満ち欠けと。やがて日の昇る地平線と。日付変更線と。これまで無駄にしてきた十年という歳月をとり戻し（やっぱり、あの医者はヤ

ブ医者だったんだわ！）、さらには、ライバルとなった紗英子に追いつくべく。これはそのための助走にすぎないのだ。

そうして彼女は、女子寮までつづく阿佐ヶ谷の夜霧を、その身でもって切り裂いていった。

トモ子の失われた十年をとり戻す作業は翌日からさっそく開始された。彼女の通っている大学は国立市にあつて、その文学部にトモ子は在籍していたけども、一限目の授業前から、教室の最後部座席を確保すると、机の上で、あるリスト作りにとりかかった。

そのリストは文学的な、あまりに文学的なものとは一切関係がなく、およそ国立から阿佐ヶ谷までのめばしいケーキ屋を網羅した一覧表であつた。

まるで、ある夜、唐突に若返つてしまった老婆のように、トモ子は人生をやり直す計画を、枕もとで一晩のうちに立てたのだ。いつまたもとの姿に舞い戻つてしまつかもしれないという不安を抱きつつ。

思えば、これまでのトモ子の人生は実に味気ないものだった。クリスマスや誕生日はいうにおよばず、謝恩会のような華やかな席上でさえ、マスクをしたマネキンのように振る舞わなければならなかったのだから。（きつと、私はマスク姿でウエディングケーキを入刀するはめになるんだわ。マスク姿の花嫁になるんだわ）。

おそらくは、そうした体験が彼女を演劇の舞台へと上がらせることになった要因にもなつていて、たしかにその場所であれば、彼女はマスクなしで数々の衣装も着飾れるのだ。

しかし、そのような意味合いでなら、もはやトモ子には他人を演じる必要はまったくなくなつたわけだった。さらに言えば、お手製のケーキ屋リストも。というのは、トモ子の頭の中には、同じようなリストがすでに完成されていて、もつともそれは味覚や食欲を満たすためのものではなくて、地雷を踏まないための防御策であつた。

そんなわけだから、早朝からの比較文学論と引き換えに作成されたりリストは、あつという間に一応の完成をみた。しかし、肝心なのはここからだ。ただの店名の羅列だけでは、これまでの防御策としての凡庸なリストアップとなら変わりがない。

光あれ。今回はそこにあらたなスポットライトがあてられる。星もあれ。グルメガイドよろしく、差別化され、評価が与えられる。

トモ子はそのために、ザックの中に教科書の代わり、できる限りの情報誌を詰め込んできたのだった。それを携帯電話と共に両手で駆使しながら、客員教授による講義を右から左へ拝聴しつつ、つい昨日までならば呪われたリストであったはずのものに、プリクラめいた星やカラフルなハート模様を飾っていたのだ。

そうして、トモ子のお気に入りリストは、午後の講義の途中には見事完成をみたのであった。

まるで高校の文化祭ではじめて舞台に立った時のような気分だった。数年前のその日、トモ子はクマの着ぐるみを身につけ、袖口で自分の出番がくるのを待っていたのだったが、その落ち着きのなさは、むしろ森のクマより、檻の中のチンパンジーを思わせるところが多々あった。

それから数年後、彼女は吉祥寺のケーキ屋の前でふたたび類人猿よろしく通りをせわしく行ったり来たりしていた。背中のザックのポケットに、マスクという名の用心棒を忍ばせながら。

トモ子が目をつけたのは、情報誌でも常連になりつつある、『カフェ・ボフェミア』という名の新しいスイーツの店だった。リストの評価は、星とハートマークがそれぞれ満点の5つ。ちなみに星は世間一般の、ハートはトモ子自身の個人的な評価を意味していた。

まるで最先端のブティックみたいな大きなウインドの中に、ウエディングめいた白いインテリアがならんでいた。その奥のガラスケースには、スイーツたちが、ちりばめた宝石のように輝いているの

が見える。

トモ子のお目当ては『チョコレートバナナモンブラン』だった。グラビアページの写真を見た瞬間に一目惚れしてしまったのだ。そのため、彼女は授業終わりのあと、サークルの部屋に顔をだすこともなく、できたてホヤホヤのお気に入りリスト片手に、いざ鎌倉へと快速電車で飛び乗って、この場所に駆け参じたのであった。

ただ、そうまでしたあとに、トモ子は店のドア前で怖じ気づいているのだった。彼女の目に、ガラス張りのおしゃれな店の外観は、今はむしろ冷たい要塞のように映り、入ってゆく客たちは、生まれも育ちもちがうセレブのように見え、自分はいえ、身も心もさらに檻の中の猿へと近づいてゆくような感覚をおぼえる始末。

時間は刻々と過ぎていった。吉祥寺駅に着いたときにはまだ西の空に残っていた日差しも今は絶え、通りの街灯が、めっきり増してきた帰宅途中の人々の影帽子を様々な建物に映しだしていた。

トモ子の観察では、ほとんどの通行人が真新しいスイーツの店を珍しそうに眺めてゆくような感じだった。そして、その内の数パーセントの人間が、必ずと言ってよいほど、店内へと吸い込まれてゆく。そうこうしている間にも、トモ子の情報元ともなった雑誌を小脇にはさんだ女子大生と思わしき集団が、やいのやいの言いながら店になだれこんでいった。

やっぱり、『大黒屋』にしとけばよかつたかしらん。

けっして華やかな外観ばかりに惹かれたわけではなかつたけれど、やはりある意味、情報誌に踊らされた感もある自分の行動を、トモ子は後悔しはじめていた。しかし、このまま路上で行く当てのない猿を演じていても、目的のバナナが、いや『チョコレートバナナモンブラン』が売り切れてしまうのは目に見えているし、もしそうなら、それはそれでやはり面白くない。

いよいよ混雑の極みに達した店内では、入ってくる客とでてゆく

客、席を待つ客とテイクアウトの商品を選ぶ客、そのそれぞれが入り乱れ、まるでバーゲン会場のような様相をみせはじめていた。

それを眺めながら、たしかにオープンしたてということはあるだろうけど、あの店にはなにか根本的なところで、客の流れをスムーズに保つことに、どこか構造的、あるいは人為的な欠陥があるのじやないかしらん、とトモ子は思ったりもした。

しかし、これ幸い。どさくさに紛れるよう、人混みの店内に彼女は突入した。もはやバーゲン会場と化した店に、猿もセレブも関係なからうと。

萬寿えり子、41歳。子供のころから小太り気味の彼女が、名前はいいとして、自分の名字を変えたいと思ったのは、これまでの人生の中で一度や二度のことではなかった。

そして、結婚という手段をのぞいても、彼女にはそうするチャンスがなくて実際に存在しえた。というのは、たとえ世間にはその存在を認知されていなくとも、彼女は女優業を営んでおり、この業界には芸名という慣習がある。文字通り、彼女は好きな名字を自分に授けることができたはずだった。

だが、えり子が敢えてそれを実行にうつさなかったのは、生まれながらの腐れ縁というよりは、当時の劇団仲間たちから同じような忠告をいくつもうけていたためだった。

仲間たちは口をそろえてこう言った。「芸名？もとのままの方がいいでしょ。だってインパクトあるじゃない」

えり子はその忠告に従ったわけだが、これまでのところ、というのは大学を卒業して20年あまり、インパクトある彼女の名字はめばしい成果をまだあげていない。

学生時代からの演劇仲間で、いまま芝居をつづけている人間はもういない。えり子は自分の劇団を主宰しているけれど、台所事情は

つねに火の車で、いい歳をしながら、親の援助をつけ、どうにかやり繰りしている始末。

そんな彼女が、あらたな収入源として目をつけたのが執筆業であり、簡単なエッセイのほか、編集者と目下打ち合わせを重ねているあらたな企画が、その名も『女優ダイエット』という流行のダイエット本であった。

それは複式呼吸による発声法によって、お腹と顔のたるみを改善するという本になる予定で、ダイエットをおこないなから演技の勉強も可能という、世間に溢れるようにいる女優志望の乙女たちの、そのバイブルとも成りえる内容ではあるのだが、執筆者であるえり子の女優としての知名度にくわえ、さらに問題なのが、彼女自身まったく痩せていないということだった。

そんなわけで、自前の『女優ダイエット』はそつちのけに、えり子は「蒟蒻ダイエット」や「バナナダイエット」など、巷で話題のダイエット法を日々これ実践している毎日であった。

劇団の次期公演にむけ、あらたな芝居の台本を自宅で執筆している時だった。蒟蒻にも飽き、バナナにも飽き、なにか腹にたまる脂っこいものが食べたいと、店屋モンをとろつかどうするか真剣に悩んでいる時だった。一通のメールが携帯電話に着信した。

それは、えり子が顧問をつとめ、彼女自身そのOGでもある、大学の演劇サークルからのものだった。発信者名は部長の野崎になっている。

リーダーシップがあり、性格も素直で、なおかつ男前でもあるこの男子学生を、えり子は密かに自分の劇団の花形として引き抜きたいと思っていた。けれど、本人はあくまで芝居は学生生活の一環と考え、将来はマスコミ関連の就職を希望しているようだ。

まあそれも致し方ない。なにしろ、座長本人がやっと生活できるぐらいの収入しかない状況なのだから。将来有望な若者がわざわざ進んで貧乏クジを引くわけがない。

しかし、それでも、えり子はまだあきらめたというわけではなかった。もし、『女優ダイエツト』がベストセラーになれば、この悪しき環境もきつと変えられる、そんなふうと考えていたのだ。

メールは秋の学園祭に公演される演目に関するもので、「部員たちの話し合いによって『花とアリス』の舞台化に決まりましたが、いかがでしょうか？」といった内容だった。

はて、『花とアリス』？どんな作品だったか。観たような、観てないような……。

えり子はパソコンを使って調べ、ようやく内容を思い出した。それでも、細かなシーンまでは思い浮かんでこない。印象にのこっているのは落語のシーンだ。高校の落研に入っている男子に恋する女の子の映画だった。じゅげむじゅげむ……。

それから、バレエのシーン。学校では落研、プライベートではバレリーナ。面白い組み合わせだ。映画だけじゃなく、舞台でも意外とあつかもしれない。

でも、落語はいいとして、バレエはどうしよう。私に演出できるものかしらん。このデブのオバサンに……フム……バレエ………バレリーナ………デブ………あら、ひょっとして、これって使えるかも。やっぱ天才だわ、私って。

その時、えり子の頭に浮かんだアイデアは、およそ舞台の演出とはかけ離れたものだった。いわんや、『花とアリス』とも。しかし、確実に彼女の肉体的、精神的負担は軽減できそうだった。

えり子はやつと思いついたのだ。なにも、自分がダイエツトする必要はどこにもない。もっと若い、言わば『女優ダイエツト』の購買層と重なる女の子にそれを実践してもらったほうがずっと効果的であるはずだ、と。そして、えり子には、それを実際においてほしい若い女の子たちがいる。サークルの女子大生たちに頼めばいいのだ。

急に視界が開けてゆくような思いがした。まるで長い闘病生活を
終え、やっと退院の日をむかえたような。

えり子はさっそく携帯電話をつかむと、野崎に返信メールを打つ
よりも早く、近所の定食屋に電話をかけた。そして、カツ丼定食を
セットで注文した。

サークルの顧問が久しぶりの肉の味に舌鼓をうちながら、若干の
うしろめたさを感じていたその日、岩手出身の女子大生専用マンシ
ヨンの一室では、トモ子が、実家から届けられた荷物のヒモをほど
いていた。

ダンボールの扉の中で、田舎の特産物と箱を二つに分けていたの
は、細長い黒いハードケースで、特産物の方は親心だが、そちらの
方はわざわざトモ子から言って送ってもらった品だった。

高校の入学祝いに祖父が買ってくれた黄金色したトランプペット。
ブラスバンド部の高校生が鳴らすには、少々値の張る贅沢品だった
が、祖父にとって、可愛い孫にはそれぐらいの価値が十分あったわ
けだ。

しかし、実際のところ、その可愛い孫はブラスバンド部を半年で
辞めてしまったのだった。飽きたわけでも、練習についていけな
かったわけでもなく、ただ単に顧問の教師との相性の悪さから。

早朝の職員室の机に退部届を置いたトモ子は、昼休みには、第二
志望であった演劇部の入部手続きをすませていた次第。

そんなトモ子が、ふたたびトランプペットをその手にしようとい
うのには、べつに居残り練習をしているキャンパスの新生に、お手
本をみせてやるつもりでは毛頭なく、この際、金目の物は売り払っ
てしまおうという、祖父が聞いたら寝込んでしまいそうな悪魔的な
魂胆からだった。

しかも、彼女はその金を、巷のあらゆるケーキ屋の人気メニュー
を制覇するための軍資金にあてようというのだ。

そんなこととはつゆ知らず、たぶん田舎の祖父は、古きニューヨーク音楽の良さを、孫が再発見してくれたものと勘違いして喜んでいのに違いなく、トモ子にしてもそれはわかっていることではあるのだが、それでは彼女に孫としての罪悪感があったかと問われれば、それはまったくないというのが、率直な答えであった。

それというのも、ケーキを食べられないトモ子を誰よりも不憫がつっていたのは、ずっと昔から祖父自身であったのだし、だから孫の立場になってみれば、今度の休みに帰省した際に、トランペットを吹くかわりにケーキを食べている姿を見せてあげればOK、という理屈になるのだ。(それに、実家の押し入れを開ければ、まだポケットトランペットとコルネットだってあるんだし)。

遙かニューヨーク音楽にとってかわろうとしているのは、失われた淡い恋にとってかわろうとしているのは、懐かしい濃厚なスイーツの味だった。

吉祥寺のセレブなバーゲン以来、ケーキが、クリームが、タルトが、トモ子の生活の最優先事項になっていた。

バイトは休み、サークル活動にも顔もださず、なけなしの貯金を切り崩して、ついには失恋の痛手さえ忘れ、夕飯を抜いては高カロリー食品を頬ばりつづけた。中央線沿線のめばしい店を制覇し、休日ともなればホテルのケーキバイキングの列に嬉々として駆けつける。ケーキアレルギーを脱したトモ子は、あたかも真逆のケーキマニアになりつつあるようだった。

マニアと呼ぶからには、世間の常識などにとらわれてはいられない。金に糸目はつけず、色恋などはもつてのほか。すべての神経が一つのカタルシスへと集中されなければならない。

しかし、そんな、ある意味、世捨て人のケーキ仙人化していたトモ子の生活は、幸いなことに長くはつづかなかった。トモ子自身も気がついていなかっただろう、その精神的、さらには肉体的な危機

的狀況。偶然にも、そこから彼女を救いだしてしてくれたのは、誰であろう、いわば目下の状況をつくりだした元凶の一人と言っても過言ではない、紗英子であった。

「トモ子？」

「紗英子？」

二人は大学内の図書館で顔をあわせた。同じ学部で学び、同じサークルに属し、同じ男に惚れながら、彼女たちはお互いの鼻先にクエッションマークを投げかけずにはいらなかった。紗英子にとっては、しばらくぶりに見た級友の変貌した容姿ゆえに。トモ子にとっては、彼女自身の世捨て人的な生活のために。

サークル仲間の風変わりなアレルギーを記憶していた紗英子は、図書館の机に見開き状態で積み重ねられた情報誌の写真に目をおとし、それを不思議にも思ったが、あえてふれず、サークル活動の近況をトモ子に伝えただけだった。

もっとも、紗英子の話には、個人的な部外活動の情報は盛りこまれてはいなかった。本当のところ、トモ子にはそれが一番知りたいところではあったのだけだ。

ライバル本人を目の前に行っていたということもあるが、紗英子の助言に、消えかけていたトモ子の恋の野望はふたたび霧の奥からその姿をあらわしたようだった。学園祭の演目が決まり、この日、顧問の萬寿えり子が来校することを聞くと、情報誌の山を閉じたトモ子は、紗英子が図書館をでていくのを見計らって、ある戦略を練りはじめた。

もちろん、それは学園祭のヒロイン役を手に入れるためのものだった。演目の発案者はトモ子自身なのだから、自分にはそのヒロインを演じる資格が充分にあるはずだと、信じて疑わなかったのだ。

「トモちゃん、あなた最近太ったんじゃない？」

えり子はサークルの学生たちを、男女問わず「ちゃん」付けで呼

ぶ。それは、顧問と部員たちとの距離感を狭めるのに役立つ以上に、メディアに取り上げられることの滅多にないえり子が、確かに業界の人間であることを、あらためて学生たちに印象づけるのに役に立っていた。

もつとも、トモ子が萬寿から「トモちゃん」と呼ばれるたびに思いだすのは、業界とは縁もゆかりもない、親戚のおばさんたちの丸っこい体型ではあった。しかしこの日、顧問の中年太りの身体には、それとはべつの説得力があった。なにしろ、そのデブのおばさんの口から、致命的なダメだしを宣告されてしまったのだから。

二人は学園紛争の時代から大学内にある、山小屋を彷彿とさせる古い喫茶店の席いた。そこは新築工事をかさねる構内の中で、えり子が学生時代にもどれる数少ない思い出の場所であったのだが、サークルがはじまるまでのしばらくの時間、顧問がそこで過ごすのを習慣として、心を心得ていたトモ子は、他の部員たちの目を盗んであえて潜入してきたのだった。

えり子はアエスbの黒いバッグから、A4サイズ用紙の束をとりだし、テーブルに置いた。

トモ子はてっきり学園祭用の芝居の台本だとばかり思った。ちょうど萬寿に、自分を次の芝居のヒロイン役に抜擢してくれませんか、頼み込んだばかりだったのだ。

しかし、用紙の表を見れば、そこには『花とアリス』ではなく、なぜだか『女優ダイエツト』というふう印刷されている。

「トモちゃん、『花とアリス』には、たしかバレエシーンがあったわよね」

「は、はい。あります」

「あなた、その体で、バレエ衣装着るつもり？ダメよ。だって、それでバレリーナやったら、まるっきりコントになっちゃうもん」

「コント？」

「そうよ。コントよ。そのお腹じゃ、ね」

「じゃ、どつすれば……」

「だからさ、コレよ。コレ」

そう言って、えり子は謎のタイトルを指さしたのだった。

【ああ、ロミオ、ロミオ、どうしてあなたはロミオなの？

どうか家名をお捨てになつて。

それができないのなら、どうか私を愛すると誓ってちょうだい。

そうすれば私は今宵かぎりキャピュレットの家名を捨ててみせま
すわ

……(略)……

でも、いったい名前がなんだというの。

私たちが薔薇と呼んでいる花、その名前が変わっても、薫りにち
がいはないはず……】

16世紀のイギリスの劇作家シェイクスピアが書いた『ロミオとジ
ュリエット』から。映画やドラマばかりでなく、テレビのCMなど
でもたびたび引用される有名なバルコニーのシーンです。はじめは
お腹に手をあてて、ゆっくりと一語一語、歌うように発声しましよ
う。複式呼吸がまだ上手にできない方は、仰向けになつて、お腹の
上にタウンページなど厚手の本のせて発声してみるのもいいでしょ
う。ところで皆さんは、この有名な『ロミオとジュリエット』に原
典があるのをご存知ですか？そう、『ロミオとジュリエット』はシ
ェイクスピアの純粋なオリジナル作品ではないのです。つまり今風
に言つところのパクリ……

これは立派な詐欺じゃないのかしらん。

帰りの中央線の車中で、女性ゴシップ誌の中吊り広告を見上げな
がら、トモ子はそれ以上の胡散臭さを、両手に開いた『女優ダイエ
ット』のページから感じとっていた。

その紙面には、芸能人の離婚スクープのかわりに、シェイクスピ
アから『タイタニック』まで、これはこれで女性ウケしそうな舞台

や映画のヒロインのセリフが並んでいた。そしてその横には、これ自体が巷の諸解説のパクリであるところの著者自身による解説が。

こんなんでダイエットなんてできるの？トモ子の疑惑は確信へと急速に傾いていった。彼女は思った。だって、これぐらいのセリフを連呼して痩せるぐらいなら、世の中には、おデブちゃんを演じる役者はとつくにいなくなってるし、長台詞がお得意な名優たちなんて、それこそガリガリの骸骨になっちゃってるはず。実家のお爺ちゃんが楽しみにしてる『裸の大将』だってとつくに打ち切り。

そしてまた、トモ子がさらに眉をひそめるのは、ページのドサクサに紛れるように、世界的、歴史的な諸作品の中に、萬寿自身の戯曲までがちゃっかり挿入してあることだった。もちろんこれも本人による解説つきで。

この恥知らず。トモ子は舌打ちしながら、顧問からあずかった原稿をザツクのポケットにしまい込んだ。

ああ、『カフェ・ボフェミア』のおいしいモンブランが食べたい。トモ子には中央線沿線に見える店々の灯りが、すべて有名なケーキ店のそれに見えてくるのだった。（あれは『サンジェルマン・デ・プレ』、それからあつちのは『ミントンハウス』）。そして、本来ならば、きつと今ごろその灯りの一つから彼女自身がでてくる時間なのだ。満面の笑みをたたえて。

そう考えると、トモ子は当然の権利を剥奪されたような理不尽さにたいする怒りが、あるいはただ単に食い物の恨みが、こみあげてくるのだった。

久し振りに顔をだしたサークルでは、肝心の演目については何も話し合われず、ほとんど無益な雑談で終わった。おまけに部長の野崎と紗英子の二人は妙に他人行儀で、デレデレされるより、むしろそっちのほうが余計に腹が立つくらいだ。

しかも、顧問の萬寿には、帰り際に呼びつけられ、「ケーキ禁止令」を耳打ちされるしまつ。いったい、どこの誰が、よりによって

中年太りのおばさんからダイエットを強制されなければいけないのか。

しかし、そうは思っても、萬寿の言うことにも一理あるのはおそらく事実であった。

トモ子は電車の窓に映しだされたおのれの姿をとくと眺めた。

唇ばかりに気をとられ、体型のことなど頭になかった。ケーキ代のやり繰りは考えても、カロリー計算は思い浮かばなかった。そのしわ寄せが、如実に脂肪となってあらわれている。あるいは、唇がアレルギー反応を示すかわりに、今度は体全体が異常に反応しているのかもしれない。

どちらにしても、これではコメディになってしまう。トモ子自身もそれを認めるのにやぶさかでなかった。確かにダイエットが必要かもしれない。顧問の目は正しい。いいや、正しいばかりではない。なにしろ、もしもトモ子とそのダイエットに成功したあかつきには、萬寿は学園祭のヒロインの座を彼女に進呈しようと約束したのだから。

この優しさを、心づかいを、詐欺と形容するのもあんまりだ。せめて「大人の取引」ぐらいにとどめておくべきかもしれない。

学園祭までにはあと半年ちかくあった。それまで、毎月3キロ相当の減量がトモ子に与えられたノルマだった。もちろん、それは『女優ダイエット』によって。

しかし、いくらチャンスを与えてくれた顧問ではあっても、はい分かりましたと、早速「一人女優ごっこ」に毎日いそむほどトモ子もお目出たくはなかったし、萬寿を信頼してもいなかった。（だいたい、あの人の演出は、いつつどこかピントがズレてるし）。

はつきり効果のある、そして三日坊主で終わることのないダイエット法が必要だった。それでノルマが達成できたら、萬寿には『女優ダイエット』の成果だと嘘の報告をすればいい。きつと、自分の

このように喜ぶはずだ。だって、本当にそうなのだから。

けれども、ドラえもんがポケットからだすような、そんな便利なダイエット法がトモ子にはまったく思いつかなかった。元来、運動は嫌いなほうだし、ジョギングなんでもつてのほか。毎日のカロリー計算は面倒くさいし、ケーキを御法度にされたうえ、さらに食事制限なんてできる自信もない。インターネットで調べてみて、『女優ダイエット』といい勝負の情報しか得られなかった。

こうなったら、腹をくくって、『女優ダイエット』を実践してみようかしらん。少しは演技力の足しになってくれるかもしれないし。まるで、悪徳商法の誘惑にでも引き寄せられるように、トモ子の思考がネガとポジの逆転現象をみせはじめたころ、彼女は学びやの中庭で救いの調べを耳にした。

ニューオーリンズ、ニューオーリンズ。

それは、萬寿と大人の取引をした翌日のこと。午後の講義にむかう最中のことだった。

メロディーだけなら誰でも一度や二度は聞いたことがあるけれど、曲名はまったく知られていないアメリカの伝統音楽。けれども、トモ子は曲名どころか、そのコード進行まで言い当てることができた。彼女にとってまさに運命の夜、煙草のけむりをくゆらせながら耳にした、トランペットの音色だった。

それは校舎裏の、音楽サークルが集まった部室の方から鳴っていた。建物という建物に反響し、昼休みのキャンパスのにぎわいを物ともせず、全大学関係者にそのつたなさを御披露していた。たぶんあの夜と同じ新入生が吹いているのだらう、息のつまずくところのフレーズまでそっくりだ。

悪いけど、ちっとも上達してないんじゃない？トモ子は思った。それぐらいなら、私のほうがずっと上手いわよ、と。

じつはその時、トモ子は彼女自身に重大なヒントを与えていたの

だった。祖父が買ってくれたトランペットの、楽器店に売り払うよりも、もっと別の使い道を。

そのヒントから導きだされたトモ子の方程式は、彼女が午後の講義を早々に抜けだし、中央線経由で下宿先に直行するという行為によって体现された。トモ子は方程式の答えを手にすると、赤いジャージの上下に着替え、すっかり日の暮れた街にふたたび一人でていった。

数年振りの演奏がまさかこんな場所になるうとは夢にも思わなかった。しかし、都会の街中ではほかに適当な場所が思い浮かばないそれに、そもそもニューオーリンズの音楽にしても、その始まりは葬式パレードだとも言っし、そう考えるならば、トモ子が立っている場所も、あながち見当違いなものではないはずだった。

ただ、彼女の身の回りには、いろんな意味での緊張がはびこっているのは事実であった。トモ子は何度か深呼吸してみた。しかし、そうするたび、鼻穴から線香と菊の匂いが胸一杯に広がるのだ。

そこは阿佐ヶ谷付近で一番大きな寺だった。墓地だけでも都内の小学校のグラウンドぐらいの広さがある。トモ子はマウンド上の幽霊ピッチャーみたいに、スポットライトを浴びることなく、その中央部分に一人で立っていた。

顧問の萬寿に対抗して考えだしたトモ子のダイエット法、しかしそれは、結果として『女優ダイエット』によく似た構造をもつものになった。いや、ほとんど一緒だと言ってもいい。要はどちらも複式呼吸ということなのだ。

つまり、仏様やご先祖様の力を借りようというわけでも、座禅を組んで修行をはじめようというわけでもなく、トモ子はただ単に近所迷惑という点を考慮して墓地という場所を選んだのだった。

ただ、同じ欲に目のくらんだ間柄ではあっても、トモ子のそれが萬寿のそれと決定的に違っていたのは、そこに「女優」という二文

字が付かないことで、そのかわりに付くのが、ミュート呼ばれる金属製の消音器。それは主役の楽器に寄りそうようにハードケースの中に収まっているのだが、トモ子はまるでワイン瓶にコルクでもはめるみたいに、それをトラペットの先端に押し込んだ。（さあ、いくわよ、ブチ）。

iPodのイヤホンを耳にすると、墓場で懐かしいメロディーがよみがえった。大学から寮に帰ったあと、いらない「ポップを消去して、大急ぎでダウンロードしたマーチング風のニューオーリンズジャズだ。

トモ子はそのメロディーにあわせて、黄金色のマウスピースから春の息吹を吹き込んだ。消音器の付いたトランペットは大きな音はたてずに、ちょうど庭先で小猫が鳴いてるような声で歌った。昔、まだ中学生だったトモ子が、やはり体育のジャージ姿で、夕飯前に縁側に座って練習していたときと同じように。

近所の野良猫だったブチは、鼻がつまったようなこの金属音がなぜ好きだった。トモ子が縁側で吹いていると、どこからかあらわれて、暗い垣根から小さな顔をだすのだ。

もしかしたら、犬が救急車のサイレンに反応するように、猫は管楽器のある種の金属音に反応をしめすのかもしれない。そうでなければ、単に夕飯の匂いに惹かれてやってきていたのかも。どちらにしても、野良猫に似合わず、ブチは練習が終わるまで行儀良くトモ子のことを待っていた。まるで、猫語を操る不思議な女の子を、三日月の瞳で見上げるみたいに。

二時間ぶつ通しで吹きつづけたあと、ジャージ下のTシャツは汗だくで、ほつぺたは絞りきった雑巾みたいに疲労していた。けれど、あくまでそれは心地よい疲労感だった。イヤホンを耳にしながら楽器片手にパレードに参加していたみたい。

でも、もしかしたら『女優ダイエット』でも似たような効果はあ

つたのかもしれない。なにしろ、トモ子がネットで調べたところでは、世間には『カラオケ・ダイエット』なるものすら存在していて、日々それを実践している人々がいるらしいのだから。

しかしどちらにしても、カラオケはお金がかかるし、『女優ダイエット』を墓地で二時間つづけていたら、自転車を押したパトロール中の若い警官から職務質問されたかもしれない。いや、きつとされていたことだろう。そしてその時には、トモ子のためらうことなく顧問の萬寿の名前を密告していたはずだ。（全部、あの女のせいなんです、お巡りさん！）。

そんな情景を思い浮かべながらトランプペットをケースに仕舞っていると、なにやら背中に鋭い視線を感じてトモ子はうしろを振りかえった。

夜の墓地という場所柄ではあったが、彼女の背筋にラブコールを送っていたのは幽霊の類いではなく、裏切りという名の丸い顧問の影だった。萬寿が、強迫概念に苛まれた中年女が、はたしてサークルの生徒が言われたとおりに事を実行しているかどうか、夜の墓場まで偵察にきたのに違いない。

トモ子は思わず大声をあげた。ただそれは乙女の悲鳴ではなく、有名な戯曲の一説だった。彼女は萬寿の影を見るや、遅すぎる自己流『女優ダイエット』をはじめたのだ。

「おお、ロミオ、ロミオ！ どうしてあなたはロミオなの？」

丸い影はなんの反応もしめさなかった。それもそのはず、影の正体は萬寿でなく、饅頭顔に穏やかな微笑をたたえた地蔵さんだったのだ。

「チュッ」

トモ子は舌打ちしながらケースの扉をボタンと閉めた。そして、こんなことで動揺している自分に腹が立ち、そのはらいせに、どこかに密告すべきパトロール中の警官は本当にいないものかと、バッチのついた制服姿を墓地の周辺にキョロキョロ探しはじめるのだっ

た。

トモ子と紗英子は同じ学年の同じ学部で学んでいた。けれども、二人がサークルの時間外に学内で顔をあわせ言葉を交わすのは、家庭内離婚寸前の夫婦がお茶の間で笑顔を交わす確率のごとく、一年に数回あるかないかの珍事であり、その珍事がひと月のうちにつづけて起こったのは、それ自体が春の珍事であると言っても過言ではなかった。

「トモ子？」

「紗英子？」

二人はデジャブのように一週間前とまるで同じセリフを吐いた。ただ、場所は図書館ではなく、それぞれのクエツションマークの意味も前回とは違ったものだった。

つまり、紗英子のそれは、先週末までは別人のようにスリムに引き締まったトモ子の顔つきに驚いてでたものであり、対するトモ子は、どうして紗英子がそんな不思議そうに自分の顔を見つめているのか分からない、という意味でのそれであった。

二人は始業ベル前の、コンサートができそうなくらい広い講堂の席にいた。

疑惑の人差し指がトモ子の鼻先をさしていた。

その指は、ダイエットに成功しつつある彼女の、心と体の両方にむけられていた。紗英子はトモ子の目の奥をのぞきこむようにして言った。

「トモ子、それまさか、あなたも『女優ダイエット』？」

乙女の霹靂。どうしてその恥ずかしい言葉を紗英子が知っているのか。それは萬寿とトモ子だけの内輪の話であったはずなのに。しかも、「あなたも」とは？トモ子はどう言い返してよいかわからなかった。そもそも、実際には『女優ダイエット』はやっていないわけだし。

紗英子は広い教室で、女刑事みたいにトモ子の沈黙から真相を読みとろうとしているかのようだった。しかし、それが難しいと分かると、今度は容疑者の知らない裏事情を暴露して揺さぶりにかかるのだった。

「みんな、やってるのよ。ううん、やらされてるの、その嘘のダイエツト法。私以外のサークルの女子部員たちが、学園祭の演目を工サに、萬寿先生にそそのかされてね」

トモ子はもう驚かなかった。たしかにサークルのほかの女子部員が関わっていたことは知らなかったけども、それぐらいはいかにも萬寿が考えだしそうなことだからだ。それよりむしろ気になったのは、ダイエツト・キャンプの輪から紗英子だけが除外された理由のほうだ。

トモ子は目の前の女刑事に黙秘権を行使しつつ、クールな知能犯が優等生をよそおい、ザツクから教科書とノートをとりだした。そして授業の準備にとりかかるフリをしながら思考をめぐらせはじめた。彼女は思った。たしかに、もともとモデル体質の紗英子にダイエツトなんて必要ないかも。でも、それだけが彼女が外された理由なのかしらん。もしかしたら、あの萬寿、紗英子と野崎先輩がつき合ってること知ってるのかも。だから、紗英子にだけ声をかけなかった。部長である野崎に話が伝わることを恐れて……。

「もしかして本当になにも知らないの？」

刑事役に疲れたらしい紗英子が切りだした。トモ子は内心、自分の推理と演技力の確かさに自惚れながら小さくうなずいた。

すると、紗英子はサークル顧問の悪行の数々を熱っぽく語りはじめるのだった。誰かに話したくてウズウズしていた様子だった。もちろんトモ子はここでもなにも知らない素振りですべての様子だった。もちろんトモ子はここでもなにも知らない素振りですべての様子からよき理解者へと華麗に演じ分けてみせるのだった。

講義の担当教授は始業ベルが鳴ってもなかなかあらわれそうになかった。

「その『女優ダイエット』、いくらやっても効果がでないの。それで、このままじゃなにも役がもらえないんじゃないかって心配した部員の一人が、私に相談しにきたってわけ」

紗英子は得意そうに語った。効果なんてでるわけないじゃん、トモ子も負けずに内心得意げにそう思った。

「ゴメンね、最初疑って。この間会ったときよりずいぶん痩せて見えたから、早合点しちゃった。でも考えたら、本当に『女優ダイエット』なんかやってたら、逆に痩せるはずないもんね。なにか、運動とかはじめた？」

「べつに。ただ、甘いもの控えてるだけ」

「そう。でもさ、トモ子もこれってヒドい話だと思うでしょ？自分の本を売る目的で、部員である私たちを利用してるんだから。役をエサに、自分だけブクブク太って。断固抗議するべきよ。場合によっては、みんなで力を合わせてクビにしてやりましょうよ、あんなブタ女」

紗英子の鼻息は女闘士のように荒かった。しかし、目の前でその鼻息を感じているトモ子は、それとはまったくべつの解決法を考えていた。ダイエット中の知能犯はただ冷静に口を開いた。

「紗英子、部長の野崎先輩とつき合ってるでしょ。そっちはどうなるの？たしか、サークル内の恋愛は禁止されてなかったっけ？」

女闘士の鼻息はいっぺんにおさまった。

べつにトモ子としても、今さらクビが生えたような大昔のサークルの決まり事を持ちだす気は毛頭なかった。でも、どんなにアコギであろうが、萬寿が顧問をクビになってしまっただけはこれまでの苦労がすべて水の泡となってしまうし、もしそうなれば、どんな演目になったとしても、美人で人気者の紗英子がヒロインの座をつかむのは目に見えている。

それに、いかに正論ではあっても、紗英子の正義感が、リーダー

シップが、やはりトモ子には鼻についた。多分にそれは野崎から感化されたものだろうし、その後ろ盾があつてのものだろうから。彼女には最初から勝利を確信してものを言っているフシがあるのだ。

そんなわけで、トモ子としては、その鼻先を折ることまではしなくとも、せめて指パツチンしてやるうぐらいの気持ちはあつた。そうして、野崎云々の件が口にでたのだ。

「萬寿先生もきつといろいろ大変なのよ。悪気なんてないんじゃない？だからさ、今回だけは穩便にすませてあげようよ」

もはやトモ子には恥も外聞もなかった。ピノキオだったら鼻が伸びすぎて折れ曲がつてしまいそうなことを平気で言つてのけた。

ただ、それでもまだ紗英子は納得してないようだった。で、トモ子はとつておきのダメだしをした。

「二人のために、ね？」

「お手柄、大手柄だわよ、トモちゃん」

萬寿のはしゃぐ声が携帯電話を揺らしていた。

「ここだけの話、あたしも前々から、あの紗英ちゃんにはひとこと言つてやりたかつたのよ。そりゃ、たしかにちよつとは可愛いわよ。でもね、舞台で必要なのは個性。それに人柄。ワガママなお人形さんじゃないのよ。偉そうなこと言つて、舞台に私情を持ち込んだらダメよ。とくに男女関係はダメ。そりゃ、ほかの女の子たちにはちよつと悪いことしちゃつたかもしれないけど、バレエ衣装着るんだつたらダイエットはぜつたいたい必要でしょ？ぜんぜん、あたし悪くないわよ、ね、トモちゃん」

「あ、はい」

「でさ、トモちゃん、何キロ痩せたの？」

「5キロぐらいです」

「二週間で5キロ！最高よ、トモちゃん、最高。やつぱり『女優ダイエット』の成果よね？」

「学校から帰つて、毎日近所のお寺でやっています」

「だからさ、ちゃんとやれば結果がでるのよ。それをあのお人形ちゃん、インチキとか言ってるの。本当、どっちがインチキなのよ。もうぜったい役なんてあげないわよ。トモちゃんはその調子でバンバン痩せてよ。もうヒロインはあなたに決まりだから」

「いったい何人ヒロインがいるんだか。あなたも少しは痩せなさいよ。トモ子はまだあまりに楽天的で節操がない顧問に半ば呆れ、半ば感心しながら携帯を切った。

夜の墓地にいた。『女優ダイエツト』の代わりに日課となったトランプを吹いている途中で携帯電話のバイブ機能が作動した。本当はもう少し吹いていくつもりだったけども、自分のモットーと相反する調子に乗り過ぎた顧問の声を聞いて気持ちがかわった。それに、今夜のトモ子には、墓参りのほかにも行くべき場所があったのだ。

トランプをケースを抱えて墓石の間を通り過ぎ、白い砂利がひきつめられた寺の境内にでると、墓地の暗がりから猫の鳴き声が聞こえた。(ブチ?)。その猫にこたえるように、すぐにべつの場所でもう一匹が。(ブチなの?)。そして、さらにまた一匹。(帰ってきたの?)。

仄かな春の月夜に誘われて集まってきたのか、ゲームのモグラみたいに、暗い所から次々と猫たちの声のノロシがあがった。いつの間にか墓地は猫たちの夜の合唱の場となつて、おごそかな境内は、まるでカエルたちが暮らす池の畔のように、姿の見えない賑やかさにつつまれた。

もしかしたら、この寺は阿佐ヶ谷周辺の野良猫たちの社交場になっていたのかもしれない。そして、トモ子が演奏している間にも、ああして鳴いていたのかも。トモ子はずっとイヤホーンをしていて気づかなかつた。

あるいは東京にも、かつてのブチのように、管楽器の好きな猫たちがいて、彼女にもっと吹いてくれとせがんでいるのだろうか。カ

エルだったら気持ち悪いけど、猫だったら何匹いても平気だ。
また明日ね。トモ子は彼らに約束して寺の門をくぐった。

それは自分へのささやかなプレゼントであり、同時に再検証でもあったのかもしれない。墓地を去ったあと、トモ子はふたたび夜の『大黒屋』の前に立っていた。

ダイエツトは効果がでている。紗英子はなにやら不気味な沈黙をつづけているけども、サークル内のゴタゴタもなんとかクリアできそう。ここらですと我慢してきたスイーツを口にしてもいい頃ではある。ただし、今夜を最後に。

美味しいケーキ屋ならいくらでもあるけども、やはり最後となればここをおいてほかにない。トモ子はそう思っていた。すべてはこの場所からはじまったと彼女は考えている。だからこそ、どんなにケーキ屋詣でつづけても、この店だけはあえて避けてきたのだ。

もしかしたら、おとぎ話の林檎のように、あの球体ゼリーの中に閉じ込められた小さなケーキを食べたら、魔法がとけて、すべてが霧の中に吸い込まれ消えてしまうのかもしれない。他人には馬鹿げている、トモ子には切実な可能性を、彼女は思い描いた。唇は医者が見た萬寿は「ダメよ、トモちゃん。それじゃコメディになっちゃう」と見捨てるように言うだろう。それで、ヒロインの座はあっさり紗英子のもとへと転がりこむ。おまけに、ついに書店に並んだ『女優ダイエツト』の表紙には、ニツコリ微笑でポーズをとる、もとからダイエツトの必要ないスリムな紗英子の姿が。

ま、表紙の席は喜んで進呈してあげる。人生の汚点になりかねないから。トモ子はそこだけはなんなく了解することができた。

もしも、前に来た時みたいに店がもぬけの殻だったら、なにもなかったことにして、手ぶらで帰ろう。トモ子はそう決めていた。これは試練でなく、一つの運だめしのようなもの。確実な答えは得ら

れなくとも、そこからなにかしらのヒントが導かれればそれでいい。でも、答えはちゃんとでた。ただし、より大きな謎とセットになつて。しかもそれは、まったく予定外のニューオーリンズ風に音楽的で、おしゃべりな謎であつた。

「あれ、キミ、お寺の子？」

トモ子と同じ年ぐらいの青年は言つた。さつそく球体ケーキを注文しようとしていたトモ子はびっくりして頭を左右に振つた。

「でもさ、キミ、毎日お寺でラッパ吹いてるよね？」ユースクリーム・アイスクリーム』とか、誰も知らない古いジャズの曲ばかりさ」

トモ子の驚きは頂点に達したが、今度は頭を上下に振つた。

「ああ、そうか。ほかに練習場所がないんだね。僕もたまに大学で吹いてるんだ。あそこだったら、誰も文句言つてこないからね。もつとも今は僕、休学中の身なんだけど。夏休みのツーリングで事故つちやつてさ。それこそ、ボブ・ディランみたいに派手にやつちやつたんだ」

この青年こそ、トモ子にとってニューオーリンズ風に音楽的で、おしゃべりなクエツションマークとなる存在だつた。でも、彼にしてみれば、トモ子の存在の方こそ一つの答えであつたのかもしれない。それぐらい、彼は一方的に話しかけ、話しつづけた。まるで、めつたに人が来ることのない森の奥で営業しているケーキ屋みたい

に。
白いパティシエの制服を身にまとつた青年は『大黒屋』のカウンターに、トモ子は通りに、それぞれ立つていた。

この謎のケーキ屋青年に尋ねたいことは山ほどあつたけども（大学？それって、どこの？吹いてるって、なにを？トランプット？それとも、口笛？なんでわざわざ大学まで出向いて口笛吹くの？休学しながらケーキ作つてるのっておかしくない？ボブ・ディランって誰？ていうか、あなた誰？）、トモ子はただ、最初の予定どおりに

苺のショートケーキが浮かんだ球体ゼリーを指さして、「これ、ください」と言っただけだった。すると、パティシエ青年は言うのだ。「キミ、本当にうちのケーキ買うの？よしたほうがいいよ。うちの商品はよその店のとは違うんだ。ちょっと変わってるんだよ。作ってる本人が言うんだから間違いない」

なら、なんで売ってるのよ。トモ子はそう聞き返したかったけども、確かに変わってるということは頷けた。そもそも、なんであんな形をしているのか。お菓子というより、一種の芸術作品のつもりなのだろうか。それを客であるトモ子に勧めようとするのは、つまり、彼女には芸術的センスがないということ、暗に指摘しているのだろうか。それは、トモ子がお寺で、赤いジャージの上下で、誰も知らない古臭い曲ばかりをラップで吹いているためだろうか。その姿を、この青年パティシエはお寺のどこからか眺めていて、こっそり笑っていたのかもしれない。

トモ子はすっかり頭にきて、乱暴に言い放った。
「いいから、さっさと売ってよ」

その夜、原風景とも呼ぶべき『大黒屋』の球体ケーキを食べても、トモ子の唇にはなんの変化も起きなかった。そもそも、彼女はそんな不安はすでに忘れてしまってもいた。彼女のかつての心のさざ波は、突然の津波にすっかり呑みこまれてしまっていたのだ。

そんなわけか、部屋にもどったトモ子は、船酔いしたみたいにケーキが入った白い箱をポンとテーブルの上に無造作に落としたのだった。

でも、それは実験の一つだった。与えた衝撃によって、ケーキの球体が、芸術作品が、どう変形したか見定めるための。まるで、岩に叩きつけた壺の、その割れ方によって作物の収穫を占った古代人のように、トモ子はその実験から、いよいよ口に入れる寸前に謎の球体ケーキの正体を、あるいは成分を、探ろうとしたのだ。

しかし、銀スプーンとフォークを皿において箱の扉を開いてみる

と、ケーキはもとの丸い形をたもつたままだった。心臓を取りだすみたいに直接両手で持って皿に置き、よくよく眺めてみても、やっぱり小さな亀裂一つ入っていない。

すつごい歯ごたえのあるゼリーなのかも。トモ子は一瞬そう思いもしたが、途端にべつの考えが思い浮かんだ。

ううん。もしかしたら、ゼリーに見えるのは匂いのである樹脂で、中のショートケーキはデパートのレストランにあるみたいなフィギュアなのかも。甘いもの好きな人のための置物。それをあの男、気取っちゃって、変わってるとか言ったんだ。とすると、パティシエの格好もケーキ屋の看板も、全部シャレってわけ？ほんと、顧問といい、あのパティシエといい、自称芸術家って変人の集まり。なにを考えだすか想像もつかない。子供が間違っただけに口に入れたりしたらどう責任とるつもりなんだろう。

しかし、散々トランペットを吹いたあとで、無分別な子供よりよっぽど食い意地のはっていたトモ子は、分かってはいても念のためメロンのように丸々と皿にのった球体のでっぺんにスプーンのギザギザを立てずにはいられなかった。そして、スプーンはトモ子の予想とは裏腹に、手術のメスみたいにたやすく球体の内部に滑りこんでいったのだ。

トモ子はおっかなびっくり、すくった透明の物体を鼻で嗅いでみた。完熟した果物みたいな濃厚な甘い香りがした。口に入れてみた。美味しかった。

ほどなく、スプーンは、球体と彼女の口の間を止まることなく行き来しはじめた。

翌日、まだ校門の警備員が眠い目をこすっているような時間から、トモ子は大学の中庭で、煙草のけむりを一人くゆらせていた。昨晩は一睡もできなかった。でも、眠くはない。ただ、煙草の味だけがひどく苦かった。

空にのこった薄いすじ状の夜の雲が、ほんのり白く染まりながら、早起きな小鳥たちのさえずりを耳にしているかのような、そんな穏やかな朝だった。ただ、あいにくトモ子が聞きたいのは小鳥たちの歌ではなかった。

彼女はトランペットのファンファーレが鳴りだすのを待っているのだ。下手クソな、いつはじまるのか分かりもしないファンファーレを。あるいはそれは、一日中待っていたとしても、ウンともスンともいわないかもしれない。なにしろ、吹き手の男は下手クソなくせに、神出鬼没ときている。本来なら一女子大生などではなく、しかるべき国家機関か、シンジケートがマークしなければいけないような男なのだ。

けれども、トモ子の準備も万端だ。ザックには半日分の水に食料。それに、あらゆる授業をサボる覚悟だつてできている。おまけに、直接的にはなんの関係もないが、腕にしたG・S H O C Kには、世界の七つの海の代表的なダイビングスポットの時刻まで表示されるのだ。

しかし、晩春のキャンパスにファンファーレはついに響かなかつたし、G・S H O C Kの高機能は暇つぶしにもならなかった。代わりにトモ子は夜の墓場で、自らくすんだ音色のファンファーレを響かせることになった。もつとも、これもかの男をおびき寄せるための彼女流の罠の一つではあった。

演奏よりも辺りの気配に、トモ子は重きを置いた。ラッパ吹きというより、クラシックコンサートの指揮者のごとく、目と耳のどく限り、神経の網を張り巡らせるのだ。もしかしたら、墓石の影から男が、地蔵様のようにこちらを盗み見しているかもしれない。男はいたるところに身を潜めているはずだ。変装の名人なのだ。もちろん、地蔵様にだって化けられるだろう。若い警官のフリをして、パトロールを装いつつこちらをずっと観察しているかもしれない。あるいは、胸パットを入れた女子大生になりすまし、流暢な東北弁

と色気を操っては見事に管理人を丸め込み、今ごろトモ子の部屋で番茶をすすっているかもしれない。あるいはまたこれが可能性としては一番高いのだが、パティシエの格好をして、いかにもケーキ屋然としながらも、実はパンドラの箱を売りつけようか、売りつけまいか、しているのかもしれない。

結局のところ、キャンパス同様、夜の墓地にも男は姿をあらわさなかった。もしかしたらどこかに隠れていたのかもしれないが、トモ子にはその気配を感じることができなかった。それというのも、寺に集まった尻尾のついた聴衆たちの、その視線がずっと邪魔になつて仕方なかったのだ。

墓石の陰に、茂みの暗がりには、猫たちが身を潜めているのがトモ子には分かった。敵意はない。ただ、異国の街で暮らしはじめた移民の家族のように身を寄せあっている。

彼らは一様に行儀よく、静かにしていたけども、まるで甲斐性のない夫よりペットへの愛情を選んだご婦人のように、トモ子にはその光る三日月の瞳が気になるのだった。

猫たちはパレードに参加する権利を持っている。ニューオリンズ行きの夜行列車の、その乗車券を持っている。トモ子が彼らと交わした約束はそういうものだ。だから無下に追い払うことはできない。

トモ子は思う。これまで私の演奏に耳をかたむけてくれたのは、お爺ちゃんと猫だけだったし、たぶんこれかもそうなんだ、と。だから彼女は、男とパンドラの箱のことはひとまず忘れ、ダイエツトも棚上げし、ブチのあごを撫でてやるように、できるだけ優しくメロディーを紡いでいったのだ。

トモ子は最後の砦にたどり着いた。昨晚、球体ケーキを買ったときとほぼ同じ時刻に。『大黒屋』の店先に客の姿はなかったが、店内からこぼれる明かりに、ときに人影が映しだされるのが見てとれた。間違いなく男がいるのだ。

振り出しにもどつたみたいにトモ子の胸は高鳴った。吉祥寺の『カフェ・ボフェミア』の前で、さんざん通りを行ったり来たりした最初の夜のように。

けれど今夜、トモ子はケーキを買いにきたわけではない。昨日とは違うけれど、彼女はやはり答えを求めてやってきたのだ。彼女自身ではなく、純粹に商品に関しての。昨晚のふざけたケーキ、あれはいったいなんなのか、と。

もっともそれは、トモ子が一夜のうちに、今度は執念深く、おせつかいなクレイマーに豹変してしまったというわけでは決してなく、彼女が冷蔵庫の中に隠し持ったパンドラの箱、それはあり大抵の品質や安全性といった食に関するレベルを超越したところにあつたのだ。だからこそ、国家機関やシンジケートのお出ましとなる。

ただ、トモ子が頼りにできる最大の国家権力は、岩手の町役場で働く親戚の叔母さんであり、シンジケートに関しては、はっきりとしたその言葉の意味も分からない有り様だった。

そんなわけで、彼女はふたたび『大黒屋』に単身のりこむとにないなつた。

「いらつしゃいませ」

変なオジさんが言った。いや、じつは全然変ではないのだが、てつきり同じパティシエが店のカウンターに立っているものと思ひこんでいたトモ子にとって、その太く沈んだ声と、厚みのある顔はかなりインパクトのある違和感だった。

もしかしたら、これこそ変装がなせるワザなのだろうか。昨日は謎の学生、今日は変なオジさん。でも、どんなにオジさんパティシエのぜい肉を切り取ったとしても、そこからおしゃべりパティシエがでてくるようには見えなかった。

それに、ガラスケースに目を落としてみれば、そこには球体ケーキの姿は跡形もなく、コンビニでも買えそうなシュークリームやプリンのような、あり大抵のお菓子ばかりがすき間なくなっている。

しかも、その売れ残り状態から推測して、この店の経営が萬寿の運営する劇団とかなりいい勝負であることは、数字に弱いトモ子でも容易に察しがついた。

でも、もしかしたら、これこそ一種のカモフラージュなのかもしれない。昨晚とはまったく違う店を装っているのだ。お客様、どこそこのお店と勘違いなさつてませんか？などと。

しかし、そもそもなぜそんなことをしなければいけないのか。

「丸い透明のゼリーの中に、小さいショートケーキが入ってるんです」

「ふーん。そうですか」

「昨日、ここで買ったんです」
「なるほど」

夜の街角で繰り広げられるパティシエと客の会話は、被害者のいない幻の怪事件をめぐる探偵と目撃者のそのようにチグハグだった。

長年ケーキ屋稼業を営んできたせいも、あるいは最初からそれを売りにしているのか、どこかサンタクロースを彷彿とさせる穏やかな顔つきのオジさんパティシエは、しかし少々疲れ気味の声で、つぎにはお決まりのセリフを吐くだろう、トモ子はそう確信していた。曰わく、「どこかよそのお店と……」。

「でも、あいにく、昨日は休みでしてね」

「は？」

「お休み。ウチは毎週火曜が定休日なんです」

「え？」

季節はずれのサンタは不思議そうにトモ子の赤いジャージに目をやった。まるで、その色は私の色なんだよ、お嬢ちゃん。しかるべき季節がやってくればね、とでもいうように。でも、本当のところ、オジさんが見ていたのは、彼女が抱えたトランプットケースだった。トモ子はそのことにはまったく気がつかなかった。ただ、シーズン

オフのサンタが、お忍びで流行らないケーキ屋のパーティシエをしているというアイデアは、そう悪くはないと、あとになってから思うのだった。

火曜日。そう言われてみれば、はじめて『大黒屋』を訪れた夜も火曜日だったような気がする。いいや、サークル活動があつた日だから間違いなくそうだ。そしてあの夜、『大黒屋』はもぬけの殻だった。おしゃべりパーティシエもオジさんパーティシエもいなかった。幽霊による幽霊のためのケーキ屋みたいに。最初から誰もいなかったみたいに。

トモ子はトボトボと暗い夜道を寮にむかって帰っていった。今日一日の努力がすべて徒労となって彼女の足にまとわりつく。良かったことといったら、お寺の猫たちにトランペットを聴かせてあげられたことぐらいだ。猫たちは喜んでくれはず。たぶん。

寮にもどると、明かりもつけぬまま、トモ子は冷蔵庫の扉を開いた。潜水艇めいた光が、彼女のワンルームを深海のように仄かに映しだした。

トモ子は水槽の生き物を見つめるがごとく冷蔵庫を覗き見た。中には皿にのつた球体ケーキがあるだけ。それは、まるで実験室に保管された物体のような透明の円を描いていた。

世の中に完璧な球体は存在しないという。球体ケーキはその定説を過去のものとすべく、自ら完璧な曲線を作り上げようとしていた。トモ子が差し入れたスプーン跡はきれいに消えていた。口に入れたはずのゼリーはすでに補充が済まされていた。

白い冷気が霧のように頬をつたう。トモ子は冷蔵庫の前にペタンとしゃがみ込んで、子供が雨空を恨めしそうに眺めるみたいに、小さなショートケーキを包み込んだ厚いゼリーの層を見つめるのだった。

昨夜はとうとうショートケーキまでたどり着けなかった。すくっ

てもすくつても、あとからゼリーが、夏の雨雲みたいにニヨキニヨキせり上がってくるのだ。

そうとは知らず、トモ子は無邪気に食べつづけた。真夏の青空に不気味な黒い雨雲が近づく中、ゴム飛びに夢中になっている女の子みたいに。気がついた時にはもう辺りは真っ暗。トモ子はお腹がいっぱい。スプーンを投げ捨てた彼女は、ついにゼリーが増殖し、最後のパズルの駒を埋めるかのごとく、ギザギザスプーンの凸凹跡をピタリと埋めて、見事な球体にもどる瞬間をその目で見た。

おしゃべりパティシエが「変わってる」と言っていたのはこのことだったのだ。どう考えてもこれ以上変わっていることなどあるはずがない。

トモ子がつさに思ったのは、窓から球体ケーキを放り投げることだった。もしかしたら、ゼリーがブクブクとさらに膨張をつづけて部屋を埋め尽くし、やがてモスラみたいになって寮の建物ごと破壊してしまうかもしれない。いや、それ以前に、トモ子の胃袋の中でそれが起きないともかぎらない。

気分が悪く、なおかつ不安だった。でも、窓は開けなかった。あともう少し、ゼリーの曲面がピクリとでも動いたらそうするつもりだった。そうして、球体ケーキとにらめっこしながら、トモ子はマジマジと眠れぬ夜をすごしたのだ。

ケーキはモスラにならなかった。トモ子のお腹もボディースナッチャーに変身しなかった。白々と明けてゆく窓を充血気味の眼で彼女は見上げた。とりあえず、テーブルの球体ケーキを冷蔵庫に入れることにした。そうすると、大掃除したあとみたいに気分がせいせいした。でも、割り切れない感情はまだ部屋の壁に張りついていた。やり場のない怒りにも似た。

経済的な面から見れば、たしかにトモ子の財布は一円の損もだしていないわけだ。いいやむしろ、胃袋的には得をしたと言ってもい

い。なにしろ美味しいゼリーをたらふく食べられたのだから。そのままベッドにもぐり込んでいたら、ゼリーの雲に乗った楽しい旅の夢だってみれたかもしれない。

もつとも、それが逆にトモ子をイラつかせる理由にもなっていて彼女としては、なんとしてもあの『大黒屋』のおしゃべりパティシエに一言いつてやりたいところなのだが、これではどうも根拠が希薄すぎる感じなのだ。おしゃべりパティシエは言うだろう。

「それでさ、いったい君はなにをそんなに怒ってるわけ？」

かつては幸福の使いであり、今では宿敵と化したパティシエ、しかしその顔すら見るこのできぬまま、徒勞の一日が終わろうとしていた。ただ、時間の経過にともなって、球体ケーキをめぐるトモ子の心情にも変化らしきものが訪れた。

べつに冷蔵庫の冷気が彼女の頭を冷やしたわけではないだろうが、早朝のとんがった感情は不思議と消えていた。かわりに頭をもたげてきたのは旺盛な食欲だった。変わることはないケーキへの愛情であり、独占欲だった。それが、丸い対象を見つめるたびに湧いてくるのだ。ゼリーもいいが、なんとしても中に閉じこめられたショートケーキが食べてみたい。食べられないからこそ余計に食べたい。食べなければ気がすまない。

トモ子は銀スプーンを持ちだしてくると、球体ケーキがのった皿をテーブルにおいた。冷蔵庫の光がゼリーの気泡を星のように瞬かせる。苺をのせたショートケーキは丸い宇宙に浮かんだ小さなお家のように。

こんな綺麗なケーキ見たことない。トモ子はあらためて思った。でも、食べるのがもつたいたいとは思わなかった。これはケーキと胃袋との真剣勝負なのだ。勝つか負けるか。昨夜は経験がない分、トモ子に不利だった。でも、今夜は違う。それなりの情報を彼女の方も掴んでいる。勝算はわずかだが、ある。

トモ子は一つ深呼吸を吐くと、一気呵成に食べはじめた。

壮絶な戦は一週間にもわたった。しかし、トモ子はまだ一勝もできていない。連戦連敗の影が彼女の肉体に色濃くあらわれはじめていた。ジーンズのボタンは閉まらなくなり、ラフなＴシャツはピチＴになりつつある。このままいけば、お盆休みに帰省した際、「あのー、どちら様でしょうか？」と両親にたずねられてしまう可能性はかなり高い。

それでも、トモ子は食べるのをやめようとはしなかった。もちろん、当初の目的であるショートケーキへの飽くなき執着心がその原動力となっているのに今もかわりはない。ただ、食の修行僧と化したトモ子は、逆にそうなることによって食欲とはまたべつの、ある確信に近い予感を抱くようになったのだった。

中庭にファンファーレは響かない。『大黒屋』に球体ケーキがならぶこともない。猫たちには悪いけど、トランペットダイエツトはやめてしまった。トモ子は学校から真っ直ぐ寮に帰ると、すぐにスプーンをとりだす。そして冷蔵庫の扉を開く。完璧な球体が光に照らされあらわれる。美しい、とトモ子は思う。でも、この世に完璧な球体は存在しない。それを人間の目で見ることができないと言う人もいる。だとしたら、今、自分が見ているものは、完璧な球体ではないのか、幻覚か、そのどちらかだ。

トモ子は思う。球体ケーキなんて存在しない。それから、あのおしゃべりパティシエも。最初からいなかった。そう考えればなんにも説明がつく。たぶん、構内でトランペットを耳にした学生だっではない。火曜の夜に『大黒屋』でケーキを買った客も。自分以外には。

あの青年は幽霊みたいな存在なんだ。彼女は想像する。きつと、若すぎるか、血気盛んすぎて成仏できてない。原因はバイク事故。でも、恥ずかしくて、死んじやいました、なんて彼は口にできないんだろう。まるで、オネシヨしちやいました、みたいだから。

『大黒屋』のオジさんが彼のお父さん。お父さんは死んでない。ただ、店同様、少し元気がないみたい。見るに見かねた孝行息子は、ちよつと店を手伝うことにした。定休日の夜だけこつそりと。

トモ子はじつと瞼を閉じた。もしもこれまで自分が目にし、耳にし、口にしたものがすべて幻であったなら、ふたたび瞼を開けたとき、きつと皿の上の球体ケーキは忽然と消えてなくなっているはずだ、と。

それでも、彼女は受験の合格発表を見るときみたいに、どうかそれがありますようにと、心の中で強く念じた。

すると、瞼の奥に針の先ほどの小さな光の点が見えた。やがてその点は、長いトンネルの先に見える光の出口のように、しだいに大きくなっていった。しまいにはそれが光の点ではなく、白い長方形の掲示板であることがわかった。掲示板はさらに大きくなって、トモ子の瞼一杯に広がった。暗闇が一転、眩しいくらいに白い世界に変わった。でも、その奥にはもうすでに小さな黒点が見えている。黒点は白いコンベアーで運ばれているみたいに迫ってきた。

それは四桁の数字だった。誰かの受験番号かしらん。トモ子は思った。掲示板にのつてゐることは合格ね。おめでとう！

しかし、よくよく見ると、その数字には小数点がついている。3・141。なんだったけ？あ、そうだ、円周率。

トモ子がそれを思いだした瞬間が合図になった。数字はいきなり暴走をはじめた。彼女の頭のなかを、無限の円周率がグルグル駆けめぐりだした。

3・14159265358979323846……

数学の苦手なトモ子は小さい悲鳴をあげて目を開けた。

透明な球体の内部で、数字の残像が魚の群れのように泳いで見えた。

「トモちゃん、なによ、どうしちゃったのよ」

顧問の声がいつかの喫茶店に響いた。この日、季節のトレンドか、はたまた人目を忍ぶ身なのか、黒縁のサングラスをかけた萬寿は、それをオデコまで持ち上げてトモ子を見た。

トモ子は約束の時間に遅れてやってきた。もちろん、萬寿が驚いたのはそのことではなかった。彼女は若い頃の自分に瓜二つの、青春の息吹きを吸いつくして健康的に膨れあがった揚げパンのような顔を目の当たりにし、うるたえていたのだ。それは予想外のデジャブ体験であるとともに、出版を間近にひかえたダイエット本の契約白紙撤回の危険性を意味していた。

カギを握る人物は萬寿の横の席にいた。グレーのスーツに尖った黒縁メガネをかけた特許局書記長のような女性。萬寿とトモ子に挟まれて少し痩せ気味にも見える彼女こそ、『女優ダイエット』の出版元となる雑誌社の女編集長であり、結果的に萬寿の劇団運営をも左右しうる人物だった。

萬寿は黒縁メガネのレンズ奥に隠された表情を横目で気にしながら、変わり果てた、裏切り者の、揚げパン顔を、編集長女史に紹介すべきかどうか悩んでいる様子だった。結果、喫茶店のテーブルの上を、いま一方の古株の揚げパン顔が、行ったり来たりするはめとなった。

そんなやりとりに終止符をうつべく、トモ子が口を開いた。

「先生、私、リバウンドしちゃいました」

たしかにトモ子はリバウンドした。それもごく短期間のうちに。しかし、萬寿としてはそれを言葉どおりに受けとめるわけにはいかなかった。

追いつめられた舞台女優は、トモ子の殺し文句に対抗すべく、サングラスをもどして、今はまだ世間には秘伝の『女優ダイエット』演技法を開始した。

「あらそう。ところでさトモミちゃん、トモちゃん見かけなかった。今日ここで会う約束してるんだけど、遅れてるみたいなのよ」

トモ子は返す言葉がなかった。開いた口がふさがらない。彼女には萬寿の魂胆がすぐに呑みこめた。

「時間がないのよね。今度会った時にきつーくお説教してやんなきゃ。きつーくね。約束を守れないような子に舞台のヒロインは無理だつて」

「それじゃ、それ私がやりますよ」

トモ子は平然とチャチャを入れた。サングラスの影からでも、睨みつける萬寿の眼光が見てとれた。

「悪いけど、あなたじゃダメなのよ、トモミちゃん。コメディになつちゃうから。でも、トモちゃんにだけはもう一度チャンスをあげるわ。それ彼女に伝えといてね、トモミちゃん。今度、会うときまでに身も心も改めておけば、今日のこととは大目に見てあげるつて。ダメなら、紗英ちゃんを代役にたてるからつて」

喫茶店に入ってからまだなにも口にしてないのに、トモ子の開いた口は閉じるヒマがなかった。でもそれは、萬寿の悪知恵に呆れたわけでも、ましてや、その忠告が身に染みていたからでも決してなく、『大黒屋』を再訪したときに抱いた不安がすべて現実のものとなるつとして、すべての物事が悪い方向へリンクし合っていることへの、驚きだった。

一方、萬寿の方は女優としての誤ったプライドをさらに肥大化しつつあるようだった。てつきりトモ子が、自分の言葉に感銘をうけているものと思ひ込んでいたのだ。（やっぱりプロのセリフは説得力が違うわね）。

顧問はさらなる方向違いの高みに登るべく、女編集長に言った。

「いきましようか。今度もつといい子紹介しますから。その子、紗英子ちゃんていうんですけど、そりゃ美人で性格もいいの。彼女なら『女優ダイエツト』にピッタリ」

二人の黒縁は席を立った。萬寿はテーブルの明細をトモ子に押しつけるのを忘れなかった。

「これ、サークルの経費で落とすといてね、トモミちゃん。それぐらいなら、あなたにもできるでしょ？」

喫茶店を一人でたトモ子は、立て替えたコーヒー代の釣り銭をにぎりしめながら、人生を呪い、世界にむかつて悪態をついていた。校門への道すがら、すれ違う学生たちが自分の容姿を見て心の中で笑っているように思えてならない。

まるで最終幕のジュリエットのような気分。すべての歯車が狂い、若い夢が挫折してゆく。愛した人はすでにこの世のものではない。

でも、ジュリエットはまだマシ。トモ子は思う。だって、相思相愛だったし、美人だし、おまけにセレブ。それにくらべて、私はさ。ここでトモ子は昨夜の出来事を蒸し返す。ううん、やっぱり私の方が少しはマシかも。だって、ロミオは死んじゃったけど、ケーキ屋の彼はそうじゃない。まん丸ケーキはちゃんとテーブルにのこってたし。

そうかと思うと、彼女はすぐにその考えを根底からひっくり返す。ううん、そもそも私は彼のことなんてどうでもいい。ただ文句を言っただけ。だって、一度しか会ってない人を好きになるなんておかしいし、幽霊の存在以上にはあり得ない。それに、こんなふうになっちゃったのも、すべてはあのまん丸ケーキのせい。あれを口に入れるまでは全部計画通りにいってたんだから。

一連の自己肯定の作業が済むと、しかしそこからなにかがこぼれ落ちるように、トモ子の指先から一枚の五円玉が滑り落ちた。後ろむきにコロコロ転がってゆく褐色のコイン。そのゆくえを目で追ってゆくと、人なつこい子犬みたいにベージュ色のパンプスを履いたミニのワンピースの手前でペタンと止まった。

トモ子が男で、尚かつ赤の他人であったなら、さぞかし喜んでいなかもしれない。地面の五円玉を拾い上げたのは、麻のトートバッグを肩にかけた夏服姿の紗英子だった。

「ありがとう」

トモ子はなぜか恐縮しながら彼女から落とす物をうけとった。

紗英子の方はなにもしゃべらない。その立ち姿には、どこか毅然とした様子があった。まるで、その五円玉がもともと紗英子の持ち物であり、そのことを彼女自身が知っているような。

無論、トモ子には紗英子の財布からクスねたような覚えはない。

しかしそうかといって、これまでの事情を考慮すれば、頭から爪先まで、まったくの無実であるとも宣言できない。

それで、本心ではそれが学校に着てくる服？と思いながらも、ここは一つ紗英子のミニのワンピースを誉めておき、頃合いを見計らって「さよなら」しようとトモ子は考えたのだが、ちょうどその時南方の突風のようなファンファーレが、遠く校舎裏から建物を飛び越え、吹き下ろしてきたのだ。ずっと待ちつづけた黄金色の旋律が。

今にもダービーレースの旗が振りおろされそうなその高らかな一瞬の響きは、浅はかなトモ子の処世術をきれいさっぱり吹き飛ばした。

「今の聞こえた？」

トモ子は興奮気味に、あるいは逆にそれをどうにか隠そうとしながら、紗英子にたずねた。しかし、紗英子にはトモ子の言っている「聞こえた」が、いつたいなにを指しているのかが分からない。それに、たとえ理解し、聞こえていたとしても、彼女にしてみればただのトランペットの音色にすぎない。

紗英子は黙ったまま首を横に振った。それは質問の意味が理解できないというゼスチャーであり、答えではなかった。すると、トモ子はなにを勘違いしたか、すっかり仲直りして親友同士になったみたいに微笑み返すのだった。確かに、紗英子の首が横に振れても縦に振れても、トモ子にとってそれは「YES」のサインにはなるのだが。

「さよなら。そのワンピース可愛いね」

そう言つて、トモ子は校門前で紗英子と別れた。べつにオベツカを言つたつもりではなく、自然と言葉が口からでたのだ。

投げかけられた質問の意味をまだ考えているのか、そのあとトモ子はその背中に紗英子からの視線を感じつつづけた。

校舎裏にはいかなかった。あんなに待っていたファンファーレがやっと聞こえたにもかかわらず、トモ子はもはやレースには参加しようとしなかった。

はじめて『大黒屋』の店前に立った日にもトランペットが鳴った。それをヒントに墓地でトランペットを吹きはじめたら、おしゃべりパティシエに出会った。きっとあれは何かのサイン。あの場所にいっても彼はいない。トモ子はそんなふうに感じていた。

そうして、もう落とさないように、五円玉を強く握りしめながら歩いていった。今日は一週間ぶりの火曜日。もしかしたら、この五円玉が役に立つことだつてあるかもしれないと胸踊らせながら。

しかし、ふたたびコインは彼女の手から滑り落ちる。今度は紗英子の助けもない。コインは二度と見つからない。でも、それは決して悪い前兆ではない。トモ子が考えていたよりもずっと早く、コインはその役割を終えただけなのだ。

指紋よりも深く硬貨の円い形だけが、タトゥーみたいにクツキリと跡になっていた。最初に感じたのは失われてゆく平行感覚。あるべき重さが消え失せ、その質感のみが残されている。

トモ子が手のひらをまじまじと見たのは、駅の改札に着いたときだった。落とした記憶はまったくなかった。血の気がスーツと引けていく。それは感染が広がるように自分の体が透明になっていく感じ。改札を行き交う人々の姿も焦点の合っていないメガネで覗いたみたいに歪んで見えた。

周囲の風景はぼやけ、手のひらにできた小さなミステリーサークルだけに焦点が合った。すると、麦畑で燃える炎の輪のようにそれ

が浮かび上がった。円がだいに球になっていく。どこかで見た形。色は無色透明。毎晩トモ子が貪っている球体ケーキ。そのミニチュア版。

さらにその中、砂時計の一粒めいたミクロの像があらわれた。シートケーキ？トモ子はじつと覗きこんだ。でも、そこに苺の赤いクラウンはのっていない。何かがちらに向かつて微笑んでいる。実際には目では確認できないが、彼女はそれを感じとることができた。やはりどこかで見たはずの微笑。トモ子はやっとそれを思いだした。

お地蔵さん？

まるで、トモ子の手のひらにできたミステリーサークルが、そのまま空へと浮かびあがり、半月を包みこんだ白い靄に月光の輪となつて映しだされたかのような夜だった。

ただ、空に月はあつても、寺の境内にいつもの三日月は見当たらなかった。墓地に猫たちの気配はなかった。

どこにいっちゃったの？過去の猫体験からか、トモ子は彼らのゆくえを案じずにはいられなかった。彼女は思案した。もしか、雨の気配を感じて本堂の床下に身を潜めているのかしらん。それとも、しばらく吹きにこなかつたうちに、集団でべつ場所に引越してしちやった？三食昼寝付きの恩義を忘れたブチみたいに、もつといい寢床を見つけた？もしそうだったら、それはそれでいいけどさ。

しかしそうは思つても、あるいは、たとえ尻尾の生えた聴衆ではあつても、ギャラリーのない演奏にはやはりハリがでない。さすがにお地蔵さん相手ではジャンルが違うような気がする。トモ子の予感では、千客万来、猫たちが合唱しながら出迎えてくれるものと期待していたのだが。

ある意味、トモ子は自分の都合にあわせ、猫たちの存在を理想化し過ぎていたのかもしれない。まるで最後の砦みたいに。ブチだっ

て夕飯の匂いに誘われてきていただけなのかもしれない。

しかし、そうなつてくると、キャンパスで耳にしたファンファーレもなんだか怪しいような気になってきた。てっきり、天からの啓示のように受けとめていたけれど、あれもただ単に、音楽部の誰かが練習していただけなのではないだろうか。たぶんそう考えるのが普通なのだ。サインなどではなしに。

ならば、『大黒屋』の閉じたシャッターには「本日定休日」の札がかかっていることだろう。いったいどんな文句を言ってやろうかと、トランプペットを吹きながらあれこれ考えていた時間はまったく無駄足だったことになる。

トモ子はふたたび、おだてられたあげく木から滑り落ちていった一頭のブタにまいもどつたような気分だった。晴れてリバウンドもしたことだし丁度いい。誰彼に文句を言えるような柄ではもとからなかったのだ。

もはや、ほつぺたを膨らませトランプペットを吹く気になど毛頭なれず、トモ子は自己否定の泥沼に足を踏み入れようとしていた。ちよつどそのときだった。さらにその背中を押さんとする声が、複式呼吸マスターの雄叫びが、墓石の間を夜の落雷のように駆けめぐつた。

「ちよつと、トモちゃん、あんたさつきから何やってんの！」

トモ子は一瞬、お地蔵さんが喋つたのかと思つた。地蔵裏から萬寿の黒い影があらわれても、怒れる大魔神のように数々の悪行を懲らしめんがため、ついに地蔵様が動き出したのかと勘違いしてビツクリしていた。

「最初からずつと見てたわよ！そのどこが『女優ダイエット』なのよ！」

巨大な影を揺らし迫ってくるのは大魔神でなく萬寿だった。なにより、たなびくアニメスbの黒いスカートがそれを証明している。

この危機に直面して、かつてのトモ子だったら、すぐに平謝りする

るか、逃げだすか、していたはずだ。しかし、墮ちるところまで墮ちた今のトモ子はこれぐらいのことではもはや怯んだりはしなかった。手にしたトランプेटを刀のようにたずさえ、なんならご乱心の顧問と刺し違えるつもりになっていた。

すると、教え子のただならぬ殺気を感じとったか、大魔神の動きはピタリと止まった。境内の砂利が鈍い音を立てる。萬寿はやや震え気味の指先でトモ子をさして言った。

「あたしの『女優ダイエツト』ダメになったわよ！出版契約白紙撤回よ！ぜーんぶ、あなたの所為だからね、トモちゃん。あんたクビ。紗英ちゃんをヒロインにする。いいわね、わかったわね！」

「お断りします」

トモ子が答える前に、突然、第三の音が響いた。それは聞き覚えのある女闘士めいた。トモ子が声の方向に振りかえると、茂みの陰から夏服の紗英子が姿をあらわした。そして、彼女につきそうように部長の野崎まで。

猫たちの社交場だった夜の墓地は、醜い人間たちの修羅場の様相をみせはじめていた。睨み合っているのは紗英子と萬寿。トモ子と野崎の二人はむしろこの状況に戸惑っているような感じ。

「今日、この女が大学にくるって聞いたから、絶対なにかあると思って、一日中あなたのおとつけてたの。おかげで、やっと証拠をつかんだわ」

紗英子に「あの女」呼ばわりされたのは萬寿。トモ子はまだ「あなた」で済んでいたけども、つい最近まで「先生」と敬われていた顧問の心境を考えると、それは決して穏やかではないことは、容易に察しがついた。

「小娘ちゃんが、笑わせるじゃないわよ。証拠をつかんだのはこっちの方よ」

萬寿が反撃にでた。

「あなたたち、なんで一緒にいるのよ。どうせ茂みの中でイチヤツ

いてたんでしょ。まさかサークルの規約また忘れたわけじゃないわよね。サークル内の男女交際は御法度でしょ！それとも紗英ちゃん、あなた、お芝居辞めたいの？それなら責めたりしないけど」

窮地に立たされた中年女は見境がなかった。萬寿は勝ち誇ったようにトモ子に目をやった。まるでなにかの同志みたいに。もちろんトモ子の方はすぐに目をそらした。

「先生、今すぐ紗英子に謝ってください」

野崎がやつと口を開いた。しかしそこに男らしい勢いはない。むしろガールフレンドの手前、言わざるをえない感じ。

「やーよ。それよりね、野崎君。あなた、こんなしょーもないワガママ娘とは潔く別れて、今すぐ私の劇団にきなさい。私の力で看板役者にしてあげるから」

「え、本当ですか？」

あろうことが、野崎の顔に動揺が走った。これには紗英子ばかりでなく、トモ子も驚いた。いいや、呆れ返った。

「変なこと言わないで！野崎先輩はテレビ局に入社するんです。フジテレビか日テレの社員になるんです。劇団員なんて人生を棒に振るようなもんでしょ！」

「バカね、紗英ちゃん。テレビ局の倍率がどれくらい高いか知ってる？人生棒に振るのはそつちよ。運良く下請けの制作会社に滑り込んで、十年後に居酒屋で仕事のグチ言ってるのがパターンでしょ。」

それよりね、あたしだったら、テレビ局にも知り合いがいるからさ、紹介してあげてもいいんだけど」

「だから、それが下請けなんですよ。自分の本の出版を断られた女がなに偉そうにホザいてるのよ」

「なんだって！もう一度言ってごらん、この世間知らずの小娘が！」

その昔、多くの学生たちがヘルメットをかぶり、国家権力と戦っていた時代があったという。それがいかに若さゆえの未熟さをとも

なった行動ではあったとしても、今の自分たちと比較すると、私たちがはいつたいここでなにをしているんだらう。トモ子はぼんやりそんなことを思い浮かべながら、なるべく泥沼化した女二人の舌合戦を見ないように努めていた。

でもよくよく考えてみたなら、当時のシユプレヒコールも、目下の舌合戦も、見た目ほどの差はないのではないかしらん？トモ子はそんな気にもなってきた。結局のところ、それぞれみんなが、自分こそ、自分たちこそ正しいと信じ込んで行動してるだけ。違うのは、その頭数のみ。

すると、彼女は墓地のある異変に気がついた。これまで闇の幕に包まれていた茂み。そこにホタルの群れのような小さな無数の光源が瞬いている。

いいや、それは壁に張り付いたようにじっとして動かない。そして、茂みの壁だけではなくいたるところに、墓石の陰に、木々の枝に、境内の砂利に、遠く本堂の瓦屋根の上にまで光っている。

なにかに取り囲まれてる。大魔神化した萬寿には怯まなかったトモ子でも、これにははじめて鳥肌が立った。もっとも、その感覚はすぐにおさまった。三日月。その光は、トモ子がよく知った形をしていたことがわかったのだ。

「ニャー」

最初に聞こえたのは、瓦屋根のてっぺんにのぼっている一匹だった。それは見張り役の狼のように夜空の月にむかって鳴いたみたいだった。そして、それを合図に地上の猫たちがいつせいに鳴きはじめた。目だけを光らせ。いつかトモ子が遭遇した猫たちの大合唱がはじまったのだ。

「なにコレ？」

「やだ。私、猫嫌い！」

言い争っていた女たちは、ホラー映画のキャラクターよろしくたじろいで、彼女たちの論題を忘れた。

トモ子は瓦屋根まで音がとどくようにトランペットの先端からミュートをはずした。そして高らかにファンファーレを吹き上げた。「ブチ、本当に帰ってきたんだね！」と心の中で歌いながら。はたして、それがブチなのかどうかは知らないが、瓦屋根のてっぺんに陣取った小さな影は、トモ子のラッパ信号に答えるようにもういつぺん長めに「ニャー」と鳴いた。すると、地上の猫たちもそれに合わせるように長く鳴きはじめた。合唱はお芝居の大団団を迎えつつあるかのようだった。

「トモちゃん、あんた、なにやってんの！」

「やだ。私、猫嫌い！」

萬寿の問いに答えるつもりは毛頭なかったけども、もし仮にあつたとしても、トモ子には答えようがなかった。彼女自身、なにが起きているのかさっぱりわからなかったから。

ただ、三人の人間どもが墓地に隠れているのを知って、猫たちもまたその身を潜めていたのであるうことは、トモ子にも想像できた。そして、彼女が心得ているこの混乱状況を鎮める唯一の方法、それはさらにもっと大きな混乱を招きよせることだった。

トモ子はその可能性を実行にうつした。片手を高くかがげ、猫たちにはあらたな合図を指し示した。

「みんな、でておいで！」

トモ子は手を振りおろした。茂みから、墓石の陰から、猫たちがいつせいに飛びだした。それは毛も模様もない、ただ黒くて形の定まらない塊だ。それとともに、墓地には聞くに堪えない三つどもえの人間たちの絶叫が木霊した。黒猫の怒涛の群れは、彼らめがけ、アニメのオームみたいに押しよせてきたのだ。

尻尾の生えた黒い影が弧を描き、宙を飛ぶ。あつという間の出来事だった。先陣の三匹がジャンプしたのだ。三本の黒い放物線は、三人の人間の脳天をロックした。すると、そのたもとが吸い込まれるように人体の中にスッポリ消えてなくなった。

六つの丸い眼は催眠術にかかったみたいにいったん瞼を閉じた。そしてつぎの瞬間には三日月形の瞳に入れかわっていた。

「ニヤー」と萬寿が鳴いた。「ニヤー」と紗英子が鳴いた。「ニヤー」と野崎も鳴いた。

三人は頭が空っぽのマネキン人形みたいになって突っ立っていた。残った猫たちはトモ子の足元に集まって、つぎの指示をせがむかのように「ニヤーニヤー」鳴いている。

それで、トモ子は預言者モーゼの杖のごとく、トランペットを寺の外へと指し示した。

「さあ、みんな出発よ！」

それがパレードのはじまりの合図だった。トモ子は先頭に立って高らかにマーチを吹き鳴らした。その足元を猫の合唱隊がついてゆく。それから三人の猫人間もゾロゾロと。

パレードは寺をぬけ、駅へとむかった。そこは光にあふれ、電車を降りた人々が次々と改札口からはきだされている。ギャラリーとしては申し分ない。ただ、彼ら仕事帰りの勤め人たちが、パレードを歓迎している様子はまったく見うけられなかった。むしろ、その表情は凍りついている。サラリーマンにOLS、交番に立った警官までが、むかってくる異様な一団を目に耳にしたとたん、催眠術にかかったみたいに動けなくなってしまう。

黒猫たちはこの機を逃さなかった。ロケット花火みたいになって飛んでいっては、黒い放物線を駅ロータリーのそこかしこに描き、彼らの脳天にアメアラレのごとく降りそそいでいった。

バスを待っている万年課長、コンビニ袋をさげた独身ビジネスマン、携帯電話をかけている営業マン、待ち合わせ中のOLS、その瞳が見る見るうちに三日月へと変わってゆく。トモ子はお気に入りマーチを奏でながら、ゆっくりとロータリーを一周した。

パレードから黒猫たちの姿は消えた。代わりにその列に加わった

のはスーツ姿の猫人間たち。彼らは小学生の遠足みたいにトモ子のあとについていった。取引先の部長の顔を忘れ、待ち人を忘れ、ゴールデンタイムのテレビを忘れ、ついでにあらゆる種類のストレスまで忘れて、慣れないマーチのリズムにあわせ楽しげに「ニャーニャー」と鳴きながら。

パレードは駅からの並木通りを『大黒屋』にむかって進んでいった。先頭のトモ子は、これまでの練習の成果を思う存分発揮しながら、おだてられて木に登った子ブタみたいな気分だった。子ブタは思った。きつと今夜の『大黒屋』は開店はじまって以来の大忙し。おしゃべりパティシエもさすがにテンテコ舞い。でも大丈夫。彼なら、それに見合った魔法を必ず思いつくはずだから。

第14話「偽R35」

『小柳氏、禁煙突入65日目！もはや限界か！？』

他人が記したブログによって、自分の行動を後確認するというのはいかなものだろうか。

『氏は生まれながらの負け犬だ。我々の調査によると、無名の三流大学に入って覚えたニコチンの味を、氏はその後の22年間におよぶ人生の中で3回断ち切る試みをしてはいるが、その身の程知らずの企てはいずれも60日以内に挫折の憂き目をみている』

そこにはたしかに一種有名芸能人にも祭り上げられたような気分が存在する。Web上で自分の名前が取りざたされるといのは。しかし、芸能ゴシップなどであるならば、あることないこと虚実無根の数々をねつ造されてしまうこともしばしばだろうけども、これが私の場合、そのほとんどがまぎれもない事実であり、しかも本人の記憶よりも正しいときているから始末が悪い。

それにWeb上であろうと大衆誌の誌面であろうと、タレントならそれが一つの宣伝材料になることだってありうるが、疑いもなく一般庶民であり、有名になることなど一つも望んでいない輩にとつて、誹謗中傷のブログの存在など迷惑千万、1バイト分のメリットすらないのだ。

いいや、待たれよ。一概にはそうとは言いつてもいいかもしれない。考えてみれば、私自身この悪徳サイトのハードリピーターであるのだ。更新などあれば必ず閲覧せずにはいられないし、携帯電話の「お気に入り」にもちゃんと登録してある。ただし、それは間違つてもブログの内容に興味があつてのことではない。

これは実にプライベートな件であり、個人的な家庭内の現状に立ち入った話になるのだが、十数年連れ添ってきた妻と私との関係は、

現時点では悲しいかな、このブログサイトのみが唯一のホットライオンとなっているような有り様なのだ。

彼女は読んでいるらしい。私に、いいや願わくば私たちに、あてられた誹謗中傷記事の数々を。そして、私の禁煙を望んでいたのは、誰よりも妻自身であった。ならば、記録更新中の夫のことを今回ばかりは少しだけでも見直しているかもしれない。どこか遠い空の下で。

だが、またしてもその身の程知らずな希望をあざ笑うかのよう。ブログの管理人は先回りしてこんなことも書いている。

『たとえそれが僅かな額であつても、氏の奥方はそろそろ本気で、財産分与に必要な書類を取りそろえる準備にとりかかったほうがよさそうだ』。

悪徳ブログの記事によつて、今日という日が禁煙開始66日目の朝であり、同時に私たち夫婦が、端からみても離婚危機に見えるほどの惨状であるという客観的事実を後確認した私は、今一度気を引き締めながら中央線の駅ホームで自分の職務を開始した。

とは言つても、私はJRの職員であるわけでも、駅の警備員であるわけでもなかった。そしてまた、かのブログの管理人は、禁煙者に心理戦を迫りながら、世間にせつせと喫煙を推奨しているわけでもない。

私の格好はごく普通のビジネスマンのそれに近い。ダークグレーのスーツに好きなオレンジ色のネクタイ。そうして中野駅の快速用プラットフォームに立っている。見る人が見れば、健康管理に気を使ったIT関連の勤め人などにも見えなくない。というのも、私がスーツと一緒に身につけているのは、ランナー向けの小さなザックとジョギング用のスニーカーだったりするのだ。

しかし、実際には私はIT企業の社員ではないし、これからホームに入ってくる電車と併走して走るタイムを競おうとしているので

もなかった。当たり前だが、そんな仕事は世の中に存在しないし、そんなバカなことに給料を支払う経営者だっていない。たぶん。

階段とそれに並列したエスカレーターから、朝の勤め人たちが続々とホームが上がってくる。私は彼らを探偵のような眼差しで眺める。幾人かがホーム上の小さな看板の前を通り過ぎる。そこには『R35』と、一際太い黒文字で印刷された広告がうたれてある。実はそれは、私とかの管理人とを結びつける記号でもある。

「まさに『カミ』だね」

神ではなく、恐らくカミ。近頃では神様も色々な表記の仕方です々な場所にお出ましになる。

それは三カ月ほど前のこと、昼時の蕎麦屋で課長がはなつた言葉だった。ただ、蕎麦は課長の好物ではあったが、べつに我が上司は毎日のように食しているその麵の、喉ごしや歯ごたえを今さら「カミ」にたとえて誉めていたわけでは無論なかった。

彼はお気に入り、とある武士の生い立ち話を、現代の大手町にある出版社の部下である私にトクと語っていたのだ。持った割り箸を小旗のように振りながら。

「生まれる時代さえ違ったら、間違いなく、あの男は幕末の獅子の一人になってたね」

いやはやなんと。いつの世も「生まれる時代が……」という注釈は男たちの背中に影のようにつきまとうらしい。

それにしても日本男子というのは、どうしてこう歴史上の人物が好きなのか。その中でも武将や侍の類。会ったはずなどあるわけなのに、まるで自分の身内や竹馬の友を語るかのように話してみせる。典型例の上司を持ったせい、とくにここ最近、その傾向に拍車がかかっているように思えてならない。

これは私の勝手な想像だけでも、近年の武将人気の高騰は、プロ野球人気の低下や車の消費者離れなどとなにか関係があるのではあ

るまいか。ひと昔前までなら、呑み屋でサラリーマンたちが繰り広げる会話ともなれば、それは野球や車の話と相場が決まっていたものだ。間違つて好きな映画の話でもはじめようものなら、つぎの飲み会にはまずお呼びがかからない。それが今ではどうだろう。男たちは呑み屋で交わす共通言語を失ってしまったのだ。そこに救世主のごとく颯爽とあらわれたのが戦国武将やサムライたちだったわけだ。

彼ら戦国武将は、はるばる海をこえてメジャーリーグにいったりしない。ガソリンみたいに値上がりすることもない。エコと言えばこれぐらいのエコもない。なにしろ彼らは皆一様に死んでいるのだから。

そして、これがまた私の勝手な想像のその延長になるわけだけでも、どうも男たちの社会的地位によつて、お気に入り武将やサムライたちにも細かなジャンル分けが生じるらしい。つまり、管理職クラスともなれば、それに見合った指導者、徳川家康や豊臣秀吉になる。そして中間管理職者は、その家臣やもつとマイナーな大名たち。平社員や一匹狼、一発屋の類は、坂本龍馬、織田信長、宮本武蔵などなど。

中間管理職を二十年以上つづけている我が課長のお気に入りには、当然のようにマイナー大名のそのまた家臣だった。

最上平之助。その名を耳にして「ああ」とうなづける人はそうはいまい。かく言う私だつて、課長の口からその素性を聞かされるまでは、てつきり好きな時代劇の話でもはじめたのかと思つていた。

しかし、平之助はれっきとした薩摩出身の下級藩士で、関ヶ原の戦いに敗れたあと、剣よりよほど得意だったそろばん勘定で腕をあげ、藩の御蔵役として外様大名ゆえのつねに緊迫状態にあつた藩の財政をやりくりした人物であつたそう。

もしかしたらこれ以外にも、私の知らない、あるいは聞き逃した

「平之助像」というものがどこかにあるのかもしれない。ただ、それを加味したとしても、これが幕末の獅子たちと肩を並べたり、ましてやカミにたとえられるような人物の略歴であるとはとうてい思えない。

もつとも、課長が時代劇の脇役としても薄すぎるようなこんなキヤラの持ち主を、まるで自分と重ねるかのごとく語るのには、それなりの訳もある。

つまり、かつて薩摩藩であったところの今の宮崎は、彼の母方の出身地であり、平之助の家系とは遠い親戚にあたるのか、あたらないとかが。さらに蛇足を言えば、宮崎は彼がサムライたちに入れ込むまで、長らくファンであった読売ジャイアンツのキャンプ地でもあり、さらに蛇足をかさねると、課長自身、藩の御蔵役というポジションによく似たサラリーマン的肩書きをもっているわけだから。

その日も私は渦中の上司から昼飯に誘われていて、きつとまたチヨンマゲの時代にあったような、なかったような四方話を、つい昨日の出来事みたいに聞かされるのかと、まだ暖簾をくぐる前からすでに食傷気味であった。

ところで、私のような社内勤務の勤め人は、外回りの多い営業職を羨ましがる傾向が強い。彼ら営業マンのポケットには、まだ半分「自由」がのこっているように見えるからだ。経理課の私の「自由」は、ソックスの小指の先ぐらいものこされているかどうか疑問だ。なにしろ、昼飯を食う店も、相手も選べないときているのだから。しかし、いざ昼時になってみると、課長はいつもの蕎麦屋には向かわずに、どういうわけか会社近くの喫茶店の自動ドアを跨いだのだった。しかも、普段は陰口の矛先になっている新人社員の若者も連れて。

上司や同僚に対する評価は悲喜こもごもだが、私の新人社員に対するそれははつきりと二つに分けることができる。とくにここ数年、

その傾向が露骨にあらわれてきているように思う。ただ、ヒラ社員である私に新人社員の評価を尋ねてくるような上役もないから、あえて発表したことはない。

つまりそれは、仕事はできないが人間味のあるヤツと、人間味はないが仕事のできるヤツ。私たちと一緒に喫茶店の席についたタニシゲ君なんかは、さしずめ後者の代表だ。私にはなにがそんなに面白いのかさっぱり分らないけども、休憩時間などいつも一人で携帯電話の画面を飽きることなく見つめている。

そんな打つてもまったく響かなそうなタニシゲ君を交え、さすがの課長も「平之助話」をする気はないだろうと思ひ、そうなつてくると、わざわざ我々を呼び出した目的は、おそらくは仕事の話ということになる。それも、喫茶店でしなければいけないような内密の

メニューを眺めるフリをしながら、私は課長の顔色をうかがいはじめた。すると、三人分のセットメニューが運ばれてくるよりさきに、課長はオフィスから持参してきた雑誌をテーブルに置いて開口一番言った。

「これ見たことあるかい？」

それは予想どおり「月刊戦国武将」の類ではなかったが、それでも私は上司の真意を計りかねた。なにかの冗談のつもりだろうか。知ってるものにも、それは我が社が出版している情報誌なのだ。

私とタニシゲ君の前には、まったく同じ表紙が、心理テストのシンメトリーのように二つ並べられた。なんの意味だかさっぱりわからない。課長は自社の同じ出版物を、わざわざ二冊持ってきていたのだ。

その名は『R35』。某大手情報社が駅などで配布している無料情報誌の、その二匹目のドジョウをねらった身内の人間が言うのも恥ずかしい、まんまのパクリ商品だ。あちらが「25」なら、こちらには「35」と。

しかしこれが、社内の誰もが予想しえなかった大ヒット。編集部とは遠く離れた、しかもほとんどページすらめくったことのない經理の私だってそれぐらいのことは承知している。

ん？もしかして課長の話とは、その編集部へ人事異動してくれないか、ということではあるまいか。なにしろ、増刷につぐ増刷で、編集は猫の手も借りたいほどの忙しさだと聞く。しかし、経費削減の折り、新しい編集者もそうは雇えない。であるからして、君たちがいつてくれ、と。

それはないでしょ、課長。私だってあなたと同じ經理一筋の人間だ。若いタニシゲ君はいいだろうけども、私のような中年侍が今さら畑違いの部署に異動してくれと言われても、「ハイ、分かりました」と、二つ返事でいくものではない。

はてさて、この人事話をどうやって断ったらよいものやら。私の頭は辞退にふさわしい適当な言葉をフル稼働で探しはじめた。たとえば、こんな。「なにぶん歳も歳ですし、今さら他社のモノマネをした偽物雑誌なんて……」

いったい私はなにを口走ろうとしているのか。いくらなんでも上司の手前で偽物呼ばわりはマズイ。辞退のつもりが、ヘタをしたら辞職になってしまう。

いいや、そうではない。「偽物」と先走りそうになったのは私ではないのだ。タニシゲ君だ。今さっき、彼の口がそう動いたように見えた。いや、彼はたしかに口にだしてそう言った。「偽物じゃないですか」と。

これだから携帯電話ばかり見てる今時の若者は困る。社会には言っていないことと、悪いことがあるという決まりごとがさっぱり理解できていないのだ。ズバリ空気が読めない。彼らは「KY」などという目新しい言葉を使うけども、その「K」が意味している「空気」とは、どうやら私たちが普段何気なく吸っているものとは違っ

た特殊なものであるらしい。

そんなスペシャルなケースとは異なつたごく一般的な気まずい空気の中、私はふたたび課長の顔色をうかがつた。案の定、不機嫌そうだ。長いつきあいだから手にとるようにわかるのだ。通勤途中の週明けの朝みたいな顔つきで我が上司は言った。

「うん、そうなんだ。実はコレ、本物そっくりの偽物だね」
なんと。か、課長まで。

どういふ事情になつていいのかさっぱり分からないけども、目下の状況を冷静に分析してみれば、どうやらこの喫茶店是一種の無礼講めいた秘密裏の会合であるらしい。私に言わせれば、なにを今さら感はあるけども、不本意ながら出遅れてしまった格好だ。こうなつたら、私も溜まるに溜まつた会社批判をさせてもらおう。

「ほんと『R35』なんて、上の人間はなにを考へてるんでしょうかねえ。まつたく、恥ずかしいやら、情けないやら。今こそ我が社は、原点である参考書専門の出版社へと立ちかえるべきですよ」

言つた私の顔は、二人の視線によつてちよつどくの字型に挟まれるような格好になつた。それで、どうやら空気が読めていないのはこちらの方であるらしいことがわかつた。昼時の喫茶店で、私は一瞬、無礼講という名の白日夢をみていたのだ。

珈琲の香りを嗅いだためだろうか、なんだか無性にタバコが喫いたくなつた。

「5月25日。AM7:30。中野駅ホーム異常なし」

右手にもつたボイスレコーダーにむかつて私はささやくように言つた。同じカタギの勤め人として、周囲から変人みたいに思われたくはないのだが、これも仕事の一部だから致し方ない。ダイヤは間もなく通勤ラッシュのピークを迎えつつあつた。

ほんの三カ月前までは、私もあの勤め人たちの群集の中にいたのだ。それが今ではどうだろう、すっかりプラットホームの謎の住人と化している。

謎の住人は謎の住人らしく、午前中の仕事のスケジュールのことなど頭にはなく、たとえばこんな意味のないことを考えていたりする。こうしてあらためて眺めていると、朝の駅の風景は、どこか遊園地のアトラクションのそれと似ているところがありはしまいか、と。

つまり、チケットを買い、列に並び、入ってきた乗り物へと足を踏み入れる。ただ、朝の駅には間違っても遊園地で見聞きされるような笑顔や黄色い声はない。もしあったとすら、それはそれで気持ちが悪い。通勤電車をはしやぎながら待つOLの一群。鞆片手にソフトクリームをなめているサラリーマン。口笛を吹き吹き乗客を整理している駅員ミツキー、などなど。

そんな妄想の遊園地ほどではないにしても、少なくともかつて羨ましがっていた外回りの営業マン以上の「自由」を、フトしたきっかけから私は手に入れてしまっていた。

それはたしかにプラットホーム限定の「自由」であり、なおかつ世間にたいしてはブログでさらし者にされるといいうリスクはある。しかしそれでもなお、他人の給料計算やノルマ合戦に精をだすことよりも、限定付き、リスク付きの自由を私は選ぶ所存だ。そこでの私は、タイムカードからも、サービス残業からも、ついでに「平之助」からも、解放される。

そんな私に私生活を除いた不安材料があるとすれば、それはプラットホームという新しい現場での三カ月間が過ぎ去っても、まだなんの職務的成果をあげていないという点につきるだろう。べつに私はここで見知らぬ勤め人たちを見送っている物好きではないのだ。

『R』。私は奴を捕まえなければならぬ。それが私に課せられた唯一の使命だ。しかし、奴を捕まえることは相当に難しい。と言うか、私はまだその顔すら拝んだことがない。

見たことのない人間をどうやってお縄にするのか。その『R』と

いう輩には一つの際立った特徴があるらしい。眉間の中央に、切除手術をうける前のかつての千昌夫のような、ビー玉クラスのホクロがあるというのだ。年齢は私と同じ40代。中肉中背。ネクタイの色はまちまちだが、きまって薄いグレーのスーツを身につけた男であるらしい。

逆から見ると、『R』とはそのホクロ以外、これといった特徴のない男ということにもなる。そんな「平之助」みたいな、ということとはウチの課長みたいな、平凡な男を、なぜ一般企業の経理の人間が捕まえなければいけないのか。無論、千昌夫のそれを含めて、ホクロ自体に罪はないはずだ。

事の推移はふたたび昼時の喫茶店へとまいもどる。

「タニシゲ君はクロスワードパズルが好きみたいだね。いつも、携帯電話でやってるんだろ？」

「クロスワードパズルじゃありません。1から9までの数字を使うペンシルパズルの一種です。『ナンバープレース』といいます。略して『ナンプレ』です」

どっちだっていい。パズルであることになんの違いがある。

その時、私はテーブル上の二人の生姜焼き定食を恨めしそうに眺め、久しぶりに蕎麦以外の昼食が口にできるというのに、自分のハンバーグ定食だけがなかなかやってこないことに憤慨し、腹いせに新人君の小利口そうな発言を噛み砕き、コップの水と一緒に呑み込んだのだった。

しかし、タニシゲ君が休憩時間にそんなことをしていたとは今の今までまったく知らなかった。というか、携帯電話でそんなことができるということ自体知らなかった。

だが、それより意外だったのは、あの課長が部下のそんな細かいところにまで目を光らせていたという事実だ。もしか、私がデスクの引き出しに同僚から拝借した井上和香のDVDを入れっぱなしにしていることも知っていたりして。怖い怖い。社にもどったら、さ

っそく返しにいかねば。

「それじゃタニシゲ君さ、これのどっちが偽物か見分けがつくかい？その『ナンプレ』とかで鍛えた真理眼で」

課長がつづけて聞いたのはもちろん二冊の『R35』のことで、手に持った箸は今、テーブルの上で交互にその表紙をさしていた。しかし、これではまるで禅問答だ。なにしろ二つは同じ雑誌の同じ号なのだから。

だが、タニシゲ君もタニシゲ君だ。よせばいいのに、食事を中断して真剣に見比べはじめたではないか。いったいどうしちゃったというのか、この二人。まったくついていけない。本当に今時の新人君は言われたことだけはちゃんとこなす。ロボットみたいに。

そこに救世主が現れた。ウェイターが私のハンバーグ定食をトレイにのせてやつときたのだ。双子の『R35』をどける以外、もうテーブルに空きのスペースはない。白昼の禅問答もこれまでだ。

「お待たせしました」

ウェイター君が言った。

「ありが……」

「ちよつと待った。今、重要なとこなんだ」

なんとという仕打ちだろう。私の言葉と、トレイを受けとろうとした私の両腕は、箸を持った課長の右手によって遮られてしまった。行き場を失った私の言葉は、成仏できずにいつまでも空調の中を漂い、私の両腕は、時が止まったまま石のように。さながら哀れ古代ポンペイ市民のごとく。

喫茶店で化石のミイラ状態になってしまった私は、発掘隊が到着するのを待ち望んだが、いくら待ってもそれはきそうになかった。そこで私は視線をあげ、我がハンバーグ定食をトレイにのせたままのウェイター君の顔を見上げた。課長の理不尽な行為によって忙しい昼時の職務を中断され、きっと彼も私と同じ化石状態になってい

るであろうと考えたからだ。同じミイラでも、二人いればなにかと心強い。上司の非道を周囲にもアピールしやすい。

だがしかし、頼みの綱のウェイター君はあろうことか、おかしな二人と一緒にあって間違い探しの禅問答に参加しているのであった。本来、私のハンバーグ定食が置かれるべき場所をタニシゲ君と一緒にあって覗き込み、彼は言うのだ。

「これ、もしかしたら『偽R35』じゃないっスカ？」
いいから、ハンバーグ定食をここに置け。

「分かるかい？コレクターから高値で入手したんだよ」

「へー、そうっスカ。すごいっスネ」

スカ夫にスネ夫。スカ子にスネ子というのまでタマにいるが、まったくこの喫茶店はアルバイト教育がなっていない。課長も課長だ。長年の付き合いである部下を、大事なその昼飯を、ほったらかしにしてどういうつもりなのか。

しかし、『偽R35』とはいったいなんのことなのだろう。コレクターまでいるとは。はて。

それがどんなものであるにしろ、ないにしろ、我が社の業務に関わることであるのは確かなようだ。でも、それを喫茶店のスカ夫ウェイターが知っていて、れっきとした社員である私がまったく関知していないというのも変な話だ。

すると、ようやく諦めたタニシゲ君が、禅の教典と化した二冊の『R35』から顔あげた。もしかしたら、彼なりに私に気を使ってくれたのかもしれない。

「ダメだ。分かりません」
「いいさ。時間は充分ある。しばらくはこれが君の仕事になるからな」

そう言って、課長はやつと二つの表紙をどけた。スカ夫ウェイターが例のものを私の前に置いていった。私はやつとフォークとナイフを手にもつことができた。だがしかし、課長は今度その私にむか

って話をはじめたのだ。

「小柳、お前は脚が速かったな。昔、野球部で代走専門だったんだろ?」

「はあ」

「昼食にありつく前、私は遙か昔、十代のころのことを思いだすはめになった。」

「それが今後、お前の仕事になるから。煙草やめといてよかったな」

「野球、やるんですか?」

課長は笑いだした。

「違うよ。誰がそんなこと言ったよ」

「あなたが」。もしも、ここが本当に無礼講喫茶なら、当然私はそう答えていただろう。

そうして私は中野駅のプラットホームに立っている。そしておそらくタニシゲ君は、そろそろ会社のオフィスに到着して、社員たちの給料計算用ソフトを立ちあげるかわりに、デスク上で二冊の『R35』の表紙を開いていることだろう。お互い、長い一日はまだはじまったばかりだ。

しかし、どちらがより長い一日になるかと問われれば、それはタニシゲ君に軍配があがる。なにしろ彼は仕事のほかに、昼時になれば毎日のように蕎麦屋に通って、「最上平之助」の出世話にも耳をかたむけねばならないのだから。

いいや、もしかしたら、今ごろは課長の方がタニシゲ君に感化されて、二人して携帯電話を手に持ち、無言のまま蕎麦屋で『ナンプレ』とやらに興じているかもしれない。いやはや、怖い怖い。

しかし、他人のことを心配している場合ではなかった。ふたたびプラットホームに目をやれば、そこにはなにやらソワソワと拳動不審の男が一人、『R35』の看板の前に突っ立っているではないか。

恐らく年齢は私と同じぐらい。しかも、お約束の薄いグレーのスーツを身にまとい、小脇には怪しく膨らんだ茶色の書籍袋を抱えている。

はたしてその眉間にホクロはあるだろうか。私は猫のような忍び足で対象者の斜向かいに回りこもつとした。

だが、その行為は両刃の剣だった。私は対象者の額にホクロがあるのを発見したが、こちらの視線に気づいた男は、袋から雑誌の束を急いでとりだすと、それを『R35』の並んだワゴン棚にやおら突っ込んだのだ。間違いなくあれが『偽R35』だろう。

そして私たちは仲良くプラットホームを走り始めることにあいなった。一方は追う者、もう一方は追われる者として。

これがもし刑事ドラマのワンシーンであつたなら、『ヤモメ暮らし』か、あるいは単に『ヤモメ』というアダ名をボスから授かつた刑事役であるところの私は、『カラー！待てー！』とお決まりのセリフを吐いていただろう。

だがしかし、実のところ、職務遂行はほかの乗客たちの迷惑にならない範囲内で、会社から厳命されているサラリーマンであるがゆえ、私は叫ぶかわりに、「R発見！R発見！」とボイスレコーダーに吹きこみながら薄グレーのスーツの後を追った。

ホームの階段を駆け下り、自動改札機の警告音を背中に聞く。ロータリーに差しかかったところで、元高校球児ダツシユ50本仕込みの脚でもって、ようやく私は奴の首根っこを掴んだ。

腕を強く引くと、対象者はスケートシューズを履いてるみたいに簡単に尻餅をついて倒れた。背後で女性の短い悲鳴があがった。

「R捕獲、R捕獲」

私は対象者の上に馬乗りになりながら、ボイスレコーダーのスイッチを切った。まるで敏腕刑事の身のこなし。その名は「ヤモメ」。しかし、嫌な予感も走った。『R』とはこんなにも簡単に捕ま

るヤワな輩だったのだろうか。ネットの書き込みでは、嘘か真か、100メートルを10秒台前半で走る強者のようなフレコミだったが。それがよほどのシヨックだったのか、私の捕らえた男は、まるで蛇に睨まれたカエルみたいになっている。

嫌な予感 realism を増していった。野次馬の輪もできつつある。もはや躊躇はしていられない。こうなったら手っ取り早く真実を掴むべく、私は唯一の証拠に手をのばした。惚れた女房のホクロだつて、かつてこんな真剣に見つめたことはなかったらう。

ブチッ。それは古くなつたカサブタみたいに対象者の額からあつさりとはズれた。さては付けボクロだったのだ。まるで切除手術をうけたあとの千昌夫めいた印象の対象者。それが口をワナワナと震わしながら私だけに聞こえるように小声で言った。

「なにも知らないんだ。頼まれただけなんだよ」
「知ってるさ」

男を解放すべく、私は腰をあげた。

またしても無駄骨だった。負け戦だった。元対象者はシワになつたスーツの裾を振り振り、小走りに改札の人混みの中に消えていった。日頃は平凡なサラリーマンなのに違いない。通勤途中の割のよいアルバイトぐらいのつもりだったのだろうか。なにもなかったかのように、晴れてこれからご出勤というわけだ。

それにくらべ、ある意味すでに出勤のすんでいる私には、野次馬たちによる携帯電話の洗礼が待っていた。さしずめ、敏腕刑事から罪のない市民を懲らしめる悪徳刑事へと墜ちた偶像といったところか。

今朝はさぞかし職権乱用中の私の勇姿が、そこかしこのネットサイトにアップされることだらう。辛辣なコメント付きで。それを見た妻は、遠くに暮らす夫の、不吉な今日の運勢をメールで送りつけてくるだらう。彼女によれば、このところの獅子座生まれの低調ぶりには目を見張るものがあるらしいから。

窓口から睨みつけている若い駅員にこれまで効果のあったためし
のなかった愛想笑いをふりまき、私は改札をとおってプラットホー
ムへ戻った。

すると、『R35』の看板前に今度は黒山の人だかりができてい
る。さきほどの捕物帖的一幕から、鼻の効く乗客たちが早くも嗅ぎ
つけたのだ。ワゴン棚に、あらたな『偽R35』が補充されたこと
を。結局のところ私は、不本意ながら偽モノの広告塔になっていた
りするわけだ。

その群集の光景は、オイルショック時に、人々がトイレットペー
パーの争奪戦を繰り広げた昭和史のニュース映像を思い起こさせる。
我先にと、争うように双子の表紙を取りあう老若男女。宝くじより
も安く、しかもハイリターンと噂される夢の無料情報誌。あるいは、
遊園地にも似た朝の駅に、新種のアトラクションが加わったかのよ
うな。

それは歓喜するOL。そのご自慢の長い髪に、童顔サラリーマン
のなめるソフトクリームの塊がボトリと落ちる。つぎの瞬間、ホー
ムにはつんざくような悲鳴が。でも、心配ご無用。だってここはネ
バーランド。なるほど上りエレベーターからは、駅員の制服を身に
つけたミッキーが颯爽と登場する。陽気に口笛を吹きながら。相棒
のグーフィーを引き連れて。

私はプラットホーム上の一群にそんな妄想を重ねあわせながら、
入ってきた下り電車のタラップに足を踏み入れた。

朝の下り電車はいい。いつも空いている。

三カ月前まで、まともなサラリーマン生活をおくっていた私は、
幾度となく朝の上りホームに立ちながらそんなふうに羨んでいたも
のだった。

でも、それはひよっとしたら私だけでなく、都市圏の上り通勤を
利用する多くの乗客に共通した感情だったのかもしれない。特に月

曜日の朝などは、私以外の「上り組」の通勤客たちにも、単に空いているだけの下り電車が、まるで前日の日曜日へとカレンダーを遡ってゆく時空列車か、あるいは、レイの花飾りを首にかけてくれるリゾート地へと向かう南方列車のように見えていたりしたのかも。だがしかし、実際のところ中央線の下り電車が私をおろしたのは、まぎれもなく平日の高円寺駅であり、私の中でこの街は東西南北いずれのリゾート地にも入らない。しかも、ホームで待っていたのももちろんレイの花飾りを手にした美女ではなく、「平之助」課長の名を画面に表示した携帯電話の着信音であった。

「小柳よ、朝っぱらから元気だな」

「ありがとうございます」

「誉めてないよ。追尾はあくまで一般市民の迷惑にならないようにと言ったろ。それが、一般市民捕まえてどうするんだよ」

「でも、対象者は額にホクロをつけてたんですよ」

「なら今度からは、「それは付けボクロですか？」って、ちゃんと質問してから追っかけるんだな」

「はあ……」

「冗談で言ってるんじゃないぞ」

「わかりました」

「すぐに対策書をメールで送るように」

「はい」

生ぬるい。こんな調子で、会社は本当に『R』を捕まえるつもりがあるのだろうか。

この仕事をまかされてからというもの、ずっと心の淵に横たわっていた疑惑の影がいよいよ伸びてゆくを感じ、私はどうにかそれを足で踏みつけながら携帯電話のOFFボタンをおした。

プラットホームの隅に空いたベンチを見つけ、携帯のメールソフトを開く。私は言われるがままに、対策書という名の謝罪文をした

ためはじめた。今となつてはこの対策書なるものこそ、私と会社とを結びつける唯一のホットラインだ。見方をかえれば、『R』捕獲よりもよほど重要な作業といえる。少なくとも私自身にとつては。

朝の通勤電車が次々とホームに入つては出てゆき、人々の波がコマ落ち映像みたいに慌ただしく動く最中、私は一人、メールソフトの白い画面をじつと見つめていた。なんの因果か知らないが、いつの間にか仕事や家庭といった本来実生活の中心を占めてしかるべき物事と、私は携帯電話一本でどうにかつながつているような状況に陥っている。どうしてこんなことになつてしまったのだろう。地道にコツコツやつてきたつもりなのだが。

いつまでたつても謝罪の文句は一語も浮かんできそうにない。

しばらくそうしていると、仕舞いに携帯電話の白い画面が、持ち主のキー打ちを辛抱強く待ちつつづけているように思えはじめた。まるで白い忠犬八子公みたいに、ご主人様を待っているように見えてきた。

どうも相当にストレスが溜まつているようだ。手のひらに収まる単なる端末を、あたかも実生活のパートナーのように感じてしまうとは。これでは、江戸時代の下級武士を竹馬の友のように語る上司と大差ない。あるいは、占いが人の人生を決定づけているかのようを考える我が伴侶。それともパズルが恋人の青年とか。

いやいけない。こんなことを考えている場合ではない。下り電車を羨む「上り組」といい、なんだか今日の私は他人と自分とを同化させることはかりに夢中になつている。こんなことなら、携帯電話を実生活のパートナーと思ひ込んでいるほうがまだ少しはご利益があるというものだ。そのご利益が残されているうち、早いとこ対策書を完成させて課長にメールしなければ。

相変わらず旨い文句は浮かんでこなかったが、とりあえずどんな常套句でもいいから私は書きだすことにした。あとはおのずと言葉がつながつてゆくだろうと。

だがしかし、一つ句点を打ったところで、画面に並んだ字面を読み返し、私は驚愕した。そこに記されていたのは謝罪の言葉などではなく、またしても自分を辞職へと追いやりかねない問題発言だったからだ。

私の人生のパートナーであるところの端末は、白い画面にこう表示していた。

「Rは存在しない」。

一時間後、私は中央線の下りに乗り、つぎの現場である阿佐ヶ谷駅へとむかっていた。もちろんこの間に、正式な対策書を書き上げ、課長宛のメールをすませていた。課長からの返信はないが、それは私の書いたものが無事受理されたことを意味している。

どうやら首をつなぎとめておくことにはひとまず成功したようだった。だが、そんなことに一喜一憂できるような気分ではない。私は消去したばかりの、私自身による予言めいたフレーズがいまだに頭に引つかかっていた。

あれは毎日のように妻から送られてくる占いメールの文句にどこか似ていた。謎を含んだその調子が。それが余計に私の心を疑心暗鬼めいたものにしていった。たしか昨日届いた彼女からのメールには、こんな文面が書かれていたはずだ。

『待ち人はあらわれず。することなすことすべて空回り。一度遠くから職場の人間関係を見つめ直すといいでしょう。ラッキーアイテムは缶コーヒー。今日の獅子座の運勢格付けは11位』。

11位。ということは、もっと下の星座があるわけだ。今朝、中野駅で捕まえたサラリーマンあたりがそうかもしれない。こんな冴えない中年男に朝っぱらからロータリーで馬乗りされているのだから。たしかに彼はツイてない。

「待ち人」とは『R』のことだろうか。缶コーヒーはなぜだろう。コーヒーを飲むと煙草が喫いたくなるからずっと控えているのだけ

ど、それを買うとキャンペーンの懸賞品でも当たるとのだろうか。でも、所詮11位だから、当たってもTシャツ止まりだろう。

そもそも、どうして11位なんかにはラッキーアイテムが存在するのか。気休めのつもりかもしれないが、占いにおける10位以上のラッキーアイテムはすべて廃止し、今後はアンラッキーアイテムに変更すべきだ。なにしろ、下から数えたほうがはるかに早いのだから、身の安全を考えれば用心にこしたことはない。

最後の問題は「職場の人間関係」だが、こればかりは如何ともし難い。「遠く」にいることはいのりだけ。

しかし、こうしてあらためて考えてみると、なるほど妻の占いメーブルは今の私の環境にかなりのパーセンテージで当てはまっている。占っているというより、ほとんど近くから観察しているかのようだ。いいや、やはり、そんなことはありえない。当てはまってなんかいないのだ。だいたい占いというものは、大昔の時代から、受けとめ方によつてどんなふうにも解釈が可能になるようにできているものなのだ。

だから「待ち人」はあらわれない。千年前も千年後も変わらずに占いの中で詠われている「待ち人」とは、万人の「待ち人」であり、それはつまるところ、永遠の「待ち人」なのだから。

しかしながら、私の伴侶は眉ツバナ占いを信じ切っている。なにしろ、それがもとで家をでていったぐらいだ。

とは言つても、べつに彼女はおかしな占い師にそそのかされて、どこか遠いお山のふもとに出家してしまったというわけではない。福島の実家に身をよせているのだ。彼女の家は祖父の代からつづくヨウカンが人気の和菓子店を営んでいて、現在は兄夫婦が店を切り盛りしているのだけど、彼女はその手伝いをしているというわけだ。今の体型からは想像し難いけども、彼女はその昔、店の看板娘だったそう。その史実は、アルバムに収められた古い写真から確認できる。

そんな昔ながらのそろばん勘定が似合いそうな職人の家に生まれ育ったはずの妻が、占いなどに凝りはじめるようになったのはやはりごく最近のことで、彼女の配偶者が少しおかしな格好でプラットフォームに立つようになる二カ月ほど前のことだった。家計の足しにと、なにか自宅にいながらでもできそうな簡単なパートの仕事を探しはじめたのがきっかけだった。

まあ、このご時世、特にこれといった資格も特技も持ち合わせていないメタボリック気味の主婦に、こちらの都合にあわせてような美味しい話が舞い込むのは難しかろうと思っていたのだけれど、ひよんなことから、というのは大昔の四方話に飽きた私が蕎麦屋で相談をもちかけたことから、それを私たち夫婦に紹介してくれることになったのは、あの「平之助」課長だった。

なぜだかそれまで耳にしたことがなかったのだけど、課長はどうも『戦国武将サークル』なるものの会員になっていて、同じ会員であるIT関連企業の社長さんが、農家の嫁さん探しに疾走する村長みために、年がら年中、宅勤のパートさんを探しているというのだ。しかも、仕事内容の割にはパート代はかなりいいらしい。

渡りに船。妻はさっそく契約書にサインして働きはじめることになった。ただ、その仕事というのが『戦国武将サークル』に負けないうぐらいに奇妙なもので、テレビや新聞、雑誌、インターネットなど、様々なメディアに溢れるように存在する星座占いのデータをかき集めて平均値を算出しては、その日の真の、そして全日本的な、星座運勢を公表するという、その名も『格付け 星座占いちゃんねる』というインターネットサイトに関わるものだった。

それはいいよ妻がパート契約を交わす日のこと。IT企業の社員がわざわざ夜に家までやってくるというので、私も定時に会社をあとにして自宅マンションの居間でその到着を待っていた。

IT社員は二人きた。対照的な男女のコンビで、男のほうは痩せ

気味、女のほうは健康的に太り気味といった、なんとなく私たち夫婦をそのまま若くしたような二人であった。テレビチューナーみたいな黒い家電機器を抱えていたのは男のほうだった。

今になって思えば、地方限定のCMタレントみたいなあの二人は、ローカルな笑顔の下に、そろって薄グレーのスーツをあつらえていた。女のほうが私たちに仕事の内容を説明している間に、男のほうが出参した黒い家電機器を我が家のテレビにとりつけた。

それがチューナーではなく、いわゆる録画用のハードディスクであるということはすぐに理解できた。

妻の忙しい日々がはじまった。毎朝5時にベッドから起きだし、同時にテレビをつける。そしてインターネットに接続。それから正午近くまで、彼女は寝巻き姿のまま、午前中の情報番組やワイドショーの画面下に流れる星座占いをチェックしつづけるのだ。ゴミだしは当然のこと、食パンをトーストするのも、コーヒーを入れるのも、すべては夫の勤めとなる。

しかしながら、テレビの占いコーナーをすべてリアルタイムで制覇するには、夫の手助けだけではとてもではないが追いつかない。それらのテレビ番組はいくつも放送時間が重なっているのが常だし、亭主は7時半には家をでるからだ。そこで多機能ハードディスクの出番がやってくるわけだ。

そのハードディスク、家事や洗濯の機能は付いていないけども、かわりに二桁の番組を同時に録画するという機能がついている。妻はその録画映像を追っかけては、採れたての占いデータをIT会社のマザーコンピューターらしきものへと送信するのだ。すると、その情報が直ぐさま『格付け 星座占いちゃんねる』のその格付けに反映される、というシステムらしい。

IT企業の太った女性社員は妻の仕事を『情報収集係』と呼んだ。その『情報収集係』の仕事を妻はよくこなしていた。苦手だった早

起きも克服し、一度も寝坊することなく、休むこともなくノルマをこなしていた。

おかげで夫である私もすっかり5時起きの習慣が身につき、この歳になって朝シャンまで覚えた。家計も潤って、課長が紹介してくれた奇妙なパート仕事はいいことづくめであるように思えた。貯金が溜まったら二人で温泉にいこうと私たちは話しあい、それはすぐにでも実現できそうだった。

だが、私たちに待っていたのが、夫婦水入らずの温泉旅行ではなく、妻の実家への一人旅であったことは周知の事実。問題は静かにだが居間のテレビに高機能ハードディスクが取り付けられたときにはすでにはじまっていたのだ。

いいや、もしかしたら、それよりもっと以前から計画されていたのかもしれない。薄いグレーの集団によって。なぜだか、私を貶めよとしている輩は、みんな薄いグレーのスーツを着ているような気がしてならない。

「あなた、最近なにか一つでもいいことあった？」

そう言った妻の表情は、まるで更年期障害と天中殺がいつぺんに押し寄せてきたみたいにあっけなかった。長年連れ添った仲だから、彼女が冗談のつもりで言っているのではないことはすぐにわかった。

で、居間の夕食の席、私は妻の顔を眺めながら、さて、最近なにかいいことがあっただろうかと考えはじめた。

まず思い浮かんだのは、妻にパートの仕事が見つかったことだが、これはよくよく考えてみれば妻個人の出来事であって、私の身の上におきたことではない。

逆に私個人にあったことと言えば、給料カットにノルマアップ。定期健康診断で腸に軽い出血が見つかったこと。高血圧気味だった血圧がさらに上昇し、医者から今度こそ禁煙するように言われたこと、などだ。

はて困った。いいことなどまるでない。質問の内容が「最近」か

ら「ここ数年」にアップグレードされたとしても、その答えに大差はないような気がする。

すると妻は、「あ・うん」の呼吸で沈黙の中に答えを見だし、キユウリの漬け物を箸でつつきながら、まるで浮気の証拠をつきとめたみたいに言い放った。

「やっぱり」

なんで「やっぱり」なのか。どうしてそんなことが面と向かって言えるのか。こちらとしては、元看板娘のお菓子好きを密かに見逃してやっているのに。

まさか顔に「私も天中殺なんです」などと書かれてあるわけではあるまい。額に「666」と刻印がされてあるわけではあるまい。

いや、もしかしたらされているのかもしれないけど、なにやら妻の話によると、あの『格付け 星座占いちゃんねる』のホームページに、それらしきことが書かれてあるというのだ。

いや、それだったらむしろ一安心だ。まずは私の顔や額が無事になによりだし、もともと占いの類を信じない私には、占いサイトがなにをどう書いていようが関係ないのだ。たとえ「あなたは今日の朝、散歩中のトイプードルに脚を咬まれます。おまけにその飼い主は、咬みついたペットよりも咬まれたあなたの方に非難の眼差しをむけるでしょう」と書かれていたって問題ない。いいや、ある。犬だけは例外だ。

世の中に占い好きの女性は多い。女性誌の占いページが誌面に占める割合は、男性誌のそれよりもはるかに大きいし、街角で手相を観てもらっている客は、ほとんどが女性陣ではなからうか。

けれども、だからといって女性が男性よりも信心迷信深いとは一概にはいえない。日常生活の中でゲンカツギをするのは、むしろ男たちのほうがずっと多いような気がするし、たいがいの男は自分のラッキーナンバーを持っていたりする。わざわざ苦勞してまで語呂

のいいナンバープレートを手に入れようとしたりする。占いの双子の兄弟であり、より数字に支配されたギャンブルなどは、いつだって男たちの独占場だ。

もしかしたら、占いや迷信の趣向にも、性別による傾向があらわれることがあるのかもしれない。場合によっては、女性のそれは「外」からやってきて、男性のそれは「内」から発生するようなことが言えるのかも。平たく言えば、女性が他人にこじつけしてもらうことを、男性は自分でこじつける、とか。

『格付け 星座占いちゃんねる』はその名のとおり星座占いのサイトだから、私の考えによれば、一見そこを訪れるビジターのほとんどが女性たちであるかのように思われる。しかし、さにあらず。マーケティングを怠らない世間の勝ち組たる人々は、ちゃんと性別を超えてネット利用者がサイトを訪れるよう、私の浅はかな考えなど見透かした対策をたてている。

その一つは今も昔も占いに隠されたトリックの一つだ。「予言」が大衆のものであり、「占い」が個人のものであるならば、個人心理を活用しない手はない。そこで運勢に順位が、格付けがもたされる。いいや、占いとは、そもそも最初から格付けそのものだ。大吉、中吉、小吉と。個人の競争心を上手く利用しているのだ。

私みたいに占いなんて信じないと言っている人間だって、一歩世の中にでてみれば、そこは自分も含めてどんなものにも、およそ名のつくものにはすべて、順位がつけられた格付け社会であるということ。これは痛いほどよく知っている。だから占いの内容は信じなくとも、そこに帽子の飾りみたいにつけられた順位の方はなんとなく信じてしまう。

ここがミソだ。占いの順位を信じることは、じつは占いそのものを信じることと変わりがないのだ。なぜなら、占いとは格付けであり、格付けにはとうぜん順位がともなうものだから。

しかし、その日の運勢に順番をつけることぐらいならば、どのテレビ局の占いコーナーだつてたいていやっている。『格付け 星座 占いちゃんねる』の目新しさは、そこにアメンバーめいた変幻自在のシステムを付け加えたことだ。

普通、その日の運勢といった星の数ほどある占いは、それぞれが独立し、完結している。でも、『占いちゃんねる』のそれは、日付がかかるまで終わりがなく、たえず変化してゆく。テレビ、雑誌、インターネットなどあらゆる媒体のデータを集計平均値化したサイトの運勢順位は、どこかで新しい格付け星座占いがでるたび、それが加算され変動してゆくからだ。

そのリアルタイムさにハマった人々は、日に一度ならず、二度三度とサイトを訪れるようになる。自分の運気がさつきよりは少しはあがつていないかと。まるで株価トピックスの動きに一喜一憂する個人投資家よろしく。

もっとも、いくらデータを集めようと、それらがもたらさず不確かなものであるならば、それをどんなに積み重ねようと、真つ直ぐな塔は建ちはしないと私は思うのだが、しかし『格付け 星座占いちゃんねる』はそのシステムによって、数ある占いサイトのなかでも一番の人気サイトにのし上がった。今ではここをたびたび訪れるリピーターを巷では「格付けマニア」と呼ぶらしい。

『情報収集係』である妻が、今もかつても「格付けマニア」であったことはない、と私は考える。彼女は私同様、占いの類を信じ込むタイプではなかったし、あくまでビジネスライクにパート仕事をこなしていたはずだ。

でも、もしかしたらその真面目な仕事ぶりが、寝た子を起こすような余計な発見を彼女にさせてしまったのかもしれない。

夕食の卓での「やつぱり」発言のあと、「666」のかわりに額に「？」と書いた夫にむかい、妻はこんなことを言った。

「あなた、獅子座だったわよね？」

いかにも。私は獅子座生まれだ。しかし、それがどうしたというのか。獅子座生まれの人間にはいいことがあつてはいけないのか。血液型占いにおけるA B型のように、星座占いの獅子座は、云われのない非難中傷を浴びなければならぬとも言つうのか。

「ううん」と、妻はそれにたいしては首を横にふる。

「じゃ、なに」私は自分が昔懐かしい山田太一のドラマにでてくる登場人物みたいな喋り方をしているのに気がつきながら聞く。

「ちゃんと、云われはある」

妻は断言した。そして『情報収集係』をはじめから二カ月あまり、その果てに見つけた夜空の星々の神秘さからはほど遠い星座占いの打算的な現状を、そしてそこから偶然のように浮かびあがった、しかしとても偶然とは思えない、獅子座生まれに忍び寄る今そこにある危機を、楽しい夕食時の夫婦の会話に後味の悪いデザートのようにつけくわえた。

まるで秘密基地に見立てた公園のコンクリ缶の中で、世界を一変させてしまう理論を友達と語りあっているかのような趣だった。妻の話はそんなふうにごどこか子供じみていた。それゆえに奇妙な懐かしさもあつた。

その時、私の頭によぎつたのは、高校の野球部で補欠仲間だったソトコバ君という少年のことだった。当時のソトコバ君と現在の妻では、性別以上に年齢による大きな差があるけども、二人が発見した理論には、それを超越したある共通項が存在するような気がしてならなかったのだ。

どんな顔をしていたか今では思いだせないけど、そのソトコバ君『お天気カラクリ理論』という彼自身が命名した、野球とは縁がないようで縁の深い、独自の天気予報に関する持論を習得していた。それが妻の発見した占いの理論とよく似ているのだ。

ソトコバ君には苦手な先輩部員がいた。彼が毎朝毎夜欠かさずに天気予報を観るようになったのはそのせいだった。というのも、雨が降って練習が中止になれば、その小姑先輩と顔をあわさずにすむから。

三年生が引退する夏の終わりには、ソトコバ君は晴れて毎日の天気予報チエックからも、先輩のしごきからも、解放される予定をたててた。しかし、その小姑先輩というのが良くも悪くも面倒見のいい人で、引退どころか、卒業してからも毎日のように母校のグラウンドに顔をだすようになった。

おかげでソトコバ君は彼の高校生活の集大成ともいうべき「天気予報理論」を打ち立てることになったのだ。勉強でもスポーツでも、芸術でも女の子でもなく、「天気予報」が彼の青春アルバムの巻頭ページを飾り、「あとがき」を締めくくった。

ソトコバ君がどういう気持ちであったのか今では見当もつかないけど、ハタから見れば、彼は入部先の選択を完全に間違えていた。

『お天気カラクリ理論』はソトコバ君がごく初期に完成させた理論の一つだ。

野球部の練習が終わり、部室のない私たち一年は、校舎裏の暗い自転車置き場で着替えをしていた。

「明日、雨だよね」

その時、私はソトコバ君に確認するようにそうたずねたはずだ。

彼が天気予報に詳しいことはすでに知っていたし、翌日は土曜日で、夕方からやっている「ガンダム」がどうしても観たかったのだ。

「うっん、たぶん降らないよ。降ったとしても、練習が中止になるほどじゃない」

ソトコバ君は私とはまたべつの意味でがっかりした口調で言った。

「でもさ、天気予報は朝から雨だってよ」

「天気予報は大袈裟に言うんだよ。特に週末の天気はさ」

特に週末の天気は？

そうして私はソトコバ君の『お天気カラクリ理論』を知ることになった。

ソトコバ君と妻が発見した理論の共通部分を一言で表現するならば、それは「メディアによるリスク回避」とでもなるだろうか。

ソトコバ君お得意の「天気予報」では、その定理は「気象予報士は考えうる最悪のケースを選択する」という一説によってあらわされる。簡単に言ってしまうえば、晴れなら曇り、曇りなら雨、というふうに。そうしておけば、もし予報がハズレた場合にもリスクが少なくてすむというのだ。

「例えばね」モザイクのマスクをかぶったソトコバ君が、マンガにでてくる『ともだち』みたいに言う。「晴れると聞いて雨が降っちゃったケースと、雨が降ると聞いて晴れたケースを比較してみなよ。どっちがムカつく？」

もちろん私はソトコバ君が期待したどおりの答えをした。

「だろ？だからさ、悪いほうを言っておけば間違いないんだ。だって、そっちのほうがハズレたとしてって視聴者からのクレームは少なくてすむし、特に週末なんかはさ、みんな晴れるのを期待してるから、そこに晴れるって予報だしといて、雨降っちゃったら大変なことになるわけ」

「へー、そうか。すごいね。どうしてそんなこと知ってるの？」

「オレが自分で発見したんだ。『お天気カラクリ理論』っていうんだよ」

ソトコバ君はべつに自慢するふうでもなく、庭のペットを紹介するみたいにそう言った。たぶん。

当時の私はまだ幼稚だったから、彼の眉唾話にバカみたいに感心してみせたけども、今になってみれば、気象庁ならびに気象予報士がそんな子供じみた手段を用いているとはとうてい考えにくい。

それでも私の記憶に誤りがなければ、ソトコバ君の「カラクリ理論」は見事的中して、その土曜日、雨は午前中にパラパラと降っ

ただけで終わった。お出かけの予定をたてていた人々はさぞかし喜んだことだろうが、当然、野球部の練習は日が暮れるまでつづくことになり、それでも私などはまだお目当ての「ガンダム」を観れただけですんだけど、当のソトコバ君といえば、「声がでてない！」と、かの先輩に硬球を投げつけられたあげく、果ては一人ケツバツトの刑に処せられていたのだった。

大人になったソトコバ君が、おかしな「予言の書」を実行にうつさないことを私は望む。

かつての補欠仲間にならって妻の理論に名前をつけるとすると、少々長くはなるが、『星座占い格付けカラクリ理論』とでもなる。二つの理論はちょうど発信源も同じテレビからであり、二人はそれを熱心に観察し、考察することによって独自の見解を得るにいたったのだ。

ある日、いつものように『情報収集係』の仕事でテレビを観つつ女房は思ったらしい。『格付け 星座占いちゃんねる』に、月間の格付けがあればもっと面白いのにと。「先月一番運が良かったのは 座！ 座の皆さん、おめでとございます！ どんないいことがありました？ メールで教えてね」みたいな。

そこで、妻は試しに自分でひと月前の統計をとってみることにした。我ながらいい思いつきだと思ったのだろう。もしかしたら、「主婦のアイデア商品」として特許を取れるかもしれない、と。

そんな、よもやの「夢の印税生活」という言葉に踊らされた彼女は、多少の労力など惜しむことなく、家計簿をつける主婦よろしく電卓とボールペンを手に計算を開始した。方法は簡単。十二の星座の日別順位をそれぞれ合計して、先月の日数で割ればいい。算出された数字が小さいほど格付けは上位になる。

妻の当初の予想では、さそり座はまだしも、獅子座が上位にくい込むことはまずない、いやあり得ない、というふになっていた。彼女はさそり座の女なのだ。とうぜんもう一方の獅子座は……。

女房の予想は六分の一ぐらいは当たっていた。折り込み広告の裏に書きだされた秘密コードめいた数字の羅列は、たしかにさそり座が十二の星座のうちの上位ではないことを物語っていた。しかし、そうかといって下位というわけでもなかった。それはちょうど中間だった。ほとんどの星座と同じように。夜空で何万光年もはなれあつた星座たちは、居間のテーブルの上で星々のメリーゴーランドよろしく仲良く肩をならべていた。

ちよつとした思いつきではじめたこの妻の試みは、だが、熱心に『情報収集係』をこなしてきた彼女に、まるでこれまで善き夫だとばかり思っていた亭主のその携帯画面に、なにやら絵文字を頻繁につかつた怪しげな送信済みメールを発見したような虚しい疑惑を生みだす結果をもたらした。

妻はようやく理解した。『格付け 星座占いちゃんねる』は、べつに月別格付けほどのアイデアを持ちあわせていないわけではない。単にやりたくても出来ないのだ、ということ。なぜなら、そこではサイトの謳い文句にもなっている「格付け」が成立しないのだから。

印税生活の夢は流れ星のような一瞬の輝きだけをのこし、四角いブラックホールの中へと吸い込まれていった。あとに残ったのは何も映しだされていない暗いテレビ画面だけだった。

妻はそこにメディアによるカラクリと、明るい未来への扉が閉ざされるような感覚を同時に見いだしたのだった。

はじきだした星座占いの月別の順位は、その数字の値のほとんどが6から7の間だった。つまり、星座占いが正しく人の運勢を反映したものだとは仮定し、この結果を考慮したならば、先月、世の中の人々はみな等しく公平な苦楽を享受したことになる。鈴木さんも、佐藤さんも、同じぐらい幸せで、同じぐらい不幸せだったことになる。

どちらの鈴木さんだろうと、どこそこの佐藤さんだろうと、そんなことはまずありえない。法律がどんなに国民の平等な幸福を約束しているようが、実社会は不平等の塊なのだ。それぐらいは、いかに楽天的な女房だって心得ている。

そこで彼女は悟った。夏休みの最後の一日におとずれた夕焼けを眺める子供のごとく。どんなに楽しい時間にも、必ず終わりはやってくる。それがはじまったとき、その終わりもはじまっている。

ようするに、占いといえども客商売。同じ星座が下位ばかりつづいては、その星座の視聴者や読者がはなれていってしまう危惧がある。メディア側に見れば、実際に視聴者や読者の身にどんな種類の悲劇がまき起こっているのか、いないのか、それは知らないけども、そんなことより、このままでは視聴率や購買数に影響がでてくる可能性がある。そこで巧いこと調整がなされるのだ。実社会では不可能なまさに時の神の手によって。

かくして、はじまりは終わりとなり、終わりははじまりとなる。災難つづきだった星座難民は嘘のように救出される。あるいは、ラッキーアイテム「缶コーヒー」によって。昨日12位だった星座が今日は1位に上り詰める。わずか24時間の間に、鈴木さん、佐藤さんの身にながったのか。

まるで人生の浮き沈みを反映しているかのように、日々順位の入れ替わる格付け占い。しかし、それも長いスパンで顧みれば、そこでは実社会ではおおよそあり得ない、誰もが凡庸ながらも平等な人生をおくることができると中途半端なユートピアが実現されていたのだ。

妻の発見した『星座占い格付けカラクリ理論』のあらましは以上のようなものだ。けれども、これだけでは彼女が占いを信じ、わざわざ家をでてまで、毎日のように占いメールを夫に送信してくる理由にはならない。いいや、もしもこれだけだったなら、事態はむし

る今とは真逆の展開をみせていたはずなのだ。新婚早々とまでは贅沢言わなくとも、まあそれなりに仲睦まじく。

思うに、人間というのは、とかく良いことより悪いことのほうを信じやすい生き物なのかもしれない。それが他人にまつわる物事に關してならなおさらのこと。

たとえば、私が通勤途中に100万円拾ったと言っても会社の人間は誰も信じないだろうが、これが100万円落としたと言ったなら、何人かは信じるような気がする。とくに課長あたりは。

妻のケースもそっくりそのままコレに当てはまりはしないだろうか。ただ、100万円の件は例外だ。そんな金が私にないことは、彼女は百も承知しているわけだから。

そうではなく、印税生活のバブルな夢が不可能な数字となってあらわれたとき、彼女がそこに見てとったのは、妄想マネーよりもっとリアルな悪夢であったのだ。

リアルな悪夢、つまりそれは正夢というやつ。

ほとんどが横並びであった星座の平均順位。彼女はその下に、まるで夜空の林間学校についてこれずはぐれてしまった、一人のノーマな生徒めいた星座があるのを見つけたのだ。横並びどころか、まるで一人だけ何万光年と離れてしまっているような。

鈴木さんも佐藤さんもすでに気がついてのことだろう。それが真夏の夜にまたたく獅子座だったわけだ。

さそり座の危険な好奇心に不必要な火が点いた。もちろんまだ単純な計算違いということだってありうる。で、妻は今一度、電卓片手に計算をやり直し、さらに三カ月前までさかのぼってその月平均の順位も割りだしたのだった。二枚目の折り込み広告をボールペンの数字文字で埋め尽くしながら。ときに彼女は、職人肌の血筋をのぞかせる瞬間があるのだ。

どれも同じ結果だった。計算違いでも、ひと月だけの偶然でもない。獅子座は、獅子座だけは、仲良し星組の中で唯一、個性的な順位を何カ月もキープしつづけていたのだ。当然ながらそれは最下位という負の個性を。もしも獅子座生まれの選手ばかりを集めたプロのサッカーチームがあったなら、来シーズンはまず間違いない下部リーグ降格、監督は更迭、といったところだ。あるいは、チームごとロシアの石油王に身売りなんてことになるかもしれない。そうしたら、全国の獅子座サポーターは、愛するクラブと北方の島々を天秤にかけなければならなくなるかもしれない。

しかし、それでもなお全国の獅子座生まれを代表して、あるいは獅子座サポーターを代表して、私は言いたい。もし私が妻の立場であつたなら、これはやはりならかのシステムの不具合か、そうでなければ単に悪い冗談だと受け流し、不問に伏すべきであつたらうと。

だが、自身はさそり座生まれであり、なおかつ人生の下部リーグ降格危機に直面した獅子座の男を亭主にもつた女はそうは考えなかつた。

和菓子屋の元看板娘は悟ってしまったのだ。これこそ星々の運航からの、古代ギリシャの神々からの、本当の啓示なのだ。つまり、出来レースの格付け占いからはみ出してしまったものこそ、システムの裏側に見え隠れしているものこそ、真の占いであり、言いかえれば、獅子座の不運は格付け出来レースをもつてしても救いがたいほどのレベルなのだ。なにしろ、彼女は生きたサンプルを毎日その目で見ているわけだから。

長い一日が終わろうとしていた。ようやく私は駅のプラットフォームから解放されようとしている。昼食からトイレまで、JR職員でもないのに、すべてが駅の中ですまされてしまう我が職務。それは中野駅にはじまり、吉祥寺駅で終わることになっている。なぜだか『偽R35』はそれ以外の区間の駅で発見された形跡がないのだ。

結局この日、私がした仕事といえば、中野の付けボク口男の一件のみ。それとて対策書を書かされるハメになったわけで、むしろ会社的にはマイナス査定の要因だ。やはり悪い星の下に生まれたのだろうか。

妻からの占いメールはとどかなかつた。こんなことは別居以来はじめてだ。実家でタチの悪い風邪でもひいたのか。それとも店の手伝いが忙しくて、ついに甲斐性なしの亭主のことは忘れたか。

いつもだったら彼女のよこした占いメールの、その文面の裏側に隠された意味を読み解くべく、時間をつぶしていた小生であったが、仕方がないので、例の悪徳サイトでも覗いて今朝の私の言動をどんなふうにしたてているのやら確認しておこうと思つたら、どういうわけか突然サイトごと閉鎖されていてアクセスできなかつた。

どうやら私という存在は、公私ともにその正味期限を切らしつつあるらしい。あとはコンビニ弁当よろしく破棄されるのを待つのみ。

自宅マンションのある高円寺で電車をおりた私ことヤモメは、真つ当なコンビニ弁当を夕飯にすべく、駅近くの店舗に立ち寄つた。そこで昨日の妻からのメールを思いだし、ゼロカロリーの缶コーヒーも一緒に購入してみた。(120円で手に入る幸運とはいかなるものなのか。ここは女房の眼力を試すいい機会だ)。

ヤモメは弁当の上に、他人の目にはただのシヨート缶としか映らない夫婦間のある緊張をのせ、レジへとむかつた。すると、店員の女の子に抽選箱の中のキャンペンくじを一枚引くよう薦められた。言われるがままにそうすると、めくつたクジの内側になにやら野球帽のイラストらしきものが印刷されてあつた。女の子はレジ袋に入れた弁当と一緒に、イラストによく似た赤い帽子をヤモメにくれた。真ん中に「B」のチームロゴが打つてある、メジャーリーグはレッドソックスのキャップだつた。

女の子は言つた。

「おめでとつございます。こちらが一等の懸賞品になります。占い

どおりになつたでしょ？」

最後の言葉が妻のそれと重なって聞こえたのは、もちろんヤモメの聞き違いだ。店員が占い云々などと口走るはずがない。

それでも、ヤモメはもう少して肝心の弁当を置き忘れたまま店をでそうになるぐらい動転していた。女の子に呼び止められて、やつとキャップ片手に引き返すと、頭上にキャンペーン用の宣伝ボードが吊されてあるのが見えた。レッドソックスのチームTシャツは二等だった。

そういつたわけで、ヤモメこと小生は、レジ袋とベースボールキャップを持ってコンビニ前に立っていた。一等賞の記念に、缶コーヒーは飲まずに居間の棚にでも飾っておこうかと考えもしたが、やはり缶コーヒーはあくまでただの缶コーヒーであり、ラッキーアイテムの成果もただの偶然にすぎない。ここにいたつてもなお、私は妻が信仰する星座占いを信じる気には到底なれなかった。だって、そもそも私のお気に入りはレッドソックスではなく、その永遠のライバルチーム、ゴジラ松井が在籍したニューヨークヤンキースなわけだし。

であるからして、ただの缶コーヒーとは潔くおさらばすべく、その場で一気に飲み干して、少し大人気ないとも思ったが、むしろ厄払いするかのよう空き缶をコンビニ前のゴミ箱めがけて放り投げたのだった。

元ラッキーアイテム君は、アスファルトの上に緩やかな曲線を描きながら、さながら商店街の流れ星のように3メートルほど飛行した。そして吸い込まれるようにゴミ箱に設けられた穴の中へと姿を消した。まるで、家の壁に空いた小さな穴にボールをとおし、向かいの木立に命中させ、一人キャッチボールをしてみせて川上哲治を驚かせた星飛馬なみのコントロールだった。

見たか、ソトコバ君。

「禁煙とは、つまり生き方を変えることなり」。それを試みたことのある者ならば、誰もが一度は目に耳にしたことのある言葉だろう。その格言めいた響きは、禁煙願望のある喫煙者にとって、海に向こうの黄金都市バビロンのようなイメージとなっていていつも脳裏のどこかに張りついているのに違いない。黄金都市には行ってみたいされど、そこへたどり着くには一人でこの広い海原を渡り切らなければならぬ、と。

歴史上の格言がいつも真実を語っているわけではないだろうし、まして禁煙三カ月目の私が言うのもなんなのだけど、この格言にかぎって、それは事実であるように思う。

平たく言ってしまうえば、禁煙前と後では時間の使い方がまったく違ってくるのだ。つまり、なにもしていないという時間がなくなる。あるいは、怠惰な思想家から行動家へと舵を切らざるをえなくなる。岸边でただのんびり本を読んだり、釣り糸を垂れたりといったスナフキンの行為は、バビロンにむかってひたすら櫓をこがんとする者にとってはほとんど自殺行為になるのだ。

そうして我々禁煙を誓った者たちは、櫓をこぐにふさわしい代替行為を日常生活の中に探すこととなる。

それはなんでもいいわけで、なにか一つのことにと絞り込む必要もないのだが、おそらくは、運動、スポーツといったジャンルがそこに入り込んでくるケースは非常に多くなるだろう。禁煙と運動が互いに持つ性格は、双子の兄弟みたいによく似ているからだ。困ったことに、ともに三日坊主で終わる確率が高いというマイナス要因まで。

しかし、ここに救世主があらわれる。仕事に追われ、決まった運動時間が思うようにとれないサラリーマン諸氏に。その単調さと過酷さに耐えられないかつての怠惰な思想家たちに。それは今、本や釣り竿のかわりに私の手のひらに収まっている。任天堂『Wii』。これだ。

コンビ二弁当を食した私は、ジャージに着替え、一人居間のテレビに向かってバーチャルベースボールに興じていた。なにしろ、ここ二カ月近く毎晩の日課にしているから、元高校球児という肩書きを考慮したとしても腕前は中々のものだ。

おそらく、このバーチャルベースボールが、星飛馬における大リーグボール養成ギブスのごとく、壁の穴をもとおすコントロールをこの私にさずけたのは確かだろう。高校時代はノーコンゆえの控えピッチャー兼代走専門に甘んじていたこの私に。

もしそうであるなら、私のラッキーアイテムは缶コーヒーなどではなく、この『wii』であるべきだ。だって、缶コーヒーが私のトラウマやらコンプレックスやらを取り払ってくれるとは到底考えにくいけども、『wii』ならば、私の心身だけでなく、妻のダイエツトにだって役立つ可能性があるのだから。本来は。

九回表。ツーアウト、ランナー二塁。ピッチャー・ヤメメがセツトポジションから第一球を投じようとしたとき、60年代風の少しサイケがかった綿雲の上を、優雅に浮遊するかのような『ワイルドサイドを歩け』のイントロが、ドームいっぱいに響きわたった。

それはこれまで人生における「ワイルドサイド」を歩いたためしのない私の着メロであり、ここ最近の私的なテーマソングであった。右手から落ちたボールがマウンドから人工芝へとコロコロ転がってゆく。それを見た『wii』審判は、まるでオーバーなゼスチャーによって自身のバーチャルな存在感をおぎなうかのようになり、私にむかってボールの判定を下したが、これも致し方ない。試合中断だ。私は急ぎテーブルの携帯に手をのばした。てっきり妻からの電話だと思ったのだ。忘れたメールのかわりにかけてきたのかと。しかし、今になってそんな気づかいがのこっているぐらいならば、はじめから家をでていたりはいらない。

やはり、電話の主はまたしても「平之助」課長だった。とっくに

勤務時間は過ぎているのに。もしかしたら、彼は部下との通話やメールが無料になるサービスを携帯会社と個人契約でもしているのではあるまいか。略して「部下割」とか。

そのサービスには、上司とのメールや会話が無料になるというコースもあるかもしれない。こちらは略して「上司割」。

いいや、そんなものあるわけない。あっても申し込む人間がいなから。一日の着信履歴がほとんど一人の上司に限定されている私でさえ。いいや、私こそ。

「小柳さ、タニシゲ君からなにか連絡なかったか？」

声のうしろから聞き覚えのある喧騒が聞こえた。どうやら課長、残業あとに行きつけの焼鳥屋の暖簾をくぐったらしい。昼は蕎麦屋、夜は焼鳥屋。「部下割」の加入者は、いまだ新橋的サラリーマンライフを堅持実行しているのだ。

「タニシゲ君ですか？ ないですけどね。彼がどうかしたんですか？」
「それがさ、どういわけか昼前に会社から出たつきりもどってこなかったんだよ」

それは蕎麦に飽きたからでしょう。ついでに会社にも。それから、あなたにも。

とりあえず試合続行。スタジアムの観衆が私を待っている。右手に『wii』のコントローラー、左手にはグローブでなく携帯電話を握りしめながら、私はふたたびリビングのバーチャルマウンドに立った。

バッターボックスにはなぜか「平之助」課長とよく似たベテラン選手が、焼鳥の串の代わりにバットを持って立っている。マスクをかぶったソトコバ君らしきキャッチャーが、ミット下にのぞかせたサインは頭部をかすめる危険球。マウンド上の私は、昔の相棒にむかって一度深くうなづいた。

「とにかく、なんでもいいからなにか情報が入ったら、すぐに私の

ところに連絡してくれ。いいな、これは緊急事項だから」

「承知しました」

電話を切ると、バーチャルスタジアムのホームベース上では、ちょうど課長らしき選手がグラウンドをあとにしようとしているところだった。担架にのせられて。

私はできるものならマウンドをおり、意識朦朧としている上司にむかって、詫びを入れるかわりに、二言三言たずねたいことがあった。そのタニシゲ君の肝心の携帯番号とアドレスを。それから、それが本当に緊急事態であるのなら、あなたは焼鳥屋でなにをしているのですか、と。

でも、面倒なので全部ヤメにした。こっちだって緊急事態なのだ。ツアアウト満塁のピンチなのだ。

すると、今度は玄関のチャイムが試合の流れに水をさした。性懲りもなく私はまた一瞬、妻が帰ってきたのかと思ってしまった。それで今日はわざわざメールしてこなかったのか、と。いや、よそう。いい加減とどかなかったメールを希望材料として使うのは。

玄関のチャイムは二度鳴った。インターホンのボタンを押す前に、私はなぜかタニシゲ君がウチの玄関の前に立っている姿を思い描いた。しかし、こちらが携帯番号も知らないのに、あちらが私の自宅を知っているはずがない。それに、そもそもどうして私の宅を訪れる必要があるのか。

案の定、インターホンのスピーカーからは聞き覚えのない中年男らしき声が返ってきた。だが、その言葉はある意味、果たされなかったタニシゲ君の電撃訪問以上に想定外なものだった。

「小柳さん、電報です」

スピーカー越しに男が言った。電報？ここ数年、年賀状一通とどいていない私に。いったい今度はどんな緊急の要件なのか。

なにやら地球のどこかから、見知らぬ誰かが私にむかって大いなる危機を知らせようとしているみたいなの胸騒ぎがする。そうでなけ

れば、振り込め詐欺にとってかわる電報を使った新手の詐欺か。

いや、それは新手の詐欺でも、地球のどこかの見知らぬ誰かのものでもなかった。ただ、やはり私の身の危険を知らせているようではあった。

玄関のドアを開けると、グレーの制服を身につけた郵便配達員が立っていた。はて、配達員の制服はいつからグレーになったのだろうか。赤いオートバイに深緑だか紺色だかの制服がトレードマークだったような気がするが。民間化にともないカラーも一緒に変えたのだろうか。おかしな電報の文面に目を走らせたのは、そのグレーの背中がたしかに薄暗いマンションの廊下に消えてゆくのをレンズ窓から確認したあとだった。

妻からの電報だった。

形は違えども、ようやく一日の終わりに待ちわびていたものを手に入れて、本来なら胸をなでおろすなり、喉に引つかかった異物かとれたような感覚にひたるなりもしたかったのだが、薄い一枚の紙切れを手に私が抱いた印象は、はたしてこれは本当に妻からの電報なのだろうか、というものだった。

それはまるでどこかの誰かが、彼女の名を偽りよこしてきたようなのだ。電報特有の箇条書きめいた文体をのぞいても、やはりいつもの占いメールとは調子が違っていた。

もしも、この悪い予感が当たっていたとしたら、最初の胸騒ぎは決して間違いではなかったことになる。どこかの誰かが私に警告を発しているのか、それともなにかの罠にかけようとしているのだ。

いやそれだけではない。もしかしたら、これまで毎日のように私が受けとってきた占いメールも、妻からのものではなかった可能性だつてでてくる。

なにがなんだか分からなくなってきた。今この場で私がなさなければならぬことはなんだろう。バーチャルマウンドにもどってあ

とワンアウトをとり、ゲームを終わらせることが。いいや、たぶん、絶対、そうではない。

私はふたたび電報の文面を目でおった。そこには読みづらいカタカナ文字がこんなふうにつづいている。

「デンワツナガラス デンポウウツ

スグニゲロ アルガクル

レンラクコウ」

私は30分ほど熟慮したあげく、ようやく妻と連絡をとることにした。一人で悩んでいてもラチはあかない。

だが、やはりダメだった。携帯もメールも、備え付けの電話からも繋がらない。もしかしたら、大規模な通信障害でもおきているのだろうか。さつき課長と携帯で話したばかりだが、「部下割」コースだけは例外なのか？

しかし、この八方塞がりの悪状況が、逆に電報がたしかに妻からのものであることの確証を高めてくれもした。「部下割」課長に電話して、つながるかどうかためてみようかとも考えたが、それは思いとどまった。

とにかく逃げるのだ。今すぐに。でも、いったいどこへ？

あれこれと考えたあげく、私が選んだ行き先はいつもの駅だった。馴れ親しんだあの中央線プラットホームだった。もしも本当に『R』が存在していて、ヤツが私のところに来てくれるというのなら、ヤツを返り討ちにできる場所は、あそこをおいてほかにはない。

私はジャージの部屋着から、ソファアに脱ぎ捨てたままの我が戦鬪服たるスーツに着替え、リュックを背負ってふたたび部屋をあとにしたのだった……。

『偽R35』。そんな、田舎の人々にとってはまったく意味不明な単語が、都会の住人たちの口にのぼるようになったのはいつごろからのことだったろうか。

詳しいことは知らないけども、およそ現代の都市伝説なるもの全

般がそうであるように、それはインターネットを発信源に、口コミで広がっていったことはたしかだ。

もっとも、れっきとした都民ではあっても、私たち夫婦みたいにそんなこととはまったく無縁に暮らしていた者たちもいて、少なくとも私たちに関していえば、それで生活するのに困るようなことはなかったし、かえって知らなかったときのほうが幸せですらあったような気がする。とにかく、夫婦関係は今よりマシだった。

ただ、世の中の流れに長けた人々の間では、『偽R35』の存在はずいぶん前から噂になっていたようで、それによれば、事の発端は、のちに『偽R35』と呼ばれるようになるその雑誌自体というよりは、ある一人の奇妙な男の存在が、どこかしらの掲示板なりブログなりに書き込まれたことによってはじまっているのだとか。

その書き込みをした人物を仮に「ヤモメB」としよう。そしてある朝、毎日のように利用している最寄りの駅ホームで、デジャブと似たようできて、どこか異質な感覚が、彼の脳裏に押しよせたと仮定しよう。

それは十数年振りに開かれた同窓会の席で、懐かしい同級生と語りあいながら、あとになって、じつはそれがまったくの別人であったと判明したような感覚にちいかもしれない。ヤモメBは、いつもと変わらないはずのプラットホームの風景の中に、ある違和感を感じてふと足をとめたのだ。

彼の視線の先には一人のサラリーマン風の中年男が立っていた。Bはその男に見覚えがあった。たしか昨日の朝も、いや一昨日も、同じ時間に同じ場所に立っていたはず。『R35』という、ヤモメ自身が勤める会社が出版する無料情報誌の前に。

グレーのスーツに身をつつんだその男は、どこか必要以上に無機質なオーラを周囲にはなっていた。まるで毎日決まった時間にそれを眺めにくるようインプットされたサラリーマン型ロボットのよう

しかしこれだけのことであれば、単に鉄仮面の下に変わった趣味を隠し持ったサラリーマンか、あるいはそれでも貴重なお客さんであることにかわりはない、といったぐらいの話で終わり、わざわざインターネットに書きこむような出来事でもない。

ヤモメも思い直したようにそろえていた足をふたたび運びだし、通勤客の列につづいてホームに入ってきた電車に乗りこもうとした。そのうしろをサラリーマン型ロボットがとおり過ぎてゆく。これで何冊目かの、同じ雑誌の同じ号を今朝の収穫物として小脇に抱え。やれやれ、とヤモメ。ふと、その額に大きなホクロがあることに彼は気がついた。しかも、ちょうど目立つように額の真ん中に。

はて、あんなものが昨日もついていたただらうか。ロボットにホクロは必要だらうか。

昨日は目にも入らなかつた男のホクロが、今朝はまるでホクロそのものが男を動かしているかのように見えた。あたかもマトリックス上のエージェントのごとく、それに触れたとたんべつのなにかに姿を変えてしまう装置のような。今はなるだけ目立たぬよう、地味な勤め人の姿をしてはいるが。

しかし、それにしてもたかだかホクロ一つ、ハタから見れば、決して大騒ぎするようなことではあるまい。だがヤモメの頭は、はじめてパソコンを前にした老人のごとく混乱していた。それは永遠に解けない謎かけみたいな顔をして、茶の間のテーブルに、彼の頭のVIP席に、座り込み、その思考を堂々巡りの迷宮へと誘おうとしていた。はたして、あのホクロは昨日もあつただらうか、と。あるいは、まったく役に立たないヘルプ機能とはいったいなんぞや、と。

そんなヤモメサラリーマンの困惑をよそに、ホクロ男は冷めたグリーの背中を見せながら静かにエスカレーターをおりてゆく。けれどその時、ヤモメは謎かけの答えをみちびくきっかけを、ホクロ男自身の後ろ姿から見つけたのだった。

その手にはなにも握られていなかった。ついさつきまで脇に挟んでいたはずの『R35』が、そこから忽然と消えていた。ホク口男の両腕はロボットのそれどころか、今は羽ばたく鳥のようにどこまでも軽やかだった。

アレを、男は目にも止まらぬ速さでどこかに投げ捨てたのだろうか。あるいは、手品師のような芸等でもってスーツの中に潜り込ませたのだろうか。たぶんどちらの可能性としては低いだろう。むしろ、最初から無料情報誌など持っていなかったと考え直したほうが自然なくらいだ。

すると舞台の袖で出番を待っていたかのように、三人の中年男たちがヤモメの視界に入ってきた。一昨日のホク口男が、昨日のホク口男が、そして今朝のそれが、グレーな三つ子の『アビーロード』のように一列になって、朝のプラットホームをパレードしてゆく。先頭に立って彼らを引率するのは、白スーツのジョン・レノンではなく、いつも笑顔の駅員ミッキーだ。

ミッキーは『R35』が並んだワゴン棚の前で立ち止まった。ホク口男三兄弟は、引率者の笑顔の指示のもと、それぞれ持参した紙袋から真新しい『R35』もどきを順々に差し込んでゆく。その一連の作業が完了すると、彼らはプラットホームをUターンしてきてふたたびヤモメの横をとおる。振り返ると、つかの間のパレードは消えている。

それはヤモメ自身の記憶の奥底にあった映像だった。彼はたしかに見ていたのだ。抜き取るでなく、差し込んでいたホク口男の行動を。けれども、彼の頭のヘルプ機能は老人にとつてのそれと同じように役には立たず、誤った動作を修正できなかった。誰も人がそんなことをするとは考えにくい。毎日決まった時間に駅のプラットホームに置き土産をのこしていく勤め人がいるとは。ヤモメBの目の頭の、動きは通常の人々のそれにならっただけなのだ。彼もまたマ

トリックスの住人にすぎない。ほかの人々と同じように、誤った記憶をインプットした一体の。

最初にプラットホームに立ったときに感じた違和感の正体をようやく突きとめたヤモメは、はたして男がいたいなにを置いていったのか、電車を一本やり過ぎすしながら、興味本位にワゴンの中を探ってみることにした。

それは通勤途中に書きためた過労気味の詩集なのか。はたまた、古文書に由来する埋蔵金の在処を記したトンデモ本なのか。どちらにしても、ただのゴミくずではないような気がする。

だが、結局のところそこからは埋蔵金よろしくいくら探ってもなにもでてこなかった。ゴミも、ゴミくずのような詩も。あつてしかるべき『R35』以外には。

ついにヤモメの頭はフリーズしてしまう。買ったばかりの老人のパソコンよろしく。

それからの事の次第は誰もが予測できるだろう。仕事から帰ってもまだ朝のプラットホームの一件が頭にこびりついてはなれないヤモメは、コールセンターに助けを求めるパソコン老人と同じように、ネットワークに駆け込んだのだ。そしてブログなり掲示板なりに一連のホク口男の行動を書き込んだ。ほどなくしてビジターたちからの反応があらわれた。曰わく、「ホク口男とはいったい何者なのか」。「男は棚になにを隠したのか」。「なんの目的があつて毎朝そんなことをしているのか」云々。

インターネットの電波にのって憶測が憶測を呼んだ。そのうち自分も中央線のプラットホームでホク口男を目撃したという者もあらわれた。そして、ワゴンにはやはり『R35』以外には見当たらないかかったと書き込むのだ。

一人が、ワゴンの中に『R35』以外見当たらないのは、それはホク口男がまさにその『R35』を差し込んでいるからではないかと仮説をたてた。では、なぜわざわざそんなことをするのか。また

一人が、それは『R35』ではなく、じつは本物そっくりの偽物なんじゃないかと、仮説の上に大胆な仮説をかさねる。ホク口男はしだいに『R』というシンボリックな名前と呼ばれるようになり、偽物のほうは『偽R35』と正式に名付けられた。

徐々にあらたな都市伝説の骨格ができあがっていった。ただ、これだけではまだなにかが足りない。都市伝説が世間一般のすそのにまで広まってゆくには、奇妙な現象に見合った、それでいて誰もが共有できる結末を提示する必要があるのだ。

しかし、それをあれやこれやと議論するのは時間の無駄だろう。実際、骨格ができあがってからのネット上での話の展開はそれまでよりもずつとはやかった。だいたい都市伝説というものには、ネット社会が定着するずっと以前から二つの結末しか用意されていない。それは、「夢が叶う」という物理的利益か、「死」という不利益か、いつもたいていそのいずれかなのだ。

『偽R35』につけられ結末は物理的利益のほうだった。つまり、『偽R35』には7つの間違いが隠されていて、それを全部見つけることができるか願い事が叶えられるかというのだ。

「7」という数字がいかに二ワ力都市伝説ばいけども、それが「13」であったとしても「666」であったとしても結果は同じこと。無料情報誌と個人の夢とはもとからなんの因果関係もないのだから。

しかし、その目には見えないはずの因果関係の壁を、どういうわけか見事に飛びこえて、「7つの間違いを見つけて、ついに念願のマイホームを手に入れました!」とか、「ずっと片思いだった彼にコクられちゃった?」とか、そんなことを口走っている人々が巷に大勢いることは私も承知している。だが、そういう彼らの一人でも、公然の前に姿をあらわして発言したという実例は、私の知るかぎりではこれまで一度もない。

それに、仮に「願い事が叶う」という不可能なお約束の疑惑性を

差し引いたとしても、肝心の『R』の存在には最後まで疑問がのこされたままだ。

もしも、個人でこれだけのことをしようとするれば、それ相応の資金と労力が必要になってくるのは間違いない。しかし、そうまでして、いったい彼にどんなメリットがあるというのか？

結局、『偽R35』の一件で一番得をした人間は誰なのか。もちろん、自称「7つの間違いを探しあてた匿名読者」でないことはたしかだ。彼らはただの野次馬の類か、そうでなかったら派遣会社に雇われたアルバイトのはず。無料情報誌がマイホームや恋人をくれるくらいなら、一般誌はハリウッドスターをメイドに雇った豪邸ぐらいならプレゼントしてくれるだろう。彼らが得たものは、よくて小遣い程度の日給だけのはずだ。

たぶん『偽R35』は存在するだろうし、その誌面には7つの間違いも隠されているのかもしれない。でも、『R』なんて男はこの世には存在しない。『偽R35』は会社が仕掛けた情報操作に違いないのだから。社内ではそれこそ社屋の床下に埋められた地雷のごとくタブー視されていて、誰も口にはださないけども。

業界に不況の嵐が吹きつづく中、世にだされた『R35』はまさに社運をかけたプロジェクトであった。他社のまんまパクリ雑誌に社運をかけるというのもお粗末な話だけでも、消費者だつて最初からそれぐらいのことはちゃんと見抜いている。『R35』の発行部数の折れ線グラフは、刊行以来一度も折れ線を描くことなく、想像力の豊かな高所恐怖症の人が見たら足をすくませるほど急降下な右下がり直線を伸ばしていた。

そこに降つてわいたようにでてきたのが『偽R35』の一件なのだ。もしかしたら、会社の上層部の人々はあらかじめこうなることを予測して出版前から影で準備していたのかもしれない。ネット社会に詳しい人間や、放送作家を雇い入れて、広告代理店に発注をか

けて。にしても、決してほめられた行為ではあるまい。

けれど、これがまた組織というものだ。しかも、この陰謀説が真実であったなら、彼らの目論みは見事に的中したわけで、右下がりだった発行部数は右上がりに転じ、スポンサー収入も日に日に桁を繰り上げるかの勢いだ。なにしろ、読者は間違いを見つけようと、目をさらのようにして二つの誌面を見比べるわけだから、当然のように何度も広告ページにも目をとおすことになる。宣伝効果はバツグンなのだ。

かつての影の陰謀者たちは一転、勝利者に。ハリウッドスターのメイドがいる豪邸は無理だとしても、まず昇給に特別ボーナスは間違いないだろう。社内の廊下だって、その真ん中を部下を引き連れ、肩で歩くようになる。いきつけの店もかわる。逃げた女房だって帰ってくる。

「小柳さん、小柳さん」

誰かが肩を揺らしながら私の名を呼んでいた。

臉をあげると、馴染みのプラットホームの風景をバックにタニシゲ君の姿が見えた。

「ああ」と私はこたえた。「タニシゲ君じゃないか。今日は土曜日かい？」

「いいえ、水曜です。水曜日の午前9時です。仕事はじまっていますよ、小柳さん」

フムム。じゃ、そう言ってる君は、水曜日のこんな時間にジーンスにTシャツ姿でいったいなにをしてるんだい。君だってオフィスで7つの間違い探しをはじめている時間じゃないか。それとも私は、夢のつづきをみているのか？

どうもタニシゲ君は、私がいつものプラットホームのお勤めをサボって居眠りしていたと思っっているらしい。まあ、たしかにそのとおりではあるのだが、昨晚、女房からの電報をうけとった私は、この場所で『R』と対決すべく馳せ参じ、いつの間にか眠り込んでし

まったようなのだ。

『R』は妻の忠告どおり来たのか来なかったのか。来ても、私の穏やかな寝顔を見て改心し、引き返したのか。私の体は、固いベンチのせいで首と背中が少々痛むだけだった。

そういつた諸々の事情を、タニシゲ君に説明するのはかなり困難だ。すると、まるで他人事のように、タニシゲ君が口を開いた。

「僕、会社辞めるんです」

そういえば昨日、課長が電話で彼を探していたのをようやく私は思いだした。

タニシゲ君の足元には大きな旅行鞆があった。

「沖繩にいくんです。同級生の実家が民宿を経営してるんで、しばらく働かせてもらおうと思って」

和菓子屋のつぎは沖繩の民宿か。やはり、いざという時に頼りになってくれるのは手堅い自営業者なのか。はて、私にはそういったツテがあったか、なかったか。

「小柳さん、これ課長に渡してくれませんか」

タニシゲ君はジーンズのうしろポケットから白い封筒をとりだして言った。私はそこに並んだ字面を見てとった。

「そういうのは自分で渡したほうがいいだろ」

「頼みます。もう一分一秒だってあの場所にはいたくないんですよ」

まあ、それはそうだろうな。気持ちにはわかる。とくにタニシゲ君の場合は。「退職届」と書かれたその封筒を私はうけとった。ようやく打ち解けたように彼は横のベンチに腰をおろした。

「本当はメールですませようと思ったんですけど、昨日から課長の携帯につながらなくて。それで小柳さんだったら、中央線のプラウトホームにいますかと思ってきたんです」

これまで仕事の上でまったく言っていないほどタニシゲ君から頼りにされたことのなかった私は、せっかくの後輩の言葉を耳にしながら、しかしなんだかすごく嫌な予感を胸に抱いていた。というの

も、懐では携帯電話の着信を知らせるバイブ機能が作動しはじめていたのだ。その画面に目をやらなくとも相手の顔は察しがついた。

「あの、でたほうがいいんじゃないですか」

私の胸の携帯が小刻みな振動を十秒以上もつづけたあと、さすがに耳にとどいたか、タニシゲ君が口をはさんだ。私は背広の内ポケットを指さして言った。

「課長からだよ。どういうわけか私のとはつながるみたいなんだ。昨日からずっと君のことを探してる。でてみるかい？」

タニシゲ君は身震いするように首を横にふった。

「ジーツ、ジーツと、あぶら蝉みたいな携帯はしつこく鳴りつづけた。私はそのあぶら蝉にライバル心を燃やす瘦せたコオロギみたいに言葉をかさねた。」

「いま思いついたんだけどね、こつこつって面白いと思わないか。どこにつながるか分からない携帯電話。iPodのシャッフル機能みたいに、発信ボタンをおすたびに違った番号にかかるんだ」

私のアイデアにたいするタニシゲ君のこたえはシビアだった。「それじゃ電話の意味がないじゃないですか」と彼はそっけなかった。せつかく冗談で言ったのに。

バイブ音は三十回ぐらい鳴ってやっとおさまった。私とタニシゲ君は小さなペットの死を看取るみたいに、しばらく私の内ポケットを一緒になつて見つめていた。そして、どうやら携帯電話がゾンビみたいに蘇ってこないことを確認すると、タニシゲ君のほうから先に口を開いた。なにやらペット葬儀中の会話みたいに神妙に。

「小柳さん、悪いことは言いません。あなたも今後の身の振り方を考えたほうがいいですよ。これ以上あの会社においてもロクなことないじゃないですか」

「辞めてどうするんだい。私には民宿をやってるようなツテも、和菓子屋のツテもないんだが」

「和菓子屋？僕、和菓子屋なんて言ってますよ」

「一つの例えだよ」

「小柳さんは今すぐにカウンセリングをうけるべきです」

「ちよつと話が飛躍しすぎじゃないか、タニシゲ君」

「知ってますか。僕の仕事」

「7つの間違い探しだろ」

「ええ、そう。毎日毎日、来る日も来る日も同じ雑誌の同じページを一日中見比べる。僕は頭がおかしくなりそうで、おかげでハタから見れば決して気づかれない居眠り方をあみだしました」

「でかしたじゃないか、タニシゲ君。でも、たしか君はクロスワードパズルが得意なんじゃなかったっけ」

「クロスワードパズルじゃありません。『ナンプレ』です。あれにはちゃんとした法則があるんです。デタラメな間違い探しとはワケが違う。僕の頭はそんなふうにはできてない。だから一週間でパンク寸前で。でも、聞いた話では、あの囚人の作業を、律儀に半年間もやりつづけた社員がいるそうなんですよ。つまり僕の仕事には、堅物とも呼べる前任者がいたんです」

「へー、そうなんだ。知らなかったな。誰だろう」

「あなたですよ、小柳さん」

「なんだか無性に煙草が吸いたかった。」

あとの記憶が定かでない。覚えているのは、カウンセリングのほかに労働災害を申請すべきだと、タニシゲ君が熱心にすすめていたこと。彼は私が乗るはずだった平日の南方行き電車に乗って旅立っていった。私はそのタニシゲ君をプラットホームで見送った。いや、見送られたのはこちらのほうだったか。

気がつくと電車のシートに揺られていた。ただ、それが南方のリゾート地に向かう列車でないことは、ボンヤリした頭でもすぐに察しがついた。私を正気にもどらせたのは、またしてもあのしつこいバイブ機能だったからだ。コイツが胸のポケットにいるうちは、私

が晴れて自由の身になれることはないだろう。

ボンヤリしているうち、胸の振動はどうにか止んだ。

車内の様子からして、私はいつもの中央線下り電車に乗っているらしかった。しかし、気がつかないうちにせいぶん遠くまできてしまったようだ。シートにはポツン、ポツンと黒い人影が、あたかも昔のパ・リーグの消化試合みたいな侘びしさで孤立しあっている。窓の外にはまるで北の大地を走っていると思わしき黄金色した麦畑の絨毯が、澄んだ青空の下にどこまでもつづいている。いつか秋ビールのCMで見たことがあったような。

いったいここはどこなのだろう。とても東京の在来線を走っているようには思えない。麦畑の中には掘つ建て小屋のような小さな家が点在している。線路と平行するかのようにつづく電線と電柱の黒くて細い影が、その果てにあるかもしれない寂れた町を連想させる。来る車も行く車もない。麦畑で遊ぶ子供たちの姿もない。

電車は太陽の下のカラツポの空間をゴトーン、ゴトーン、と走りつづけた。

車掌アナウンスは一度も耳にしなかった。路線図の掲示のようなものも見あたらない。窓の外は麦畑。こうなったらつぎの駅に着いてみないことには、どの辺まで来てしまったのか知りようがない。それでも、どこかに地名のヒントになるようなものは見えないかと、私はしばらくし外を眺めていたのだが、ヒントどころか、私はこれと同じ秋ビールさながらの風景を、かつて車窓から眺めたことがあったのを思いだした。

あれは福島にある妻の実家へと帰省する最中だった。たぶん栃木との県境辺りの土地だ。しかし、私が乗っているこの電車は中央線のはずで、その中央線が、栃木や福島まで路線を拡張したという話はまず聞いたことがない。

それとも私の両足が、妻に会うために勝手に電車を乗り継ぎ、無意識のうちにそのルートをたどろうとでもしたのだろうか。いいや、

いくらなんでもそんなことはあり得ない。むしろ私の足より私の頭のほうが、妻の実家へとむかう夢をみていて、こんな幽霊列車をつくりだしたと考えたほうがはるかにマトモだろう。それならすべて合点がゆく。夢の中でも携帯のバイブ機能は作動するし、夢ならS u i c a一枚で月にだっていける。

そんな思いから、私はもう一度、車中を見渡した。どうやら私の夢の住人たちはご主人様に似て少し人見知りのところがあるようだ。乗客たちは一つの車両に一人か二人、たがいに絶妙な距離感をたちながら座席に腰掛けていた。

理屈で考えればその中には、かつて言葉を交わしたり、冗談を言ったり笑いあったりしたことのある人々がいてもおかしくはない。高校の同窓生とか。けれど、今はわざわざ席をはなれて久しぶりの再会を喜びあう気にはなれない。それに、あちらが私のことを必ず覚えていても限らない。たとえ相手が私の創造物であったとしても、それよれも、むしろ夢から目覚めたとき、私はいつたいどこにいるのか、そちらのほうがずっと気になっていた。もしかしたら、まだ高円寺駅のホームのベンチで眠っていて、夢をみているのではなからうか。そして、様子をうかがいにきた課長に肩を揺すられながら起こされるのだ。上司は寝ぼけまなこの私にむかって言うだろう。

「おまえが前任者だ、小柳」

あるいは、私を揺り起こすのはまたしてもタニシゲ君かもしれない。彼もさつきと同じように言うだろう。

「あなたが僕の前任者だったんです、小柳さん」

しかし、どうしてまたタニシゲ君は最後の最後になってあんなことを言いだしたのか。もしかしたら、課長あたりから「アイツにだつてできたんだから」とか、毎日のように余計なガセネタを吹き込まれていたのかもしれない。だが、いくら心配されたところで、当の本人にまったくその記憶がないのだからラチが開かない。本来ならもう少しべつの別れ方もあっただろうが、致し方ない。サラリー

マンたるものいつの世も、どこの部署も、さよならだけが人生だ。

そしてまたいつの世も、どこの部署も、おまけに秋ビールの車両にも、去る者がいれば来る者がいる。

驚いたことに、うつむき加減だった私の視線の先には、いつの間にか黒い革靴が力カトを揃えて立っていた。そのつま先は私のほうをむいている。上には薄グレーのズボン裾がのぞいてる。どうも、人見知りばかりだと思っていた我が夢の住人にも、いくらか社交性のある人物がいたようだ。いいや、すっかり忘れていたが、もしかしたらこれが『R』なのではないか？ いい加減あらわれてもよさそうなころだし。

だが、やはりそれは思い過ぎだった。なにしろこれは夢なのだから。私の夢に『R』なんて登場しない。だって、顔も見たことがないのだ。

「オマエ、なんで携帯でないんだよ」

頭上で男の声がした。

「オマエ、なんで携帯でないんだよ」

さらにもう一度。社交性があるのはいいけども、どうもまともな会話ができる相手ではなさそうだった。まるで遠くからリモコン操作されているイカれたロボットみたいだ。いかに自分の創造物であるとはいえ、いささかウンザリ気味に私は顔をあげた。

グレーのスーツの上に無表情な男の顔が見えた。額の中央から大きなホクロが突きだしている。なんと男は、中野駅のロータリーで私が捕まえたサラリーマンであった。どうしてヤツが私の夢にでてくるのか。しかも、なぜヤツの電話に私がでなければいけないのか。その答えをくれたのは、あくまでそれが答えであったならばだが、ホクロサラリーマン自身だった。男は自分の素性とその役目を明かすかのように言った。

「『オマエ、なんで携帯でないんだよ。そんなにクビになりたいのかよ』と、あなたの課長が、あなたに言ってます」

やはり私はカウンセリングをうけるべきかもしれない。タニシゲ君は正しかった。これは専門家に夢分析してもらわねばならない事態ではなからうか。

私の創造物であるはずの中野駅の男は、じつのところ、かの課長と私とを橋渡しするホク口ある媒体にすぎなかった。しかもその課長自体、どう考えても私の創造物であるのに違いない。言ってみれば、偽課長だ。しかし何故、よりによってこの二人なのか。

せつかくではあるけれど、武将好きの上司も、中野駅のサラリーマンも、まったく同じレベルで関心のない私が、これならば首をまわして、かつて夫婦で眺めた秋ビールの風景を、一人懐かしく鑑賞していたほうがまだマシだと考えたのは無理もない話ではある。だが、実際にそうしなかつたのは、偽課長の言葉が、私自身の深層心理を代弁している可能性があるからだ。言ってみればこの状況は、私の無意識が、私になんらかのヒントをあたえようとしておきた珍現象なのではあるまいか、と。

それでは、いったい偽課長はなにを伝えようとお出ましになったのか。まさか、この期におよんで戦国武将伝ということはあるまいともかく、スーツを着た力カシのように突っ立ったホク口男經由に、私は深層心理を読み解く会話を試みることにした。なにか、子供のころに流行った「こっくりさん」を思いだしながら。

「すみません課長、私になんの話があるんですか」

「課長は言ってます。『オレはタニシゲに、「アイツにだってできただから」なんて言った覚えはない』と、言ってます。『オマエはたしかに前任者だったんだ。まだ頭治らねーのかよ』と、言ってます。それから『クビにする代わりに、デスクの中の井上和香のDVDはオレがもらう』と、言ってます。」

「課長、DVDはあげられません」

「『なら、ちよっとだけ貸してくれ』と、言ってます。それから『

オマエがどうして中央線のプラットホームに配置されたのかよく考えてみる』と、言っています。『いいや、考えなくていい』と、言っています。『それはオマエの頭がおかしくなったからだ』と、言っています。『オマエは会社的にお払い箱になったんだ』と、言っています。いかに自分の深層心理とはいえ、私はだんだん腹がたつてきた。よくもまあ又ケ又ケとデタラメばかりをまくし立てられたものだ。『仰ってる意味がよくわかりませんが』

「課長は言っています。『せっかく7つの間違いを見つけて、マイホームの頭金を手に入れようと考えてたのに、オマエは一つも見つけられなかった』。課長は呆れています。そして怒っています。『オレは呆れている。そして怒っている』と、課長は言っています」

もう我慢の限界だった。私はなんだか本当に課長と話しているような気分になってきた。あの大バカ上司と。アンポンタンと。

「頭がおかしいのはアンタだよ」私はホクロ男の瞳の奥にあるだろう、課長の目を見据えて言っちゃった。「『偽R35』は会社の上層部が仕組んだ情報操作なんだ。『R』なんているわけないだろ。マイホームの夢は潔くあきらめるですな」

「『大バカのアンポンタンはオマエだ』と、課長は言っています。『ウチの会社の上層部が『偽R35』なんて、あのクソ長いだけの会議を何百回やったところで考えつくはずないだろ』と、言っています」
「もういい。わかった、失せてくれ」

「『オレの話はまだ終わってない』と、課長は言っています。『ここからが本題だ』と、言っています。『耳の穴をカッポじってよく聞け』と、言っています。『会社はオマエの頭がおかしくなったってことでかたづけているが、オレはその半分ぐらいしか信じちゃいない。じつはオレは、オマエが密かに7つの間違いを見つけたんじゃないかって疑ってる。お互い長いつきあいだ。オレはオマエがそれほど柔な男じゃないことぐらい承知している。どうだ、見つけたんだろ？オレだけには本当のことを話してくれないか。頭がおかしくなっ

たと見せかけてるのは、そのためのカモフラージュなんだろう？」と、言ってます」

「聞こえなかったか？私は『失せる』と、言ってます。『でなきや、また馬乗りになって、今度こそボコボコにしてやる』と、言ってます。『本気だぞ』と、言ってます」

ホク口男の顔つきがかわった。ようやく私はその顔に表情らしきものを読みとった。男は二三歩後退した。

「早くいけ」

私は腰をあげる素振りをした。男は今度は早足で逃げだした。それでも車両の一番端までたどり着くと、こちらを恨めしそうに見やりながら手前のシートに腰をおちつけた。なんとなくオカマっぽい動作だった。私はそれっきりウツチャツておくことにした。

電車はなおも走りつづけた。いったいどこまで行くつもりなのやら。いいや、それを言うのなら、いったいいつになったら私は目を覚ますのやら。窓外の風景は相変わらずで、いくら感傷好きの輩にも限度というものがあろう。

車両の端を見ると、ホク口男はまだそこにいて、今は仕事帰りのサラリーマンよろしく座席で眠りについていた。さらに遠くまで視線をのばすと、チラホラと点在する乗客たちも、みな疲れたように眠っている。考えてみれば、夢の住人たる彼らには、日の高いこの時間帯は本来休息にあてらるべきなのだ。そう考えると、さっきは柄にもなくつい乱暴な口調であたってしまつて、ホク口男には悪いことをしたかもしれない。

彼らにくらべると、ご主人である私のほうはいくら揺りかごのように振動する電車に乗っていてもまったく眠くなつてはこない。むしろ目は冴えている。当たり前か。本当のところ居眠りしているのはこちらのほうなのだ。

経験的に言つて夢の中で眠ることはできないし、携帯電話などにはさわりたくもない。要するにほかにすることもないので、私はホ

ク口男經由に聞いた偽課長の発言内容をあらためて考えなおしてみることにした。

しかし、暇つぶしの思いつきとはいえ、おせっかいな親心にも似たその行動を、私はすぐに後悔することになった。というのも、最初は口からデマカセと切り捨ててはいたものの、今になって考えてみると、偽課長の意見には、なるほどと頷ける箇所がいくつかあるのだ。それは私の考えよりも、私が陥っている環境を的確に説明できたりする。その結果、私は思考の迷宮をさまよい歩くことになってしまった。どこまでも走りつづける電車よろしく。思うに、人はずいぶんときに地図を持ってはいるがために、かえって道に迷ってしまうことがあるようだ。

その一つが妻の件。私はてっきり彼女からの三行半の理由をずっと煙草と星占いにもとめていたけども、あらためて考えてみれば、はたしてそれぐらいのことで十年來ともにしてきた伴侶があっさり家をでていったりするものだろうか。

いや、やはりでてゆくことはあるだろう。なにしろ世間には新婚旅行にむかう空港で別れてしまう夫婦だっているわけだし、会社の同僚なんかは、十萬円の宝くじが当たったのはいいけれど、その使い道で離婚寸前の大ゲンカにまで発展したらしい。夫婦なんて千差万別だ。なにがそこにヒビを入れるかなんて誰にもわからない。逆に言えば、どんな些細なことでも原因になりうる。煙草や星占いでも可能性としては充分だ。

しかし、こう考えてはどうだろう。煙草もいい。星占いもけっこう。だが、そこに亭主の頭がおかしくなったという条件が加わったなら、可能性は一段と高くなりはないか。

もつとも、頭がおかしくなったといっただって、その程度が問題になろう。タニシゲ君や偽課長の話によれば、どうも私が「前任者」であったことを覚えていないのがその根拠になっているようだ。

百歩譲って彼らの主張が事実であったとしても、あくまでそれは仕事上の話。それぐらいで家庭生活に支障がでるということはないはずだ。

つまり、この程度の「おかしくなった」レベルでは、妻が家を立てゆく理由にはならない。そうなるとやはり、三行半の理由は煙草と星占いなのか。それはそれで逆にシヨックだが。

話は振り出しにもどってしまった。私は思わず天井を仰いだ。だが、その視線は完全に上にたどり着く前にピタリと止まった。いま一人の乗客が、ある意味『R』以上に招かれざる客が、目の前に立っていたのだ。

自分の背中が見えたら、それは夢だという話はよく聞くけども、私が見ていたのはその正面からの立ち姿だった。でも、こちらとしてはすでにこれが夢であることは承知しているから、どの角度であろうが関係ない。それよりもいつたいなんのつもりでこの電車にあらわれたのか。私はなんだか無性に腹がたつた。とてもじゃないが、「やあ、久しぶり。元気だった？」とか言って握手を交わす気にはなれない。むしろ話すことなどまるでない。いつそホク口男とのほうが会話がはずむぐらいだ。

私は私を見上げた。その男は私にそっくりだった。まったく嫌になるほどに。偽課長のつぎはついに自分のクローンのお出ましというわけだ。もしや、細かなシワの数まで同じだったりして。いや、きっと同じなのだろう。ホク口の数は言うにおよばず。

いや、そうではない。これはただのクローンというわけではないのだ。コイツにはちゃんと名前がある。私はそれを思いだした。コイツは「ヤメメ」なのだ。

ただ、ようやく対面をはたしたヤメメには、表情というものがまるでなかった。ミスター・スポックばりのむっつり顔でこちらを見下ろしている。たしか月曜の残業帰りに車窓に映った自分の顔をのぞきこむとこんな感じではなかったか。その冴えない中年面と、背

広の下に隠れた貧弱な肉体を想像しながら、そりや女房もでていくわなと、私は今さらながら一人心中でゴチた。

もしかしたら、コイツはそれを知らせるためにわざわざあらわれたんじゃないだろうか。汝自身を知れ、と。まったく大きなお世話だ。女房はでていったんだから、もうそれでいいではないか。

しかし、どうもそうだった理由ではなさそうだった。

ヤモメはスーツの内ポケットからなにかをとりだした。サラリーマンの哀しい性が、思わず名刺交換と勘違いしてつい私も内ポケットに手をのばしそうになってしまったが、自分同士で名刺交換してどうしようというのか。しかも夢の中で。

そうではなく、ヤモメがとりだしたのは煙草ケースだった。銘柄はマルボロ。どういうわけだろう。私は国産煙草一筋で、最後に吸っていたのはマイルドセブンの1ミリgだったはずだが。ホク口の数は一緒に嗜好となると別なのか。

するとヤモメはマルボロを一本、私にむかってさしだすのだった。心なしか、友好的な笑みを浮かべて。

「やめたんだ、煙草」

私は首を振って言うてみせた。さて困った。それでもアチラさんは、まるで言葉が通じないみたいに愛想よくすすめてくる。仕方ないので、私はケースから一本ぬきとった。ヤモメはポケットからシルバーのジッポをとりだして火を点けた。私は危うく礼を言いそうになった。

はたしてこれは禁煙を破ったことになるのだろうか。久しぶりの一服に私はいろんな意味でムセそうだった。喉はイガイガ力するし、頭はクラクラする。それでも二十年も吸っていたのだ。三口ほど吸ったらいくらか美味しくなってきた。

蒼い煙が車両の天井へとゆっくりのぼってゆく。私はそれがヤモメの姿とかさなっていることにしばらくしてから気がついた。ただその時、すでにヤモメの影は煙と見境がつかなくなっていた。つい

には白い亡霊のようになってスウツと消えてしまった。

もしや自分が死ぬ時もこんな感じなのだろうか、私はふと思った。ふたたび私は怠惰な思想家へと静かにもどっていくようだった。ぼんやり煙を眺めながら。

きっと私は7つの間違いを見つけたのだ。そして妻が家をでてゆくことを望んだのだ。

電車が停まったのは黄昏の国だった。

私がマルボロを吸い終えたころ、電車は振動を弱め、鈍い悲鳴をあげながら動きを止めた。なんだか恐竜やマンモスみたいな死滅した巨大生物の最期を思わせた。

車両のドアが重い音をたてて開いた。首をひねると、窓の外にプラットホームめいた白い石畳が見えた。辺りの風景はなにも変わらない。こんな場所で降るされても困るのだが。

ほかの乗客たちはいったいどうしたものか。車内を見わしてみれば、ホク口男をふくめてそこにはもう誰もいなかった。もしかしたら、みんなヤモメと一緒に消えてなくなってしまったのかもしれない。ガランとした巨大な鉄の棺桶に一人いるみたいだった。

私は慌ててプラットホームへ飛びだした。

ドアを閉じた電車は、遠い鐘のような音を響かせながら走り去った。その最後尾が見えなくなると、穂を揺らす風と黒い小鳥たちのさえずりだけしか聞こえなくなった。麦畑の中に納屋のような家が一軒だけ建っていたが、とても人が暮らしているようには見えなかった。

プラットホームは極端に短かった。プラットホームというより、誰かの墓の上に立っているみたいだ。昔の偉い人ならば、これぐらいの墓はつくつたらう。

しかし、よくもこんな場所に人をおろしてくれたものだ。改札もなければ、表札もない。当然のように駅員だっていない。ようする

に駅が駅であるための条件がまるで備わっていない。それでも辛うじてこの場所が駅だとわかったのは、狭いホームにベンチと自動販売機が両首脳のようにならんでいたからだ。木目の判別できなくなつたような使い古されたベンチと比較すると、自販機のほうはまるで国道沿いのモーターみたいなチ力チ力と派手に光っていた。たとえ埋葬されているのが偉人でなくとも、普通、人の墓の上にこんなものは置かない。

暑くもなく、寒くもなかった。麦畑をわたる風が頬をつたい、髪を優しくなでた。太陽は高く、空はどこまでも青い。ロケーション的にいったなら、ここは間違はなくビールといきたいところだ。そして、自販機の銘柄には、目的に叶った缶ビールも入っていた。だが、コインを入れ、私が選択したボタンは、最初からこうなるべくしてなつたように、缶コーヒーであった。

妻が言っていたラッキーアイテムとは、コンビニで当てたレッドソックスのキャップのことではなく、これのことだったのかもしれない。コーヒーではさすがに酔えないけど、たしかに何も無いよりずっといい。心して飲むべきだ。

しかし、その夫婦の最後の絆とも呼べる代物を、不覚にも私はプラットホームの石畳におとししてしまったのだ。でも、それには致し方ないワケがあつたのだ。

缶を口に運んだとき、さきほどの納屋が視界に入った。そこまではいい。でも、今回はその傍らに、こちらをじっと見つめている人影が立っていた。

私の一瞬のイメージでは、その光景は『大草原の小さな家』というよりは、ヒッチコックの『サイコ』により近かつた。丘の屋敷脇に黒い人影が映つたその構図。たしか映画のポスターにもなつていた。サイコスリラーの先駆的な作品。そんなわけで、コーヒー缶は私の手からすべり落ちていったのだ。

たしか映画の中で、殺人鬼のアンソニー・ホプキンスは自分の母

親に変装していた。まさに「サイコ」たる由縁。私の視野にいる影の男は、どうやら「サイコ」ではなさそうだったが、それに負けず劣らずおかしな格好をしていた。その輪郭はどう見ても、袴の帯に刀をさしたサムライのそれなのだ。そして、あるうことか、男はこちらに向かつて歩きはじめたではないか。

両腕を懐に押し込み、肩で風を切るようにサムライ男は麦畑をわたってくる。まるで『用心棒』の登場人物みたいに。真っ直ぐプラットホームにむかってくる。さては、つぎの電車に乗るつもりなのだろうか。それとも私になにか用事でもあるのか。こちらにはひとまず用心棒を雇うような用件はないのだが。

黒ずんだ人相に武将髭。その真ん中を棒で突っついたような二つの白目に真っ黒な眼球が張り付いている。そして腰には黒く細長い竿が。なにやらサムライ男の印象は黒いカカシのようであった。

その黒いカカシの表情がいよいよ読みとれるぐらいの距離まで近づいてくると、はたしてどうするつもりだったのか、自分でもわからないうちに私はベンチから腰をあげた。

しかし、その予期せぬ行動が、向かい合いながらしだいに間隔を縮めてゆく二人の、その後の互いの行動を決定づけることとなった。サムライ男は、私が立ちあがったのを見てとるや、獲物のネズミが逃げだすと思ったか、やおら腰の剣を抜き、黒狐みたいな形相で麦の穂を荒波のごとく飛び越え飛び越え、こちらに駆けだしてきたのだ。

いったいなにがそんなに気に障ったのか。私になにをしたというのか。まるでここで遭ったが百年目、ついに親の仇を見つけたかのような勢いだ。もしかしたら、せっかくの武将ブームにチャチャを入れた輩を成敗しにやってきたサムライの化身なのか。あるいは例の『戦国武将サークル』に雇われた殺し屋か。

いずれにせよ、こうなったら私がとるべき行動は一つしかない。とにかく早いとこ逃げるのだ。『エルム街の悪夢』みたいに、夢の

中の死が現実の死に直結するなんてもなりかねない。

勝算はある。こちらはジョギング用のスニーカー。あちらは恐らくワラ草履。身長だって現代人である私のほうがずっと高いはずだ。骨格や摂取しているエネルギー量が如実に違うのだ。なんたって、長いこと欧米型の食生活を実践しているわけだから。

だが、その欧米型の食生活は肝心なところで足元からスクわれることになった。

きびすを返し、サムライ男から逃げ去るべく最初の一步を踏みだしたときだ。私は、甲高いサムライ男の奇声をあらぬ方向から耳にした。同時に間抜けな自分の悲鳴まで。あらぬ方向から。

なにか山鳥めいたサムライ男の叫び声。驚いた黒い小鳥たちが麦畑からいつせいに飛び立ってゆく。一方、踏みだした私の右足はちよつど転がった缶コーヒーの上のつかっていた。サーカスの熊みたい。

今度は私がダイブする番だった。コンビニのゴミ箱に向かって放物線を描いた缶コーヒーのかわりに。慣性の法則とテコの原理によって。いや、テコの原理は違うだろうか。

ともかく私は飛んだ。不本意ながら。視界には太平洋のように広がる麦畑。もしかしたら、このまま黒い鳥たちに混じってどこまでも飛んでいってしまうのではないかとも思ったが、幸か不幸か、そういうことにはならなかった。私の体はすぐに下降にむかった。これは間違いなく重力の法則によって。

しかし不思議なのは、どうして我々は夢の中でまで律儀に物理の法則を守ろうとするのか、ということだ。夢なのだから、地の果てまで飛んでいっていいはずなのに。

目前にプラットホームの石畳が迫っていた。

「大丈夫ですか、お客さん」

誰かが私の耳元でつぶやいていた。若い女性の声だった。私はそ

のお客であるらしい。どんな種類の店だか知らないけど、少なくとも私の長かった悪夢はようやく終着駅にたどりついたようだ。でも、気のせいか頭が痛い。ズキズキする。

「ああ、大丈夫、大丈夫」

女性の手前、とりあえず私は強がってみせた。なにが大丈夫なのかわからないまま。なにが大丈夫なのかかわからないまま。なにが大丈夫でないのかかわからないまま。

「でも、血がでてますから。手当てしたほうがいいですよ」

へ？血？まさかサムライ男に討たれてしまったのか。

ようやく私は重いまぶたを開けた。夜の高円寺駅にいた。たしかに広い意味では店なのかもしれない。

立ち去ってゆく女性車掌のうしろ姿が見えた。

きつと彼女は私を仕事帰りの酔っ払いだと思ったのだろう。

どうやら居眠りしているうち、プラットホームのベンチから転げ落ちて頭を打ったみたいだった。正確な状況を把握すべく、私はふたたびベンチに腰を落着けた。横の席には、いま一人の中年サラリーマンが、酔いつぶれてイビキをかいている。ああ、我が同志。ちょうど私も、彼のようにベンチで醜態をさらしていたわけだ。いや、私の方はもつとヒドい。なにしろ転げ落ちていたわけだから、指でふれると、たしかにこめかみ辺りから軽い出血があった。でも、痛むのはそこだけだ。無論、刀で切られたような跡はない。

腕の時計を見ると、深夜0時を少し回ったところだった。たしか自宅マンションをでたのが9時ぐらいだったから、あれからまだ3時間しかたっていないのだ。『R』の到着を待ちかまえるつもりだったはずが、その間にすっかりベンチで寝入ってしまったわけだ。そうして、行方不明中のタニシゲ君を駅で見送り、遠く秋ビールの麦畑を眺め、まったく無意味でバカげた思考の旅をつづけた挙げ句、最後にはサムライ男に命を狙われたという次第。

ヤレヤレだ。まったく『R』といい、ウチの女房といい、人騒がせにもほどがある。それを一瞬でも信じた私も私だが。おかげです

すっかり体も冷えてしまった。明日も仕事だ。さっさと家に帰って温かい風呂に入ることになろう。

私は一度は覚悟をきめた『R』との決闘を放棄し、なおかつ悪い夢もマルボロの煙と一緒に忘れることにして、さっさとベンチの指定席から腰をあげた。

しかし、私の足は半歩前にでただけで止まってしまった。いつもならば気にもかけないはずのプラットホームのゴミが、なにか特別な意味をもった唯一無二の存在感をしめして目の前にあった。

コーヒーの空き缶が落ちていた。かつての私のラッキーアイテム。記憶は定かではないけども、なにやら夢の中で落としたものと同じ銘柄であるような気がする。

たしかに幸運な偶然だった。もしもあれが缶コーヒーの硬いスチール缶でなく、ビールの柔らかなアルミ缶であつたなら、私の足はそれを踏みつぶして、プラットホームの上をダイブすることもなく、結果、夢から覚めることのできなかつた私は、サムライ男の刃にかかつていたかもしれないのだから。

そう考えれば、ラッキーアイテムどころか、命の恩人ということになる。缶コーヒーに救われる男。いいや、それともメールをくれた妻か。どちらにしても、そんな私が、このまま空き缶をプラットホーム上に放置しておくわけにもいくまい。腰を曲げ、私はそれに手をのばした。

すると、いったいどんな夢をみているのか、ベンチのオッサンが、まるで呑み屋で交わされる馴染みの挨拶みたいな調子でこんな寝言をつぶやくのが聞こえた。

「よーこそ、ワイルドサイドへ……ムニヤムニヤ……」

もしかしたら、『R』はすでにやって来ていたのかもしれない。駅のエスカレーターを下りる間、ふとそんな考えが頭をよぎった。私が眠っている間に。まさか、さっきの寝言のオッサンがそうだった。

たりして。そういえば、あのオッサン、薄いグレーの背広を着ては
いなかっただろうか。

いや、考えすぎだ。きっと、あのオッサンはルー・リードのファ
ンなのだ。駅のベンチで居眠りしている中年サラリーマンが、ルー・
リードのファンであってもなんの不思議もない。だって、ルー・リ
ード自身、すでにいいオッサンのはずだし。

それとも、あれは私が言った寝言だったのかもしれない。あのオ
ッサンはそれを寝耳にして、自分の夢の中に取り込んでしまったの
だ。ちょうど雨の日に、雨の日にあったことを思いだすように。

はたして、あのオッサンのワイルドサイドとはいかなる場所なの
か。刀をかざした男に追いかけていないといいのだけど。

いや、いけない、いけない。こんなことばかり考えていると、ま
たヘンな夢の中に迷いこんでしまう。ともかく、アレコレ考え事を
するのはもうヤメにしなければ。このままでは身がもたない。今、
私がしなければいけないのは、傷口を洗い、さっさと家に帰って風
呂に入ることだけだ。

頭上のプラットホームを振り返ることなくエスカレーターをおり、
私は改札脇のトイレへと立ち寄った。

水道の蛇口を開き、鏡にこめかみを映しだして傷口の具合を見た。
だが、おかしい。なにかヘンだ。ようやくそこで私は、その傷より
もよほど大きな変化が自分の身に起きていることに気がついた。

私は薄いグレーのスーツを着ていた。

私の眉間には大きなホクロがあった。

第15話「マスク美人」

司会者「中野ケーブルテレビをご覧のみなさん、こんにちわ。時計の針は午後2時を回りました。『マルシンマーケット』のお時間です。司会の萬寿えり子でございます。どうぞよろしくおねがい致します。

寒さも和らいで、日ごと春めいてきましたね。いかがお過ごしでしょうか。でも、あれですよ、暖かくなってくると困るのが、花粉。スギ花粉じゃございません？最近多いでしょう、花粉症の人。じつはですね、私もそうなんです。花粉症。去年まではなんともなかったのに。

五月の連休に私が主催してる劇団の公演があるんですけどもね、ちなみにチケット絶賛発売中なんですけど、もう台本読むにも目がかゆいし、鼻水はでるしで。マスクと目薬が手放せません。必需品です。毎日アエスのバックに入れて持ち歩いてます。

前置きが長くなりました。今日、『マルシンマーケット』が自信をもってご紹介する商品がこちら、『マスク美人』。

花粉もそうですけど、最近マスクをすることって多くなったとお思いになりませんか？新型インフルエンザに花粉症、鳥インフルエンザなんてのもありますでしょう？考えてみたら、だいたい一年のうち半分はマスクしてるんじゃないかってゆうぐらい。

せっかく新しいワンピース買って、あらやだ、私だってワンピースぐらい着るんですよ。3Lですけど。でもねー、口元に保健所の人みたいなマスクじゃ、春のファッションも台無しですよ。そういう視聴者の皆様からのお嘆きの声をよく耳にするんです。

そんな方に強くおすすめしたいのがこの『マスク美人』なんです。え？それただのマスクじゃないかって？なにがどう「美人」なんだって？そう思いなるでしょ。でも違うんです。このマスク、世界に一つしかない優れものなんです。じつはこれオーダーメイドな

んですよ、皆さん。

たかがマスクにオーダーメイドなんてとお考えになる方もいらっしゃるかと思えます。ですけども、さつきもお話したように、これからはマスクをする機会がますます増えていくと思うんです。そうしますとね、私たち女性はお洋服やお化粧品に負けられないぐらいにマスクにも気を使わないといけなわけですよ。だってそうじゃありません？せっかく何万円もするお洋服着て、月に一度美容院で髪をセットしてもらっても、口元には三百円で買ったコンビニのマスクじゃ、いかせん釣り合いが悪いですもの。

さて、講釈はこのぐらいにいたしまして、こちらの『マスク美人』が一般に売られているマスクとどう違うのか、実際につけてお見せしますね」

（司会者、マスクつける）

司会者「マスク越しで聞き取りずらくてゴメンあそばせ。皆さん、どーですコレ。」

（司会者、正面から左右へカメラにむかってアピール）

お分かりになります？このフィット感。どこからご覧になってもジャストフィットじゃございません？もちろんこれ、私の顔が大きいかからじゃありませんよ。

この『マスク美人』はですね、余分なモタツキ感、ゴワゴワ感が一切ないんです。余分なモタツキがないということは？そう、それだけお顔が小さく見えるということなんです。しかも窮屈感もまるでないんです。

どうしてこんなことができるのかと申しますとね、ちょっとこちらのフリップをご覧になってください」

（司会者、フリップーを持つ）

司会者「まず専門の女性技師さんが、センサーでお客様のお顔の輪郭を細かく計測するんです。そのデータがコンピューターにインプットされます。そうしますとほら、お客様のお顔が立体グラフィックになってコンピューターのモニターに再現されるんです。すこ

いでしよう。まるで『アバター』みたい。ご覧になりました？『アバター』。「アジャパー」じゃございませんよ。

失礼しました。お客様のお顔のデータがコンピューターに記録されますとね、あとはもう自動的にコンピューターがお客様のデータにピッタリ合ったマスクをデザインしちゃうんです。なにしろ立体ですから、『アバター』ですから、間違いございません。一般のマスクではこうはいきませんよ。自分にあったサイズを探すだけで一苦労。探しているうちに花粉シーズンが終わっちゃったりして。すっかり夏になっちゃったりして。

でも、こちらの『マスク美人』でしたらそんな心配はございません。わたくし萬寿が保証します。

そして、『マスク美人』のすごいところがさらにもう一つ。私の顔を含めてよくご覧になってください。なにかお気づきになりませんか？お気づきになりました？

そうなんです。『マスク美人』は単にお客様のお顔を小さく見せるだけじゃないんです。全体のバランス、これがとつても大事なんですよ、お客様。『マスク美人』はその点もしっかりサポートしていますから。ちょっとこちらのフリップをご覧になって「

(司会者、フリップ2を持つ)

司会者「この写真の建物ご存知でしょう。世界史の教科書なんかに必ず登場しますよね。有名です。そうです、ギリシャのパルテノン神殿。ご旅行などで実際にご覧になった方もいらっしゃるんじゃないでしょうか。もちろん世界遺産にも登録されています。ちなみに世界遺産のシンボルマークはこのパルテノン神殿をかたどったものなんですよ。

ま、そんな豆知識はいいとして、いったいこのパルテノン神殿が『マスク美人』とどんな関係があるのかないのか。あるんです。大アリなんです。

パルテノン神殿のこのお写真、ご覧になってどうお思いになります？美しいですよ。綺麗ですよ。私もそう思うんですけど、な

にしる、この神殿、数あるギリシヤ建築の中でも最高傑作と呼ばれている建物なんだそうです。

では、どうして私たちはこのパルテノン神殿を見て美しいと思うのか。だって、紀元前の建物ですよ、皆さん。紀元前。もちろんテレビだってまだありません。私なんか、もしもその時代のギリシヤに生まれてたら、ただの失業者ですからー、残念！

失礼しました。ギャグが古すぎましたね。じつはですね、ちゃんと秘密があるんです。パルテノン神殿が綺麗に見える秘密が。偉い学者さんによりますとね、物が綺麗に見えるのには決まった割合、比率というものがあらしいんですよ。それをね、『黄金比』って呼ぶそうなんですけど。あれ。あの『エバラ』の。それは焼き肉のタレ。

失礼しました。一人ボケツッコミでした。まあ、詳しく話すと難しくなっちゃうんですけど、ようするに女性のプロポーションと同じです。ウエストがキューっと締まってる綺麗に見えるじゃないですか。あれです。ああいうのが物にもあるんです。で、このパルテノン神殿ですけどね、驚くことに、その物が美しく見える『黄金比』がふんだんに取り入れられてるんです。柱の長さとか、屋根の高さとかぜーんぶ。まさに『黄金比』の総合商社。古代ギリシヤ人はちゃんと知ってたんですね。すごい、古代ギリシヤ人！

ということ、やっところから『マスク美人』にもどります。もうお分かりじゃありません？ そうなんです。じつはこちらの『マスク美人』にも『黄金比』が入ってるんですよ、皆様。はい、ここピツクリするところ。古代ギリシヤ人もすごいけど、『マスク美人』もすごい！

ほんと世界遺産に申請しちゃいたいぐらいです。だってマスクですよ、マスク。でも、そのぐらい考えられて『マスク美人』は作られているということなんです、皆さん。ですから、前にも申しましたように、『マスク美人』は単にお顔が小さく見えるだけじゃないんです。お客様がお顔につけたとき、どこから見ても美しく見える

ように、マスクの面積から紐の長さまで、計算されて、計算し尽くされて作られているんです。どうです、すごいでしょう？

まだまだお話ししたいことは沢山ございますけど、そろそろお時間のほうが押してまいりました。私のご説明が足りなかったところは、あとでコールセンターの受付係がちゃんとご説明いたしますので、ご安心ください。

只今からお電話のほう受付させていただきます。こちらのテロップにある番号のほうにお電話お待ちしております。くれぐれもかけ違いのないようお願いいたします。

それでは、最後にすでに『マスク美人』をご愛用になさっているというお客様と電話が繋がってるようですのでお話をうかがいたいと思います。もしもし、こんにちわー、『マスク美人』をご利用になっていかがですか？

客A「あんた、ちよつといいかげんにしなさいよ。顔が小さく見えるとか言ってる、全部イカサマじゃない。あんたの顔がデカいからそう見えるだけでしょ。コンビニのマスクと全然変わんないんだからほんと、お金返してよ。それからね、あの『黄金比』ってね……」

(司会者、マスクをはずす)

司会者「お時間がきたようですよ！『マルシンマーケット』この辺で！ご案内は萬寿えり子でしたー」

客A「ちよつと待ちなさいよ！こっちは出るところ出たっていいんだからー！」

司会者「さようならー！『マルシンマーケット』来週も観てくださいねー！萬寿えり子の舞台は五月からです！チケット絶賛発売中！くれぐれもお忘れなくー」

(司会者、マスクをハンカチのように激しく振る)

第16話「新社会人のための有給デモ入門（Web編）」

『はじめに』

今でも勘違いしている人が多いのですが、いわゆる「有給デモ」は、会社や世の中にたいして有給休暇を要求するためのデモではありません。そうではなくて、「有給デモ」とは、実際に有給休暇を消化するためのデモのことです。

この点は誤解されやすいようです。とくに、地方の学生さんは、なかなかその目で「有給デモ」を見る機会がないと思うので、注意が必要です。

今では「有給デモの会」代表を勤めている私も、地元長野の大学に通っていた頃には、てっきり東京のほうでは、サラリーマンやOLたちが、毎日のように「もつと有給休暇を！」とか「有給休暇に自由を！」とか書かれたプラカードを手にしながらシュプレヒコールを繰り返しているものと早合点していました。そして、東京の会社に就職したあかつきには、私もデモに参加して、自分の有給休暇をこの手で勝ち取るんだと、60年代風の夢を抱いたりしていました。

当たり前ですが、今時そんなアナクロナデモは、少なくとも東京には存在しません。それにワザワザそんなことをしなくても有給休暇は簡単に取ることができます。「有給デモ」はそのために進化開発された古くて新しいシステムなのです。

ここでは、これから社会に旅立つ新社会人の皆さんに、「有給デモ」にたいする正しい知識を身につけてもらうために、その成り立ちと主な活動内容について説明したいと思います。

『有給デモはデモごっこからはじまった』

今ではほとんど伝説となっていていますが、そもそも「有給デモ」はYouTubeに投稿されたインターネット上の一つのビデオ映像

からはじまったと言われています。

それは二人の青年が一種の「デモごっこ」を手持ちのビデオカメラで撮影したもののなのですが、「ごっこ」ではあっても、デモの申請はちゃんと届け出てをすませていたようで、ご苦労なことにデモ血行日には本物の警察官が二名付き添います。

デモ行進は杉並区の高円寺周辺でおこなわれます。ですが、もともがお遊びなので、二人の青年はプラカードを手になにかを叫んだり、道行く人に自分たちのイデオロギーを訴えかけたりといった、いかにもデモらしい行動は何一つしません。ビデオが回っていることと、本物の警察官が付き添っていることをのぞけば、まるつきり普通の散歩と変わりがないのです。

デモは終始淡々と進んでゆきます。立ち寄った神社で和んだりします。二人の警官はあきれ果て、ついには「君たち、なにか主張とか、言いたいこととか、ないの?」と、本来の職務を忘れて青年たちを煽りだす始末です。しかし、主張はないのです。身分不相応なもったいない付き添い人の問いかけに、青年は「うーん、べつにないですね」と率直に答えます。思わず警察官たちのぼやきが聞こえてきそうなこのビデオのハイライトです。

泡踊りで有名な高円寺駅前の大通りを、ブラブラとデモらしきものをつづける青年の背中を追いながら映像はフェイドアウトし、まったりとしたまま終わります。

このビデオを観て、思わず二人の警察官には「お勤めご苦労様です」と、ねぎらいの言葉をかけたくなったのは私だけではないでしょう。人によつては、大切な税金を無駄にすると、二人の青年に怒りを覚えたかもしれません。それはごくまともな反応です。ですが、これを面白いと感じたインターネットのユーザーもいたわけです。それもかなり大勢の。

本人たちに見ればほんの些細なおふざけのつもりだったのかもしれません。しかし、YouTube上の「デモごっこ」は無数

のフォロアーを生みだしました。

二人からはじまったデモ行進は、すぐに様々なグループがネット上で参加者を募集するようになるまでに拡大しました。ただ、こういったデモの方法は以前からも存在はしていました。「デモごっこ」の新しさは、それがデモであるにもかかわらず、なんの主義主張も持たないという、「有給デモ」になってからも変わらないその性格にあるのです。

しかしそうなってくると、今度「有給デモ」は、巷にあるパレードと限りなく近い存在になってくるわけです。でも、やはり「有給デモ」はあくまでデモであって、パレードとは違います。

次は「有給デモ」が持つ、その独創的なシステム誕生の経緯について説明したいと思います。

『有給デモとパレードはどう違う？』

当たり前ですが、「パレードに参加する」と言って素直に休みをくれるのは、せいぜい小学生までが限度でしょう。中学や高校では少し危険かもしれません。言わんや、利益を追求するための企業が、「そうですか。楽しんでいらっしやいね」と、有給休暇をくれたりするはずはありません。「有給デモ」にしても、当初から有給休暇をとるためにあつたわけではありません。

「有給デモ」が自らのアイデンティティを獲得したのはほとんど偶然によるものでした。それは外部からの圧力がきっかけだったのです。

「デモごっこ」のグループや回数が増え、その数が80年代の暴走族並みに拡大してゆくと、都は取り締まりをはじめました。「社会性、公共性のない休日デモの届け出は認められない」という条例を制定したのです。

おそらくは、保守派の顔を持った当時の都知事が、「デモごっこ」を日本の恥、国家衰退の象徴、とでも思ったのででしょうか。保守陣営にしてみれば、たとえそれが改革を叫んだとしても、なにかしら

の思想性をもったこれまでのデモの方がまだ政敵としてマシだと考えたのかもしれない。

しかし、この規制が不幸中の幸いとなったのです。要は「休日デモ」というところです。これが後にアダとなります。行政側としては、表現の自由や、海外の人権団体からの目という障害もあるので、全面的に規制をかけるわけにはいかなかったのでしょうか。「デモごっこ」はイデオロギーのないデモとして、日本のサブカルチャー好きの海外メディアからも注目を集めはじめていたからです。

これでようやく「デモごっこ」が「有給デモ」へと進化する条件が整いました。ここからいよいよ「デモごっこ」が有給休暇とリンクしはじめます。

『有給デモ誕生』

私たちの有給休暇は法律で保証されているはずですから、本来は自由にその制度を活用してもなんの支障もないわけです。

しかし、わが国の多くの企業では、それがまるで怠け者の刻印であるかのように長い間あつかわれてきたというのがこれまでの現状のようです。そして、長引く不況がその傾向に拍車をかけたのです。会社が赤字なのに有給休暇をとるとは何事か、けしからん、という風潮が生まれてきたわけです。

そんなわけで、不景気で仕事が少ないのに、逆に有給休暇はとりづらいついた逆転現象がうまれました。

たしかに一見すると、この「会社が赤字なのに」理論は正論のようにも思えます。しかし、広く考えてみれば、国民がより多く休暇をとったほうが消費活動は活発になり、引いては景気もよくなり、企業の業績も上がるという考え方もあります。たとえば、お昼にお父さんが会社で一人380円のホカ弁を食べるよりは、有給休暇をとって夫婦二人で外食にかけたほうが、夫婦円満は言うに及ばず、経済効果だって大きいはずですよ。

このような理論は、専門の学者をはじめとして、いろいろな場所でだいぶ前から唱えられてはいました。ただ残念なことに、それを実践しようとする勇氣ある企業がなかなかあらわれてこなかったのです。

しかし、ついには知恵を絞り、立ちあがった人々がいました。残念ながら、やはりそれは一般企業ではありませんでしたが、かえってそのことがよい結果をもたらした要因になったかもしれません。「デモごっこ」が高円寺からはじまったように、「有給デモ」もまた同じ場所からはじまるべきであり、そしてそれはその地の公共機関からはじまったのです。

杉並区は「デモごっこ」を積極的に誘致しはじめた最初の自治体になりました。具体的には条例を改正して、デモ申請を簡略化したのですが、それよりも重要だったのは、「デモごっこ」に取って代わる「有給デモ」という言葉をはじめて公式に使い、尚かつそれをマスメディアを通じて大々的に宣伝したことにあるでしょう。

もとより杉並区の目的は、デモそれ自体にあつたわけではなく、「デモごっこ」に参加していた人々によつてもたらされる地域の経済効果にあつたはずです。ですから、区にしてみればできるだけ大勢の人間が、それもできれば学生やフリーターよりは、財布に余裕をもつた社会人が大勢集まつたほうがいいわけで、そうなると土日の「デモごっこ」が都の条例で禁止された環境では、「有給」という条件が必要不可欠なものになつてくるわけです。

しかし、ただ表紙のタイトルを変えただけでは、保守的な企業の体質をオープンにするのは不可能です。一区役所がいくら「もつと有給休暇をとりましょう」と唱えたところでナシのつぶてでしょう。都知事に鼻で笑われるのがオチです。

では、どうすればよいのでしょうか。大切なのは大きな流れをつくりだすことです。それをつくりだせれば、企業のほうは自ら長い

ものに巻かれてゆくはずです。その昔、ゴミ分別のCMに出演していた女優の加賀まりこが、いささか世間からは白い目で見られていたという、現在のエコ活動の盛り上がりからは想像しがたい過去の遺産がよい例です。

しかし、世間の流れを変えるためにはかなり突飛で大胆な、しかも大衆をひきつける魅力的をもった戦略が必要になってきます。そんなアイデアをお堅い区役所の役人がはたして思いつくものでしょうか。

思いついたのです。

杉並区は「有給デモ」の募集を区のホームページで受け付けはじめると同時に、それに懸賞金をかけるといふ驚くべき戦略をうちだしました。その月のデモ参加者から、抽選で金一封が数人に当たります。

いったいどこの世界にデモに対して懸賞金をかけるお役所があるのでしょうか。非イデオロギーの「有給デモ」だからこそできた離れ業です。

ただ、懸賞金といっても、もともとが税金ですから、どちらにしても大した金額ではありません。けれども、問題は額ではないのです。あくまでもキャスティングボードをにぎれるかどうかということが重要なのです。

懸賞金制度は「有給デモ」とセットになって大々的にマスコミによって報道されましたが、さらにそこには思わぬオマケがついてきました。

つまりそれは、懸賞金が有給休暇をとるための一種の大義名分になりえたということなのです。とくに「有給デモ」発祥当初は、やはりまだ「デモに参加する」と言うよりは、「懸賞金が欲しいから」と言ったほうが、周囲の理解も得られやすいといった空気が強かったのです。

『デモは楽しい』

高円寺は「有給デモ」発祥の地として、ゲスト（あるいはデモゲイ）。有給デモの参加者はこう呼ばれています（たちの聖地となりました。今、JR高円寺駅前周辺は、毎朝9時になると、東京マラソンのスタート地点みたいな喧騒をみせています。（だからといって、仮設トイレはありません。念のため）。

また杉並区の成功例につづけとばかり、他区でも「有給デモ」の誘致をはじめました。現在では23区中19の区がそれぞれのホームページ上で「有給デモ」の募集を受け付けています。

まだまだ東京限定の現象ではありますが、「有給デモ」の輪は日々増幅しています。参加者にしてみれば、それはもちろん有給休暇をとるための口実としてはじまったことでしょう。しかし、結果として「有給デモ」は大勢のリピーターを生んでいるのです。おそらくこれは、「有給デモ」生みの親である杉並区役所の職員ですら思い描くことのできなかつた展開なのではないでしょうか。一つのデモが新しいデモを生み、ひいては「有給デモ」全体の底上げにつながっている状況なのです。

このようなハプニングがどうして起きたのでしょうか。それにはまず、これまで述べてきた様々な要件が重なったということはあるでしょう。しかし本質的な理由はただ一つだと思えます。それは「デモが楽しいから」ということに尽きるのではないのでしょうか。

そうなのです。デモは楽しいのです。そして簡単なのです。誰でも無料で無条件で参加できます。会社だって休めます。まずはパソコンで「有給デモ」と検索してみてください。そこから無限にリンクがつながってゆくはずです。きっとあなたにピッタリあったデモが見つかるでしょう。

では最後に、私たちのサイトに登録されている「有給デモ」グループの中からいくつかピックアップして、その特徴と具体的なデモ

内容について紹介したいと思います。

「社長デモ」

昔の労働運動を知っている人が聞いたらビックリするかもしれませんが、「有給デモ」は誰でも参加できますから、当然のように企業の社長さん方が集まったグループも存在します。

ゲストは中小企業の経営者から大企業のトップまで様々ですが、どちらかと言えば景気のよさそうな社長さんの参加が多いようです。デモ行進は主に銀座日本橋が中心で、時刻はだいたい正午からと、比較的遅いのが特徴です。

企業はなによりイメージが大切ですから、デモ内容はほとんど笑顔で通行人に手をふりながら行進、というのがメインになります。社長さんによっては、会社の新製品を手を持ちたり、商品券を通行人に配ったりする人も見受けられます。この商品券目当てにデモを追いかける通行人も多いようです。当然人気の高いデモの一つになります。

また、稀にですが、名刺をくれたりする社長さんもいますので、これから就職活動を予定している方は、デモがある日には、一度銀座まで足を運んでみるのも一考かと思えます。

ボデイガードや部下の会社役員など、取り巻きが多いのもこのデモの特徴で、わざわざ社員総出で社長の応援に駆けつけたりする家庭的な企業もあるようです。

「元社長デモ」

社長デモがあれば、当然、元社長デモもあります。しかし、これは社長職を勇退した人が集まったグループではなくて、役員会で部下の反乱に遭遇して社長職をクビになった人や、倒産してしまった企業の元社長さんなどが集まったグループになります。

はたして彼らが有給制度を活用しているか否かは定かではありませんが、その経歴上、デモの雰囲気は必然的に暗いものになります。

ゲストの中には行進中に泣きだしたりする人や、あるいはデモが通り過ぎたあとに塩をまいたりするシヨップ店員の姿もよく見受けられます。

どうして塩までまかれてデモなんかするのかと考える人もいるでしょうが、そつとしておいてあげるのが一番かと思えます。

デモの場所はやはり銀座日本橋で、時刻も前述の「社長デモ」と「社長デモ」と「元社長デモ」と「社長デモ」とが、銀座の通りでバツタリ鉢合わせ、なんてことになったりはしないのかというと、そういうことにはならないようです。これは問題がおきないように、管理者である区のほうで、相反するグループのデモ日程をあらかじめ調整しているからです。

デモ内容は少し複雑になりますが、通りのゴミを拾ったり、通行人にひたすら頭を下げたりといった行為がメインになります。どうもゲストたちにとってこのデモは、お詫び行脚の意味合いがあるようです。しかしそうかと思うと、ボブ・ディランの「ライク・ア・ローリングストーン」を自分たち流に翻訳した「転げ落ちた石のごとく」「」を大声で合唱しながら行進したりと、どこか自虐的な雰囲気も漂います。

誰でも参加できるといったジャンルのグループではありませんが、債権者、あるいはゲストがツケをためたクラブのママさんなどには注目度の高いデモです。

「禁煙デモ」

「有給デモ」とそれ以前のデモとの決定的な違いが、なにも主張しないことにあるのはすでに述べました。けれども、相田みつをではありませんが、そこはやはり「にんげんだもの」。若干の自己主張が含まれるのは致し方ないことかと思えます。

ただ念を押しておくと、この「禁煙デモ」はべつに世の中にたいして広く禁煙運動を推し進めようとしている人々の集まりではありません。彼らの主張はもつと個人的なものです。彼らは禁煙中か、

もしくはこれから禁煙しようとしている人たちなのです。

似たようなジャンルに「ダイエットデモ」というのもありますけど、この種の自己開発型デモに共通するゲストたちの動機付けは、己の姿を世間にさらすことによつて、自分自身を奮い立たせること。誘惑に負けそうな自分に、逆に世間の目というプレッシャーを与えることによつて、目的を達成しようとする事、だと考えられます。

「禁煙デモ」は三カ月に一回行われています。これは三カ月という期間が、おおむね禁煙が成功したと考えられる目安になっているからでしょう。そんなわけですから、三カ月周期である「禁煙デモ」は、デモがおこなわれることにそのメンバーの顔ぶれが一新されるのがベストなのでしょうが、そこもやはり「にんげんだもの」で、半年経つても、一年が過ぎても、ずっとデモに参加したままの人の姿もチラホラ見受けられます。そうかと思うと、見事禁煙に成功してデモからは卒業したはずなのに、半年ぐらい経つてからもどつてくるような出戻りタイプの人もいたりします。

人生いろいろ、会社もいろいろ、禁煙だっているいろいろです。

「宮沢賢治デモ」

通称「雨にも負けずデモ」。著名人のファンや信奉者によるデモは、ゲストたちに人気が高いジャンルの一つです。特に対象者が故人になる場合は、その命日にかぎりデモがおこなわれるのが普通です。当日は長い行列がつづくことになります。宮沢賢治の命日は9月21日だそうです。

デモは早く、朝7時からスタートします。賢治ゆかりの地としてまず思い浮かぶのは出身地であるイーハトーヴこと岩手県ですが、ここ東京にも少なからず足跡をのこしています。デモ当日には、彼の詩を合唱しながら、その足跡をたどる行列が延々とつづきます。それは、熱心な仏教徒でもあつた宮沢賢治の横顔をなんとなく彷彿とさせる光景です。私見ですが、当日雨が降ればシチュエーション的には最高かと思います。

ちなみに通称「吾輩は猫である。名前はまだないデモ」は12月9日。同じく「人間失格デモ」は6月13日です。

「俺も昔は悪かったデモ」

かつての新社会人たちが、居酒屋などでイヤというほど聞かされてきた先輩社員の武勇伝。あれが「有給デモ」バージョンになってもどつてきました。

ただし、先輩社員の武勇伝はいかせん眉唾ものですが、こちらのほうはホンモノです。なにしろこのデモに参加するには、当時ヤンチャをしていたころの本人の写真を持参する必要があつて、それがメンバーになるためのパスポート代わりになっているからです。この世界では、現役を卒業してからも、なにかと新人の加入には厳しい審査があるようです。もつとも、卒業したとはいっても、見たかぎりでは、いまだ現役続行中の人もいるみたいですが。

デモの性格上、車やオートバイでの参加は不可になっています。なにも彼らはどこかの県の成人式みたいに、ふたたび悪さをするために集まるうというのではないのです。これは一種の世直しデモであつて、その目的は未成年者の保護育成にあります。道行くデモの最中、平日の日中から繁華街をうろついている、それらしき若者に声をかけ、事情を聞いたりするわけです。昔とつたキネヅカもありますし、大所帯であるデモの迫力もあつてか、未成年者たちも彼らの話には素直に耳をかたむける傾向があるようです。

「俺も昔は悪かったデモ」の地道(?)な運動は一定の成果とそれにともなつた世間的評価を得はじめているようで、近ごろでは、町内会や学校関係者のほうから、ぜひうちの地区でデモをやってくれ、と声がかかるほどだそうです。

そんなわけなので、もしこのデモを偶然街中で見かけることがあつても、くれぐれも後ろ指をさしたりなどして、彼らの昔とつたキネヅカを不必要なところで蘇らしたりしないようお願いします。

なお、彼らの運動によって見事厚生した若者たちからなる、「俺

も昔は悪かったデモ」の弟版ともいうべき「愛されるヤンキーデモ」があります。

「丘サーファーデモ」

思うのですが、サーファーがこの世にいるかぎり、丘サーフアームも必ず存在します。ただし、それは常に嘲笑の対象として。

しかし、彼らは立ちあがりました。どうして立ちあがったのかは誰にもわかりません。また、わかる必要もないでしょう。

噂では、彼らはデモをしながら、メンバーの中で誰が一番本物のサーファーに見えるか競い合っているのではないかという未確認の情報があります。丘サーファーのサイトなるものが存在していて、携帯やパソコンから投票できるらしい、という話です。

どうしてこの情報が未確認かというと、わざわざ確認するのが面倒だからです。

サーフボード持参、というのがデモの決まり事のようです。たしかに、サーフボードがなければ、丘サーファーにすら見えないでしょう。単なるあんちゃんの家団です。

でも、サーフボードを持っていてだけ彼らはまだマシなのかもしれません。中にはサーフボードすら持っていない丘サーフアームもきもいるでしょうから。もしかしたら、丘サーフアームたちは彼ら丘サーフアームもどきを激しく軽蔑しているのかもしれない。丘サーフアームたちにもなにかしらの序列のようなものがあるのかもしれない。丘サーフアーム歴18年とか。

そこは私たちが想像する以上に複雑でディープな世界なのかもしれませんね。

これももちろん未確認ですが、最近耳にした情報によると、彼ら丘サーフアームたちは、常に不確かな自分たちのアイデンティティを世の中に確立すべく、なにか新しいムーブメントを計画しているようです。

いったい丘サーフアームが集まってなにができるのか私には疑問で

すが、それが本当のサーフィンでないことだけはたしかだと思いません。

追記：丘サーファーたちのムーブメントが判明しました。自分たちのブランドを立ちあげるとのことです。やれやれ。なお、「有給デモ」には本当のサーファーが集まったデモもちゃんと存在します。念のため。

「iPod以外デモ」

私が勤める会社の上司から聞いた話では、昔まだカセットテープやMDで音楽を聞いていた時代には、その携帯用端末は、それがSONY以外のメーカーであっても、すべて「ウォークマン」の総称で通っていたらしいです。

ただ、現在では環境が様変わりました。ご存知のようにパソコンとiPodが登場してきたわけです。でも、ここで困ったことが起こりました。それは、ほとんどの人にとってはまったくどうでもいいことではあるのですが、ごく一部の人のにとっては頭を悩ませる問題にまで発展しているようなのです。その一部の人というのが、iPod以外の携帯音楽プレイヤーを使用している人たち、つまり「iPod以外デモ」のゲストたちなのです。

当たり前ですが、携帯音楽プレイヤーはなにもiPodだけしかないわけではありません。SONYのウォークマンをはじめ、いくつも存在します。しかし、ここで問題が発生してしまうのです。

すべての携帯プレイヤーが「ウォークマン」の名で通ってしまう時代はよかったです。しかし現在、携帯音楽プレイヤーの代名詞と呼んでも過言ではないiPodは、普通iPodだけをさす名称として使われています。iPod以外のプレイヤーをiPodとは呼びません。これがiPod以外の携帯プレイヤーのユーザーを悩ませる問題に発展しているらしいのです。

「それ、なにを聴いてるんですかと人から聞かれたらさ、なんと答えればいいんだい」

残業終わりのデスクで、かの上司は途方に暮れたようにボヤいていました。上司がポーナスでSONYのウォークマンを購入しようと考えていたのを知っていた私は、

「ウォークマンって言えばいいんじゃないですか」

そう答えました。すると上司は、なんにもわかってないんだな、という風に私の顔を見てこう言いました。

「CDウォークマンですか、それともMDウォークマンですか？つてかえされたらどうするだい」

悩める上司の発言は、当時すでにiPodユーザーであった私にとってどうでもいい問題であると同時に、目からウロコが落ちるような発見でもあったのですが、どうやらその名称に関するお悩みは、私の上司だけに限ったことではなかったようです。

「iPod以外デモ」にはいつもたいてい30名近いゲストが集まります。当然、みんながみんな、iPod以外の携帯音楽プレイヤーユーザーです。場所はこれもやはりと言おうか、秋葉原の一角でおこなわれます。

賑やかなデモが多い音楽関係のジャンルに属しているにもかかわらず、このデモは他ジャンルのデモと比べても非常に静かなものです。それは参加者全員が耳にイヤホンをして行進するためです。電気街の常連さんには「サイレントデモ」と呼ばれたりもしているようです。

行進中ではあっても、彼らは自分たちの携帯プレイヤーを決してポケットやバッグの中に仕舞い込んだりはしません。それぞれが手にもったり、胸にかけたりして、周囲の目からとどくようにしています。

静かなる彼らの主張は、携帯音楽プレイヤーに取って代わる携帯音楽プレイヤーの総称を誰かに考えだしてもらい、それを広めてほしいということなのです。なにしろ、彼らがふだん愛用している携帯音楽プレイヤーの商品名が「iPod」よりもメジャーになる可能性はきわめて低く、また「携帯音楽プレイヤー」という総称では、

あまりにも長く無骨すぎるのです。もつとオシヤレで呼びやすい一般名称に変えてほしいわけです。

もしも、その新しい名称が世間に流通してそれが定着すれば、彼らは「それ、なに聴いてるの?」「トラウマから解放されることができるでしょう。そうすれば、「iPod以外デモ」はその役割を終え、秋葉原の人波の中へと静かに溶け込んで消えてゆくことになります。もつとも、「サイレントデモ」と呼ばれているぐらいですから、消えてなくなっても気がつく人は誰もいないかもしれませんね。

追記：私の上司はiPodではなく、結局ウォークマンを購入しました。これまでめつたに仕事を休むことがなかった人なのですが、今では「iPod以外デモ」に参加するために、遅ればせながら、やつと有給休暇を有効利用する人生をおくりはじめています。

では、新社会人のみなさん、晴れて給料明細に有給休暇が付いてゲストとして「有給デモ」に参加してくれる日がやってくることを心待ちにしています。

第17話「彼女が悪魔に憑かれたら」

「私のバージンを返して欲しいって彼女が言ってるんです」

携帯電話のスピーカーの向こうで男が言った。

「仰っている意味がよくわからないんですけど」

僕は携帯電話のマイクにむかって言い返した。

「ええ。私にもよくわからないんです。でも、彼女はたしかにそう言ってるんです。あなたにバージンを返してほしいって。そういっ

たわけなんで、お手数ですけど、それを返しにきてもらえませんか」

「人違いみたいですね。すみませんけど忙しいんで、これで」

「ま、待つてください！冗談で言ってるんじゃないんです！」

たしかに男の声は真剣そうではあった。でも、話の内容からしてその真剣さはむしろ場違いなものだった。むしろ趣味の悪い冗談であつたほうがまだ救いがある。

それに、僕が忙しかったのは偽りのない事実だった。時刻は午後7時を少しまわったところ。そろそろ一次面接を受けた出版社から電話がかかってくるころだ。ワケのわからない電話の相手をしている場合ではなかった。

「金田マサルさんですよね？」

男は僕の名前を確認した。これで三度目だ。

「そうだけど」

「神奈川県立川ノ崎高校出身で、同級生だった真鍋ミュキと当時付き合っていましたよね？」

「半年だけね」

「そうでしょ？それで、ミュキはあなたに……」

「あのね」

もう面倒だし、時間もなかったから、僕はとっさに思いっいきの嘘をついた。

「ミュキはバージンじゃなかったよ」

我ながら品のない嘘ではあった。でも、その分効果はテキメンだった。スピーカーの奥から男の「え!？」という声が聞こえてきた。なんだか『サザエさん』のマスオさんみたいな「え!？」だった。それはどこまでも存在感の希薄な「え!？」なのだ。僕は登場する曜日を間違えたマスオさんにトドメの一撃をくわえることにした。「だからさ、どのみち僕は彼女のバージョンを返すことはできないわけ。わかった?」

男はグーの字もなかった。僕は携帯を切り、同時に男とも、かつての恋人真鍋ミユキさんとも完全に縁を切ったつもりでいた。でも、そうはならなかった。

面接を受けた出版社からはいくら待てども電話もメールもこなかった。10時ごろになって同じ大学のガールフレンドから電話がかかってきた。「面接どうだった?」と彼女は聞いてきた。

「まあまあ、かな」

「電話あった?」

「それがまだ」

「そう」

スピーカー越しの彼女の言葉がため息と一緒になって耳にとどいた。深い深いため息。シーズン終了間際の横浜ベイスターズのコーチ陣がベンチ裏で吐くような。

「私ね、しばらく帰省することになりそう。地元で就職活動しようと思って」

「え!？」

まったく人のことは言ってもらえない。僕もさっきの電話男と同じようなマスオさん状態に陥ってしまった。でも、僕の「え!？」にはそれなりの重さがある。だって、彼女は都内の企業に就職希望のはずで、すでに二社から内定をもらっていたからだ。しかも彼女の実家といったら九州なのだ。

「もしかしたら、もっと条件のいい会社が見つかるかもしれないし。

それにまだ時間もあるから、なるべく選択肢を多くもっていたほうがいいと思うの」

「それはそうだね」

僕のスピーカー越しの言葉に、深い深いため息がふくまれていなかったことを願う。

結局、出版社からはなんの連絡もなかった。ガールフレンドは帰省してしまうし、梅雨時のベタつき感をのぞいたとしても、寝つきの悪い夜になりそうだった。

大学四年目の夏。文学部の創作学科に席を置いている僕は、卒業制作である中編小説を書き進めながら、せつせと就職活動をしている最中だった。

卒業制作のほうはボチボチ進んでいたけれど、就職活動のほうはまったくお先真つ暗な状態で、第一志望である出版業界の門戸は、長引く不況のせいもあってか想像以上に狭くなっていった。

このまま東京でアテのない就職浪人になるより、いっそ田舎に帰って地元の企業に就職しようか、そんな弱気な考えが頭をもたげはじめたころだった。男から電話がかかってきたのは。

おかげで僕は志半ばのない帰省計画を白紙にもどすことができた。三年前に上京して以来、僕はまだ一度も故郷の土を踏んでいなかった。

当時、真鍋ミユキなるうら若き乙女が、はたしてバージンであったかどうか僕は知らない。僕と彼女の関係はその程度のたわいのないものだった。高校生活の最後の半年間で、たしか一回だけキス（のようなもの）をしただけ。

そもそも、僕は彼女のことを呼び捨てにしたことすらなかった。いつも「真鍋さん」だった。それだけで二人の関係がどんなものだったかわかるだろう。僕たちは、NHKの連ドラにできそうな純朴な田舎の高校生カップルだったのだ。真鍋さんの清く短い男女

交際は、僕の暗い高校生活の中で、ほとんど唯一のいい思い出として記憶されていた。

電話の男は自分の職業をコンビニの店長だと名乗った。そう言うっておけば、いくらか自分の発言に真実味がでるとでも思っているかのように。

彼には悪いけど、僕個人としては、あんな話を真にうけるほどコンビニ店長という職種に重きを置いてはいない。それに、決して職業差別というわけではないけれど、僕の記憶では、真鍋さんはコンビニ店長と付き合うようなタイプでは決してなかった。

もしかしたら、あの電話は真鍋さんとはなんの関係もない新手の振り込め詐欺だったのかもしれない。バージンを返すなんてできないわけだから、つまりそれは、それに見合った対価を支払えということなのだ。名付けて「元カノ・バージン詐欺」。たしかに、中には引かかる男もいるかもしれない。かなり確率は低いだろうけど。下宿先にコンビニ店長から宅急便がとどいたのは、電話があった日からちょうど一週間が経った雨の夜のことだった。

その日の僕のスケジュールは、朝早くから濃紺色のリクルートスーツに身を包んで、お茶の水で開催された合同就職面接会に参加、午後は水道橋の名画座で二本立てを鑑賞、さらにジャズ喫茶で一時間粘ったあと、下宿先の阿佐ヶ谷にあるバツティングセンターで三番勝負、といった感じだった。面接の結果がいかなるものであるにしろ、これがここ最近の僕のベストな平日の過ごし方だった。

そして、テレビで夜のニュースを眺めながらホカ弁を箸でつついていたところ、宅急便のお兄さんが下宿先のインターホーンを押したのだ。

茶色い包装紙にくるまれた荷物の送り状には聞き覚えのある名前がペン書きされていた。僕は携帯越しに耳にした男の「え!？」を思いだした。送り状の品目欄には「食料品」とある。それから少し

懐かしみのある故郷の住所。

どうも気味が悪い。僕にはコンビニ店長から食料品を送られるような身に覚えはまったくない。イヤな予感がする。するに決まっている。

このままほつたらかしておこうかとも思ったけども、中身がナマモノだったら困るし、冷蔵庫に入れるには荷物は大きすぎた。黙って捨てるにも燃えるゴミか燃えないゴミか見当がつかない。仕方なく僕は包装紙を破って中を見てみることにした。

水ようかんの詰め合わせセット。それはコンビニのカウンター越しによく飾られているギフト商品だった。箱のおもてに白い封筒がそえてある。そこには男が何度も確認した僕の名前が宛名書きされている。

電話のつぎは手紙攻勢。性懲りもなく。でも、水ようかんがセツトになっているからにはなにかしらの状況の変化みたいなものがあったに違いない。でも、それでハイそうですかと、甘いエサにほだされて直ぐに封を開けるほどこっちだっておめでたくはない。

それに、卒業制作として中編小説を書きすすめている輩としては、下手な影響をつけるのを避けるためにあらゆる活字媒体から目を遠ざけているところなのだ。月に一度は読みかえしてきたケリー・リンクの短編集だってもう半年も開いていない。そんな僕が、どうしてコンビニ店長の手による文章に目をとおさなければいけないのか。

だが、結局のところホカ弁を食べ終えるころには、僕は自分の考えを訂正することになった。もちろんそれは食後のデザートとしての水ようかんにほだされたわけではなくて、三年以上も文学と格闘し、おまけに出版業界に就職を志望しているような学生が、たかだかコンビニ店長が書いた手紙ごときにいまさらどんな影響もつけるはずがないと考えなおしたからで、それに正直、内容も知らずにそのまま手紙を放置しておくことが少々薄気味悪くもあったのだ。

そんなわけで僕はコーヒースティックを入れ、封を開いた。手紙を読むなん

てずいぶん久しぶりだった。

白い便箋の片隅に、砂浜にうちあげられた巻き貝の水彩画が印刷されていた。気のせいかな文面から乾いた潮の香りがプーンと漂ってくる。そういつた作りの特殊な便箋なのだろうけど、コンビニ店長がもしも狙ってこんな便箋を使用したのなら、彼のもくろみは見事に達成されたことになる。なぜなら僕は、限りなくアカの他人に近い男の手紙を読みはじめながら、いささか郷愁の念にかられるという、かなり奇妙な心理状態に陥ったから。

白い砂浜めいた便箋に、なかなか達者なペン文字が、よせる波のように永遠とつづいていた。でも、その言葉のつらなりが織りなす響きは、懐かしい波の音のように心地よくはなかった……。

『前略。梅雨の長雨にあじさいの花が色濃く映る季節になりました。金田さんにおきましてはいかがお過ごしでしょうか。』

先日は不躰な電話を失礼いたしました。どうかあのことは忘れてください。ミュキのバージン云々に関しては私たちの間違いでした。ミュキ本人も反省しているところです。どうかお許しください。

それでは、どうしてあのような電話を金田さんにさしあげることになったのか、その辺の事情を含めましていろいろとご説明いたしたく、このような手紙を書くことになった次第です。

以下の内容には金田さんへの重要なメッセージが含まれています。さらに度重なる失礼な記述もあるとは思いますが、どうか最後までお読みになれることを強く希望いたします。

まず最初に断っておかなければならないことがあります。私とミュキは付き合いはじめて一年ほどになるのですが、この半年でミュキは以前とは大きく変わってしまったんです。私が知っている現在のミュキと、金田さんが知っている過去のミュキとは、大きな隔たりがあるのです。

まわりくどい言い方をしてもお手間をとらせるだけですし、こうしている間にもある危険が確実に迫っています。早速本題に入りたいと思います。

とても悲しく残念な報告をしなければなりません。ミュキが悪魔にとり憑かれてしまったのです。

金田さんは『エクソシスト』という映画をご存知でしょうか。悪魔にとり憑かれた少女が、ベッドの上に浮いたり、首が360度回ったりする外国のホラー映画なんですけど、現在のミュキのイメージはまさにあんな感じなんです。もしまだご覧になっていませんでしたら、一度ご鑑賞していただくことを強く希望します。たぶんご近所のTSUTAYAに置いてあると思います。

ただ、アレは映画ですので、かなり誇張された部分があります。さすがにミュキがベッドの上に浮いたり、首を360度回したりすることは今のところありません。それでも、彼女がほとんど寝たきりで、食事もロクに口にしないような状態であることは事実です。そして時折、私よりも低い男の声（俳優の中尾彬氏をイメージしてもらえると良いと思います）で私に語りかけるのです。

ところで、突然ですが、金田さんはローリングストーンズという外国のロックグループはご存知でしょうか。中尾悪魔（男の声で話すときのミュキです。私は悪魔をこう呼ぶか、あるいは単に中尾と呼んでいます）によりますと、彼女にとり憑いてるのは、そのローリングストーンズの『悪魔を憐れむ歌』という曲にでてくる悪魔なんだそうです。

洋楽などにはとんと疎い私は、ローリングストーンズも、その『悪魔を憐れむ歌』のこともよく知らなかったのですが、中尾に悟られないようこっそり町の図書館でその曲が入ったCDを試聴しましたところ、音楽的なことはともかく、その訳詞を見て私は驚愕しました。なんとそこに歌われている悪魔ときたら、あのイエス・キリ

ストが神を疑ったときや、かのジョン・F・ケネディ大統領が暗殺されたときなどにも、その場にいあわせてたというではないですか。ほんとうに、とんでもなく全人類的な悪魔です。悪魔というものは、そもそもそういったものなのかもしれません。それにしても、人類史の影の部分を一身に背負ったような強者が、どうしてまた極東の島国のそれもまた一地方の女性にとり憑いたのか皆目見当つきません。ただ、ミユキも中尾悪魔の経歴を認めてはいるようなので、私としてはそれをうけいれるほかありません。

ここまで書いて思うのですが、たぶんこのような文面だけを読んでいたとしても、遠い東京の空の下で暮らしている金田さんにはなかなか真実味は伝わらないと思います。そこで、身内の不幸を公表するような後ろめたさはあるのですが、私がビデオカメラで撮影したミユキの映像をYouTubeにアップすることにしました。URLは「<http://www.youtube.com/...>」です。すぐに削除する予定でいますので、できるだけ早い時期にご覧になっていただくことを強く希望します。

撮影は私の家の寝室でおこないました（ミユキの様子がおかしくなつて以来、彼女の両親の意向もありまして、ミユキを私の家に預かっているのです。私の実家は現在のコンビニエンスストアになる以前は、両親が酒屋を営んでおりました）。

後々のため、できるだけ詳細な記録をのこそうと思ひまして、この日のためにハイビジョンカメラを購入しました。より繊細な映像がご覧になっていただけるかと思ひます。ミユキの低い野太い声は決して吹き替えなどではありません。金田さんにとつてもかなりシヨッキングな映像になるかとは思ひますけど、どうか最後までご覧になってください。ミユキにとり憑いている悪魔の存在を信じてもらえるかと思ひます。

先述しましたように、ミユキの様子がおかしくなりはじめたのは、

年がかわってからののですが、それからというもの、私は方々の医者
者に彼女を診察してもらいました。中には、まったく異常はないと
いう人もいましたけど、たいいていの医者は彼女がうつ病であると診
断しました。

もちろんミユキはうつ病ではなかったので、もらった薬を呑んで
も効果はありません。むしろ時間がたつにつれ、彼女の症状は深刻
になっていきました。

そうしてようやく私自身もミユキの体になにかがとり憑いている
と信じるようになったわけなんです。そうなってくると私の力では
どうすることもできないのです。霊媒師の方に頼んでみようかと
も考えたんですが、お金の無駄だからやめるようにと、逆にミユキ
の口から中尾悪魔に助言される始末でした。

医学の力も頼りにできず、神にすぐることもできない。まったく
八方塞がりな日々がつづきました。そんなある日の昼、ミユキが奇
妙なことを口にしました。中尾悪魔がある男の居場所を調べている
というのです。

いったい調べているというのはどういうことなのか。ミユキによ
りますと、夜になるとが奴が彼女の記憶の中に入りこみ、あれこれ
頭の中を探っているというのです。彼女にはそれが感覚として分か
るらしいのですが、中尾が調べているのは、どうもミユキがはじめ
て性交渉をもった相手の男性のようで、これはなぜだかはわかりま
せんが、奴にはその男の肉体がどうしても必要らしいのです。

金田さんも覚えがあるかもしれませんが、ミユキはとても頭の回
転のはやい女性です。とっさの機転がきくのです。で、中尾悪魔の
暗躍を察知したミユキは、ここでも得意の機転をきかせたわけなの
ですが、結果的にそれが、金田さんにとつてもない不幸を招きよせ
ることになってしまったことをここで告白しなければなりません。

はつきり云いましょう。ミユキは悪魔に嘘の情報を与えました。

ただそれは、言葉として奴に直接伝えたのではなくて、あくまで自分の頭の中でストーリーを作り、それをイメージした。つまり、ミユキは自分自身の偽の記憶を、自分で創り上げたわけなのです。その偽の記憶を読み取り、まんまとそれを信じ込んだ中尾は、ミユキの口を伝い、私に命令したのです。金田マサルという男に電話をかけるようにと。

もうおわかりかと思えます。ミユキが彼女の初体験の相手として悪魔に信じ込ませた男性とは、あなたのことなのです、金田さん。

実を云えば、金田さんに電話をかけるまで、私もミユキの作った偽初体験話をう呑みにしていました。彼女は「人間などに騙されるわけがない」という中尾悪魔の自尊心を上手く利用したとあとになって言っていました。子供のころからの空想好きが役に立ったともこぼしていました。

しかし、とつさの機転とはいえ、このような展開は金田さんにとつてはまったく迷惑極まりない話かと思えます。今、この文章を読んでいるあなたの心境を考えますと、私も一人の当事者として心苦しいばかりです。

恐らく、金田さんのお気持ちを察しますに、「いかに偽の記憶とはいえ、どうしてよりによって自分を選んだのか」という怒りにも似た疑問符であふれかえっていることでしょう。

ごもつともです。しかし、言い訳がましくなりますけども、ミユキの選択にも彼女なりの論理的な根拠があつたことをここであえて書かせてください。

彼女の話によりますと、『悪魔を憐れむ歌』に登場する悪魔はたしかに恐ろしい悪魔的な力をもっているようです。しかし、同時に奴は人間の体に寄生しなければ地上では生きていけないようなのです。

なんだかM78星雲からやってきたヒーローみたいなのですが、

さらにその形而上学的な力は、意外にも物理的な力学の法則にのっとっているようで、野球のピッチャーの投げたボールが時間と距離によってやがて失速していくように、悪魔の力も距離や時間によってその影響力に違いが生じるらしいのです。

以上のような条件からミュキは考えました。自分がねつ造する偽の初体験相手は、なるべくここ川ノ崎から遠く離れた場所に暮らしている男性がいいと（実際のミュキの初体験の相手が誰なのかはいまだ見当もつきませんが、前後の事情からして、その方が川ノ崎近辺に暮らしている男性であることは確かでしょう）。

そしてここが重要なポイントになってくるわけですが、いくらねつ造とはいえ、まったくの赤の他人では、いかせんリアリティができません。実際の中尾彬氏はべつにして、中尾悪魔がはたしてどれほど現代社会の恋愛事情に通じているかは定かではありませんが、奴がいかにも人間を見くびっているとはいっても、さすがに書き割りのようなベタな展開は信じない可能性があります。そこで当然のようにミュキの選択肢は、ここ川ノ崎から遠く離れて暮らし、尚かつ実際にかつて付き合ったことのある男性に絞られたわけです。

この二つの条件を満たす男性が、ミュキの中に何人いるのかは知るよしもないのですが、おそらく、この二つの条件をもっとも完璧に満たす男性が金田さん、あなただったのです。

ここまで書いても、まだ金田さんの心には割り切れなさ感がのこるかもしれません。ごもつともです。しかし、申し訳ないのですが、それについて検証している時間はもはやないのです。この手紙をお読みになっている間にも、中尾の魔の手は確実に金田さんのもとに近づいているはずですから。

包み隠さず申しあげます。中尾悪魔は金田さんに呪いをかけようとしているのです。

お気持ちお察しします。本来であれば、ミュキの恋人である私が

負うべき責務です。ですが、ミユキが選んだのは金田さんなのです。これは私の個人的な見解なのですが、恐らく、ミユキが金田さんを選んだのは、ただ単に川ノ崎から遠く離れた場所で暮らしているという理由だけではないような気がします。

少し大袈裟に聞こえるかもしれませんが、彼女は共に悪魔と戦うパートナーとして金田さんを選んだのではないかと私は考えているのです。悪魔にとり憑かれるという想像を絶する苦難を体験しているミユキは、同時に悪魔と戦うことのできる唯一の女性でもあるわけです。

ミユキにはすでに金田さんのために全身全霊をこめて中尾と戦う覚悟ができています。微力ではありますが、私も店の世話（このところアルバイトが立てつづけに辞めてしまい、タイトなシフトがつづいています）をしながらできるかぎりのサポートをしてあげたいと考えています。

誠に勝手な言い分ですが、ここは一つ金田さんも男らしいご決断をお願いします。

中尾悪魔の呪いがどんなものなのかはよくわかりませんが、一つ確かなことは、たとえそれがどんな形の呪いであつたとしても、奴が金田さんの命そのものを狙うようなことは決してない、ということとです。なぜなら、殺してしまつては身も蓋もないからです。魂のぬけた亡骸にはとり憑けない、というわけです。

中尾の狙いは、あくまで金田さんを精神的、肉体的に痛めつけることにあるはずとす。もしかしたら、奴には仲間の悪魔がいて、そのためにべつの人間の体が必要なかもしれません。いずれにしても、悪魔は人が衰弱しているときにとり憑くようです（ミユキの場合、それはちょうど彼女がインフルエンザで寝込んでいる時期でした。ただ、そのインフルエンザと中尾の呪いと因果関係は直接的には不明です）。

今後はいつなにか起きるかわかりませんし、なにが起きてもおおしくはありません。くれぐれも、病気ケガ、事故の類にはお気を付けになってください。なるべく外出も控えたほうがいいかと思いません。

このような状態がはたしていつまでつづくのかわかりませんが、念のために、私の名刺を手紙に同封しておきます。どんな些細なことでもかまいませんので、なにかありましたらご一報ください。

しつこいようですが、くれぐれもご注意を。そして、遠い故郷の空の下で、あなたのために戦っている一人の女性がいることをどうか忘れないでいてください。

PS・川ノ崎名産、水ようかんのギフトセットをはじめました。よく冷やしてお召し上がりになってください。』

コンビニ店長の手紙を読み終えたばかりの僕は、なんというか、ここ一番の大試合で救援に失敗したりリーフピッチャーのような気分がしてならなかった。実際には一人アパートにいたわけだけど、仮にも狭い下宿先の部屋に試合後のチームナインや監督コーチがすし詰め状態になっていたとしても、誰一人、僕と目をあわせようとはしないかのような。

それはいろんな意味でショッキングな手紙だった。そこには大小様々な地雷がしかけられていた。でも、なにより僕が驚いたのは、新種の不幸の手紙めいたその内容より、結局のところ真鍋さんがコンビニ店長と付き合っていたという事実と、大学に入ってまで文学を専攻しているこの僕が、決して職業差別ではないけれど、いかにそれが手紙という形式をとっていたとしても、コンビニ店長が書いた文章などを一気に読みとおしてしまったという後事実だった。

僕にしてみれば、コンビニ店長ぐらい文学から遠く離れた職業はこの世に存在しない。彼らに比べれば、まだフリーターのコンビニ店員のほうがいくらかマシだ。僕のイメージとしてコンビニ店長

とは、休憩中に文庫本に目をおとして、そのフリーター店員を、白い目で眺めている種類の人たちなのだ。

そのコンビニ店長にこれぐらいの文章が書けるわけだから、世間一般を見わたせば言わずもがな。僕が就職面接で次々と落とされるのはとうぜんの結果だし、呑気に卒業制作とかいって執筆活動などにかまけている場合ではない。

そう考えると、この手紙は不幸の手紙どころか、狭く偏った僕の見識を広げてくれた幸運の便りということになる。

いや、よそう。これではまるでバカの言うことに感心している大バカ者みたいではないか。文章の出来はともかく、こんな手紙を送ってくる輩がマトモなはずはない。もっとべつのとらえ方があるはずだ。

封からだしたときの便箋は懐かしい潮の香りがしたけども、それを仕舞うときにはインチキな詐欺の匂いがプンプンした。それもかなり手の込んだ組織的な匂いが。『地元特産品教団』とか、『悪魔を憐れむ会』とか。

もしかしたら、コンビニ店長なんてハナから存在しないのかもしれない。そう考えると少しは心も安まるし、手紙の内容からして、そう考えたほうが妥当ですらある。つまり、手紙の書き手は、コンビニ店長に成りすました、教団に一文何円かで雇われた三文作家なのではあるまいか。

でも、そんな組織が仮に関わっていたとするなら、この手紙だけですべてチャラになるということにはならないだろう。きっと次にとどく手紙では、バッタもんの壺や魔除けの数珠あたりを、今だけの特別奉仕価格というフレ込みの法外な値段で売りつけてくるはずだ。なにしろ向こうは悪魔の呪いがかかっていると本気で忠告しているわけだから。面接に落ちるのも、彼女が帰省してしまうのも、階段でのつまづきさえ、都合の悪いことはすべて呪いのせいということになる。

電話での段階では「元カノ・バージン詐欺」と呼んでいた三面記事的な一件は、ここにきて全国紙の一面を飾る組織的詐欺事件へと拡大しそうな様相を見せはじめていた。ふたたび名付けるとするならば、今度のは「卒業アルバム詐欺」。

僕の推理はこうなる。まず、『地元特産品教団』なり、『悪魔を憐れむ会』なりが、どこそこの卒業生から高校の卒業アルバムを買い上げる。教団はそれを三年間ほど寝かせて頃合いを待ったのち、アルバムの写真の中から特に美人の女子生徒を選ぶ。そして別ルートで手に入れた住所録を頼りに、今は故郷から離れて暮らしている元卒業生だけを選んで、地元のコンビニ店長の肩書きを名乗り電話をかける。コンビニエンスストアなら日本全国どこにでもあるから疑われる心配がないのだ。

一方で、電話で交わされる会話は、相手の近況をうかがうのと同じ時に、元学園アイドルの情報収集にも一役買うことになる。その情報は、次のターゲットとなる元卒業生に電話をかけるさい役立つことだろう。

教団はあらたに入手した情報をすみやかに分析すると、間をいれずにこんどは手紙の特産品と一緒にターゲットの自宅に送りつける。懐かしい故郷の品にほだされた元卒業生は、つい手紙の封をあけてしまう。

手紙には、「学園のアイドルだったミユキさんは、じつはあなたに好意をよせていたんです」などといった内容が書かれているはずだ。時が経って世話になった担任の顔は忘れても、当時学園のアイドルだった女子生徒の存在は覚えているもの。これは、その彼女が本当に好きだったのはじつは自分だったという、モテない男子特有の虚栄心を逆手にとった、教団による柵からポタ餅的な巧妙なる心理作戦なのだ。

でも、そのポタ餅にはもちろん毒が盛られている。便箋の文面は

決まり文句のようにこうつぶく。「悲しい報告をしなければなりません」と。

たぶん手紙を読んだ卒業生男子の何割かはYouTubeにアクセスすることだろう。ただ、そこに映しだされるのはきっと美人ではあるけど、学園のアイドルだった同級生ではない。教団に雇われたモデルとか女優の卵なのだ。でも、卒業して三年が経過しているわけだから、はっきりとは見分けはつきづらい。そもそも美人の顔のつくりは不美人より個性に乏しいし、しかもその声は中尾彬風に吹き替えしてあるのに決まっているのだ。それに手紙には、彼女はここ半年で大きく変わってしまったと、あらかじめエクスキューズが入っているのだし。

我ながら僕の推理は完璧のように思える。これでリリーフピッチヤーとしての名誉も回復できた。監督コーチの熱い視線をふたたびブルペン上を感じるができる。ほどなくリリーフカーに乗りこんだ僕は、球場にこだまする声援を背にしながら卒業制作へととりかかることだろう。

でも、なにより嬉しかったのは、この推理によって真鍋ミユキさんの名誉も回復できたことだった。その名誉とは、無論のこと、悪魔にとり憑かれたといった話が虚実であったということではなく、彼女がコンビニ店長と付き合っていたという事実にはかならない。

僕はインスタントコーヒーのCMにでてくる違いのわかる役者のごとく満足げにコーヒークップを口にした。こんな手紙がとどくまでは、もともと悪くない一日を過ごしていたのだ。ようやく気分も持ちなおして、本来のペースをとりもどしつつあった。そろそろパソコンを立ち上げる時間だ。もちろんYouTubeを閲覧するためではなく、やりかけの卒業制作にとりかかるために。

だがその夜、僕が実際にパソコンのキーボードをたたくことはなかった。いざモニター上のファイルを開こうとすると、携帯の着信が鳴って、僕の指はマウスをクリックすることなくそこからはなれた。

携帯画面に、僕が卒業作品を提出することになっているゼミの先生の名が表示されていた。学生たちから先生と呼ばれるのをひどく嫌っている非常勤助教授の堀田さんだ。まだ30代半ばで、去年うちの大学に赴任してきたばかりの彼は、たしかに先生というよりは学生たちの兄貴的な存在だった。古き良きアメリカンロックと、これもまた古き良きアメリカンベースボールをこよなく愛する、ヤングでピースな文学部の助教授。特に僕とは、教師と教え子というより、歳のはなれた友人同士といった感じで、彼は僕に泣く子も黙る60年代のブルースなロックを、僕はかわりに、泣く子も踊りだすような00年代のダンスなロックを教えあう間柄だった。

そんなフランクな堀田さんだったけども、じつは僕だけでなく、ゼミの学生全員が常々不思議に感じている謎めいた傾向が一つあった。それは彼が関西圏出身であるにもかかわらず、関西弁を一切喋らないということだ。しかも、ただ喋らないというだけではない。堀田さんは関西圏に属する話題そのものを避けているようだった。まるで、関西アレルギーみたいな徹底ぶりだ。おかげで、僕たちのゼミでは、吉本芸人のお笑いや、阪神タイガースについての話題は、中世の地動説にも等しく、長らくタブーになっていた。

おそらく堀田さんには、なにかしら郷土にたいする複雑な思いがあるのだろう。上京以来、僕がまだ一度も帰省したことがないように。お互い、そこまで心のうちを明かしたことはないけれど、ゼミの学生たちの中でも特に僕と親しいのには、二人がそうした喪失感を共有しているせいなのかもしれない。

そんな堀田さんが、携帯電話のむこうで僕にこうやってきた。

「あのな、このあいだ貸した三千元、今すぐ耳そろえて返してくれへんか」

三千元？まったく寝耳に水だった。というか、本やCDならしょっちゅう借りてるけど、これまで僕が堀田さんから金品を借りたことなんて一度だってない。もしかして、冗談のつもりで言っているのだろうか。堀田さん、なにかいいことがあって、長年の生まれ故郷へのトラウマが一気に吹っ切れたのだろうか。それで今夜は関西弁なのだろうか。「遠く故郷を思う会」の一人としては気になるところだ。

「堀田さん、どうして今日は関西弁なの？なにかいいことでもあった？」

「ゴチャゴチャぬかすなボケ。返すか、返さへんか、二つに一つやどっちやねん」

前言撤回。もしかしたら、いいことではなく、すごく悪いことがあったのかも。苦労に苦労を重ねた翻訳の仕事が酷評をうけたとか。それで堀田さん、ヤケになっているのかもしれない。

「コラ、聞いてんのか。金返せ言うтонじゃ、ボケ」

「聞いてますよ。なにかあったんですか？悪い冗談ならやめてくださいよ。僕がいつ堀田さんから三千元借りたんですか」

「殺すぞ、ワレ！」

どうも様子がおかしい。あきらかに常軌を逸している。いつもの堀田さんではない。悪酔いでもしてるのか。

「忘れたとは言わせんぞ。先週の飲み会や。ワシがカードで代金立て替えたやろ。アレや」

「だって……あれは堀田さんのオゴリでしょ？自分で言うてたじゃないですか」

「ふざけんなや。こっちはな、臨時雇いの薄給でどうにか生活してる身やぞ。なにが悲しくてお前らみたいなボンクラ頭のおぼっちゃま学生にタダ酒オゴらなあかんねん。あほんだら」

その夜、堀田さんが浪花のサラ金業者スタイルを崩すことは最後

までなかった。とにかく、一秒でもはやく電話を切りたかった僕は、仕方なく、昼前に学食で落ち合い、そこで三千円を返すということ、で話はどうにか落ちついた。

会話の最後に、堀田さんはこう吐いた。

「あのな、これだけは言つとくぞ。前々から言いときたかったことや、耳の穴カツポじてよく聞いとけ。ええか、金田。お前な、才能ないぞ。ゆめゆめ物書きになろうなんて考えおこすなよ。作家の真似事は学生時代だけのお遊戯だと思え。ええな。わかつたな」
ガチャ。

ジキルとハイド。もしかしたら、堀田さんは二重人格者なのかもしれない。今の今までまったく気がつかなかったけど。それ以外に説明がつかない。電話番号は合ってるし、声も堀田さんそのままだった。

僕は携帯画面を見つめながら、これが手鏡でなくてよかつたと思つた。もし鏡だったら、さぞや虚ろな自分の顔が映つていたことだろうから。

僕はそれつきり努めて堀田さんの件は考えないことにした。気分が悪い。そんなことより卒業制作だ。帰宅してからまだ一字もすんでいない。一日一ページがノルマなのに。

ようやく僕はマウスを握りしめ、執筆モードに入った。だが、どこをクリックしてよいのかわからない。モニターが真っ暗なのだ。

部屋がやけに静かだった。そして暑苦しかった。

壁を見上げた。いつの間にかエアコンが止まっていた。

僕は窓をあけた。

雨が止んでいた。ベランダごしの夜風が涼しかった。

帰省前にガールフレンドが置いていった鉢に小さな芽がでていた。

あと一週間もすれば大学は夏休みに入る。梅雨シーズンは明け切つてはいなかったけど、久しぶりに足を踏み入れたキャンパスには、

ヴァカンス前の快活な空気が満ちていた。

もつとも、就職活動中の四年生にとつて今は氷河期の真っ只中であり、さらにこの日、リクルートスーツ姿の僕には度重なる人工的な暴風雨も吹き荒れていた。大学構内にある学食に到着したのは約束の時間を30分も遅れてのことだった。

いったい今度はどんな関西弁を浴びせられてしまうのか、そう考えると足取りは重かった。このまま、しらばっくれて帰ろうかと思つたぐらいだ。

いや、実際に広い学食の隅のテーブルに、堀田さん御用達、くたびれたハードロックカフェTシャツと思わしき背中が見えたときには、本気で帰ろうとしたのだけど、やっと履き馴れてきた僕の真新しい革靴が、二匹の冬のハエみたいにピタリと動きを止めたのは、その堀田さんの向かいに見知らぬ女の子の顔が見え、しかもその女の子というのが、頭に白い髪飾りをのせた、まるで秋葉原のメイドカフェで働いていそうな格好をしていたからだ。

一般社会とくらべればよほど自由な環境の大学構内にあつても、二人の取り合わせはかなり特異な存在だった。

もしかしたら堀田さん、ただの二重人格者ではなくて、その手の店の常連客でもあるのかもしれない。今日は同伴デートの途中というわけだ。

しかし、仮にそうだとして、いやたぶんそうに違いないのだろうけど、いかに非常勤の身とはいえ、神聖な教育の場に同伴でくるとは何事か。教え子としては、ここは説教の一つも垂れたいところだ。でも、三千円を押しつけてとつと退散するのにはかえって都合がいいかもしれない。

そんなふうには僕は考えて二人がいるテーブルにむかった。

「まいど。おおきに」

自由な空気をさらに自由に和ませるべく、僕は二人に軽いあいさつをした。しかし堀田さんはともかく、初対面の女の子にもこれは

まったくウケなかった。というか、どうも僕は余計なことを口走ってしまったようだ。和ませるところか、僕の場合いなギャグは、せっかくのヴァカンス気分のキャンパスにもう一つの局地的なゲリラ氷河期をもたらしたただけだった。

振り返った堀田さんのハードロックカフェTシャツはあいかわらずヨレヨレだったけど、その上に付いた顔の方はパリパリに凍りついていた。気のせいか、唇が小刻みに震えている。

一方、長い黒髪の日本人形が白いフリフリの付いた黒いメイド衣装を着たような、痩せた感じの女の子は、目の前の冴えないゲストよりよほどメールのやりとりのほうが大事なのか、両手に持ったピンク色した携帯電話の画面から一瞬顔をあげて鋭い切れ長の視線をこちらにむけただけだった。携帯には、それよりはるかに重そうなストラップの束がどっさり垂れさがっている。テーブルについた肘の横には、学食のデザートで一番大きなチョコレートパフェがのっていた。たぶん、携帯電話のつぎに甘いものが大事なんじゃないだろうか。いや、順番が逆かもしれない。

はたして、アメリカなハードロックカフェと秋葉原なメイドカフェとに、どんな因果関係があるのかは知らないけど、今日の堀田さんの印象は、昨夜の横柄な態度とは雲泥の違いがあった。もしかしたら女の子の手前、猫をかぶっているのかも。それとも、やっぱり二重人格で、今はおもての顔を見せているだけなのだろうか。いずれにしても、こちらはこれから面接にいかねばならぬ身の上なのだ。長居は無用。

僕は財布をとりだすべくスーツの内ポケットに手を入れた。すると同時にメイドギャルがふたたび顔をあげてこちらを見た。彼女は携帯電話を手にした占い師みたいに、黒いネイルアートがほどこされた指を僕にむけて告げた。

「財布をださないで、金田くん。そのお金、呪われてるから」

「こちらは山田風子さん。去年まで僕が教鞭をとっていた女子大の

四年生で、同人誌にミステリー小説を発表してるんだ。お父さんはあの有名なミステリー作家の山田吾郎。今日はデビュー作の執筆で忙しいところ、わざわざアルバイトを抜けてもらって来てもらったんだよ」

山田吾郎？知らないけど。それに、わざわざ来てもらった訳は？そんなに忙しいのに、どうしてアルバイト中なの？

堀田さんは説明不足な紹介を完璧な標準語ですませると、まるでそれが人命にかかわるものであるかのように、急ぎ僕の分の飲み物を買いに席を立ってしまった。今日は年長者らしくちゃんとオゴってくれるつもりなのか。もしかして、その代金にたいしても、あとで取り立ての電話がかかってきたりして。

それはそれとして、初対面の女性と、それも得体の知れない眼光鋭いメイド女子と二人切りで向かいあうことになってしまい、本来なら気まずい空気でも流れそうなところだったけど、僕的には珍しく、そんな感じはまったくしなかった。それは、山田風子ちゃんなる女子大生が、人当たりがよくて、初対面の人間になんら緊張感を感じさせないフレンドリーな人だったからという意味合いではもちろんなく、むしろ事態はその逆で、初対面であるにもかかわらず、僕を「くん」付けで呼び、おまけに謂われのない借金をわざわざ返しにきたのに、それが呪われていると宣う女の子に、僕は気を使う必要性なんてまったく感じなかったのだ。

よほど込み入った事情があるのか、堀田さんが席をたつと、風子ちゃんはメールのやりとりをふたたび開始した。目の前のゲストには目もくれず。

こうというのが最近の学生に多いパターン。よく言えばマイペースふつづに言って自己中。僕らゆとり世代の特徴だ。

すると、ゲストの心のクレームが聞こえたのか、風子ちゃんは視線の先はなおも携帯画面にむけたまま、僕に言葉だけをかけてきた。「気にしないでね、金田くん。私、携帯で小説書いちゃうタイプだ

から。×切が近くてあせつてると」

それは無理な話。そんな格好して、気にするなというのは。これから面接にむかう輩にむかって、呪われてると言っておきながら。ここはゆとり世代の一員として、たとえ携帯画面に表示されているものが、絵文字だらけのデコメールでなく、世界の未来を予言するような革命的文学作品であったとしても、言いたいことは言わせてもらおう。

でも、まずは世間的な挨拶から。とりあえず携帯ストラップとデビュー作の話題はパス。

よくよく見て見てみれば、それは十二支のストラップだった。つまり、彼女の携帯には十二個もの軽めの重りがついているわけだ。

自分の干支だったらわかるけど、十二支全部付けることになにか意味でもあるのだろうか。たぶんないだろう。だって、十二支以前にストラップというものそれ自体にたいして意味なんてないんだから。

「アルバイトって、もしかしてメイドカフェ？」

「うん。そうよ」

「それ店の制服？」

「うん。店長のモットーがね、東京を秋葉原化することなの。だから今もちゃんと時給が発生してるわけ。この格好で外歩いてると宣伝になるじゃない？少なくともメイド文化の宣伝には」

敵もさるもの。風子ちゃんはこれらの会話を、携帯画面から目をそらすことなく平然とこなした。しかもその親指は休むことなくキーボードをピッチしている。もしかしたら十二支ストラップにだってちゃんとした理由があるのかもしれない。僕には計り知れないなにか文学的な意味合いがあるのかもしれない。彼女が書いている小説と関係があるのかもしれない。

でも、僕が知りたいのは、世界の未来ではなくて、あくまで今日の個人的な出来事なのだ。

「で、そのメイドカフェって、悪魔払いとかする種類のお店？アルバイトの子は、みんな霊媒師？」

風子ちゃんは唇の両端をあげてようやく僕を見た。そうすると少し可愛らしく見えた。これぐらいのことを言わないと、「冗談も認めてもらえない感じだ。」

「靈感が強いのは私だけ。そういう店には、靈感の強いお客さんってまず来ないの。それが私がメイドカフェでバイトしてる理由。靈感の強い人って、世間が思っている以上に多勢いるし、そういう者同士が顔を向きあわせるのって、けっこうキツイものがあるの。」

「お互いの財布の中身がわかつちゃうから？」
「財布の中身だつてわかるし、背後に女性の守護霊が憑いてることだつてわかるわよ、御主人様」

風子ちゃんは僕にむかつて見方によつてはキュートともとれるアイコンタクトをしながらそう言った。当然、僕は内心ドキッとしたけど、昼間の堀田さんが関西弁をひた隠しにしているように、それはおもてにださないようにした。努めて平静を装って僕は言った。

「それ、たぶん守護霊じゃないよ。彼女ならまだ生きてるから」

「知ってるの？彼女のこと」

「うん。彼女、元気にしてるかな」

「そうね……元気なんじゃない。一応自分の脚で立ってるから」

「立ってるんだ。それは意外」

初対面であるにもかかわらず、いや初対面であるからこそ、共通の話題があるというのはいいことだ。たとえそれが僕にとり憑いているなにかしらであったとしても。呪われているらしい僕の持ち合わせだとしても。

「ところで、呪われたお金の使い道はどうすればいいのかな」

「ホームレスのオジサンにあげたら。いいにしろ悪いにしろ、少なくとも、あの人たちには変化が必要だと思うから」

僕には風子ちゃんの言ったことが冗談なのか本気なのかわからなかった。

紙カップを手にした堀田さんがようやく席にもどってきた。

「風ちゃんは靈感の強い子なんだ。昨日、金田くんの携帯に電話したあと、彼女がマンションにやってきて、危ないところを助けてもらったんだよ」

「私って、自分の知り合いが霊にとり憑かれると、必ずその人の夢をみるの。その人が夢にでてきて、霊に痛めつけられてるの」

「へー」と言ったのは僕で、「でも、君と僕とは、今日はじめて会ったわけだけど」

メイド風子ちゃんは不思議そうに僕を見た。堀田さんが席にもどっても、いつでも現代のパピルスに予言を書きだせる体勢をとっていた。

「夢にでてきたのは堀田さんよ。私、堀田さんが大阪かどこかの舞台ホールみたいところで、大阪弁の漫才師と漫才をしてる夢をみたの」

風子ちゃんは人の鼻先をナメるみたいにチョコレートパフェを舌ですくった。

「私、お笑い好きだからそれでよかったんだけど、問題なのは、ボケ担当の堀田さんが上手に大阪弁をしゃべれないってこと。大阪弁のボケを噛むたびに、相方の漫才師から殴る蹴るのツッコミを入れられちゃうの。でも、それが会場のお客さんたちには大ウケで。私あんまり堀田さんが可哀相で、それで目が覚めて、急いでウチをでてタクシーに飛び乗ったの。あの漫才師がただの漫才師じゃなくて悪霊だっということが私にはすぐにわかったから」

僕は風子ちゃんが夢でみた堀田さんの晴れ舞台を頭の中で想像してみた。それは意外と簡単にできた。もともとが大学教授には見えない人なのだ。

「マンションのインターホン鳴らしてでてきたのは、堀田さんじゃなくて漫才師のほうだった。薄気味悪かったけど部屋にあがったら、堀田さん、死にそうな顔してソファアに腰掛けてたわ」

「すっかり自己嫌悪に陥ってたんだ。金田くんが電話したあとだったからね。よりによって、漫才師の霊だなんて。最悪だよ」

「なかなか堂に入りましたけど」

「いやゴメン。昨夜のことは謝るよ。でも正直、どんな内容の話をしたかまでは覚えていないんだ。たしか三千円を返してくれ、みたいなことは言ったような気がするんだけど」

「『耳そろえて返してくれへんか』って言ってましたよ」

「やっぱり。ほんとゴメン」

「でもね、堀田さんは自分の意志とは無関係に、霊に言わされてただけなの。だから、金田くんも悪く思わないで」

風子ちゃんはそうフオローを入れたけど、僕にしてみれば、それはほとんどフオローになっっていなかった。

だって霊なんかより、二重人格のほうがよっぽど現実的な考え方だし、もしもそれが問題の根幹であったなら、堀田さんが電話で僕に言ったことは、ある意味すべて彼の本心になりうるのだ。最後に僕にむかって吐いた致命的な言葉さえ。

それに、二重人格者という考え方なら、堀田さんがこれまで関西弁を一切しゃべろうとしなかった理由も説明できる。おもての顔の堀田さんは、浪花の取り立て屋めいた裏の顔を無意識のうちに否定しつづけてきたはずだから。

「前から不思議に思ってたんですけど、堀田さんって、関西出身ですよ。どうしてふだん一言も関西話さないんですか？」

僕は自説の確証を得るためにたずねた。でも、また余計なことを口走っただけみたいだった。風子ちゃんも不思議そうに堀田さんの顔を見た。堀田さんはバツが悪そうにこぼした。

「それについては追って話しするよ。今はとりあえず先を急ごう」

風子ちゃんは話をつづけた。

「たぶんあの漫才師、堀田さんに漫才の手本でもみせてたんだわ。そこにお客がきたもんだから、喜んじゃって。一人でボケて一人でツッコんで。舞台と同じピカピカに光ったスパンコールのダツサイスーツ着て。私たちの前で悲しいぐらい昭和丸だしの漫才をはじめたの」

「僕にはそのときの記憶もまったくないんだ」

「堀田さんは魂の抜け殻みたいに座ったまま動かなかった。私、なんだか漫才師と二人切りで世界にとり残されちゃったような気がしてきて、普通の世界をとりもどすには、とにかくあの一人漫才を止めるしかないと思ったから、『もうヤメてくれない？ぜんぜんオモシロくないから』って言うてやったの。霊にはなにより霊自身がイヤがりそうなことを言うてやるのが一番効くみたい。生きてた時代のコンプレックスとかね」

「一種の特殊能力だよ。風子ちゃんには霊がイヤがるのがわかるんだ。言葉による一人ゴーストバスターズとでも形容したらいいかな」

「霊って、ドラマとか映画の中では、すごくグロテスクに描かれているけど、実際の霊は、赤ちゃんの肌みたいに敏感なの。だって、彼らには肉体がなくて、常に魂が剥きだし状態なんだもん。群集の中に一人で裸でいるみたいなもの」

「だから霊を退治するのに剣や銃は無用なんだ。彼らに有効なのは直接心に響くものでしかない。つまりそれが言葉であるわけ」

自分ではなにもしていない堀田さんが、偉そうに言った。

僕はふとメイド風子ちゃんが携帯で書いているミステリー小説のことを考えた。それはすごく面白いが、すごくつまらないか、どちらかのような気がした。そして物語にでてくる登場人物たちは、これは間違いなく一人残らずなにかにとり憑かれているか、なにかに呪われているのだ。彼女にしてみれば、僕たちみたいな輩はいいお

得意さんなわけだ。

風子ちゃんは呪いの国のコケティッシュなお姫様みたいに、呪われたしもべたちに語って聞かせた。

「緊張してる人と話していると、相手の緊張がこっちにも伝わってくることもあるでしょ？それと似たような感じだと思う。私には霊がすぐく気に入ることが、お願いだからそれだけは言わないでつてことが、あの人たちの様子からなんとなく伝わってくるの」

それは特殊能力というより、性格が悪いってことなんじゃないだろうか。もの凄く。DSとか。クラスにたいてい一人はいる、アダ名をつけるのが異常に上手いヤツとか。

でも、もしかしたらそれは物書きになるための重要な資質なのかもしれない。たいていの作家は性格が悪いらしいから。

だとしたら、風子ちゃんは素質十分というわけだ。ちょっと悔しいけど。

未来のアガサ・クリステイは話をつづけた。

「その昭和漫才師、キョトンとした目で私のことを見たわ。焼き魚みたいな目だった。たぶん、そのマヌケ面が生涯唯一まともな芸だったんじゃないかしら。でも私、その顔でピンときたの。昔この人のコントだか漫才だかを、テレビで観たことがあるつて。そのときもオモシロくなかったけど、やっぱり死んで霊になってもぜんぜんオモシロくなかった。だから、ほんと早く成仏したほうが本人のためだと思つて、『あなたの漫才ぜんぜんオモシロくない。笑えないの。もう死んでるんだからさ、いまさら生き恥さらさなくてもいいんじゃない？』つて言つてやったの。そしたら漫才師、『なんやとネエチャン。もういっぺん言うてみい』つて凄んだから、私、ホント頭にきちゃつて、『オモシロくないつて言つてんだよ、このKYジジイ！』つて怒鳴つてやったの。そしたら……」

風子ちゃんの表情が曇り、流暢だった言葉が途切れた。いったい、漫才師の霊はなにをやらかしたのか。今度は僕と堀田さんが顔を見

合わせるようになった。

奥歯を擦り合わせるかのように、風子ちゃんはやつとしゃべりはじめた。

「そしたら、あのクソ漫才師、唐突に私の前で衣装を脱ぎはじめたの。馴染みの銭湯にきたみたい。それもヘンな調子の鼻歌まじりで。『フーフー、フーフー』って。スパンコールの上着を脱いで、シャツのボタンを一つずつはずして。一枚一枚、丁寧に折りたたんで床の上に重ねていくの。そしてまた『フーフー、フーフー』って。なんかお座敷の余興みたいに、私の目の前で踊りながら脱ぎつつけるの」

「ほんと、我ながら最悪な霊にとり憑かれたもんだよ。恥ずかしいよ」

たしかに堀田さんにとって、それは終始最悪の出来事だったかもしれない。でも話に耳をかたむけながら、僕は彼とはべつのことを考えはじめていた。

それは僕自身の悪夢について。そして、風子ちゃんがつぎに口にした言葉が、その悪夢の扉を開く呪文になった。

「でもね、そのとき私ふと思ったの。いったい、この漫才師のオジサンの行動には、どんな意味があるんだろうって。霊には、その霊が生きていたところによくしていた行為を反復するという特徴があるし、人間の行動にも必ず意味がある。だとすると、あの漫才師のバカげた行動にだってちゃんと意味があるわけ。もしかしたら、堀田さんに霊がとり憑いた理由もそのへんに隠されてるかもしれないと思って、私、つぶさに漫才師の行動を観察したわ。そしたら私、一つあることに気がついたの。オジサンが口ずさんでる鼻歌、どこかで聞いたことがあるってね」

風子ちゃんはそのままで言つと、つづきはCMのあと、みたいに席を立っていった。

学食の中がざわめきだした。そろそろ午後の講義がはじまる時間なのだ。ほどなく学生たちの集団移動が開始された。

僕もいいかげん席を立たないと、電車の乗り換えだってあるし、面接の時間に間に合わない可能性がでてくる。でも、借りた金を返すという、ここにきた本来の目的はまだ遂げていなかった。もつとも、おもての自分をとりもどした堀田さんには、もはやその必要はないかもしれない。それに、僕の財布の中の野口英世博士はすっかり呪われてしまっているという話だし。

「堀田さん、午後の講義はいいんですか？」

「それはいいんだ」

メイド嬢が留守の間に僕はたずねた。返ってきた答えには二通りの相反する解釈が可能だった。「午後は講義がないからいいんだ」なのか、「午後に講義はあるけど、そんなのどうだっていいんだ」なのか。僕にはどうも後者のような気がしてならなかった。

どちらにしても、僕がそんな質問を投げかけたのは、べつに臨時雇いとしての堀田さんの勤務評価を心配したわけではなくて、無論のこと、自分の去り際を模索してのことだった。でも、僕のチャレンジはあえなく失敗した。

あらたなデザートを手にした風子ちゃんが、席にもどってきた。

話はこれからが佳境なのだ。

このあと僕が興奮して席を立ち、午後の空きはじめてた学食で、裏の堀田さんみたいな状態に陥ったのは、風子ちゃんが、たぶん二個目のデザートを舌ですくってから、まだ五分と経っていないときだった。

「そんなことあるわけない！」

関西弁と標準語との違いはあるにせよ、非常勤助教教授よろしく豹変した僕は、声を荒げて席を立った。もしかしたらテーブルをバンと一度ぐらい叩いたかもしれない。講義がはじまっても学食にたむろする暇そつな学生たちが何事かと振り返る。でも、一度火がつい

た僕のハートは、これしきの周囲の視線ではビクともしない……
……はずだったのだけど、まるで大人のケンカを眺める子供み
いな堀田さんと風子ちゃんの表情に気がついたとき、僕のハートは
つまり、あげくバケツの水にさした花火みたいにブスブスとなっ
た。

ただ、僕としても決して二人の純真な表情に心打たれたというわ
けではなかったし、そもそも文学繋がりが、あるいは良く言って靈
繋がりの三人が、子供みたいに純真であるはずもなかった。

そうではなくて、想像上のバケツの水をかぶって頭も冷えたこ
ろで、これまでの経緯をコンマ何秒かのうちに振りかえったのち、
ようやくある事実を悟ったという次第なのだ。

つまり、僕はまんまと二人にハメられていたのだ、と。

それはハードロックカフェな堀田さんにとってチャンス問題にな
るはずだった。たとえ超ウルトライントロだって即答できたに違
ない。でも実際には、堀田さんは問題をだされる以前から答えを知
っていたわけだ。なぜなら、彼と風子ちゃんとはここへ来るより先
に事の顛末について十分に話しあってきたはずだから。そうでな
ければ、風子ちゃんがここにいるはずがない。

「それって、ローリングストーンズの『悪魔を憐れむ歌』じゃない
かな」

当然正解。それが例の漫才師がストリップがてら口ずさんでい
たという、風子ちゃんが聴いたことがあるという、「フーフー」な
歌の曲名だった。回答者はもちろん我らが堀田さん。

「そう、それ。『悪魔を憐れむ歌』」

パフェをペロリと舌でなめ、風子ちゃんはそう言ってチラリと僕
を見た。いや、もしかしたら、僕の背後にいるという守護霊モドキ
を見ていたのかもしれない。

どちらにしても、それは僕にとって、点と点が結ばれた瞬間だっ
た。東京の大学構内にある学生食堂と、遠く離れた川ノ崎のコンビ

二エンスストアとが、見事に一本の線でつながった瞬間だった。『ハリー・ポッター』の作者なら、この状況を「まさに音楽、それが魔法なのです」と書き記したかもしれない。ストーンズファンなら逆に怒り心頭で、ページを黒く塗りつぶしたかもしれない。

僕はといえば、心情的には後者に近い。なにしろテーブルを叩いて席から立ちあがったぐらいだから。だって、アーティストの創作がいちいち本当の話になってたら、世紀魔？のデーモン小暮は本当に23000歳ということになってしまわないか。

「まあ、座れよ、金田くん」

「そうよ。座ったほうがいいわ」

興奮が冷めた僕は言われるがままにそうした。でも、二人の猿芝居につき合ったわけではない。二人に悪気はなかったということはわかっているけど。

「金田くん、『悪魔を憐れむ歌』になにか心当たりでもあるの？」

「いや、べつに」

風子ちゃんの執拗な質問に僕はあくまでシラを切った。本当は心当たりアリアリだったし、二人だってそのことはすでに感じていたはずだ。

それからの話は、だいたいが予想どおりにすすんだ。ストリップショーの漫才師はついにブリーフパンツ一枚になると、風子ちゃんの前に正座し、カンネンしたかのように深々と頭を下げ詫びをいれたそうだった。そして、事の真相を語りだした。自分が『悪魔を憐れむ歌』の悪魔に命令されて動いていたこと。その悪魔が金田マサルという名の男子学生に呪いをかけようとしていること、などなど。そして、折り畳んだ服を脇にかかえると、もう一度こうべを垂れ、ブリーフ姿のままどこへともなく消えたらしい。

どうも僕は本当に呪われているようだ。それにしても、漫才師というのはもともと喋るのが仕事だから口が軽いのは致し方ないとし

ても、堀田さんではないけれど、どうしてよりによって漫才師だったのか。

いや、もしかしたら、これが中尾悪魔の考えた策略なのかもしれない。徐々に徐々に僕を孤立させること。ガールフレンドのつぎは大学の恩師。僕に近い人間が一人一人、僕から離れてゆく。しまいに僕は孤独に耐えきれなくなって、コンビニ店長の名刺を手に故郷の土を踏む。でもそこには、当然ここよりさらに強力な罠が仕掛けられているといった案配だ。

堀田さんと風子ちゃん、あきらかに最初に会ったときより厳しい目で僕を見ていた。最初、被害者だった僕は、もはや容疑者の立場にいるのだ。

「これで私たちの知ってることは全部話したから、今度は金田くんが話す番じゃない？」

「はやくも二個目のスイーツを平らげた風子ちゃんはつづけた。

「まずは、金田くんのうしろに立ってる守護霊みたいな女性について。さつき、彼女のこと知ってるような口ぶりだったけど。私、彼女から強い引力を感じるの。それもなんだかすごくローカルでコンビニな引力」

「コンビニな引力？」

「僕は聞いた。」

「うん。だって、その女の人、コンビニの前に立ってるんだもん。なんか夜になったらヤンキーがたむろしてそうな地方のコンビニ。彼女、誰なの？金田くん、知ってるんでしょ」

「知ってるよ。でも、言えない。彼女のプライバシーに関わることだから」

「ここら辺が潮時だ。僕は真鍋さんのことはもとより、コンビニ店長も、いいや川ノ崎の街が含むすべてを、ほかの人にしゃべるつもりはなかった。僕は最後までしまっておいたとおきの爆弾をなげることにした。」

「その代わりにべつの情報を提供するよ。じつは関西弁の霊は、その漫才師だけじゃないんだ。下宿をでてから、学食にくるまでに、僕は関西弁霊にとり憑かれたと思わしき三人の人間と出会った。そして見事に、三人から関西弁で怒鳴られた。それが、僕が約束の時間に遅れた理由。だから、堀田さんもまだ気を抜かないほうがいいと思いますよ。いつまたとり憑かれるかわからないから」

僕の言葉による爆弾は堀田さんを直撃したようだった。目をやる
と、堀田さんは口をあんぐりと開け、魂のぬけがらみたいな顔をしていた。たぶん、風子ちゃんがマンションで見たのと同じ顔。

僕は「面接にいきなきゃいけないから」と言っつて、ようやく席をたつた。一人の女性とおまけにコンビニが張り付いているという僕の背に、風子ちゃんの声がとどいた。

「金田くん、あなた人の心配してる場合じゃないでしょうに！」
たしかに。

結局、面接にはいかなかった。なんだかイヤな予感がしたのだ。それも身の危険を感じるほどの。やはり、コンビニ店長が書いていたように、しばらく部屋でじっとしているのが得策かもしれない。エアコンとパソコンが故障中ではあつても、冷えた水ようかんぐらいはあるし。

イヤな予感にはやくも的中した。帰りの道中、僕はいたるところで敵意ある視線を肌を感じた。いつもの大学通りがヤクザな繁華街に見え、馴染みの喫茶店がぼつたくりバーに見えた。

駅に着けば、反対側のプラットホームに立っているメタボリック気味のサラリーマンが、黒縁メガネの奥くから僕を見つめ、なにやらブツブツつぶやいている。耳にはとどかないけれど、十中八九それは関西弁であるのに違いない。丸い顔が徐々に赤く紅潮してゆく様が見てとれる。まるで自分でつぶやいた言葉に怒っているかのようだ。

ついには怒りが頂点に達したか、メタボサラリーマンは僕にむか

って反対側のホームで叫びだした。なんだか、溜め込んだ仕事上のストレスが一気に吹きだしたみたい。まったく、そういうのは上司が取引先にやってほしい。

「コラー、そのボンクラ学生！そこで待つとけ！いてコマシたるー！」

サラリーマンは階段めがけて走りはじめた。こっちのホームにわたってくるつもりらしい。ホームに電車が入ってきた。これ以上ないタイミングで。

僕は本当に守られているのかもしれない。いや、まさか。

飛び乗った電車のドアから、黒縁メガネをずり落としながら階段を駆け下りてくるサラリーマンの姿が見えた。間一髪で電車の扉が閉まった。

「ま、ま、待たんかい！社会人ナメんなよ！」

叫びながら、しばし電車と併走するメタボ。その腹が苦しそうにタプタプと揺れていた。まさに九死に一生だった。でも、どうして僕が学生だとわかったのだろうか。

「外へであれば男には七人の敵がいる」とは言うけれど、このままのペースでいくと、僕にはそんなものでは収まり切らないみたいだった。車内を見渡せば、乗客には外回りのサラリーマンが、言ってみれば関西弁予備軍の集団が、チラホラまじっている。サラリーマンだけではない。制服姿の高校生だって十分アブナイ。なにしろこの日、僕を朝一番に関西弁で恫喝してきたのは、まだランドセルを背負った小学生の男の子だった。男の子は、通りですれ違いざま顔をあげ、まだ声変わり前の黄色い声で言ったのだ。

「コラ、兄ちゃん、なにメンチ切っとなねん！小学生にケンカ売るヒマあったらな、とっとと就職先決めて、お国のために働かんかい、このどアホ！」

もちろん僕は小学生相手にメンチは切っていない。

それでも、まだ相手が子供なら少しは可愛げもある。ある意味、刺激的な励ましともうけとれる。しかし、これが大人相手だと話はまったく違ってくる。

「やんちゃな男の子と別れたあと、履歴書用の封筒を買ったために立ち寄ったコンビニで、僕は店長らしき男に腕を掴まれこう言われた。『学生はん、万引きは立派な犯罪でつせ。一緒に交番いきましょか』」
「なにも盗ってないよ」

僕は手にした封筒をみせてマトモにこたえた。でも、それは間違えだった。やっぱり、僕はコンビニ店長という人たちとはどうもウマが合わない。浪花

生まれの岡っ引きめいた店長は、手に一段と力をこめた。

「みんな、そう言うんや。就職活動中のとこすまんけどな、あんたの夏はこれでおしまいや。お疲れさん。さ、いこか」

東京で関西弁を使うコンビニ店長はいるかもしれない。万引きの冤罪だってタマには起こるだろう。でも、僕が就職活動中の学生であることを知るコンビニ店長はまずいない。少なくとも川ノ崎以外には。

僕は店長の手を振り払い、封筒の束をフリスビーみたいに投げた。それはクルクル回りながら店内を旋回して、狙っていたわけではなけれど、ちょうどカウンターに設けられた『おでんコーナー』のストープの中にポチャッと落ちた。

「うおーッ！ワイのおでん！ワイが手塩にかけたおでんがー！」
それは、こだわり店長のこだわり風おでんだったのか。あまりのシヨックに、こだわり店長は男のこだわりの雄叫びをあげ、僕の存在を一瞬忘れたみたいだった。自動ドアから客が入ってくる。この好機を見逃す手はない。

万引きの濡れ衣を着せられた僕は、まるでコンビニ強盗になったみたいに店の外へと飛びだした。路地からでてきたタクシーが急ブレーキで目前に止まる。血相をかえたタクシードライバーがドアか

ら顔をだした。

「どこに目つけとんじゃ、ボケ！ひき殺されたいんかい！」

背後からコンビニ店長の声が響く。

「運転手はん、そいつ捕まえてくれ！おでん泥棒や！」

「なんやと、ホンマか！」

いつの間にか、おでん泥棒にされてた僕は、ボンネットをかけたぼってジャンプし、とにかく走りつづけた。

今ごろ窃盗および器物破損の容疑者として、僕は指名手配されているかもしれない。でも、コンビニの防犯カメラに残された映像は、逆に僕の無実を証明してくれることだろう。

そんなことを考えながら、コンビニ以上に危険きわまりない密室状態の電車に乗り合わせた僕は、朝からつづく一連の災難を思いおこし、ようやくある統計的な事実を発見した。

それはつまり、小学生をふくめて、これまで遭遇した関西弁霊にとり憑かれた人たちが、すべて男だということ。しかしそうなる中尾悪魔はどうして女である真鍋さんにとり憑いたのかという疑問がのこるけど、それはこの際問題外。とりあえず僕は車両の移動を開始した。誰とも目が合わないようにうつむきながら。

僕が目指したのはJRの桜の園。男どものいない世界。先頭にある女性専用車両だった。それはたしか、通勤時間限定のサービスだったような気もしたけど、ワラにでもすがりたい僕は、とにかく先頭車両めざしてイバラの道を歩みつづけた。

記憶違いだったか、JRの桜の園は日中でもちゃんと存在した。ということとは、同時に男である僕がそこにいてはいけないことにもなるのだけど、緊急時なのでそれは大目にみてもらうことにした。

もつとも、車両の女性客たちは、僕の存在など八ナから気にしてないようではあった。スーツ姿の僕が足を踏み入れても、誰一人顔もあげなかった。もしかしたら、僕にはもとから男としての存在感

がちよつと希薄なのかもしれない。一人ぐらゐは気がついて顔をあげてもよさそうなものだけだ。

どちらにしても、これ幸い。僕は亀のように小さくなって、隅の席でじつとしていることにした。

しかし、よくよく考えてみれば、この桜の園状態は必ずしも都合のいいことばかりではなかった。僕はシートに腰を落ち着けてからそのことに気がついた。

たとえば、次の駅で関西弁霊にとり憑かれた男がこの車両に乗り込んできたらどうなるか。これまでのケースを考慮すれば、僕が女性たちの前で見知らぬ男から関西弁で怒鳴られることになるのは目に見えている。そんな僕だってイヤだけど、偶然居合わせてしまった女性たちにとつても迷惑な話だ。

こうしてはいられない。僕は臨戦態勢を復活させることにした。気を抜いてる場合ではない。ドア越しに立って、プラットホームの容疑者が車両に足を踏み入れそうになるのを発見したときには、すぐさまホームに飛び降りるのだ。

せつかく気を張って臨戦態勢はとつたものの、実際に僕が次にプラットホームに足をおろしたのは、地元の阿佐ヶ谷駅だった。つまり、容疑者は最後まであらわれなかったのだ。女性専用車両に乗り込んできたのは、本当に女性だけだった。

さすがは日本人。生真面目な国民性の賜物か。

いや、そんなことはない。これは国民性でも、ただの偶然の結果でもないのだ。僕はなんだか世間から過大評価されているルーキーみたいな、大勢の女性に見送られながら、逃げるようにプラットホームにおりた。

下宿先にもどつて卒業制作にとりかかろうとしても、我がパソコンは相変わらずウンともスンとも言わず、エアコンも右へならえの状態で、仕方なく僕は換気扇を回して部屋の窓を全開にし、久しぶりにケリー・リンクの短編集を手にとつた。

でも、一行もまともに読めなかった。とてもじゃないけど読めた代物ではなかった。無論、ケリー・リンクの文章が悪いわけじゃない。そんなことがあるはずがない。彼女こそ小説界のフアンタジスタなのだから。

記念すべきケリー・リンクのデビュー作『スペシャリストの帽子』が、『スペシャリストの帽子やねん』になっていた。ハードカバーの『マジック・フォー・ビギナーズ』が、『マジック・フォー・ビギナーズ、それってなんなん』になっていた。二冊の短編集に収められたすべての作品は、どれもご丁寧にタイトルから登場人物のセリフまで、すべてが適当な関西弁に書きかえられていた。いやこの場合、関西弁に翻訳されていたというべきか。

いずれにしても、ケリー・リンクはアメリカの作家であって、難波とか、岸和田出身の女流作家ではない。当たり前だ。これは、関西弁霊がついに活字の世界にまで侵攻してきたということなのだ。

僕は手当たり次第、棚にいらんだ本や雑誌を引きぬいてみた。漱石の『それから』が、『それからでんな』になっていた。ヘミングウェイの『日はまた昇る』が、『日はまた昇る、それがどないしたん』になっていた。F・K・ディックの『アンドロイドは電気羊の夢をみるか』にいたっては、『ほんまアンドロイドは電気羊の夢みるんかっちゃう話や』になっていた。

僕の本棚は、ほぼ壊滅的な打撃をうけていた。唯一無傷でのこったのは、松本人志の『シネマ坊主』だけかと思われた。

心の広い読書家なら逆に面白そうだと、関西弁バージョンの漱石やヘミングウェイにトライしていたかもしれない。でも、今の僕にはそんな精神的余裕はなかった。堀田さんじゃないけれど、僕も関西弁アレルギーを発症しつつあった。もう関西弁だけにかぎらず、関西に関連するあらゆることに触れたくないのだ。

僕はコーヒーを沸かし、棚からセロニアス・モンクのCDを選ん

でデッキに入れた。ピアノトリオの演奏ならまず間違いない。関西弁はでてこないだろうと考えただけで、でも、そんなふうに見える。してしまうこと自体、悪魔の術中にはまっている証拠なのかもしれない。

コンビニ店長の手紙を読んだときには、悪魔の呪いというから、それこそ僕が思い浮かべたのは、ハリウッド的なドラマチックな展開だった。白昼の街が暗雲に包まれて、次々と僕めがけて落雷が落ちてきたり、地面が突然裂けて、そこから得体の知れない化け物があらわれ、奈落の底へと引きずり込まれたり。あるいは、子供向けのファンタジーみたいに、子ブタに変身させられたり。だから、逆にそんな夢みたいなのが現実におこるはずがないと、タ力をくくすることもできた。

でも、それがまさかこんな地味で、ある意味ベタな呪いでくるのは。

いや、もしかしたら、本来の状況はもっと悲惨なことになっていたのかもしれない。堀田さんは僕が三千円の借りを忘れていたことに腹を立て、卒業制作に赤点をつけていたかもしれない。小学生の男の子はヤンキー高校生だったかもしれないし、万引きの罪で警察に誤認逮捕されたあと、タクシーにひかれていたかもしれない。

どんな可能性だってある。風子ちゃんが言っていたことが真実ならば。僕が真鍋さんに守られていなければ。

しかし、それが僕には一番信じられなかった。あの真鍋さんが僕を守ってくれているなんて。それなら、まだ悪魔にとり憑かれた件のほうが真実味がある。実際、彼女にはそれを匂わせる生真面目すぎる一面があったし。むしろ守るよりは、二人の別れ方からして、呪うべき立場にいる人なのだ。

けれど、三年という年月が彼女の心を癒やし、頑なな意志を和らげたのかもしれない。それでコンビニ店長と付き合っているのかも

しない。

そんなふうにも考えでもしなければ、あまりにも都合のいい偶然が重なり過ぎた。怒り狂ったメタボサラリーマンが階段をわたってきたとき、計ったかのように電車がホームに入ってきたこと。封筒がちようどおでんのスープに落ち、既定の時間帯でないにもかかわらず、電車には女性専用車両があつて、最後までそこに男性客が一人も乗車してこなかったこと。

なにかしらの力が働いていないかぎり、こと僕の人生にかぎってこんな連続した幸運は起こりえない。

ただ、もしもこの幸運が真鍋さんのお陰だったとしたなら、そもそも関西弁霊にしても本来悪魔が意図したものは異なつた形になつている可能性がある。中尾悪魔は言葉などではなく、もっと暴力的な呪いをかけていたのではないか。それが、呪いの対象である僕に真鍋さんの力が働いているため、関西弁霊という形に弱体化されているだけなのだ。

しかし、どうして関西弁だったのだろうか。風子ちゃんみたいに、真鍋さんもお笑い好きなのだろうか。

いずれにしても部屋に引きこもっている場合ではない。このままでは就職浪人まっしぐらだし、なにより僕には真鍋ミユキさんという強い味方がついてるわけだから。

それに関西弁霊にしたところで、とり憑いているほうも、とり憑かれてているほうも、ごくごく普通の人間みただし、べつに恐れる必要なんかない。怒鳴られたら怒鳴りかえしてやればいいだけだ。周囲の目なんか気にしなればいいのだ。気にするけど。

とりあえず僕は気分転換のためにシャワーを浴びることにした。それから約5分後、僕は素っ裸のまま、じつとシャワーの小さな穴々と無言の会話をしていた。蛇口をひねっても、お湯も水もでなかつたのだ。僕はシャワーを浴びることはできず、よって気分転換もできなかった。

水道料金はちゃんと納めている。ならば、これも呪いのなせる業か。なんてセコい悪魔なのだろう。

いや、違う。そうではないのだ。もしかしたら、僕が蛇口をひねった瞬間、そこからは熱湯が勢いよくでて、僕は大火傷を負っていたのかもしれないのだ。

いいや、間違いないくそうなっていただろう。真鍋さんがついていてくれなければ。

中央線沿いの雑多な夜風が、まるで春の潮風のように心地よかった。自宅でのシャワーをあきらめた僕は、夕飯の弁当を買いにいぐ途中、近所のコインシャワーでそれをすませた。

コインシャワーにはシーズンオフのホテルみたいに人影はなく、弁当屋は女性スタッフだけだった。

怒鳴られたら怒鳴りかえせばいいとはいっても、やはり無駄な争いは避けたほうがいいに決まっている。このまま上手く運べば、僕のモラトリアム生活はどうか成立していきそうな感じだった。

でも、百戦錬磨の悪魔がそう簡単に引き下がるはずがない。僕の淡い期待は、弁当片手に下宿先にもどったとき、はやくも木っ端微塵に砕け散ることとなった。

「コラー、金田！どこほつつき歩いとんじゃ！今何時や思うとんねん！人を待たせやがって、このゴロツキが！」

背筋がゾツとした。斧を手にした『シャイニング』のJ・ニコルソンと道端でバツタリ出くわしたような気分だった。潮風めいていた夜風は、男の怒鳴り声に一気に浪花の嵐になりそうな気配をみせはじめていた。僕を待っていた輩は、きっと自らの怒りによる発熱と、湿った空気の影響で、黒縁メガネのレンズをどんよりと曇らせていた。昼間のメタボサラリーマンが下宿前の街灯の下に立っていた。

「どうしてここがわかったんかつちゅう顔やな、金田。社会人ナメ

んな言うたろうが。冥土の土産に教えたるわ。これや、コレ」

メタボはネクタイをゆるめ、その手を鞆の中に入れた。まさか本当に斧でもとりだすつもりなのか。それはマズい。こっちの手持ちは唐揚げ弁当だけなのだ。勝ち目はない。

「本名、金田マサル！生年月日、平成元年8月6日！住所、東京都杉並区阿佐ヶ谷……」

まるで卒業式の校長みたいに、メタボサラリーマンは家々の窓明かりにむかって読み上げた。奴が鞆にしのはせていたのは斧ではなかったけど、個人的にはそれに匹敵するほど厄介な代物だった。

どうして奴が僕の履歴書を持っているのか。思い当たるのは今日、キャンセルした会社の面接官だった。でも、僕がメタボと遭遇したのは大学の最寄り駅。面接会場が駅のプラットホームであるはずがない。

「学歴！平成15年川ノ崎市立川ノ崎中学校卒業！平成18年神奈川県立川ノ崎高校卒業！同年野中大学文学部入学！大したもんやないか、金田！なんで面接来なかったんや、アホンダラ。ま、来ても落としたけどな、ガハハハハ！」

メタボは大声でつぶける。

「まーだ、わからんのかいな。ワイはな、お前が今日、面接ドタキヤンするかもしれへんちゅう情報をお方から入手して、先回りして駅で待つとんたんや。そしたらお前、案の定、面接会場とは逆方向のホームにおつたやないか。ワイはホンマ目疑ったで。そんなんで、この就職氷河期生き残れる思うとるんか。今日はな、そのお前の腐り切った根性、ワイが叩きなおしたるやさかい。まあ、まずは詫びの印に、部屋あがって茶でもいれるや」

たしかにメタボの言うことにも一理はあった。だからといって、茶をだす気にはまっただくなれない。

しかし困った。下宿先にまで押しかけてくるとは思わなかった。

この状況では、いくら怒鳴り返したとしても、肝心の逃げ道がない。

こうなると、それこそ風子ちゃんみたいに関西弁霊を一撃のもとに退治できる必殺仕事人的な言葉が必要になってくる。でも、そもそも風子ちゃんみたいには霊が見えない僕に、霊のイヤがる言葉が思い浮かぶはずもなかった。

「どないしたんや、人の顔じつーと見て。つづき読もか？」

メタボ面接官は手にした履歴書をチラツかせた。街灯の下で、僕の半生のごとき紙切れが白く光る。

もちろん僕はメタボの顔など見つめてはいない。その背後にいないはずの関西弁霊を見つけようとしていたのだ。でも、当然そこに人影は見当たらない。結果的に僕はメタボを見ていることになってしまふ。またしても、奴の言っていることが正しいことになる。これではあまりにもシャクにさわる。

メタボの背に張りついている霊がはたして生前どんな関西人であったのか僕は知らない。そんな僕にできるベストの選択は、関西人の最大公約数的なモデルをそこに当てはめることだけだった。

そのモデルとは、以前同じクラスだった男子学生なのだけど、彼は人から指をさされることと、同じく「キミ」と呼ばれることをひどく毛嫌いしていた。彼によれば、その二つの行為は関西圏では御法度なのだという。人にあるまじき、畜生にも劣る行為なのだという。死者にムチ打つ行為なのだという。

その元クラスメートが関西人の最大公約数に該当するかどうかわからないけど、僕の関西出身の知り合いは、彼と堀田さんしかいないのだから仕方ない。おそらく、彼のほうが堀田さんよりはだいぶ関西人らしいことは確かだし。とりあえずやってみるしかない。

僕はメタボの顔に標準をさだめ、人差し指を真っ直ぐにむけた。

「なんや、なんの真似や。面接ドタキャンしたくせに逆ギレか。ええ度胸してるやないか」

メタボは僕の人差し指を、まるで剣でも突きつけられたかのように

にアゴをだして見据えた。いくらかは動揺しているようだ。元クスメートルの彼が言っていたことは本当だったのか。

僕はファンタジーゲームの主人公みたいに、魔法の剣を手に一歩二歩前に進んだ。黒縁メガネの魔物がそれにあわせて後退した。

「人を指さすな！学校で教わらなかつたかんか！」

「教わってないね。すくなくとも関東の学校ではそんなこと教えない」

「なんや！この関東の田舎モンが！」

メタボの慌てぶりからして、これは効果アリと僕は踏んだ。狼狽える魔物に追い討ちをかけるべく、つぎに魔法の呪文を唱えた。

「うるさいだよ、キミは」

「キ、キミ？今、キミって言ったんか。人のことキミ言ったんか」

「ああ言ったよ、キミ。キミさ、とつとと消えるよ。ウザいんだよ」

「人をキミ言うな！人に指さすな！」

ふたたび逆上するメタボ。ここまではよかつた。でも、そのあとが悪かつた。もしかしたら、僕はクスメートルの発言の主旨を勘違いしていたのかもしれない。関西人を指さし「キミ」と呼ぶ行為は、むしろ米国人相手に中指を立て「ファック」と呼ぶ行為に等しいのではないか。僕の呪文はあっさり解かれ、メタボが闘牛のように突進してきた。

こうなったらヤルしかない。遠い空の下では、真鍋さんが僕のために悪魔と戦っているのだ。それを思えば、腹のでたサラリーマンと格闘するぐらい屁でもない。

「ウギヤァー！」

むかつてきたメタボは胸に手をあて苦しそうに悶絶した。奴は僕の魔法の剣によって切り裂かれ、返り討ちとなったのだ。でも、血は一滴たりとも流れはしない。僕の剣は、さつきまで奴を指さしていた手に手をそえてだけの「エアーク」だったから。

関西人というのは、相手になにかしらツッコミを入れられると、

どうしてもそれにたいしてリアクションをとらずにはおけない人種らしい。べつに通りで乱闘してもよかったのだけど、せつかくのシヤワー帰り。暑苦しそうなサラリーマンの体に触れるのは気が引けた。そこで、いつかテレビで観た関西人をテーマにしたバラエティ番組を思いだし、とっさに僕はエア―剣をかざしたのだった。

「コラー、金田！」

メタボは当然すぐに回復し、ふたたび僕にむかってくる。僕はそれを「エイヤ！」とばかりふたたび切る。

「ウギヤ―！切られたー！」

メタボのリアクションはこちらの期待以上だった。堀田さんの漫才師にしろ、中尾悪魔の選ぶ関西弁霊はどうしてこうもコテコテなのか。

いいや、そうじゃないのかもしれぬ。中尾悪魔は本当はパンチパーマのコワ面を僕のもとに送り込んでいたのかもしれないのだ。それが真鍋さんによつて、比較的無害な人選にかえられているとしたら。

ならば、その期待にこたえるべく、奮闘せねばならない。僕はメタボの腹めがけ、剣を突き刺した。

「やめろ！金田、やめてくれ！」

メタボはワイシャツの腹をおさえて嬉しそうに悶絶する。たぶん、関東から北の人間なら、へべレケに酔っ払ったときにしかそんなこととはしない。

僕は真鍋さんと、さらにはメタボの期待にもこたえるため、腸の周辺を深くエグった。

「アカン、死ぬ死ぬ！そんなことしたら死んでまうて！」

メタボは、いやメタボにとり憑いた関西弁霊は、自分が関西人であつたことの喜びを、今一度、体全体で表現していた。

しかし、リアクションしてくれるのはいいとして、このままではラチが開かないのも事実。切って切られて永遠その繰り返し。さて

どうしたものか。

すると、まだ腹に剣が刺さっているはずのメタボの顔つきが一変した。おバカな関西人はどこかに消え、会議室の社会人の表情がスツと降りてきた。おまけに、厄介者みたいに両手で僕を押しのとくと、「なにしてんねん」と低く冷静に言いはなつた。

僕たちのつかの間のコンビ芸は解消され、メタボはすっかり酔いが醒めたような目つきをしていた。もしかしたら背後に奴の上司かパトロール中の警官でも立っているのかもしれない。袖にされた僕は、元相方の視線を目で追った。

夜の通りに、ゴスロリアニメのヒロインみたいな風子ちゃんが立っていた。

「なんや、ネエちゃん。見せ物ちゃうで。とつとと家帰り」

メタボは言った。ただ、風子ちゃんがそれを聞き入れた様子はなかった。唇を固く結び、両手を腰にあてたポーズを崩さなかった。

彼女は夜の風紀委員長みたいに堂々としていた。ここからは猫一匹通さない、といった感じだった。そして僕がしたよりもゆっくりと、黒いネイルの先端を真っ直ぐメタボにむけた。

なんだかひどく慣れた感じだったけど、コイツにその手は通用しないのだ。いいや、もしかしたら――――。

「なんやねん、どいつもこいつも」

メタボはウンザリしたように言った。その言葉の調子にはまだ余裕が漂っていた。でも、今度ばかりは相手が悪かったかもしれない。

「トナカイ」

風子ちゃんは唐突に言った。トナカイ？最初、僕には彼女の意図がまったく呑み込めなかった。とにかく覚えた言葉をなんでも口にしてしまう赤ちゃんみたいな印象だった。

それでもメタボには、いや、メタボにとり憑いている関西弁霊には、その言葉の意味がちゃんと伝わっていたようだった。風子ちゃ

んが言った瞬間、ヤツはまるで年頃の女の子みたいに鼻を両手でおさえたのだ。

「トナカイ」

風子ちゃんは今もう一度言った。

「人をトナカイ呼ばわりすな！」

メタボの声は震えていた。いや、鼻を両手でおさえているからそういふうに聞こえたただけなのかもしれない。どちらにしても、風子ちゃんがそれでやめるはずがない。

彼女は指先をクルクル回しながら唱えるように言った。

「トナカイちゃん。赤鼻のトナカイちゃん」

「人を赤鼻のトナカイ言な！」

メタボは泣きだしそうだった。僕は、「霊が僕たちより敏感」だという、風子ちゃんのことを思い出していた。

たぶん、メタボにとり憑いている霊は赤鼻で、子供のころからそのことをカラカわれつづけてきたのだろう。その男の子にとってクリスマスシーズンは、ほかの子供たちみたいに胸躍らせる季節ではなく、まさにブルーブルークリスマスだったのかもしれない。

気の毒ではあるけれど、今はそんなことも言ってもらえない。僕も一緒になってメタボを指さし、すっかりシーズンオフではあるけれど、風子ちゃんと『赤鼻のトナカイ』を道端で合唱した。

「真つ赤なお鼻のトナカイさんはいつもみんなの〜」

メタボの手が今度は鼻から耳へと移動した。そしてついには歌が二番にいく前にアスファルトに両ひざをついた。

僕はいろんな意味で胸をなで下ろした。『赤鼻のトナカイ』の二番の歌詞なんて知らなかったから。

「すみませんでした！もう勘弁してください！」

土下座したメタボがアスファルトにむかって哀願した。即席の阿佐ヶ谷少年少女合唱団は歌をやめ、風子ちゃんの両手はふたたび腰にもどった。

「つぎはこの程度じゃすまないからね。身元調査して、亡くなったお父さんは霊になってこんな悪いことしてるんですって、あなたの家族に知らせることだってできるんだから」

「二度といたしまへんから！どうか家族には内密にしといてください！」

「本当ね。本当にそう思ってるなら今回だけは許してあげる。行っていいわ」

「おおきに！ありがとうございます！」

メタボは膝をあげ、僕たちに一礼し、きびすを返した。

「待つて。置いてくものがあるでしょ、オジサン」

風子ちゃんはメタボの背に声をかけた。当然と言うべきか、ヤツは僕の履歴書を僕にはなく、おずおずと風子ちゃんに手渡した。もつとも、我らが風紀委員長の真の目的は僕の履歴書ではなかった。メタボのスーツのポケットに手をつ込み、彼女はそれを強制的に没収した。

「オジサン、会社帰りにこんなもの必要ないわよね？」

「スンマセン。すっかり忘れてましたわ」

メタボはバツが悪そうに頭をかいた。そして突然身をひるがえして走りだした。

「これですんだ思うなよ、ボケー！」

通りの角からメタボの、いや、元トナカイ少年の遠吠えが聞こえた。殺伐とした夜風が吹いて僕たちを包んだ。

「だから、人の心配してる場合じゃないって言ったじゃない」

風子ちゃんは強い口調でそう言うと、じつは風紀委員長が影のスケ番だったみたいに、僕の目の前で手にした折りたたみナイフの刃を飛び出させてみせた。

僕はメタボではなく、彼女にお茶をだすことになった。

風子ちゃんには窓際の席を用意した。それは僕にできる最高のおもてなしだった。冷たいお茶と水ようかんをふるまい、コンビニ店

長の手紙に目をとおしてもらった。

学食では話さなかったけど、今さら事の次第を隠しておくのはさすがに気がひけた。

さて、僕が感心して読んだコンビニ店長の文章に、未来のアガサ・クリステイでもある女の子がどんな反応をしめすのか、個人的にはそのへんのところも気になるところではあった。

でも、彼女は潮の香りがまだのこった便箋に目を落としながら、表情をおもてにだすことは一切なかった。どうも、風子ちゃんにとってコンビニ店長は、あくまで水ようかんを贈ってくれた人物であり、それ以上でもそれ以下でもなさそうだった。

時折、窓から入ってくる夜風に長い髪が揺れていた。

風子ちゃんは手紙を読み終えると、まるでお口直しでもするみたいに、今度はピンクの携帯電話で自分の執筆活動を開始した。そうとうメ切に追われてるみたいだった。

それでも、彼女はキーボードを打ちつづけながら僕との会話はつづけてくれた。それがペンであるにしろ、携帯の小さなキーボードであるにしろ、彼女にとって文章を書くことは、呼吸するのと同じぐらいに自然な動作のようだった。

「やっぱり来て正解だった。私ね、帰りの電車の中で金田くんの夢見ちゃったの」

「それってもしかして悪い夢？」

そうに決まっているのに、恐る恐る僕はたずねた。

「どちらかといえば、そうなるかも。金田くん、夢の中でさっきのサラリーマンに刺されてたから」

「.....あのさ、世紀魔？のデーモン小暮ってほんとうに23000歳なのかな」

「なにそれ。そんなこと今どうだっていいでしょ。それにデーモン小暮は23000歳じゃなくて100047歳」

そうだったのか。でもこの際、77000歳ぐらいの誤差は間違いいには入らないはずだ。

「これから僕はどうすればいいんだろ……風子ちゃん、よかつたら今晚泊まっていけない？変な意味じゃなくて」

「そうしなくても済むように、私、コレ渡しにきたのよね」

風子ちゃんは携帯の最後のキーを親指で押して言った。

「おしまい。送信と」

「この携帯、金田くんにあげる。もう全部書き終わったから、必要ないの。今、編集の人に小説メールで送信したとこ」

「……携帯なら持ってるけど」

「これね、私にとって命の次に大事なものの。私のすべてがこの中に詰まってると言っても大袈裟じゃないくらい。だからきつと金田くんのことを悪い霊たちから守ってくれるはず。御守りにして。どこに行くときにも肌身離さず持ち歩いて」

ピンクの携帯を、僕が？十二支のストラップも一緒に？

僕の表情を読みとったのか、風子ちゃんは補足した。

「もちろんストラップ込みで」

「でもさ、キミはどうするの」

「もう家電屋行って、新しいの買ってきた」

そう言っただけで彼女がポケットから取り出したのは、ストラップが一つもついてない、いかにもハイスペックそうな黒いスマートフォンだった。

「メイドイン台湾。編集者の人に使いやすいからって薦められて。

クールでしょ？」

どうせ貰えるなら、そっちの方がいいな、とは僕は言わなかった。冗談でも、そんなことを口にする立場ではない。

なにやら、風子ちゃんがスマートフォン画面を操作すると、ピンク携帯のバイブ機能が作動して、十二支たちがいつせいに自分たちの年がやってきたみたいにちゃぶ台の上で騒ぎだした。光る画面にメール着信の表示がでた。

「手紙を読むかぎりさ、落ちついたら、金田くん一度帰郷したほう

がいいと思う。その気になったら、このアドレスにメールして。その携帯まだ使えるし、ロック機能とかもかけてないから。私も一緒に歩いて行ってあげる」

「携帯、見ていいの」

「うん。よかつたら、ファイルに保存してある私の小説も読んでいいけど。デビュー作にして、遺作である私の本。金田くんがその読者第一号になるわけ」

「遺作？」

「うん。私、これでもう小説書くのヤメにするつもり。これからはもっと自由に生きる。自分が本当にやりたいことをやる」

僕はなんと言ってよいのやらさっぱりわからなかった。リクルーティストに身を包み、毎日のように面接のハシゴをしている輩には、ただただおとぎの国の話のようなのだ。

「私の両親、私が三歳のときに離婚してるんだけど、じつは父親だけでなく、私のお母さんも物書きなの。ただ、父にくらいればぜんぜん売れてない無名のね。で、私はその母親のほうに育てられたわけ。小説家になるための英才教育をうけながら。たぶん、お母さんにはお父さんに負けたくないっていう気持ちがあつたんだろうと思うけど、二十年間その小説家になるための英才教育をうけてきた私が悟ったのは、小説家になるための英才教育なんてこの世に存在しないってことだった。スポーツ選手とかクラシックの音楽家とは最初から土俵が違うのよね。お父さんにはハナからそれがわかってたみたい。結局、小説家になれる方法って偶然しかないって。それでも私、お母さんのこともお父さんと同じぐらい好きだし、お母さんがこれまで私にしてくれたことを無下にしたくもなかった。だからベストセラー小説を一冊書いて、それでヤメようと思ったの。そうすれば、お母さんの気持ちも少しは晴れるだろうし。知ってた？ ベストセラー小説には法則があるって。お父さんが教えてくれたんだけど、いい本を書くより、売れる本を書くほうが楽なの。ある意味

で

ほとんどおとぎの国の魔法一家の話だった。僕の両親は離婚もせず仲むつまじく暮しているはずだけど、それがむしろ悔まれる。

おとぎの国のヒロインは話をつづいた。

「たぶん私が靈感が強かったりするのも、子供のころから本ばかり読まされてきたせいだと思う。人の心の奥底を眺めると、本の行間を読む作業はちよつと似たところがあるから。でもそのせいで、私には昔っから友達一人できなかつた。思うんだけど、物書きにまず一番必要な才能って、特別なことじゃなくて、ごく普通の、平凡な人間の感覚のような気がする。それがないと、なにをどう書いても読んでる人は共感できないから。私のお母さんにはそういう知恵がなかつた」

平凡な人間。おそらく、僕もその中に含まれているのだろう。まあそれはいいとして、デビュー作であり、遺作でもある彼女の作品が、ベストセラーにならなかつたらどうするつもりなのだろうか。

いや、そんなヤボなことを聞くのは御法度だ。僕はハードルを一つ飛び越してたずねた。

「小説書くのヤメたあとはどうするの？」

「それがわからないの。ずっと読むことと書くことしかしてこなかつたから。それで、もうすぐ大学も卒業だし、お父さんに相談してみたら、お父さんが言うの。自分がなにをしたらいいかわからないときは、自分が一番やりたくないことをすればいいんだって。そうすると、自分がやりたいことが見つかるんだって」

「なるほどね。じゃ、一番やりたくないことはわかるんだ」

「うん。たぶんね」

「それはなに？」

「組織の中で働くこと。つまりね、これから私も金田くんと同じようにリクルート活動するわけよ」

なんだかよくわからないし、生まれも育ちもまったく違うのだけ

ど、巡りめぐって、僕と風子ちゃんは同じ土俵に立つたらしかった。

風子ちゃんはスマートフォンで下宿前にタクシーを呼びつけた。もういっぱしの女流作家みたいだった。

外まで見送りにでた僕に、風子ちゃんはタクシーの車内から、「忘れてた」と言って、コードに巻かれたピンク携帯用の充電器を手渡した。

「自分の携帯は忘れても、私の携帯は忘れずに持ち歩いてね。つぎに会う場所が、病院とか、葬儀場にならないように」

「うん。そうするよ」

「話してなかったけど、私ね、堀田さんから面白い小説書く生徒がゼミにいるって、金田くんの作品読んだことあったの。それで、あなたに興味もつたの。本当は霊のことはどうでもよかったの」

案ずるより産むが易し。人間万事塞翁が馬。

その夜、僕はピンク携帯を枕元で充電しながら眠りについた。電話機としてではなく、御守りとして持ち歩くわけだから、べつに充電する必要はないんじゃないかと思いつつ。

僕は風子ちゃんのピンク携帯を『ピンキー』と名付けた。たぶん風子ちゃんなら、十二支ストラップの一つ一つに小説の登場人物みたいな、それぞれのキャラクターにあつた名前をつけていたことだろう。

もらったときは半信半疑だったけど、ピンキーはさっそく赤い充電ランプを灯したときから、御守りとしての御利益をせっせと発揮していたようだった。

翌日の朝、僕は喉の乾きをおぼえて、時計のアラームよりはやくに目を覚ました。

もしかしたらと思って、寢床から手をのばしてエアコンのリモコンを手にとってみたら『ドライ』表示になっていた。設定温度は28度。たぶん、深夜のうちに動き始めたのだ。昨日はウンともスン

ともいわなかったのに。

ためしに『冷房』のボタンを押してみたけど、冷房にはならなかった。でも、動かないよりはずっとマシ。

枕元のピンキーは充電がすんで、緑色のランプを表示していた。布団からでると、パソコンのモニターにはWindowsのロゴが浮かび上がっていた。ただ、マウスをクリックしてもそれ以上先にはすすめない。でも、電源さえ入らなかった昨日に比べれば、たしかにわずかではあるけども状況はいい方向にむかっているみたいだ。

シャワーの蛇口をひねったら、節水しているみたいに、こちらも水がチヨロチヨロとだけど出るには出た。けど、やっぱりお湯にはならない。それでも僕はさっそく寝巻きを脱いで、ピンキーの恩恵にあずかった。

もとの持ち主が持ち主だけに、ピンキーの影響力はちゃんと文学の世界にまでおよんでいた。ただ、そもそも文学そのものの解釈が千差万別だったりするために、その影響力のとらえ方にもパソコンやエアコンとは違った微妙なセンスが必要とされた。

例えば、昨日は『それからでんな』になっていた夏目漱石の『それから』が、今朝見ると『それからでっせ』になっていた。

はたしてコレは改善されてると解釈してよいものだろうか。「それからでんな」と、「それからでっせ」の間にどれほどの違いがあるのだろうか。関西弁の微妙なニュアンスの違いが理解できない僕には、そのところの判断ができなかった。

たしかに、言葉の境界線には 微妙な部分があったけども、それを除けば、事態がいい方向にむかっているのは確実だった。あとは、これが対人間、あるいは対関西弁にも適用されるかどうかだ。

今日も今日とてリクルート活動に勤しむ予定の僕は、予定よりだいぶはやくに部屋をでて、通りで人を待った。

僕の待ち人は黄色い帽子をかぶり、ランドセルを背負っている。

昨日の小学生の男の子だった。

彼は今朝、カルガモの行列めいた学童たちの行列の一員として僕の前にあらわれた。

男の子はすぐにこちらに気づいて、自分だってカルガモの一員にくせして、またいいカモを見つけたみたいになやりと笑った。

僕たちはお互いの距離を縮めていった。男の子は、怪しげに膨らんだ僕の左胸に目を止めた。そして、慌ててそこから目をそらした。僕のスーツの内ポケットにはピンキーが忍ばせてあったのだ。

「おはよう」

僕は男の子に声をかけた。彼はうつむいたまま、内気な小学生よろしく帽子の下で小さく「おはよう」とこたえた。

よしよし。

気をよくした僕はその足で昨日のコンビニへとむいた。

「いらつしゃ……」

こだわり店長の気持ちのよいこだわり挨拶は、僕の顔を見た途端に中断した。彼はおでんのスープをかきまぜているところだった。

「お前、また来たんか！ええ根性してるやないか、コラ！今日という今日はポリスつれてつたるで！」

カウンターを飛びだした店長は、僕の胸ぐらをつかんだ。そこからピンキーが顔をのぞかせた。ギョツとした店長が、僕のスーツの襟から手をはなして言った。

「い、いらつしゃいませ」

「はんぺんと大根ちょうだい」

僕は言った。

そのあとにも面接会場へむかう道中、関西弁霊予備軍めいた視線をたまに感じることはあったけど、彼らが半径5メートル以内に僕に近づくことはなかった。

普段の日常生活がもどりつつあった。すべてが改善されつつある。ただ、面接の結果だけは散々だった。これは悪魔の呪いとは無関係だから致し方ない。ピンクの神通力もさすがにここまででは通じない。

名画座でクレイジーキャッツの二本立てを鑑賞し、サラリーマン社会の夢と現実に思いを馳せながら家路に着く。そこに最後の砦が僕を待っていた。

「面接、どないやった、金田！」

聞き飽きた声に、見飽きた腹。

「ダメやったろ！？分かってんねん、ワイには。お前みたいなんが、一番面接官に嫌われるタイプやねん。そやからな、今夜は面接のプ口であるワイがみっちり直接御指導したるやさかい、覚悟しいや。その前に、今日はあのけつたいなネエちゃんはおらんやろな。アレはおかんで。それから、トナカイの歌もナシや。ちゃんと耳栓もってきたけどな。準備ええやろ。そこがお前とは違うところやねん」
ごもつとも。でも、せつかくの耳栓も今回は役には立たない。むしろアイマスクのほうがまだよかった。

「水戸黄門は好き？水戸黄門ゴッコやる」

「はあ？」

「この印籠が目に入らぬか」

「なに又カしとてんねん。印籠つて、お前、それ携帯やんけ。しかもお前、ピンクの携帯つて、どない趣味しとんねん。大阪のオバハシンか……」

いいや、これはたしかに印籠なのだ。象徴的な意味で。その証拠に紋所だつてちゃんとある。メイドカフェ的な紋所が。やっとメタボもそれを読みとつたらしい。

「ギャー！で、でたー！」

悪行のかぎりをつくした悪代官よろしく地面に土下座するかわりに、メタボ面接官は夜道を猛ダッシュして僕の視界から消えていった。

毎晩こんなことしてれば、彼も少しは痩せるかもしれない。

梅雨明けと時をおなじくして、関西弁霊は僕の前から消えた。風子ちゃんのデビュー作はまだ書店に並んではいなかっただけど、すでに僕はそれを三度読み返していた。感想は直接会ったときに話すつもりでいた。

もはや悪魔の呪い云々を忘れかけていたころ、コンビニ店長から二通目の手紙が、いや、手紙を忍ばせた二個目の宅急便が、とどけられた。

それは宅急便の荷物としてはいささか奇妙な形をしていた。正方形なのだ。しかも、今回のギフトセットはコンビニエンスストアのそれでもない。有名百貨店の包装紙につつまれているからだ。

包装紙を破ると、中から正方形の木箱が目見えた。なんだかひどく高級そうだ。木箱の蓋の上に封筒がチョココンとのっている。もちろん僕は、木箱のほうを先に開ける。

濃厚な甘酸っぱい香りが、高級そうな香りが、下宿の部屋いっばいにひろがった。玉手箱の煙みたいにいっぺんに。

マスクメロンだった。乾いた地面めいた網目が入ったやつ。テレビで見たことがある。いや、テレビでしか見たことがない。人生において、人様から木箱に入ったマスクメロンを贈られる局面はそうはない。たぶん。

僕はこの貴重な経験をよりよく記憶しておくべく、ちゃぶ台に鎮座した贈り物をしばし眺めた。

しかしそうしていると、つぎにコンビニ店長からの手紙の内容が気になった。水ようかんでアレだから、マスクメロンともなれば、よほどのことがあったに違いない。

ようやく僕は、窓辺の特等席に腰をおろして封を開いた。エアコンはどうか27度まで下がるようになっていた。

『前略。水平線をかこむ入道雲たちが日をおうごとにその背丈を競

い合い、毎日のように記録更新してゆく季節となりました。金田さんにおきましては、その後いかがお過ごしでしょうか。ご連絡がないのは、そちらにお変わりがないものと勝手に推測しております。本日は嬉しいご報告があります。早速お知らせいたしたく筆をとった次第です。

今回のこの手紙を、祝・ミュキ全快号と名付けさせてください。あの憎つくき中尾悪魔がミュキの体から退散していったのです。

それは突然の出来事でした。店のカウンターに立っていた私のもとに、パジャマ姿のミュキがヨロヨロと自分の脚で歩き、部屋からでてきたのです。

金田さんは昔のアニメで『アルプスの少女ハイジ』をご存知でしょうか。ご存知でしたら、私が云いたいことはすでにおわかりかと思えますし、もしご存知でなければ、なにを云ってもなんのことだかさっぱりわからないかとも思うのですが、その時の私の気持ちはまさにクララが車椅子から立ちあがり、自分の脚で歩いたときのハイジのような気分でした。

その感動的なシーンで、たしかハイジは「クララのバカ！」と叫んだはずですが、もちろん私がミュキにむかってバカと叫ぶはずはなく、ただ黙って抱きしめました。この一週間というもの、彼女はずっと寝たきりでいたのです。

そしてミュキは私の耳元でささやきました。すべて終わった、と。

つかぬ事をうかがいますが、最近、金田さんの交友関係で、新しい出会いはありませんでしたか？ミュキの話ですと、金田さんのお知り合いの方の中に、たいへん靈感の強い方が一人いらっしゃるようです。ミュキはその方の力を携帯電話的な引力という言葉で表現しましたが、以前にはそのような引力を感じることはなかったらしいのです。

ミュキにはその方の存在を感じることができ、その方も自分の

存在を感じとっているはずだと、ミユキは申しています。

どうでしょうか。どなたか、そういった方に心当たりはないでしょうか。ちなみにミユキの話では、その方は若い女性で、甘いものがお好きなようです。

もしも心当たりがおありでしたら、ミユキと私がお礼を述べていたと伝えていただけると幸いです。もしも、その方のお力添えがなかったら、ミユキは今もベッドで一人、中尾悪魔と戦っていたでしょうから。

そのような経過がありました、ミユキはただ今、リハビリの真っ最中です。食欲ももどり、以前の健康的な本来の彼女の姿を取りもどしつつあります。ようやく私たちにも普段どおりの生活がかえってきました。

ですが、唯一つ、以前とは確実に変わってしまった部分もあります。それはミユキの身体能力に関することです。

最初の手紙で、私はミユキがベッドの上に浮いたりすることはありませんと書きましたけども、現在のミユキはベッドの上でも、絨毯の上でも、浮くことができます。

絨毯の上を浮くことのできる人間がリハビリを行なうのもおかしい話ですが、恐らく、悪魔にとり憑かれたことによって、彼女の体にある変化が起きたものと思われれます。後遺症のようなものなのかもしれません。

自分の体を浮かせる代わりに、その応用として、人や物を動かしたり、浮かせたりすることもできたりします。テレキネシスというのでしょうか。私も一度やってみましたが、これはなかなか楽しいものです。記念にビデオに撮影しましたので、YouTubeにアップして、金田さんにもまたご覧になっていただこうかとも考えたのですが、以前アップしましたミユキのビデオが、YouTubeにおいて一日に10万アクセスを記録してしまい、少々困った

ことになりましたので、今回は残念ですが自重したいと思えます。

ところで、金田さんは夏は好きですか？私はこの季節が大嫌いでした。と云いますのも、私が店長を勤めるコンビニエンスストアは海岸近くの国道沿いにあります、毎年この季節になりますと、夜ともなれば、地元の暴走族が集まり、店の駐車場は彼らの溜り場と化してしまうからなのです。

警察にも取り締まりをお願いしているのですが、功を奏しません。学校が夏休みに入れば、夜でも子供の手をひいた家族連れのお客様が来店いたします。本当にどうしたらいいものかと、せつかくミュキの状態がよくなったところなのに、今年も夏が近づくとつれ、また憂鬱な気分だったのですが、なんと最近になりまして、ミュキがその暴走族のヤンキーたちを退治してしまっただけです。

もちろん、リハビリ中の彼女が素手で暴走族のヤンキーたちを退治したわけではありません。テレキネシスを使っただけです。

その夜、パジャマ姿のミュキは部屋から店のカウンターにできました。店の駐車場には全部で5台ほどのオートバイがとまっていたでしょう。暴走族のヤンキーたちはそこで店で買った打ち上げ花火をして騒いでいました。

すると突然、オートバイが、ヤンキーともども、その打ち上げ花火よりも高く、まるで木枯らしに舞う落ち葉のように軽々と夜空に浮かび上がったのです。

いったいどうなるのかと眺めていますと、ヤンキーとそのオートバイはもの凄い速さで、彼らご自慢のオートバイのスピードをはるかに超える速度で、あっという間どこかに飛んでいってしまいました。

ビデオに録画していなかったのがつくづく残念です。

それっきり、ミュキはなにこともなかったかのように部屋に引っ込みましたが、さすがに彼らがどうなったのか彼女に尋ねてみたところ、海に落としてやったと、涼しい顔で申しておりました。

時間も時間だったので、少々心配になった私は、遅番のアルバイトに店番を頼んで、懐中電灯片手に海岸沿いを歩いてみたのですが、夜の海はまさに漆黒のような暗さで、なにも見つけることはできませんでした。

その後、暴走族のメンバーが遺体となって浜に打ち上げられたというニュースは耳にしていなかったので、まあ無事だったのでしよう。ともかくこの件以降、暴走族が店前にたむろすることはなくなりました。

今年は静かな夏がおくれそうです。

最後になりますが、今回の件では金田さんに大変なご苦勞をかけたしまったことを、ここでお詫びさせていただきます。本当に申し訳ありませんでした。

お盆には、こちらにはもどられますか？もし帰省するご予定がありましたら、一度私の店にも立ち寄ってもらえたら幸いです。ミユキともども、金田さんのお越しを心からお待ちしています。

それでは、金田さんのご健康をミユキと共に祈りつつ、筆をおきたいと思います。』

どうやら川ノ崎にもいろいろなことが起こっているらしい。手紙を読み終えた僕は、しばらく帰っていない故郷に思いを馳せた。

そういえば、落ち着いたら一度帰省したほうがいいと風子ちゃんに言っていた。彼女も同伴で。ちょうど今がその時期なのかもしれない。きっと風子ちゃんと真鍋さんなら話が合うだろう。歳も同じだし。いい友達同士になれるかもしれない。でも、僕とコンビニ店長は――――。

夜風が頬をさすった。帰省しているガールフレンドが置いていった観葉植物に赤いつぼみがなっていた。

夏がきていた。

いろんなことがあって、もう半月も連絡をとっていないけど、彼

女はどうしているだろうか。本来なら、いの一に電話すべきだったかもしれない。なんだか、ガールフレンドと過ごした日々が遠い過去の出来事のような気がする。

それが虫の知らせだったのだろうか、携帯電話の着信が久しぶりに鳴った。

てっきりガールフレンドからの電話かと、期待半分、早合点したけど、待受画面を光らせていたのは、僕自身の携帯ではなくて、ピンクのほうだった。気のせいか、ちゃぶ台の上の十二支たちの喜びようにも力が入っている。たぶん、ものご主人様からの知らせなのだ。

僕はふと、風子ちゃんがどうしてあの重たいストラップをわざわざ携帯電話にぶら下げているのかわかったような気がした。もしかしたら彼女は、着信があつたときの十二支たちの反応を見て、かかってきた電話にどうか決めてたりしていたんじゃないだろうか。一種の動物占い。

もしもそうだったとしたら、十二支たちの騒ぎようは、むしろ僕にむかって電話にでないように忠告していたのかもしれない。

なぜなら、ピンクが待受画面に表示していたのは、僕のガールフレンドの名前なのだ。それも、番号は九州にある彼女の実家のそれになっている。

なぜ風子ちゃんの携帯に僕のガールフレンドが電話をかけてくるのか。いや、そもそもなぜ彼女の名前が登録されているのか。

考え得る唯一のケースは、僕と風子ちゃんが出会う前から、風子ちゃんと僕のガールフレンドが知り合いだったということだけど、はたしてそんな偶然があり得るだろうか。しかも、実家の電話番号を知っているということは、けっこうな付き合いのはず。それなのに、風子ちゃんが僕の存在を知らなかったというのは、ちょっと解せない。もしかしたら、二人はお互い顔の知らないメル友だとか。

あるいは僕のガールフレンド、実は風子ちゃんが同人誌に書いていたミステリー小説の読者ファンだったりして。

いくら考えてもキリがない。答えを知ることができるのは、実際に電話にでてみることだ。

ようやく僕はピンクキーの通話ボタンをおした。

「もしもし、そちらは金田マサルさんでしょうか？」

スピーカーから僕の耳にとどいたのは、懐かしいガールフレンドの声ではなく、聞いたことのない低い男の声だった。なにやら中尾彬風の。男はつづけた。

「私、星野さやかのお父なんですが」

ガールフレンドの名前だった。僕はなんだか凄くイヤな予感を抱きながら携帯電話のスピーカーに聞き耳を立てていた。

ガールフレンドの父親から夜に直接電話がかかってきて、いい予感を抱く男もあんまりないだろうけど、僕の悪い予感とはまたべつの種類のものだった。

お父さんは思い悩んだように重い口をひらいた。

「うちの娘がですね、あなたにバージンを返して欲しいと言っているのですが……」

僕はピンクキーの電源を切り、それを十二支とともに横たえた。

夜風がふたたび僕の頬をさすった。

窓の外から男たちの声が聞こえてきた。男たちはカーニバルがやってきたみたいに陽気に歌っていた。

フーフー、フーフー、フーフー、フーフー……。

第18話「スーパーフライな」

カナ子くんがはじめてチョンチョコリンをおデコに付けて出社した日のことを私は今でもはつきりと覚えている。

いや、私だけではあるまい。おそらく、社長から掃除のオバサンまで、この会社に勤務しているありとあらゆる人間があの日のことを記憶しているはずなのだ。

でも誰もなにも言わない。口にしない。まるでそんなものは最初からアリはしないかのように。カナ子くんの額に、その額以外にはなにも存在していないかのように。

それでも私は知っている。社内の廊下を行き来する社員たちがカナ子くとすれ違ふとき、目のやり場に困ったように彼女の顔からわざとらしく視線を外すのを。そしてまた、その光景を目の当たりにした私の視線からも逃れるように、大した用事もないのに急にそいそと廊下を小走りになってゆくのを。

「その人、きつとスーパーフライのファンなんじゃない」

夜の食卓で娘は言った。

不景気で残業が減り、家族団欒、娘と二人で夕食をする機会が増えたのはいいが、高二になる娘はたまにウチにきてもいつもテレビに夢中で、父親の話などにはまったくアウト・オブ眼中。それがその夜は、彼女のほうから話に加わってきた。

「スーパーフライ？」

とぼけたように私は言った。たぶん、話かけてくれたことがよほど嬉しかったのだろう。いつも娘から厳しくオヤジギャグをたしなめられているのだが。

案の定、娘は花の十七歳にして、まるで生きているのに疲れ果てたような顔をしてこちらを見ている。なにしろ彼女に言わせれば、オヤジギャグは世の中に存在する諸悪の根源の一つであるらしいの

だ。

「オヤジギャグってさ、言ってる本人だけは面白いと思ってるわけじゃない？それって、自分だけは正しいと思っ込んでる人間と大差ないのかも」

娘は言う。なんだか、暗に妻と離婚した原因を突きつけられているような気がする。二重の意味で人格を否定されているような気がする。自分の娘が宇多田ヒカルみたいに見えるてくる。

はたして娘がどこまで考えて言っているのかは、はっきりとはわからないけども、たしかに彼女の意見にも一理はあると思う。もしや賢人の入れ知恵かもしれない。彼女はテレビも大好きだけど、妻に似て読書好きでもあり、私なんかよりよほど本を読んでいる。

しかしそうなっていると、娘にしてみれば、たまに父親と夕食をともにしても、その父親が諸悪の種を、それこそ飯粒みたいにせつせと夕食のテーブルにまき散らしていることになるわけで、たしかにウンザリするのもうなずける。

それでも、娘はその『スーパーフライ』なる和製ロックバンドのCDジャケットを、カバンからとりだしたiPodの画面をとおして私に見せてくれた。

なるほど、そこにはカナ子くんと同じように、おデコにヘアバンドを巻き付けた女の子が映っている。

「カチューシャっていうんだけど、これ」

そう呼ぶらしい。さらに娘によれば、このボーカリストの女性は若い女の子たちの間でカリスマ的な人気があるようで、それとあいまってその70年代風ファッションにも注目が集まっているんだそう。なにやら巷では、彼女のようにヒッピー風ファッションに身を包んだ女の子たちが通りを闊歩しているらしい。まるで往年のリンランランみたいになんて。...

いやいけない。危うくまた詰まらないことを口にしたそうになっちゃった。

しかし、それがリンリンランランではなく、スーパードライでもなく、あくまでスーパーフライではあっても、ファッション云々は若い女の子たち限定の話であるようで、カナ子くんはオバサンではないけど、かといって女の子と呼べるような歳でもない。

それに、仮にカナ子くんがそのスーパーフライのファンであったとしても、それでは会社にまでチョンチョコリンを付けてくる理由にはならない。ましてや、私を除いた社員全員が、彼女の行為を見て見ぬふりをしていることも。

「私、その人見てみたいな。お父さん、今度、写メで送ってくれない？」

「ああ……いいよ」

詰まらないオヤジギャグの自責の念からか、それとも離婚への罪滅ぼしか、つい私はできもしない口約束をしてしまった。

あるいは、それは私の思い過ぎにすぎなかったのかもしれない。中学校の校則じゃあるまいし、一〇Lがおデコに力チューシャなるチョンチョコリンを付けて出社しようがしまいが、どうでもいいことなのかもしれない。私が必要以上に神経質になっているから、周囲の人間たちが過敏な反応を逆に隠しているように感じるだけなのかもしれない。

しかし、私には神経質にならざるをえない理由があったのだ。というのも、私はカナ子くんの直属の上司であったから。

私が勤めているのは、ペットと不動産以外ならばなんでも売るような、都内の大手ネット通販会社で、私はそのコールセンター所長の肩書きを持っていた。

コールセンターというのは、ようするにお客様相談室みたいなところなのだが、なにしろ会社自体が大所帯だから、相談室の規模もそれに比例して大きくなる。

センターは本社の地下にあり、広さは学校の体育館ぐらいもある。

でも実際には、その半分を更衣室が占めている。それは、センターに勤務しているほとんどが契約社員の女性たちだからなのだが、しかし考えようによってはこれほどの無駄もない。

そこで私は、責任者会議の席で、コールセンター内の女子社員の制服を廃止したらどうかと提案してみた。

そうすれば、オフィスは広くなるし、制服にかかるコストは当然会社もちだから、廃止されればその分経費だって浮くわけだ。それに、コールセンター内の女子社員たちが、顧客と直接顔を合わせるということは必然的でないわけで、ならばべつに制服を着なければならぬ理由もない。それでなくとも、窓のない地下のオフィスで、彼女たちは一日中電話対応に追われているのだ。まだ若い彼女たちにしてみれば、私服のほうがオシャレのし甲斐だってあるし、会社にくる楽しみも一つ増える。誰も好き好んでエンジ色した地味な制服など、そう着たくはないだろう。

私の提案はセンターの女子社員からは絶大なる支持を得ていた。だが会議の席で、私の提案は否決されるどころか、議題にも選ばず、ただただ黙殺されるのみだった。

彼等はなにか制服に特別な思い入れでもあるのだろうか。役職連中、じつは揃いも揃って、全員制服フェチなのか。

まあ、考えても仕方がない。そういった連中に、そういった会社なわけだ。しかし結果的に、私は何十人という女性たちに、できもしない口約束をってしまったことになる。

もしかしたら、カナ子くんはあのときの一件を覚えていて、今になって無言の反抗を自らの行動によって意志表示しているのかもしれない。

もしそうだとすると、それは当然、所長である私に向かっての意志表示でもあるわけだ。

なるほど、そういうことなら辻褃があう。あえて会社にまで力チユーシヤを巻いてくる理由にもなる。ただし、それはあくまでカナ

子くんが、冬の凍てつく雨のように執念深い性格の持ち主であったならば、の話。

私の知るカナ子くんは、まったくその逆で、彼女は春の陽射しのように穏やかな女性だ。付き合いはじめたばかりのころの妻みたいだ。

コールセンターにはしばしばクレーマーめいた顧客からの苦情電話がかかってくるけども、そんなときでもカナ子くんが眉間にシワを寄せるような表情をみせたことは一度だってない。

アレがもし私だったならば、ものの三分と経たないうちに受話器の向こうの顧客と大喧嘩になって、始末書一枚や二枚では済まされない結果をまねているはずだ。

しかもカナ子くんは、上司である私が半日ともたないそんな仕事をもう三年もつづけている。私をのぞけば、センター内一の古株だ。まさに神様、仏様、カナ子様。そんな彼女が、私や会社の役職連中にむかって、一人で反乱を起こすということはとうてい考えづらい。

あるいはセンターの皆が、カナ子くんのチョンチョコリンを見て見ぬフリをしているのには、逆にそういった彼女の性格や仕事ぶりを熟知しているからなのかもしれない。カナ子さんなら仕方がない、というわけだ。

たしかにその気持ちはわからなくもないのだが、私の場合、どうしても見て見ぬフリのできない立場にいるのだから困る。

カナ子くんはセンター女子たちのリーダー的存在なのだ。精神的な支柱と呼んでも過言ではない。彼女を姉のように慕う女子社員だつて多い。もしも彼女ら良き妹たちが、長女の真似をして同じようにチョンチョコリンをおデコに付けて入社するようになったらどうなるか。一人が二人、二人が三人と。いつの間にか、コールセンターは遠い日のウッドストック状態に。ズラリと並んだデスクの列に、カチューシャをおデコに巻いたOしたちが、ラブ&ピースな電

話対応をしている図。

そうなら、これまで見て見ぬフリをしてきたヨソの課の社員たちもさすがに騒ぎはじめだろう。社内のアチラコチラであらぬ噂が立ちはじめ。いったいコールセンターではなにが起きているのか、と。なにか良からぬ宗教の巣窟にでもなっているのじゃないか、と。

センター内の私服化を亡きものへと追いやった役員連中がこの自体を見逃すはずがない。

きっと私は疲れているのだ。考えすぎなのだ。まさかコールセンターがウツドストックなんかになるはずがないではないか。かりにも会社のオフィスであり、私たちはみな良識ある社会人なのだから。

いいや、待て。今、私は自分が疲れていると言った。もしそうなら、いやそうに違いはないのだが、センターの女子社員たちはもつと疲れているはずだ。だって、彼女たちのほうが所長の私なんかよりよほどハードワークをこなしているのだから。

所長の主要業務といえば、デスクで書類に目をとおし、それに八を押しことぐらい。それだって急いでいるときには、ロクに目もおしていなかったりする。

たしかにセンターの乙女たちはストレスを溜め込んでいる可能性がある。エンジ色の制服に身を包み、来る日も来る日もクレーマーたちのお相手をして。しかもその報酬ときたら、これが嘘みたいじつにささやかなものなのだ。

それがどんな形であるにしても、彼女たちがなにかしらの自由を求めているもおおしくはない。ささやかだけでも、転職するよりはリスクが低く、なおかつ即効性のあるような自由。それがカナ子くんのラブ&ピースなチョンチョコリンなのではないのか。

いや、そんな抽象的なことよりも、あのチョンチョコリンにはもっと具体的なご利益があるのかもしれない。

たとえば、磁気ネックレスみたいに、頭痛、肩凝り、腰痛に効果があるとか。女性特有の冷え性にも効いたりして。なるほど、デスクワーク中心のOLにはもってこいの商品だ。

いいや、バカな。あんなものをおデコに巻いていたら逆に血行が悪くなって、頭痛だって余計ひどくなるにきまっている。

やはりチョンチョコリンはカナ子くん限定のアイテムなのだ。それがほかの女子社員にまで広がることはない。まだ二十代の彼女たちは、そもそもウツドストックなんて知りもしないはずだし、ラブ&ピースだつてとつくに死語だ。ましてこの不景気なご時世に、解雇につながるようなバカな真似をするはずがない。

私はデスク上の始末書の束を片付け、小さな安堵に確認のお墨付きをするかのようにタイムカードを押し、明かりの消えたコールセンター内を見わたした。オフィスの花たちはもういない。彼女たちは嘘みたいに素早くオフィスをあとにする。残業がないのが、彼女たちセンター業務の唯一のメリットなのだから。

やっと心の平安を得たのもつかの間、私が考えだした防御システムはいとも容易く突破されることになった。それも会社とは無関係なはずの自分の家族に。

家に帰ると、リビングから懐かしい歌が聞こえてきた。ジヨニー・ミツチエルが歌う『青春の光と影』だ。昔、妻が好きだった曲だ。

こんなふうに帰宅したばかりの私の耳に、別れた妻が学生時代に好きだった懐かしい音楽が飛び込んできたりすることがタマにある。彼女の置き土産の中から、娘が古いCDを引っ張りだしてきて聴いているのだが、そんなとき私はいつも二度ドキッとしてしまう。まず、妻が帰ってきたのかと勘違いしてドキッとし、そのあとに、いよいよ娘が妻に似てきたような気がしてドキッとしてしまうのだ。

娘はソファで文庫本に目を落としていた。『キャッチ22』だ。それもやはり私が若かったころに読み耽った小説だった。

会社の同僚に、娘さんが家族との夕食の間、ずっと耳にイヤホン

をしながら携帯電話でメールしていると嘆いていたヤツがいたけども、それと比べると、我が家の音楽事情は比較にならないほど健全であり、趣味の遺産についても確実に親から子へと正当な伝達がなされているようだった。

ただ、その夜にかぎって、私はそれを心からは喜べなかった。

「面白いだろ、その本」

私はネクタイをほどきながらたずねた。娘は文章を目で追ったまま「うん」とこたえた。できるものなら、このまま娘と小説談義をつづけたかったのだが、そういうわけにはいかなかった。

「ところで、おまえ、それ何おデコに付けてるんだい」

「ああ……学校いく途中に、知らないおばさんが電車の中でくれたんだ。これ付けてると願い事が叶うんだって」

娘はようやく顔をあげ、イタズラっぽく微笑んでみせた。

「カナ子さんみたいでしょ？」

みたい、じゃない。そのままだ。材質まで同じじゃないのか。それに知らない女の人って……。

私は娘のおデコを何年かぶりに真剣に見つめた。たぶんまだ小さいころ、同級生の男の子が下校途中に不注意で投げた石ころが命中して、額から血を流して家に帰ってきたとき以来。

ただ、正確に言えば、今回私は彼女のおデコではなく、そこに張り付いた一本の線を見つめていたのだ。

「もしもクレオパトラの鼻が3センチ低かったら……。」という話があるけども、それと同じように、カナ子さんのチョンチョリンがあと5センチ上にあってくれたなら、と私は思わずにはいられない。

もしそうだったなら、あのチョンチョリンはただの髪留めであり、誰の視線も引きつけることはなかっただろうから。

あるいは、あれが細い紐でなく、タオル状の帯みたいなものだった

たら、まだ昔のモーレツサラリーマンみたいで、周囲の笑いを誘えたかもしれない。「コールセンターにはすごく気合の入ったOLがいるもんだな」ぐらいの。

しかし、それがおデコを飛行機雲みたいに横一線に走っているばかりに、あらぬ問題が起きてしまう。まるで社内に制服を着た巫女さんが紛れ込んでいるみたいになってしまう。オフィスやエレベーターや会社のロビーに、なにやら呪術的な白い煙が立ちこめてしまう――。

娘のチョンチョコリンは、カナ子くんのそれとまるで瓜二つだった。ベージュとこげ茶色の二本の細い紐がしめ縄みたいに螺旋状に巻かれて一本になっている。それが真ん中分けした髪を土星の輪のように囲んで、頭のうしろで結ばれている。

それにしても、知らない人がくれたというのはどういうことなのか。それも電車の中で。

いや、もしかしたら娘は私をかつごとくしているのかもしれない。年頃の茶目っ気ぶりを発揮して、父親をビックリさせようとしているのかもしれない。でも、そうであるならば、カナ子くとまったく同じカチューシャというのは逆にマズい選択だったと思う。さすがにそこまで偶然がかさなってしまうと真実味が薄れてしまう。

しかし、だからといってすぐに真相を暴いてしまうのは、父親としては落第だろう。ツメの甘さはあつたにせよ、せつかく娘が親子の会話を盛り上げようとしてくれるのだから、それをさらに発展させ、面白い話に仕立て上げるのが親としての務めというものだ。「まさかお前の夢って、コールセンターで働くことじゃないだろうね。もしそうなら、お父さん賛成できないな」

もちろん私はジョークのつもりで言った。日頃、オヤジギャグを連発させている輩としては上出来の部類だったように思う。娘にもそれはちゃんと伝わっているはずだ。ただ、肝心の娘のこたえのほうは、私の頭には上手く伝わってこなかった。

「私の夢はね、韓国の大学に留学して、韓流スターと恋に落ちること、かな。だからさ、お父さん、私、韓国語教室に通いたいんだけど、ダメ？」

娘は言った。どうしていきなり韓国なのか？ウツドストックじゃなかったのか？

例の同僚の笑う顔が目には浮かんできそうだった。

最近、よく遊びにくるなと思っていたら、やっぱりそうだった。娘は吉祥寺の妻の実家で、今どき珍しい大家族暮らしをしているけども、気がむくと阿佐ヶ谷にある私の一人暮らしマンションに遊びにくる。気がむくというのは、ようするになにか買って欲しいものがあるときだ。とかく父親というのは娘には甘いものだし、特に私の場合にはたまにしか会えない弱みもあるから、つい色よい返事をしてしまうのだ。そうすると、二三日して、別れた女房からお怒りのメールがとどくことになる。「甘やかさないでくれる？」云々と。

今となつてはそのメールのやりとりが、元夫婦の唯一のコミュニケーションになっていたりする。ある意味、娘の物欲が壊れた家族の最後の絆になっている。

いや、もしかしたら娘はワザとそうした役割を演じているのかもしれない。だとしたら、なんてよく出来た娘だろう。ますます自分の娘が宇多田ヒカルに見えてきた。もつとも、本物の宇多田ヒカルなら、欲しいものを親にねだる必要はないだろうけど。

どうやら娘には、親子の会話を盛り上げようという意図などまったくなかったようだ。あり得ない出来事だが、娘の話は創作でもなんでもなく、ただありのまま事実を伝えていただけなのだ。電車でチョンチョコリンをくれたおばさんも、韓流の夢も。

父親である私には両方とも同じぐらい信じ難い話だ。ただ、娘によれば、チョンチョコリンおばさんの存在は、彼女が通う中央線沿

いの女子高生たちの間では以前から噂になっていたらしい。いわゆる都市伝説というやつだ。

それによれば、チョンチョコリンおばさんは女子高生たちの間で『カチューシャおばさん』と呼ばれていて、歳は四十代。やせ型で、けっこう美人らしい。おデコには自作と思われるカチューシャを巻いていて、長い黒髪を二つに分けている。

彼女は夫と二人で高円寺に暮らしている。結婚する前はやはり服飾関係の仕事に就いていて、若いころはモデルの経験もあるんだそう。夫はデザイナー。彼女の奇行はこの夫の浮気がそもその原因になっているようだ。ありそうな話だ。

そんなこんなで、彼女は中央線の電車に乗り込み、自分が気に入った若い女性を見つけては、お手製のカチューシャをくれるようになるわけだが、「自分が気に入った女性」というところがいかにもご都合主義だし、旦那に浮気された女性の手による品で夢が叶うというのも設定的に無理があるような気がする。どちらかといえば、それは本来『呪いのカチューシャ』になるべきではないのか。

まあ、実際それが『呪いのカチューシャ』であったなら、もらっても付ける人間はいないわけで、そうなってしまうと伝説も広まらない。それにカチューシャおばさんは、ちつと頭がおかしくなっただけで、心は優しい女性のままなのかもしれない。

「必ずおデコの上に巻かないとダメなんだって。そうしないと、いくら頭の中で夢が叶うように念じても、それがカチューシャまで伝わらないから」

娘は言う。

その言葉自体が表しているように、都市伝説なるものはあくまで伝聞であるはずだ。チョンチョコリンおばさんだって、それを直接目撃した人間が語っているわけではあるまい。伝聞に大袈裟な尾びれがついた、そのまた伝聞なのだ。

もともと営業マンだった私は時々思うけど、どうも人は往々にし

て、当事者から直接聞いた話よりも、むしろ伝聞のほうを信じやすい傾向にあるような気がする。

たとえば、私が「私は雪男と遭遇したことがある」と言っても、誰もそんな話は100%信じないだろうが、これが「私は雪男と遭遇したことがあるという男を知っている」となると、5%ぐらいならば信じるような気がする。

もちろんその5%は、本来「私が男を知っている」部分に含まれるべきものなのだ。でも、人間の頭は、こと言葉に関しては曖昧な契約を結んでいる。話術に長けた営業マンならば、その5%を雪男の存在のほうに言葉巧みに移動させ、さらにその数字を広げることができらるだろう。

しかし、韓国語教室の授業料をおねだりしたいらしい我が娘は、あくまで直接チョンチョコリンおばさんに会ったと言っているわけで、自説によれば、私はその話を100%信じることはできないはずなのだけど、なにしろ娘は証拠品をおデコに巻き付けて話しているわけだから、少なくとも私がどこかで見たかもしれない雪男よりは信憑性がある。

もしかしたら、娘は韓国語を習いたいばかりに、父親にその授業料を肩代わりしてもらいたいばかりに、やはり一芝居うつっているのかもしれない。チョンチョコリンおばさんなど存在せず、その都市伝説も作り話で、カチューシャは自分で買ったものにすぎない。

しかし、それだけのためにこんな都市伝説を作り上げるものだろうか。

いや、ウチの娘ならやりかねない。なにしろたくさん本を読んでいるし、授業も口々に聞かずに、ずっとストーリーを練りあげていたのかもしれない。その目的は当然、私の注意をむけるためだ。

娘はわざとカナ子くんと同じタイプのカチューシャを選ぶ。それを見た私はもちろんそれはどうしたのかとたずねる。誘い水をむけられた娘は、よりスムーズに韓国語教室の話題へと移行することが

できるだろう。そして実際に、事は娘のアイデアどおりにすすんでいるのだ。恐るべし、我が娘……。

「韓流スターと恋に落ちるなんて嘘よ。私が好きなのは韓国のガールズグループなんだ」

娘は少しだけ父親を安心させるような言葉を口にす。そして「コレ見て、お父さん」と言って、CD のジヨニー・ミツチエルを止め、ジーンズのポケットから取り出したiPodを私にみせた。

その画面に、なにやら韓国語で歌い踊る女の子集団のビデオが映しだされた。

どうやら娘の計画は第二段階に入ったようだ。

「みんな可愛くない？」

娘は自慢の友達を紹介しているみたいに次々と私にビデオを見せながら言った。どれもこれも韓国の若い女性歌手グループのものだ。

たしかに彼女たちは可愛いが、年頃の娘を持つ親にしてみれば、これぐらいの年齢の女の子たちは、皆自分の子供と同じように目に映ってしまうものだし、コールセンターで働いている身にしてみれば、正直、若い女の子たちには食傷気味でもある。

それにしても、韓国の歌といえば演歌のイメージしか思い浮かばないようなオジサンにはちょっととしたカルチャーショックだ。K-POPというらしいのだが、日本国内でも人気があるんだそうだ。皆一様にスカートやパンツの丈が短い。時代は変わっている。いや、さほど変わっていないか。だって、リンリンランランだって、もとはと言えば香港出身だったし、スカート丈の短かさに関していえば、我々のピンクレディのほうにまだ分があるように思える。

ただ、リンリンランランの頃と決定的に違うのは、ビデオの中の彼女らが、日本語ではなく、母国語で歌っているところだ。いや、たしかに日本語バージョンもあるにはあるのだが、母国語で歌ったオリジナルバージョンのほうが、言葉の意味がわからないにもかかわらず、より魅力的に聴こえる。娘も同意見だ。澁刺とした彼女た

ちの歌声に、鞠が跳ねるような韓国語がじつにチャージングにマッチしているのだ。

しかし、それはそれとして、K-POPが好きだというだけでわざわざ韓国語を習いにゆくというのはどんなものだろうか。一人娘の父親として私は思う。歌詞の意味がわからないなら辞書片手に調べればいいのだし、なにより三日坊主で終わりそうな公算が大きい。それに、どうせ習うならやっぱり英語か中国語のほうがメリツトがあるんじゃないのか。

だが、そんな打算的な父親の考えを、韓国産ガールズグループの美脚が遙か忘却の彼方へと蹴り飛ばしたのだった。

iPodの中、歌番組の華やかなステージで、やや平均年齢の高そうなお姉様タイプの女性たちが万華鏡のように様々に列を織り成し歌っていた。その数10名ばかり。

それまでのグループが皆ハイティーンなアイドル然としていたのに対し、このグループはモデルさんというか、例えがなんだけでも銀座辺りの若いホステスさんを彷彿させるところがある。我々オジサン連中にはこちらのほうがウケがいいだろう。ショートパンツから美しい脚を見せつけていた。

けれど、私が見惚れていたのは、娘の手前ということのをのぞいたとしても、美しい脚たちではなかった。

そのホステス、いやガールズグループの中に、私のよく知る女性にそっくりなメンバーがいたのだ。しかもそのメンバーの一人は、粒揃いのグループ内でもとりわけの器量良しで、宝塚的に言えばトップスター的な存在だった。気のせいかな、歌の途中でコロコロ変わる列の組み合わせでもグループの真ん中に立つ回数が一番多い。事務所もわかっているのだ。当然、脚だって綺麗だ。ただし、私がよく知る女性は、間違っても銀座のホステスではない。

「タエ子」

娘の名を呼ぶ私の声は、軽快なK-POPとは対照的にヤケに重

々しかった。

「この前、お父さんに、写メールでカナ子さんの写真送ってくれてお願いしたこと覚えてるか？」

「うん。まだ送ってもらってないけどさ」

「その必要がなくなつた。この中にそのカナ子くんがいるんだ」
そう言つて、私はiPodに映る一番の器量良しを指さした。

「カナ子さんつてすっごい美人なんじゃん。なんでお父さん、それ最初に言わないの？」

私の興奮が娘にも伝わったのか、我が娘はiPodをちょうど韓国版カナ子くんのアップで一時停止した。

クラブのホステスを美人の基準に考えてしまうのはまったくもつてオヤジ丸出しだけでも、あえてその例えをふたたび用いるとするなら、さしずめ韓国版カナ子くんは、高級クラブの売れっ子ホステス並だった。

私はなんと言つてよいのかわからなかった。我が社のカナ子くんは大勢の女子社員の中の一人であり、私の部下というか、少なくとも責任管轄下の一人である。所長である私は、当然のように特定の女子社員を特別扱いしてはならない。特にそれが美人であるという理由では。

これは女性社員が多数を占める職場では鉄則中の鉄則だろう。

であるからして、私はこれまでカナ子くんの器量をほかの女性、とりわけコールセンター内の女子社員たちと比較したことはなかったし、またそういう視点で彼女の容姿を眺めたことも考えたこともなかった。だから、カチューシャの件は娘に話しても、カナ子くんの容姿については、そもそも伝える必要性すら感じなかったのだ。しかし今、カナ子くんが韓国アイドルのベツピンさんと瓜二つであるという事実から垣間見ると、どうもカナ子くんは大変な器量良しであるようだ。娘の感心ぶりからもそれがうかがえる。父親のオヤジギャグのときは真逆の反応。やはり、いかなる状況でも美人

は得というわけか。私のオヤジギャグは我が家の中でさえ行き場を失おうとしているが、美人はいとも容易く国境すら超えてしまう。

その夜、いつものように甘い父親が顔をだし、私はとうとう韓国語教室について前向きに検討することを娘に約束してしまった。ただし今回は条件つきだ。かの韓国女性グループのビデオを、私の携帯電話にダウンロードすることと交換なのだ。

彼女たちは『Karara』というグループであるらしい。なんだか 本当にどこかのクラブかパブにでもありそうな名前だけでも、まったくいい歳をしながら、私は通勤途中、彼女たちのビデオを何度も繰り返し見るようになった。いやはや娘のことをとやかく言うてはいられない。

ただ、私がりびートボタンを幾度となくタップしたのは、べつに娘のようにK-POPにハマったからという理由ではなかった。

たしかに『Karara』の歌や容姿は魅力的だったけども、それよりも私はある職業的な観点から、その責務から、そうしていたのだ。

彼女たちは羽衣めいた薄くて柔らかそうな生地 of 衣装を着ていた。その長い脚は、フワフワした雲の切れ間から射し込む幾本もの春の陽光のようだった。いけない。このままずっと見つづけていると、親子そろってファンになってしまいそうだ。

私は娘がしたように、韓国版カナ子くんのアップシーンでビデオを一時停止した。それから想像力を駆使して、彼女のおデコにカチューシャを巻きつけてみた。

そうすることによって、私は部下であるカナ子くんを、会社にいくときよりもより客観的に、そしてつぶさに見ることができるようだ。国籍も、職業もまったく異なる二人だけでも、その顔はまるで鏡に映し合ったようだ。もしかしたら、カナ子くんのカチューシャをめぐる諸々の事情の中で、私が見落としている何かが見つかるかもしれない。海の向こうのソックリさんを眺めることによって、ようやく

足元のカナ子くんがとびつきりのベッピンさんであることを発見できたように。

ほどなく、私は当然といえば当然といえる帰結へたどり着いた。つまり、こうして私が携帯電話の画面を見つめていること自体が一つの答えなのではあるまいか。

三年という月日を経て私が気がついたことを、ほかの社員たちは当たり前のように最初から気づいていた。だからこそ、彼や彼女たちは、カナ子くんがおデコにカチューシャを巻いて入社してきたものにも口にださなかったのだ。

社員全員がカナ子くんに気を使っている。掃除のおばちゃんから社長までが。周囲の人間から言葉を奪ってしまうほどの美女。いいやまさか。普通なら、美人であればあるほど噂の種になりそうなものだ。

ではこういった理由ならばどうだろうか。カナ子くん、じつは社長の愛人だとか。社員公認の。知らないのは、直属の上司であるバツイチ男だけ。

なるほど、それなら説得力がある。社員たちがカナ子くんのチョンチョコリンを見て見ぬフリをしているのもうなずける。彼女はとびきりの美人というだけでなく、とびきりの権力者でもあるわけだ
- - - - -。

いったい私はなにを考えているのだろう。ついに焼きが回ったか。あのカナ子くんに限ってそんなことがあるはずがないではないか。

それに愛人云々では、彼女がチョンチョコリンを付けてくる直接の理由にはならないし、第一同じ会社に身をおく愛人OLなら、わざわざ社内が目立つ行動をとるはずもない。

さてはあのチョンチョコリン、社長に対するなにかのサインなのか。二人の間にしかわからない - - - - -。

朝から携帯電話のバッテリーと、あるいはそれ以上に自分の神

経を消耗したあげく、私は会社がある秋葉原で電車をおりた。

大勢の勤め人たちにまじってプラットフォームを階段にむかって歩いてゆく。毎朝繰り返されるお約束の光景。

そのとき私は見たのだ。紺色のスーツを身にまとった、いま一人のチョンチョコリンOLの姿を。デザインもまったく同じ。白と茶色の紐がしめ縄みたいになったヤツ。

女性は私の前を横切っていった。それは一瞬の出来事で、相手の年齢も、人相もハッキリとはわからなかったが、しかし、ことカチューシャに関するかぎり人一倍敏感になっている私だ、それだけは見間違うはずがない。

私は女性を振り返りはしなかった。代わりに私が目で追ったのは、ホームをでてゆく中央線車両の後ろ姿だった。

もしか、あれのどこかの車両に、私の娘も出会ったチョンチョコリンおばさんが乗っていたのかもしれない、と。

そういえば方向は逆だが、たしかカナ子くんも中央線で通勤していたはずだ。やはりチョンチョコリンおばさんは実在していたのか。娘の言った話は本当だったのか。

だとすると、娘は学校の教室にいる今も彼女の夢を実現するために、会社のカナ子くんよろしくチョンチョコリンを付けているのではあるまいか。

これはイケない。授業の開始ベルが鳴る前にバカな真似は止めさせなければ。

私は娘のアドレス宛に、しごく短かい緊急メールを発信した。『韓国語教室OK。チョンチョコリンは外せ。父』と。あとは担任が教室に入ってくる前に、メールに目をおしてくれを願うのみだ。

やはりカナ子くんは社長の愛人ではなかった。当たり前だ。そんなことがあってたまるか。彼女のチョンチョコリンは経営者にむ

けた妖しげなモールス信号なんかではなく、我が娘同様、おデコ用のミサंगाに違いないのだ。

これでやっと話のつかかりができた。私は『男はつらいよ』の寅さんを見習い、カナ子くんにとなく忠告して、彼女のチョンチョコリンをそのおデコからとり除くことができるだろう。「お嬢さん、夢ってのは、自分の力で掴みとるものなんだ。あのオバちゃんね、君のドラえもんじゃあないんだよ」とか。

しかし、そこで私は自分の言っていることの矛盾に気がついた。自分の力どころか、娘の夕エ子はまさにあのチョンチョコリンによつて、彼女自身の夢の階段を見事にのぼりはじめたばかりではなかったか。しかも、結果的にはあるにせよ、そのサポートをしたドラえもんは、他でもない、私なのだ。

いやはや、まったくドラえもん様々、チョンチョコリンおばさん様々だ。他力本願大いに結構。いっそのこと、私もあのカチューシヤが欲しいぐらいだ。たぶん、いや絶対、似合わないだろうけど。

もっとも、もしも私がかの女性たちのようにチョンチョコリンをおデコに巻いたとしても、叶えたい夢が、例えばカナ子くんがチョンチョコリンをはずして入社してくるとか、それによつてコールセンターにふたたび平和な日々が舞いもどってくるとか、それぐらいのことしか思い浮かばないのではないか。

すると私は、その凡庸極まりない我が夢によつて、チョンチョコリンをめぐるいま一つの凡庸極まりない矛盾点に気がついた。

それは、もしも私のおデコにそれが巻かれたとしたなら、チョンチョコリンによつて自分の夢を叶えたいカナ子くんと、彼女のチョンチョコリンをそのおデコから外したい私とで、二人の夢はお互い競合関係に陥ることになってしまい、はたしてこういったケースの場合、勝つのはどちらのチョンチョコリンになるのだろうか、といったものだ。

しかし、これはまるでニワトリと卵はどっちが先か、みたいな無

益な論争だ。二ワトリ、卵、どちらが先だろうと、それで私の生活が変化することは何一つない。せいぜい、朝食のスクランブルエッグをフォークですくったときに、この卵は二ワトリより先（あるいは後）だったのだな、と思いたしてやるぐらいだ。

いいや、たぶんそんなことだっと思って思いたしはしないだろうし、そもそも私がおデコにチョンチョコリンを巻きつけることなんて現実には起こりえないわけだから、カナ子くんとこの夢の勝敗について考えをめぐらしたりすること自体がバカげた行為なのだ。

肝心なのは、カナ子くんがどんな夢を叶えようとしているのか、それを把握すること、この一点に尽きる。

しかしそうなっていると、それはそれであらたな問題がもち上がってくる。つまり、カナ子くんの夢は、あくまでカナ子くん個人の問題であって、彼女には自分の夢について上司に報告しなければならぬ義務など毛頭ない、ということだ。

もはや『男はつらいよ』ならぬ、『上司はつらいよ』といった状況か。イケない、こんなことを言っているとまた娘に叱られてしまう。

会社の前に到着すると、娘から携帯に返信メールがとどいたよかった。間一髪間に合ったようだ。

私はその場でメールを開いて内容を確認した。

娘からの返事は私が送った緊急メール同様に短かいものだった。彼女は書いてよこした。

『チョンチョコリンってなに？』

イケない。もう間に合わない。

オフィスのデスクでOL嬢が見る夢とは、はたしていかなるものなのだろうか。しかも、社内に一騒動起こしてまで叶えたい夢とは？

やはり相対的に一番確率が高いのは、恋愛結婚関係になるだろうか。もしかしたら、カナ子くんも寿退社を考えている一人なのか。

たしかに、彼女の年齢を考えればそれもまた定石の選択だろう。でもそうになると、残される所長の私は大変だ。

私には二人の新人男性社員の部下がいるけども、なにしろこの二人、揃いも揃ってかの悪名高い『ゆとり世代』ときている。名付けて『ゆとりA』と『ゆとりB』。場当たり的な教育理論と無駄に税金を注ぎ込んで造られた二体の無気力鈍感ロボット。そんな連中よ、カナ子くん一人のほうがよく頼りになる。それに、もしカナ子くんが退職するようなことになれば、あとを追うように辞めてゆく女子社員が多勢でくるのではないか。

いやこれは一大事だ。本当に頭が痛い。ついでに胃も痛い。しかしそうかと言って、カナ子くんが着るかもしれないウエディングドレスの裾を引っ張るような真似はしたくはない。

いずれにせよ、自分の妄想で胃潰瘍を患うことになってしまいう前に、事実を確認しておくほうが先決だ。

始業ベル10分前、仕事始めの慌ただしさの最中、私の足はカナ子くんのいるデスクへとむかった。

それはどのオフィスにだって見受けられるごく一般的な光景のはずだった。仕事前に上司が部下のデスクにおもむいてなにが悪いのか。

しかし、私の足どりがカナ子くんのデスクに近づいていくのにしたが、なにやら鋭い視線が、私の頬つぺたあたりを突き刺してくるのだった。まるで反社会的な人間が、いままさに目の前で反社会的な行為を働こうとしているのを目撃しているかのような。

突き刺しているのは、まわりにいる女子社員たちだ。彼女たちは女王蜂の危険を感じとったお付きの女中蜂みたいに、デスク作業の手を休めザワザワし、キリキリしていた。それが背広の袖や襟元のうしろをとおしてこちらまで伝わってくる。おかげで、責任者であるはずの私まで緊張しはじめてしまった。なんだかとてもない事をやらかそうとしているような気分になってきた。まさしくコール

センター内のテーブルに触れようとしているかのような。私としては、ただ一女子社員にちよつとした個人的事情をたずねようとしていただけなのだ。

「カ、カ、カナ子くん」

私の声は氷の上を滑っているかのごとくうわずった。やれやれ。でも、つぎの瞬間にはそれも致し方ないことのように思えた。コールセンター所長の肩書きなど吹けば飛ぶ紙切れ同然のように思えた。カナ子くんが振り返り、私を間近に見上げたときには。

頭の中で、ふたたび『K a r a r a r a』のビデオが再生をはじめた。ただ、今回の『K a r a r a r a』たちは皆、地味なエンジ色の制服を身に着けたOLバージョンで、舞台はコールセンターのオフィスなのだ。

私は本来の目的をすっかり忘れ、カナ子くんの顔に見入ってしまった。カナ子くんも不思議そうにこちらの顔を見返している。当たり前だ。私がかなか要件を切りださないからだ。

でも、まあいいではないか。たしかに彼女の額には厄介な一本線がまだ走っていたし、その存在理由だって私はまだたずねてもしなかったけど、それを知ったところで所詮は、ニワトリが先か卵か先か、それがわかるぐらいの話ではなかったか。それならつまらない詮索はやめにして、私は『K a r a r a r a』のOLバージョンのつづきを鑑賞していきたい気分だった。

だが、そう思った途端、女子社員たちとはべつの横やりが割り込んできた。『ゆとりA』と『ゆとりB』だ。

まったく。普段なら私がちょんまげ頭で出勤したとしても、まったく無関心なはずの二人なのに、このときばかりは人が変わったみたいに私にむかって進言するのだった。これは、コールセンター内のカナ子くんへの気の使いようが、無気力鈍感ロボットにまで浸透しているということなのだろうか。

「所長、緊急会議が召集されました」

「ただちに会議室に直行してください。この要件の重要度レベルは

トリプルAになっています」

二人はまるで無気力鈍感ロボットから、地球の安全を守るなにかの隊員に生まれ変わったように言う。いつもこんなふうにはテキパキしていてくれれば、地球の安全はともかく、コールセンターの将来ぐらいは安泰なのだが。

いや、待て。トリプルAとは、たしか社長直々に御達しの御前会議ではなかったか――――。

イケない。こうしてはいられない。

私はひとまず『Karara』のビデオを一時停止して、センターをあとにした。残されたカナ子くんにしてみれば、さぞかし間の悪い上司と思つたことだろう。そして、まわりに仕えたお供の女中蜂たちは一時の休戦状態に入ったようだった。

もうかれこれ二昔以上も前のこと。当時まだ社会人になつたばかりの私は、就職したての会社にある疑念を抱いていた。大学を卒業して間もない青年の目に、ややもすると先輩や上司にあたる男性社員たちの言動が、なにやらホモのそのように見えることがよくあつたのだ。

ただし、今日にいたるまで、私がその中の誰それからそれらしい誘いを受けたことはなかったので、私が持った疑いは、若さゆえの過剰反応か、それとも、そもそも私に彼らの興味の対象となるような資質が欠けていたのか、事実はそのいずれかだったのだろう。どちらにしても、そのとき私の脳裏に記録された疑惑ファイルは決して消去されることはなく、ずっと頭のどこかの引出しに挟み込まれてあつたようだ。

そして、それからじつに二十数年ぶりに、私はその『男社員全員ホモ説』なるファイルを、頭の中からとりだすことになつた。

場所は朝一番の御前会議に於いて。会議のテーマはズバリ、コールセンター所長である私自身。ただ、ある意味主役であるはずの私の席はそこには用意されていなかった。

私は一人遅れて到着した。円卓の席にはすでに社長をはじめ、重役連中、それからそれぞれの部署の責任者たちが、いつもと変わらぬ席順で顔をそろえていた。いつもと同じ趣味の悪い剥製コレクシヨンみたいな感じで。

そこに私の席だけがなかったわけだが、代わりに、ちょうど社長の向かい側、会議室の一番下手にあたる場所にぼっかり空いたスペースがあった。かつて私の上司だったこともある営業部長が、私に向かつてその場所を無言で、しかし断固たる態度で指し示した。

私はよく状況が呑み込めぬまま、もしかしたら透明な椅子がそこにあるのを期待しつつ、空いたスペースに歩み寄った。

会議の進行役である専務が業を煮やしたかのように口を開いた。

「では、緊急会議をはじめます。まず今回問題になった部署の責任者であるコールセンター所長に、本件の経過について報告してもらいます。所長、どうぞ」

この会社の中で、所長と呼ばれている人間は私しかいない。そして、会議室の喋る剥製たちは皆、首を固定して私一人を見ている。さらに、これが社長直々の御達しによる緊急会議であることを考慮すれば、文字どおり、私は窮地に立たされているわけだった。

会議室の劣等生状態の私は、娘のことを思いだしていた。もしや彼女も今頃、クラスの担任におデコのチョンチョコリンについて責めたてられているのではなからうかと。そうして私たちは、まったく同じ時刻に、それぞれが属する場所で、親子そろって立たされているという図。

でも、しっかり者の彼女のことだ、きつとなにか校則の盲点なんかを突いて妙案を捻りだし、担任の追求を巧みにかわしていることだろう。コンピュータープログラムの弱点を突くハッカーみたいに。それに比べ、私には彼らの弱点がまったく見つかからない。だいたい、弱点を突こうにも、専務が言う「本件の経過」の本件とはなんのことなのか。まあ、だいたい察しはつくが。

たぶん、彼らはカナ子くんのチョンチョコリンのことを言いたいのだろう。それ以外、我がコールセンターにおいて会議の議題にとりあげられるような問題は存在しないのだから。ついにくるべき時がきたというわけだ。

しかしだからといって、こちらからすすんでノコノコと蜂の巣を突つつくような真似は、コールセンターの責任者である私にとっても、問題の真の当事者であるカナ子くんにとっても、恐らく得策ではない。ここはひとまず知らぬ存ぜぬで様子見するのが一番だろう。「申し訳ないんですが、私たちコールセンターの職員は、滞りなく日々の業務をこなしています。私たちにどんな問題があるとおっしゃるのでしょうか。お伺いいたします」

私はワザと開き直ったように言った。相手がどのくらい怒っているのか見定めるために。はたして、敵はどうでてくるか。

最初に噛みついてきたのは、予想どおり営業部長だった。立たされているのが自分の元部下という手前もあつただろうし、なにしろこの人は昔から私とはウマが合わない瞬間湯沸かし器タイプなのだ。「あんな、しらばっくれちゃいけないよ。問題あるだろ。アレだよ、アレ」

「アレではわかりません。具体的になにが問題なのか仰ってもらわないと」

「アレと言ったらアレだよ。毎日見てるんだからわかるだろ」

すると、営業部長と肩をならべている開発部長が唐突にワザとらしい咳払いをした。とたん、飼い主に説教された子犬みたいに口をつぐんでしまう私の元上司。どうやら彼は失言を犯したらしい。それは私に、ここ緊急会議の場でも、カナ子くんのチョンチョコリンがタブーになっている可能性があることを示していた。

かつては目の上のタンコブだった元上司のおかげで、私は彼らの弱点を見つけることができたのかもしれない。私には彼らの

よほどデキた会社にも身を置かないかぎり、サラリーマンで

ある以上、この会議はいつたいなんのためにあるのかといった、ある意味、宿命とも呼ぶべき疑問を持つことは避けられない。私の場合、それがしょっちゅうなのだが、しかし、この日ほどくだらない会議はかつてなかったような気がする。

なんだかそれは、モノ忘れがひどい人々の各国代表が集まって世界会議を開催しているかのような光景だった。皆、好き勝手に発言するが、当然その中に会議のテーマがなんであったか、覚えている人間は誰もいないのだ。

「だからさつきからアレだと言ってるじゃないか」

「アレはなんとかならないのか」

「いつたいアレはなんのつもりなんだ」

「早急にアレをなんとかしたまえ」

各国代表は発言した。私はふたたび娘の言葉を思いだしていた。

「アレ」だけですべてが相手に通じると思い込んでいる人々。世の諸悪の根源がここにも。

会議は膠着状態に陥った。『モノ忘れ世界会議』の各国代表の中に、あるべきことか、一人、健常者が混じっていたのだ。それが私なのだが、本来なら法廷の被告人席がふさわしい立場にいなから、私は会議に出席した冷静なオブザーバーよりしく彼らに説明した。「ですからアレではわかりません。もう少し具体的に仰ってください」と

どうやら役員連中にとって私の態度は想定外だったようだ。おそらく上からモノを言えば、なんでもハイハイ言うことをきくものとタカを括っていたのだろう。円卓の喋る剥製だったはずの彼らは、押し黙ったまま、本当に剥製になってしまった。

会議室の立たされ社員から、今や彼らを見下ろす勢いの私にしてみれば、どうせとつくの昔に出世街道からは外れている身なのだし、もはや昇給だって望めやしない。そうなれば、あとはカナ子くんの夢を叶えてやるのが、せめてもの親心といったところだ。いやはや、なんだかいよいよ『男はつらいよ』の寅さんめいてきた。

しかし、街で聖者になるのが大変なように、会社内でフウテンの寅さんになるのもまた至難の技だ。中間管理職者としての私のささやかな抵抗は、社長のツルの一声で、ものの見事に会議室のモクスへと消えるはめになった。

「もついい」

会議がはじまってからまだ一言も発してなかった社長がおもむろに口を開いた。まるで自分の言葉に特別な力があることをよく心得ていて、それを出し惜しみしていたみたいに。

「一週間だ。一週間のうちに答えをだしたまえ、所長。それまで、あなたを副所長に降格する。答えがだせなければ、そのままあなたを副所長に降格する。次期コールセンター所長には坂下力ナ子くんに就任してもらうことになる」

「はあ？」

「所長、君は知らないだろうがね、これは、ここにいる役員だけでなく、コールセンター全職員の要望でもあるのだよ。わかったかね。どなたか、私の意見に異議のある方は？」

「異議なし！」

剥製たちがあらかじめ約束していたかのように声をそろえて言う。営業部長にいたっては、わざわざ会議終了後に私のもとにやってきて、「もう俺の力じゃ、お前を助けてやれない」などと耳打ちする念の入れようだ。いったいいつ、私があるに助けを求めたというのか。

私が彼らを精神的ホモと勝手に決めつけるのは、ちょうどこんなときだ。

私が若かったところにヒットした『青春時代』という歌の中で、歌詞の中の主人公が答えをださねばならないのは、たしか卒業までの半年だった。歳を重ねるごとに人生の執行猶予の時間は短くなる。私ぐらいの歳になれば、それは一週間だ。

朝のうちはまだ妄想の範囲内だった胃潰瘍が、だんだんと現実の

ものになりつつある。

まさかカナ子くんの夢とは、私の代わりにコールセンター所長のポストに就くことだったのだろうか。

そのために私は、彼女の寅さんになろうとしていたというのだろうか。

なにがなんだかサツパリわからない。こうなったら、もう直接本人に聞いてみるしかあるまい。もはや『k a r a r a』のビデオがどうのこうの言ってる場合ではない。

センターにもどると、すでに通常の業務がはじまっていた。そこかしこに鳴り響く電話のベルをまるで電氣的な警笛のシグナルのように耳にしながら、私はカナ子くんのデスクへと向かった。

ふたたび女子社員たちの刺すような視線が私の一挙一動に集まってくる。彼女たちの真意を知ってしまった今となっては、それはさらに鋭角さを増している。しかし、今度ばかりは怯んではいられない。幸い、邪魔なゆとりAとBは席を外している。いや、そんなことはどうでもいい。おそらく、私はまだ彼女たちにとって所長であるはずなのだ。彼女たちはまだなにも知らされていないはずなのだ。

カナ子くんの姿はそこになかった。デスクはもぬけの殻だった。私は自分の過信ぶりに途方に暮れた。私はよもやと思いつながらも全コールセンター内が見渡せる所長デスクの席に顔を向けた。

そこにカナ子くんはいた。はやくもエンジ色の制服から紺色のスーツに着替えて。女所長然として。私が目をとおし、ハンを押すはずだった書類に視線を落としている。

知れ渡っていたのだ。すべて既定事実だったのだ。知らなかったのは私だけ。

もう我慢がならない。私は奪われたかつての自分のデスクにツカツカと歩み寄り、そのままの勢いでまくし立てた。

「カナ子くん、お仕事申し訳ないんだがね、ちよつといいかね。聞かせてほしいんだ。君の夢とやらをね。君の夢とは、つまりこう

いうことだったのかい」

なにやら背筋が凍りつくような冷気が足もとからのぼってくるのを感じた。ときに娘から浴びせられる冷たい視線よりもさらに数十倍も強力な全コールセンター女子社員たちの視線が。それは私にこう告げていた。

「『カナ子くん』じゃなくて、『カナ子さん』だろ、副所長」

私が彼女たちの侮辱に耐えることができたのは、日頃の娘によるトレーニングの賜物ということもあるけれど、もう一つは、私が見下ろすカナ子くんの表情に、意外にもモナリザのような優しい微笑が浮かんでいたからだだった。チョンチョコリンを巻いた優しいモナリザのような。

このとき私はすべてを悟ったのだ。つまり、私が少なくともこうしてまだ副所長の身でいられるのは、彼女のお陰なのではないのか。もしもカナ子くんの尽力がなかったら、私などは身ぐるみ剥がされてアツという間に会社の外に放りだされていたのではなかったか、と。

「副所長」

背中女子社員が誰かを呼んでいた。いや、誰かではない。私だ。私を呼んでいるのだ。

一つ深呼吸してから、どうにか言葉を吐いた。

「なんだね」

「お客様がお見えです。1階のカフェでお待ちになっています」

「そうか。ありがとう」

私は出口を目指した。目の前の上司に一礼して。

カフェに客人らしい人の姿はなかった。代わりに私がテーブル席で肩を並べているのを見つけたのは、ゆとりAとBだった。

勤務時間中だというのに二人は仲良くパフェを頬ばっていた。就職活動帰りの学生たちみたいに。しかも、私の姿を見とめても、二人して顔色一つ変えやしない。ゆとり教育ここに極まり、か。いや、

それともこの二人ですら、私がすでに所長でないことを知っているということなのか。

私の声は硬かった。

「君たち、いったいここでなにをしてるんだ」

「所長こそ、どうしたんです」とA。

「私はお客に会いにきたんだ」

「それは奇遇ですね。僕たちもそうなんです」とB。

「だからといって、勤務時間中にパフエはないだろ」

どうやら彼らはまだ不意の人事異動を知らないようだ。私を所長と呼ぶ人間が今も社内に残っていたわけだ。しかし、それを喜んでいいのかどうか。特にこの二人に。

私は手前の席に腰をおろした。それが二人の合図だった。二人は体乗りだすと、急に小声になって喋りはじめた。

「本当は僕たち、所長にいい提案を持ってきたんです」

「所長の客人って、じつは僕たちなんです」

「すべてを一度に解決できる妙案なんです」

「所長、時間はありませんよ。一週間なんてあっという間です」

どうやら私はまだ過信していたようだ。パフエを問題視している場合ではなかった。ようやく私は自分の立場を理解して言った。

「いや……副所長でいい」

ウエイトレスが注文をとりに来た。私はオーダーした。

「苺パフエ」

この日のAとBはこれまでとは人が変わったみたいだった。実際、彼らは人が変わっていた。もっとも、その話の内容は、彼らが授かった教育そのままに、かなりうさん臭いものだった。

それによると、じつは我が社の社員というのは彼らの仮の姿であって、本当はどこかの企業に雇われたヘッドハンターというのが、二人の正体であるらしい。

「嘘も大概にしたまえ。だって君たちにヘッドハントできるものな

んで、せいぜい迷子の子猫ぐらいなもんだろう」と、私も小声になつて言つてやったのだが、二人はあらかじめこちらの反応を予期していたのか、はたまたそれが彼ら世代の唯一の長所なのか、持ち前のゆとりある態度をのぞかせていた。

思うに、人がおよそあり得ない荒唐無稽な話を信じてしまうときは、そこになにかしら、その人にとつてのメリットが含まれているケースがほとんどだろう。とくに、そこに逆説的なメリットが含まれている場合、人はコロリとその言葉をう呑みにしまう傾向にあるようだ。お守り然り。占い然り。

いいことばかりでも、悪いことばかりでも、人はそう他人の口からでた言葉を信じたりしない。悪いことがあるからこそ、いいこともまたあるわけだ。大切なのは話の真实性ではなくて、そこで語られるメリットとデメリットの割合なのだ。

私の場合どうだったか。

たしかにヘッドハントという選択肢には魅力があった。なにしろそれは、私が抱えている問題を一気に解決してしまう可能性がある。これは大きなメリットだ。

ただ一抹の不安は、そのヘッドハント話を語るヘッドハンターと名乗る二人が、まったくもってヘッドハンターらしく見えないという点。これがデメリット。

しかし、それも考えようによっては、身を隠すためのカムフラージュともとれる。テールブルにのつたパフェなどもそうだ。もしやこの二人、本当は相当なキレ者なのだが、表面上は能ある鷹のごとく、その爪を隠していただけなのかもしれない。

ゆとり教育万歳。どうやら私は、彼らのことを彼らが受けた教育も含めて、大変な誤解をしていたようだ。彼らこそ、私の真の能力を理解してくれた数少ない逸材だったのだ。それを私は――

――。これまでの数々の非礼を勝手に水に流して私は言った。

「それで、君たちを雇ってるのはどんな会社なんだい」

「それはお答えできません」

「企業秘密です」

「それじゃ困るよ。会社名がわからないんじゃない、転職のしようがないじゃないか」

「それは本人にしか言えない規則なんです」

「本人？……君たちはいったいなんの話をしてるんだ？」

「副所長こそ、なんの話をしてるんですか」

どうも話が噛み合わない。雲行きが怪しくなってきた。イヤな予感がする。なんだか妻から離婚話もちだされたときと同じ匂いがある。

AとBは二人の雇われ弁護士みたいに言った。

「僕たちはカナ子さんをヘッドハンティングしにきたんです」

「でも、カナ子さん、なかなか首を縦にはふってくれなくて」

「そこで、副所長に協力してもらって、カナ子さんを説得してもらいたいんです」

そういうことか。どおりで話がウマすぎると思った。柄にもなく、毒パフェなんて頼むんじゃないかった。

「でもね、カナ子くんは所長に就任したばかりだよ。そこに転職話を持ちだすのは、さすがにタイミングが悪すぎやしないかね」

「僕たちは所長としてではなく、あくまでカナ子さんに電話オペレーターとしてきていただきたいんです」

「電話オペレーターはカナ子さんの天職です」

「サラリーは現在の所長職の10倍は保証します」

私はつい口をはさんだ。

「それはアレかね……やっぱりカナ子くんでないとマズいのかね。たとえば私とか……」

「ダメです」

「あり得ません」

いつたいなにがどうなっているのか。電話オペレーターをヘッドハンティングするとはどういうことなのか。

普通ヘッドハンティングと叫びたら、特別な技術やキャリアを持った人間が対象になるはずだ。電話オペレーターのヘッドハンティングなんて聞いたことがない。

すると、AとBはこちらの心のヒダを読みとったかのように話しはじめた。

「副所長は電話オペレーターという職業を下評価しています。コールセンターの電話オペレーターは、最も頻繁に顧客のクレームと接触する職種なんですから。言ってみれば、クレーム対策の要なんです」

「そして、たった一つのクレームが、世界を股にかけるほどの大企業の屋台骨を、つねに揺らしかねない危険性ははらんでいる。それが現代のインターネット社会と直面せざるを得ない企業の実情なんです」

「こういふ内部資料があります」

そう言って、Aがテーブルの上に書類の束を置いた。

「これはある調査会社の調査報告です。依頼主はこの会社の社長です。全社員の会社に対する貢献度を調べて、それを数値化したものです。トップ30位までの社員の名前が載っています。因みに、副所長の名前はありませんので」

「わかってるよ」

私は書類を手にとり、下から上へと目を走らせた。悔しいことに営業部長の名が載っている。なにかの間違いではないのか。社長の名前は二番目だ。まあ、これはそもそも調査依頼主なわけだから、リップサービスだろう。しかし、信じられないのは、その上にカナ子くんの名が載っていることだ。つまりこの調査報告は、社長やその他諸々の役職連中をさしおき、電話オペレーターであるO.Lを全社員の中のMVPに推しているのだ。

「僕たちも独自に同様の調査をおこないましたが、この調査報告に

は疑問があります。カナ子さん以外の順位に」

「ほかのオペレーターの子たちの名はないね」

「もちろんカナ子さんだけです。彼女は特別なんです。そのことを裏付ける極秘資料がこれです」

ゆとりAならぬヘッドハンターAは、あらたな資料の束を持ちだし、私に見せた。

「これは、この会社の詳細な重要顧客リストです。いろんなデータが載ってますけど、重要なポイントはただ一点。この会社の重要顧客の半数がかつてコールセンターにクレームの電話をかけた経験があり、その対応をしたのがいずれも同じ一人の電話オペレーターだったということです。つまり、それがカナ子さんだったわけです。じつに彼女は電話一本の会話で、クレマーを重要顧客へと変えてしまう能力があるんです」

「ところで、貢献度調査はそもそも社員のやる気を促進させるために実行されたので、そちらの資料のほうは極秘でもなんでもありません。全ての社員に配付されています。ですが、一人だけ配付されなかった社員がいる。それも意図的に。カン口までしいて。誰だかわかります？」

「私だろ。私には見せる価値もないというわけだ」

「いいえ、それは違います。カナ子さんが副所長だけには見せないように社長に直訴したからです」

ふたたび私は問う。「いったいなにがどうなっているのか、と。」

どうしてカナ子くんは私にこの資料を見せようとしなかったのか。私はそれをAとBにたずねるべきかもしれない。きつと彼らならその答えも知っているはずだろうし、二人してさっきからずっとこちらの顔色をうかがってもある。私のほうから口を開くのを待っているのだ。

でも、私はそれをあえて知りたいとは思わない。それは私が一社会人としてだけでなく、一人の人間としてカナ子くんのことを信頼

しているからだ。カナ子くんが知らないほうがいいと考えたのなら、それは私にとって知らないほうがいいということなのだ。

ついに痺れを切らしたか、それともダメな上司に愛想が尽きたか、ヘッドハンターたちは自ら口を開いた。

「さつきも言ったとおり、カナ子さんのヘッドハントは暗礁に乗りあげています。ですが、社長に直訴するという、普段のカナ子さんからは想像できない行動。それが僕たちに一つのヒントをくれました」

「僕たちは彼女の身辺調査に大きな穴があったと考え、それを最初からやり直しました。そしてある信じ難い結論に至ったわけです。つまりそれは、カナ子さんがこの会社の中で一番信頼をおいている人物、それが副所長だったということです」

「べつにそんなにビックリするようなことじゃないだろ」私は拍子抜けしたように言った。「だって、私は彼女の直属の上司だったんだから。今は立場が逆転してるけどさ。でも、そういうことならどうかな、君たち。カナ子くんが私のことを信頼していて、尚かつ、君たちがそんなに彼女のことをヘッドハンティングしたいというのなら、いつそ私とカナ子くんセットでヘッドハンティングしてみたら」

「それはできません」

「必ずカナ子さん一人でというのが、僕たちの雇い主の意向なので」「あ、そう」

「どうでしょう、副所長。もし、このヘッドハンティングが一週間以内にまとまれば、副所長も所長職に復帰できるわけです、僕たちとしても、副所長にそれ相応の報酬を約束しますから、一つカナ子さんの説得にあたってくれませんか？」

「その前に一つ聞きたいんだがね」私は落ち着いて言った。なにも『ゆとり』は君たち世代の専売特許じゃないんだよ、というふうに。「カナ子くん、最近おデコにヘンなもの付けてるだろ。君たちアレどうしてか知ってる？」

「たぶん……スーパーフライのファンなんじゃないですか」
私は彼らの力量を試すかのように聞いた。

「周囲の社員たちがさ、彼女のアレを見て見ぬフリしてるだろ。それはどうしてかな？」

「それはやっぱり、カナ子さんが社内が一番優秀な社員だということとを、みんなが知ってしまったからでしょう」

「それについては具体的に調べてみなかったのかね？」

「ええ」

私の彼らに対する興味は急速にしばみはじめた。二人はふたたびもとのゆとり社員にもどったようだ。いざという時に役に立たないのはそのままだ。

私たちの蜜月の時間は短かった。よそよそしく彼らから視線をそらし、暇つぶしでもするかのように手元の資料にふたたび視線をおとした。だがそのとき、私はその文面の端っこに、自分がした質問の答えの手掛かりを発見したのだ。

「早退させてもらうよ。急に急用を思いだしてね。悪いが、私のタイムカード押しといてくれてたまえ」

もはやオヤジギャグとも呼べない言葉を残し、私は席を立った。もちろん苺パフェは彼らの奢りということに。

私が調査報告書のページに見つけたのは、カナ子さんのトップ順位と同じぐらいに重要な数字だった。ヘッドハンターたちも取りこぼした数字。それは報告書に記された日付けだ。

それによれば、報告書が書かれたのはカナ子くんがはじめてチョンチョコリンを付けて出社した日より一月以上前になっている。たとえ彼女の個人的な事情に暗くとも、内偵者たる者、その一月の間にカナ子くんの身になにかしらの変化があったということに考えを及ばさなければならぬ。

私にとってこの一月のブランクは、彼女の夢が、コールセンター所長の地位とはなんら関係がないことを示している。なぜなら、そ

の気になりさえすれば、すでに社内MVPの彼女は、いつだって好きなきときにコールセンター所長ぐらいの地位は手に入る立場にいたわけだから。そもそも、チョンチョコリンなんて付ける必要はないのだ。

ヘッドハンターたちの取りこぼしは数字以外にもある。

彼らは、No.1社員のカナ子くに気をつかつて、ほかの社員たちが彼女のチョンチョコリンに触れないような言い回しをしていたけども、恐らくそんなものではない。ヘッドハンターたちは、社員たちの細かな心の動きを理解していないのだ。おそらく、社長たちだって、本心ではカナ子くんを所長の座にはつかせたくなかったはずだ。

社の人間たちは、私が今まで気がつかなかった、そしてヘッドハンターたちが未だに気がついていない、あることに薄々勘づいていたのだ。つまり、カナ子くんの秘めた力が、いつだって両刃の刃になり得るということに。彼女がその気になれば、あるいは、彼女を利用できる人間がいれば、社長のクビを変えることだってできるかもしれない。

私は思いません。所長になったカナ子くんがデスク越しにみせたあの微笑を。もしかしたらアレは、モナリザの優しい微笑なんかではなかったのかもしれない。アレは悪魔のそれだったのかもしれない。

「……お父さん、お父さん」

どういわけだか、私は何年ぶりかで娘の呼び声で眠りから目を覚ました。

私は中央線の上り電車に乗っていた。シートに腰掛けた私の前に、制服姿の娘がこちらをのぞき込むようにして立っていた。まるで彼女のほうが不思議な夢をみているような顔をしている。iPodの白いイヤホンが首から垂れていた。

「なにしてんの？」

「ああ……タエ子か。こんなところでお前に会えて、お父

さん嬉しいよ」

娘も私も、私になにを言っているのかよくわからなかった。でも、本心ではあった。

寝ている間に乗客の数がだいぶ増えていた。すでに人々が帰宅しはじめる時刻になっていた。

娘には得意先回りの帰りだと言っておいたけども、もちろんそんなことはなかった。会社を早退した私は、真つ直ぐ駅にむかい、中央線の電車に乗り込んだ。自宅に帰るためでも、胃潰瘍の検査を受けるためでもなく、チョンチョコリンおばさんに会うために。

私は東京を横断する中央線を、東から西、西から東へと、何度となく往復した。顔も知らないおばさんの姿を求めて車両を移動し、スタンドで腹ごしらえをし、何駅ものプラットフォームを歩いてわたった。かつて営業職だったときでさえ、これほど電車を乗り継いだことはなかった。でも、チョンチョコリンおばさんにはついに会えずじまい。おまけに、ついに疲れ果てた私は車中のシートで眠りこみ、学校帰りの実の娘におこされる始末。

もちろん、おばさんたちは至る所にいた。どこにでも必ずいた。でも、その中におデコにカチューシャを巻いたおばさんは一人もいなかった。

チョンチョコリンおばさんは、自分が気に入った若い女の子にかカチューシャをくれないという。もし奇跡的に出会えたら、私としては、そこをなんとかお願いするつもりでいたのだ。「じつは私の娘も一つこの間頂戴しましてね」とか言ったりして……ああ、そうか……その手があった。

奇跡は起きていたのだ。それは今、私の目の前に立っている。こうして娘と、中央線の車中で偶然出会えたことがなよりの奇跡なのだ。

私は奇跡の子を見上げて聞いた。

「お前、まだアレ持つてるか？」

「アレって？」

「チヨンチヨコリンだよ」

「チヨンチヨコリン？……ああ、カチューシャでしょ」

私と話しているときはたいていそうだが、娘は少し怒っているような感じでカバンからそれを取り出した。

「それ、お父さんにくれないか」

「なんでよ」

「だって、お前はもう夢が叶ったんだからいいじゃないか。お父さんにもそれがちよつと入り用なんだよ」

私を見る娘の視線は、限りなく落ち潰れた詐欺師を見るそれに近かった。

「お父さん、ほんと大丈夫？」

「ああ。お父さんはいつだって大丈夫さ」

私は『Dr・スランプ』にでてくるスッパマンみたいな心境で言った。

はたして私が叶えたい夢とはなんなのか。家族の健康か。たしかにそれもある。娘を無事大学まで進学させてやることか。たしかにそれもある。しかし、さし迫った目下の夢はそれではない。

もしかしたら『カチューシャおばさん』は存在しているのかもしれない。でも、彼女がくれるというカチューシャそのものに、他人の夢を叶える力が宿っているというのは迷信だ。もしも、それによって自分の夢に近づけることがあったとしたなら、それは魔法によってではなく、それをおデコに巻いたことによって、その人の内面や、その人がいる環境に、ある種の変化がおきたせいだろう。

朝の駅の改札で、すれ違う人々が不思議そうに私の顔を見やる。

逆に電車の車中では、人々が私の顔から視線をそらせる。中には、怒ったように睨みつける初老のサラリーマンもいる。なにか言いたそうだ。でも、なにも言わずにまぶたを閉じてしまう。私は涼しい

顔で窓の外の風景に目をやる。

会社前では、鉢合わせになった営業部長が私の顔を見て足を止める。彼の固まった表情なら下手な絵描きでもそっくりに描けそうだが、いつもなら道を譲るところだけでも、かつての上司の足はしばらく動けそうにないから、「失礼します」と言っただけ先をいそぐ。

私が乗り込んだ会社のエレベーターには誰も乗ろうとしない。というか、誰もエレベーターの周囲に近づこうとしない。私は仕方なくボタンを押してエレベーターの扉を閉める。

昨日までは刺すように見ていたコールセンターの女子社員たちの視線は、私の顔を見たたん、畏怖のそれへと変わる。でも、彼女たちは通勤途中にすれ違った見ず知らずのOLみたいにすぐに視線をそらしたりはしない。彼女たちの視線は太陽をはさんだ惑星のように、私を中心にゆっくり回りはじめる。やっと私は彼女たちの仲間として認められたような気がする。

女性たちとは対象的に、ゆとりAとBはすぐに私から視線をそらすと、デスクの一点を見つめる。すでに彼らはゆとりAでもBでもなく、ヘッドハンターですらない。彼らの存在は太陽に照らされたなごり雪みたいに静かに消えてゆき、デスクには彼らの形をした黒いシミしか残らない。

私は所長席にいるカナ子くんを見る。カナ子くんも私を見ている。その顔にはふたたびモナリザのような謎めいた微笑が浮かび、おデコには当然、チョンチョコリンが巻かれている。

そして、それと同じものが今朝は私の額にもある。私はおデコに神経を集中して念じつつける。どうか私をあなたの共犯者に――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1169c/>

中央線的短編集

2011年1月5日08時55分発行